
啼く鳥の謳う物語 2

フタトキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

啼く鳥の謳う物語2

【Nコード】

N1487U

【作者名】

フタトキ

【あらすじ】

“出会い”が狂わせた世界で真実を求めた人達の物語。

「用心棒貸し出します」が文句の用心屋ロリコン店長を中心に、その周囲の変人達と共に繰り広げるバトルアクション！ではなく、そんな彼らの日常を書いています。

でも、バトルは一応あります。一応。

シリアスだったり、恋愛一色だったり、ギャグ？だったりとかちゃ混ぜです。

話数が多いので、続きを啼く鳥の謳う物語2として投稿することに

しました。『啼く鳥の謳う物語』の方は人物紹介などで、投稿すると思います。

拙い文章で誤字脱字があると思いますが、温かい目で見守ってくださいと嬉しいです。短編として番外編があります。

*若干、BL要素が入っているのでお気をつけ下さい。

感想やメッセージを頂けると、凄く喜びます（<>）！

終わらない螺旋階段

啼いている……―

鳥が啼いている……―

――
叩いて何かを主張しているようだが、分厚いプラスチックを通してでは柔らかな和太鼓の音のようにしか聞こえない。

「ごめん……」

――
ドームは別に密閉状態というわけではない。ちゃんと空気孔がある。何より、機械を使って空気を巡回させている。

ただ、少年の口は布で塞がれている。発せる音は唸り声くらいだ。

――
少年は目尻に涙を溜めて、必死にプラスチックを叩く。

それに彼は……

「ごめん……」

長めの白衣の裾に半分隠れた手のひらでドームを撫でた。

と……―

『この腐れイカれ野郎！出せ！そいつを傷付けるな！！』
ガンッ。

少年の隣にもドームがある。

中には青年。

肘や膝を窮屈そうにぶつけている。

「黙ってくれないか？俺は助ける為に――」

「助ける？助けたいならそこから出してやるんだな！」

「黙れ！お前のせいで……！」

怒りの隠った拳は、少年が暴れるドームに落ちた。少年はびくりと肩を震わせると、溢れてしまった涙を拭いて、耳を塞いで縮こまる。『あんたは最低だ。あんたと同じように精神がイカれる前に、早くそいつを出してやれ』

翡翠が彼を、白衣の男を憐れむように見る。

「――っ！お前のせいで！お前がいるから！」

『イカれてるから言っている意味が分からないか。あんたには、そいつが泣いているのが嬉し泣きに見えるんだな』

「煩い！黙れ！！！！」

彼は歩みを進めると、青年の方の巡回させている機械を蹴倒した。ブウンという鈍い音と共に、それは動きを止める。

青年のドームには空気孔はない。彼は、機械の外れたそこに蓋をした。

微かに孔を残して。

少年が目を見開き、青年の方を向いて必死にプラスチックを叩き、首を振って青年に涙を浮かべる。

『そーくるとはね』

青年はそつと胸を押さえると、少年に向いた。

『安心しろ』

………っ――

強く握り込まれる青年の拳。少年に向けられた微笑は瞬く間に消え、額に脂汗をかき始める。

――…っ！！！！――

少年は彼を睨み付けた。

白衣の彼は、一瞬、苦い顔をする、強張った笑顔を少年に向けた。

「辛いのは分かるよ。だけど、もうすぐ苦しみから解放されるからね?」

緋色は彼から目を逸らさない。

「……………」

少年の明らかな抗議の色を持ったそれは彼の目を逸らさせた。彼は少年に背を向けると、青年の方のドームに近寄った。青年は虚ろな瞳の奥から憎しみを込めて彼を睨む。

『あんた……死ね……よ』

「死ぬさ。お前も俺も死ぬ」

『死んで……一人?……マジで……死ね……』

「大丈夫だ。一人でも生きて行ける」

『また……そいつを……性玩具に……したい……のか?……そいつの……生きるは……』

ぜえぜえと、青年の言葉に雑音が混ざる。

『いつだって……他人の……オモチャだ……そいつは……それを……受け入れる……当然の……ように……ごほっ……』

唇が微かな空気を求めて孔に近付いた。彼は冷ややかな目でそれを見る。

「これじゃ死ななくせに」

『一人じゃ……生きては……いけない……』

「だけど、これには俺の死もお前の死も必要だ」

『だったら……!……!』

――皆、死ねばいい――

そう聞こえた気がした。

青年の声じゃない。

彼は白衣を翻して少年を見詰めた。少年は緋色の瞳を真っ赤な血の

色に染めて、彼を見上げる。

『落ち…着け!』

青年は噎せながら少年に叫んだ。

「どう…した…?」

チリチリと少年の口を塞ぐ布は黒く炭となり、ぼろぼろ崩れていく。そして、露になる少年の薄ピンクの唇。その唇はゆっくりと言葉をつむいだ。

― ねえ、皆、死のうよ―

「何を…」

― 死ねばいい。死ねばいい。死ねばいい―

『やめろ…!』

青年が言った頃にはもう遅く、ドームは紅く色付いて熔け始める。

ドロリとしたそれは冷えた床に落ちてシュツと音を発てる。そして、空気巡回用の機械は、黒い煙を吐いて動きを止めた。

啞然として動かない彼と、少年を止めようと叫ぶ青年。

そんな中で、少年は熔けきったドームから優雅に大理石の床に降り立った。

― 皆で死のうよ―

黒服の少年は裸足を鳴らして、後退りする彼に手を伸ばす。

「俺は…お前の為に…」

― 俺の為? 俺は望んでない―

死神の様相で笑った。

冷めた笑顔。

「じゃないと…お前が死んでしまう!」

― 皆、死ねば一緒。ずっと一緒にいられる―

誰かが生き残って悲しむなら、皆、生き残らなければいい。そうし

たら、誰も悲しまない。

少年は白い肌を覗かせて、襟首から首飾りを取り出した。

「さあ、行こう？夜歌^{よか}は俺達を受け入れてくれる――

緋が揺らめく琥珀。

少年の手の中のそれは、脈を打つように輝きを一層強めた。

「夜歌って…そんなのあるわけ…ないだろ…」

―ある。遠くに…母親に守られる無限の地が―

「俺はお前を生きさせたい！」

―分からない？俺にとってここは死の地。ここが墓場。だから、死んで、夜歌で生まれる。一緒に夜歌で生きるの―

「違う！夜歌なんてない！これが現実だ！俺はお前に現実で生きて欲しいんだ！」

少年は彼に苦笑する。

呆れ果てた顔で。

―もうやめようよ。弘瀬^{ひろせ}さんはおかしいよ。第一、そう何人も殺してきて、どうして俺を殺さないの？―

「俺は誰も殺してない！殺してきたのは―」

―誰？―

少年は屍餅を突いた弘瀬の腰に乗った。

―誰なの？5年前から計18人の子供を殺したのは何処の誰？―

怯えきつた弘瀬に少年は上体を傾け、彼の胸に拳を丸めて乗った。胎児が母親の腹の中で眠っているようだ。

「俺じゃない…それに…死んだのは…4人だ」

―そうだった？たったの4人だった？―

先程まで泣き、怯えていた少年ではない。喪服の少年はまるで絵本に出てくる悪魔だ。

ごほっ…ごほっ…

―あ…忘れてた―

上体を起こすと、少年は手を伸ばして青年のドームに触れた。そして、熔ける。

青年の頭一つ分くらい開けると、再び、弘瀬にへばり付いた。

「19人目は俺？」

「だから、俺じゃない」

「なら、19人目は弘瀬さんだ」

「何…を？」

紅蓮の刃は少年の顔を不気味に写す。

「あなたが俺を殺さないなら、俺はあなたを殺す。あなたが無自覚なら、何も知らずに死んだ方がいい」

「わけが分からない！俺はお前に生きて欲しくて、あいつの力を使って、俺の命でお前が助かるなら！ただ、それだけだ！」

「分かってよ！」

本物の涙。

弘瀬は少年の涙に恐怖を忘れ、驚きしかない。

「悲しい…のか？」

「弘瀬さんのせいだ！俺は…俺は！」

泣きじゃくる子供のように「子供としてではなく、人としてではなく、ただの人形として生きてきた」少年は啼く。

翼をもがれ、耀く舞台から降ろされた鳥。

だが、美しさは消えない。

鳥は空を失っても美しさは消えない。

その美しさに人々は感嘆し、欲に奪い合う。そして、飛べない鳥は弄ばれる。

鳥の恐怖に人々は見惚れ、鳥の悲鳴に人々は聞き惚る。

だから、鳥は心無くした。

だから、鳥は声を無くした。

だから、鳥は捨てられた。

飛べない空は容赦なく鳥を痛め付ける。

ぼろぼろの体。

痛いよ…

悲しいよ…

誰か…

誰か助けて…

美しさを無くした鳥は誰にも見向きされない。

手のひらを返したような人々の反応。

痛いのに…

悲しいのに…

声は枯れて泣くことすら叶わない。

…おいで…

そんな鳥にたった一人。

震える鳥を胸に抱いて歩みを進めたたった一人。

心も声もないのに、優しくしてくれたたった一人。

そんな鳥に…

たった一つの名前をくれたたった一人のあなた。

「……………氷羽^{ひわ}…」

—生きて生きてって！もう俺は一人ぼっちは嫌だよ！分かってよ！
あなたのいない世界なんて嫌だよ！—

氷羽は弘瀬に抱き付く。

赤みがかった髪を揺らして強く。

弘瀬は…

抜け行く命の中で氷羽を強く抱き締め返した。

ぱた…

弘瀬の手は氷羽の背中から床に落ちた。

—弘瀬…さん？—

弘瀬は幸せそうな顔で…

死んだ。

『氷羽、二人で一緒にどこか遠くへ行こう？』

青年は手に握った刃を床に捨てて言った。

氷羽の視線の先のそれには、赤い、真つ赤な血。

『子供を18人も狂った頭で殺して、拳げ句、記憶に無いときた。
この異常者が』

憎々しげに弘瀬を見下ろす青年。

『もうこいつもいない。ぼく達は自由だ』

自由？

自由って？

—何で…—

『氷羽？』

—何で？—

自由って何？

『こいつは殺人鬼だ』

—だから？—
分からない。

—だから何？—

『死ぬべきなんだ。お前も近くにいたら危ない』

—だから君は殺すの？—

止まった弘瀬の鼓動。

弘瀬は死んだ。

もう弘瀬は動かない。

二度と。

—最期に教えてよ、—。20人目は…誰？—

『氷羽？20人目って…』

—俺？君？—

『二人で生きよう？な？』

氷羽は落ちた鉄片を拾う。

赤い血の炎を纏わせたそれを。

—殺した者は殺された者の罪を背負わなくてはいけない。君の罪は

18人の子供と… たった一人の弘瀬さん—

君は殺人鬼だ。

『何でだよ！僕はこいつとは違う！』

殺人鬼は…

—死ぬべきなんだ—

氷羽は驚きに転んだ青年の心臓を捉えた。

ぼたり…

ぼたり…

ぼたり…

―俺が君の罪を背負うよ。18人の子供と、あの人と君―
激しい運動で高鳴る心臓に刃を向ける。

―そして、俺は俺の罪を背負うよ―

最後の殺人鬼の心臓を貫いた。

18人の子供とあの人と君と…

…―氷羽―…

―夜歌―

…―お帰りなさい―…

―また…失敗しちゃったよ―

…―大丈夫。何度だって貴方の為に繰り返してあげる―…

―もうやめたいよ―

…―それでも、貴方は望んで繰り返すわ。今はお休みなさい―…

―うん。ちょっと休むね―

…―お休み、愛しの子―…

―お休み、夜歌―

荒廃した地にぽつりと立つ、ぼろぼろのコンクリートの建物。

そこでは、ある研究がなされ、幼い子供達が実験台として殺されていた。

建物内には緑に溢れた中庭がある。暖かな太陽の光が射し込むそこには、18の名が刻まれた石が並んでいた。

そして、ある無機質な一室には3人の人間が横たわっていた。

白衣を着た枯草色の髪の男と、ジーンズに青のTシャツの黒髪の青年の間に、黒服の赤みがかった髪の少年。

少年は男と青年の左手と右手をそれぞれ握って胸に抱いて目を閉じていた。

3人は喉かな休日の昼寝のように幸せそうな顔をして寄り添っていた。

まるで、親子のように。

言葉

葵の花弁は風に舞い上がる。

「慎^{しん}」

鮮やかな金髪を揺らした彼女は彼の肩に手を置いた。

「千鶴^{ちずる}」

振り返り、顔上げた慎に、千鶴は翡翠の瞳を細めた。

「林^{りん}は葵が大好きよね」

慎の隣にしゃがんだ彼女の長髪に花弁が触れる。

「ああ」

彼は花束を抱き締め直して言った。

「林、久し振り」

白い指先は刻まれた名前をゆっくりりとなぞる。

……崇弥^{たかや}林……

「親友を置いて先にとは……意地悪ね」

「本当に」

苦笑いをした慎は葵を墓石の前に置いた。

「千里^{せんり}は元気にしてる？」

「してるよ。千鶴、会ってあげたらどう？」

「駄目。私は監視されてるんだから。千里を危険に晒せない。慎こそどうなの？会ってあげたら？一度でいいから」

「真奈^{まな}に聞いたのか」

「……皆、意地悪ね」

千鶴は腰を下ろすと、曲げた膝に顎を乗せて前を見詰める。

慎も腰を下ろすと、曲げた膝に顎を乗せて前を向いた。

「もう一緒にお墓参りは無理かしら」

「これから柚里ゆりに会いに行こうと思っただけど」

「私は行ってきました。もう会わないことを誓って」

「何処へ？」

微かに瞳を見開くと、慎は千鶴に訊く。

「千里をお願いね」

「千鶴！何処へー」

「早くに憧れの父親を亡くして、母親には何一つ、母親らしきことをしてもらえず…愛情も注がれなかった。使えないと言われ、それでも、放棄と言う名の自由は与えられなかった。ねえ、慎…」

千鶴は慎の唇に人差し指を当てると、涙を浮かべた。白い肌に透明な筋。

慎は黙る。

「私は日々、千里がヒトから離れて行くのを見ることができなかった。笑うことも、泣くことすら忘れて行くあの子を見ることがし

……慎のお陰よ。あの子、笑うようになった」

「俺じゃない。洗祈しきと葵あおいだよ」

「そうね。でも、連れ出してくれたのは慎。私、故郷に帰るの」

ふわりと立ち上がった千鶴は、慎に手を貸して立ち上がらせてやる。

「谷に？」

「谷に。私の家はもうないけど、林の実家に。春君はるのお手伝い」

「夏なつと秋あきと冬ふゆは？」

「夏君は寮生活。秋君と冬さんは都会に出たって」

「一人寂しいな」

「夏君と秋君は長期休みには帰ってくるわよ」

「そっか」

慎の柔らかい笑み。

千鶴はそれを暫く楽しそうに眺めると、慎の手を握ってゆっくりと二人で丘を下った。

「逃げられない…か」

「真奈さんのお願いだもの」

「慎、脱け出し厳禁だと言ってる―」

「いいだろう？ 最期くらい―」

べしっ。

晴滋せいじは無言で慎の頭を叩いた。

「何だい？ 晴滋」

「こっちの台詞だ。 慎」

二人の間に険悪な雰囲気が漂う。一触即発だ。
と、

「悪かった」

慎が謝った。

「…多分」

と、付け足して。

「それじゃあ、慎、晴滋さん、私はこれで」

「千鶴…」

呆れる晴滋の横で、慎は千鶴を呼ぶ。

「どうかした？」

「千里が泣いたんだ」

「……………」

「本気で」

「……………」

「嬉し泣きを」

「…………… あの子は…」

今度は千鶴は嬉し泣きをする。そして、

「ありがとう… 慎… 本当にありがとう…」

「千里は二人の支えでもあるんだ。お互い様。こちらこそ、ありがとう」

慎は千鶴の頭を優しく撫でて笑みを溢した。

本当に童顔だ。

彼は枯草色の髪を揺らして、ベンチに腰を下ろしていた。手元には分厚い本。

「璃央りおうに話を聞いた時からお会いしたいと思っていました。初めまして、司野由宇麻さんしのゆうま」

本を閉じて立ち上がり、深々と頭を下げた由宇麻に、慎は手を差し出したのだった。

谷の子供達

「千鶴さん、兄貴からの羊羹でお茶にしませんか？」

襖から顔だけを出した春は、縁側で作業をする千鶴に声をかける。

「ええ。その前に、こんな感じでいい？」

「はい。弟達よりずっと綺麗です」

千鶴が組みかけの藁を春に見せると、彼は柔らかな笑みを溢した。

「寒くありませんでした？」

「今日は天気も良いし、寧ろ、暖かったわよ」

湯気の立つお茶を両手で抱えた春は「そうですか？」と、厚手の3枚重ねにちゃんちゃんこと布団を羽織り、炬燵で震えながら言った。

「相変わらず、春君は寒がりね」

「ここで生まれ育ったと言うのに、ですね」

そんな風に他愛ないことを話しながら二人はお茶を飲み、羊羹を頬張りながら、もうすぐやってくる人達をのんびりと待つ。

「遅いなあ」

春は壁掛けの時計を見上げた。

午後5時。

予定より3時間も遅い。

「どうしたんだろう」

場所を縁側から移し、読書中の春の傍で藁を組む千鶴も時計を見上げた。

すりガラスの戸からぼんやりと見える外は薄暗い。後数時間で雪が降り始めるだろう。

「雪…降っちゃうよ。二人とも荷物多いだろうし…大丈夫かな…」

「遅れる時は連絡してって言ったのに…」や「ご飯いるのかな…」

や「お風呂用意してあげられないよ…」と、春は困ったりだ。

「私が駅まで行ってくるよ。二人に会えたら連絡するから」

「千鶴さんにそんな！僕が行ってきますよ」

「私、家事は金槌なのよ？私が行ってきた方がいいよ」

「そんな…」

事実だから致し方ない。

千鶴に家事能力は皆無だ。だが、体力には自信があり、4兄弟で一番軟弱な春との相性はいい。

「今日の晩ご飯何？」

「よく煮込んだ大根入りの熱々おでんです」

「んーっおいしそう！早く食べたいから早く二人を連れて来なきゃ。行ってくるね、春君」

春の短い溜め息。

ポケットからカイロを二つほど取り出すと、千鶴に持たせた。

「行ってらっしゃい」

谷の子供達（2）

3人分の傘を持った千鶴ちづるは、胸のロケットを大切そうに握り締めて路地を歩く。

「ちいさん！」

少女のような高い声。

「？」

千鶴は振り返ると、そこには少女ではなく少年。

「修一郎君しゅういちろうくん！」

吉田修一郎よしただ。

美少女似の美少年。

青のニット帽に青のマフラーの黒髪の少年は、白い息を吐いて笑った。

それは儚く、美しい。

修一郎と千鶴は、千鶴の親友である林の弟の幼なじみが修一郎という関係だ。

「お久し振りです」

「久し振り。大きくなったね」

「はい」

太股辺りだった修一郎は、今では千鶴の肩ぐらいだ。男の子は成長が早い。

「修一郎君、夏君なつがまだ帰って来ないの。何があつたか分かる？」

林の弟の夏は修一郎と同じ、林や千鶴、慎や柚里の母校に通っている。修一郎が帰って来ているということは、きっと夏は帰って来ているはずだ。

「夏？あれ？僕達、一緒に帰ってきましたよ？駅で用事があるからって別れましたけど」

やはり、夏は修一郎と共に帰ってきていた。

「それっていつ？」

「んーと…3時間ちよつと前…です」

予定通りの時間だ。

夏は3時間も一体何処で何をしているのだろうか。

「夏、行方不明ですか？」

修一郎は心配より呆れ顔だ。「ちいさんに迷惑かけて…」と、膨れる。

「携帯も繋がらないし」

携帯を素早い手付きで操作した彼は『お掛けになった…』という機械音に溜め息を付いた。

千鶴はその姿を驚きの表情で見詰める。

「ちいさん？」

修一郎が首を傾げた。

「携帯…使えるんだ。凄いね」

千鶴は機械音痴だ。

その為、たとえ携帯が文明の利器と呼ばれていても使えない。彼女は羨望の眼差しを修一郎に向けた。修一郎は目をぱちくりすると、突然笑い始める。

美少年の笑いはどんな種類のものだろうと悪い気はしない。

「ちいさん、変わってない」

楽しそうに嬉しそうに笑う。そんな彼こそ…

「修一郎君も変わってない」

笑顔の似合う、心優しい動物好きの美少年だ。

「でも、夏は何処に行ったんだろう」

一通り笑った修一郎は「一応…」と、メールを夏に送った。

「秋君あきもなのよ」

「秋、帰ってくるんですか！」

何故か修一郎の頬がほんのり赤い。

目を周囲に游がせると、はっとした顔で自らの服装を見る。

「へ…変ですか？」

服装は変じゃない。

「変じゃないよ」

だが、挙動不審。

行動が変だ。

「良かったあ」

修一郎は随分と嬉しそうにする。「秋、帰ってくるんだ…」そう呟く美少年のにやけた顔も全く不自然ではない。

「あ…あの…遊びに行ってもいいですか？」

「私に言わなくても。いつでもおいで。明日のお昼には冬さんが帰ってくるよ」

「今日、行きます！」

と、修一郎は高らかに宣言して、千鶴を促す。

呆氣に取られた千鶴は、修一郎に押されて駅へと向かうことにした。

谷の子供達（3）

林は19歳で、その2年後に林の母親は林の旧姓、琴原家の末っ子達を産んだ時に亡くなった。

当時、琴原にいたのは林の父親と林の兄の冬。そして、僅か2歳の春。

谷の結束は堅く、近所の人達は交替で世話をした。千鶴も、柚里が亡くなり、千里と引き離されてから、千里に注げなかった愛情を林の弟達に注いだ。

春も秋も夏も、千鶴を本物のお姉ちゃんのように慕った。

物心つくようになって、若くして亡くなった林の存在を意識するようになった後も皆、千鶴を慕う気持ちは変わっていない。

千鶴も少しずつ、3人に林の話をしてやる。そんな時、いつの間にか冬も部屋の隅で、冬に気付いてはしゃぐ春の相手をしながら胡座をかいて目を閉じる。一度だけ、目を閉じてそのまま寝てしまった冬の口から「林…」と、寝言が溢れた。冬の頬につうと流れた雫を拭った時のことを千鶴は今も覚えている。

林の父親が亡くなって、冬は都会へ働きに。

春は水田を継ぎ、秋は冬と同居して都会の学校へ。夏は全寮制の林の母校へ。

冬が政治家として、琴原家は経済的には困っていないが、それぞれ自立しようと頑張っている。

それでも休みには、兄弟全員が実家に集まる。そして、ここが一番居心地がよいと、寛ぐのだ。

ちろりん。

「あ、夏からだ」

「本当？」

「『今、何処？』ですって。今、何処って、さっき僕が送ったのに」
3時間居た場所は教えたくないらしい。

修一郎は文句を言いながら、丁寧な文章で目的地を教える。
ちろりん。

「『あと数分で駅に着く』だそうです。雪降りそうですし、急ぎま
しょう」

千鶴は修一郎に手を掴まれて走り出した。

小さな駅のホーム入口のベンチに一人。

足下には大きな黒のエナメルバック。

「夏！」

と言う美少年に…

「遅い」

一蹴。

短い髪に野球帽の彼は、顰に視界を隠して手元の携帯ゲーム機を操作しながら言う。

「夏君、久し振り」

ティラリー〜ティラリーティ〜ラ〜…

よく御愁傷様な場面で流れた有名な曲。と、思っのは千鶴が古い人間だからだろうか。

「！？」

夏がお化けを見ているかの驚き様で、ゲーム機から有名だけど作曲者はおるか、曲名すら知らない曲を流したまま目を見張る。

そこまで驚かれると、逆にティラリー…だ。

「ひ、久し振り」

帽子を脱ぎ、開けっぱなしの鞆に突っ込むと、ギクシャクと千鶴に握手を求める。一緒にお風呂まで入った仲だというのに…。千鶴は夏と握手をした。

「ちいさん、遅い夏を心配して、外寒いのを探しに来たんだよ」

そう修一郎に言われて、春に連絡していなかったことを思い出す。

「電話しないと！修一郎君は今日、お家に来るんだよね？」

「千鶴姉ちゃん、俺が電話する」

携帯。

夏は慌てて携帯を取り出して電話をかける。公衆電話を使おうとした千鶴は恐縮だ。

「春？…あーうん…まじ忘れてた。…うん、いるいる。秋はいないけど。……そんでさ、修一郎が泊まるって…え？うん。分かっている。んじゃ」

電話を切る。

「ありがとう、夏君」

「あ、うん。…修一郎にやつくな！行くぞ！秋の居場所には心辺りがある」

ゲーム機を切り、エナメルを担ぐと、夏は先頭切って歩き出した。

この道は…

「あいつ、いつも、皆に内緒でここに先に来るんだ」

きつと別に内緒にはしていないのだと思う。ただ、わざわざ言う必要はないと思っているのだ。

からん。

長い階段で千鶴の履くサンダルが鳴った。

「何で…夏…は…知っ…て…いる…の？」

修一郎は運動不足なのか、十数段で既に息があがっている。

「たまたま偶然。通りすがりに…偶然」

偶然が多い。

「それよりもお前、まだ上がるけど大丈夫なわけ？」

「秋…ひさ…し…ぶり…だし」

どうやら、ここまで彼を奮起させているのは秋らしい。夏は溜め息を吐くと、千鶴よりも更に下にいる修一郎のもとまで降りて、修一

郎の背中を優しく押す。

「ふらふらしてつと転んで怪我すんぞ」

「あ…あり…が…」

若いカッブルにしか見えないのは千鶴だけだろうか。

「夏君、私が鞆を持つよ」

修一郎を支えながら階段を上る夏を見て、千鶴は夏のエナメルに手を伸ばす。

が、

「いい！」

怒られた。

「…あ…違くて…春に言われてっから。だから…俺、大丈夫だし。ほら、もうすぐだ」

これくらいの歳になると、素直に領けなくなるのだろうか。成長している証だが、何だか哀しい。

曇天。

急に冷え込む中で白い息を吐いて、三人は階段を上がりきった。そんな三人の頬を澄んだ風が撫でる。

並んだ墓石。

ここは谷の人間の墓場だ。

谷は低い。だから、長い階段を上った先、天と故郷に近いここに墓がある。

頑丈な柵の向こうは谷があり、見下ろせば谷の人間の生命の源の川が流れている。亡くなった人々は谷の人間、子供達の為にこの川を護っているのだそうだ。

「あれ？いねー」

夏はキョロキョロと辺りを見回して言った。

「ここじゃなかったね」

修一郎は残念そうだ。夏としては、ここまで苦労するという気持ちがあるのだろう、足下の小石を軽く蹴った。

「林姉ちゃんの墓参りかと思ったのに」

他と変わらない林の墓石。修一郎はじつとそれを見詰めた。

「修一郎君？」

「あれ…葵の花びら…じゃないですか？」

「葵？」

千鶴が振り向いた時、彼女の目の前を鮮やかな青の花弁が横切った。夏もその花弁を見上げる。

「林姉ちゃんの好きな花」

「誰かしら」

花弁はみずみずしかった。ただ、花束はない。

花びらだけを残した誰かが、何かが居たか、起こったか。

夏と修一郎が空を仰ぐ中、千鶴は林の墓石に視線を落とした。その灰色の石に黒い染みが点々としている。

「雪…」

純白のふわふわしたものが落ちてきた。

綺麗。

「降ってきちゃった」

修一郎は空に手を伸ばす。

あと数時間もしたら、ここは雪に埋もれる。明日には谷の下も雪に埋もれる。

「夏君、修一郎君、雪降ってきたし、先に帰ってて」

「千鶴姉ちゃんも帰ろうぜ。秋は粉雪だろうが、ばた雪だろうが、霰だろうが、氷だろうが、自力で帰ってこれる」

氷は痛いだろう。

「写真屋さんに行かないと。ずっと預けてたら悪いし」

「なら俺が—」

「長旅、疲れてるでしょ？」

千鶴が傘を修一郎に渡すと、彼はこくりと頷いた。

「行こう、夏。ちいさん、早く帰ってきてください」

修一郎は千鶴の本当の目的が写真屋ではないことに気付いた様で、
すたすたと階段を降り始める。

「おい！修一郎！」

「今日は熱々のおでんだって」

そう千鶴が言くと、やっと夏は走り出した。

谷の子供達（４）

千鶴^{ちじろ}は白い息を吐くと、階段を挟む急傾斜の林に近付いた。

「秋君^{あき}、危ないよ」

その林に話しかけると、

「夏^{なつ}にストーカーされていたとは気付かなかった」

染めたらしい跳ねた茶髪。

胸元に揺れるメタリックな首飾り。

コバルトブルーのＴシャツ。

ファアの付いた黒のジャンパー。

意図的によれているのであろうジーンズ。

黒のスニーカー。

今時の格好の彼は、都会の匂いを纏っていた。

「遅かったね。どうしたの？」

「都会は電車がよく停まる」

琴原秋^{ことばら}。

琴原家の三男であり、夏の双子の兄。

「久し振り、千鶴姉さん」

「久し振り、秋君」

「千鶴ちゃん。はい、これ」

現像された写真の入った紙袋と…

「これは…」

「おじさんからの遅い結婚祝いだよ」

額に収まった３人の笑顔。

それは、千鶴と柚里^{ゆり}と赤ちゃんの千里^{せんり}の写真。

「おじちゃん、千鶴姉さんの勝手に見たの？」

「都会の坊主は黙れっ」

ぺしり。

秋の頭を軽く叩いた写真屋の恰幅のよい男は、写真を撫でる千鶴の手に自らの手を重ねた。

「おじさん……」

千鶴の頬には涙。

「柚里の死は辛かった。だけど、千里がいる。お前達の子供が」
男は柔らかな笑みを溢す。

「はい」

つられて笑う千鶴を秋はじっと見ていた。

「千鶴姉さんの子供って今、何歳だっけ？」

秋は千鶴の手元の額の赤ちゃんを指差す。

「19歳。もうすぐ二十歳」

二十歳には二人は会えるだろうか。

「俺の姉さんの子供も千鶴姉さんの子供と同年なんだろう？」

「洸^{（うき）}祈^{（あおい）}君と葵君？そうね」

「それってさ、俺の方が年下なのに、そいつらからしたら俺は叔父さんかよ」

「……………そうね」

千鶴も今気付いたらしい。写真屋の男は忍び笑いをする。

「お前が叔父さんか、秋叔父さん」

「おじちゃんに叔父さん言われたくない」

そんな二人を見て、千鶴は再び笑った。そして、紙袋から他の写真を見る。

これらは千鶴が趣味で、林^{（りん）}と共に軍学校に進学した時から撮っていたものだ。

「秋君、見る？」

「ん？」

そこには……

「何てもん撮ってたんだ！」

双子のオシメを千鶴が変えている姿。きゃっきゃと笑う二人がいる。

絵としては微笑ましいが、霞もないところまで写っている。

秋は血相を変えて言った。

「冬^{ふゆ}さんが。秋の方がお兄ちゃんなのに小さいなって」

「兄貴い！！！！」

秋は叫ぶ。

「国を支える政治家にこんな悪趣味があったとは！あのヤロー！！」

「千鶴ちゃん、一体何の写真なんだ？」

「あ…はい」

千鶴は写真を写真屋に見せようとして、

「千鶴姉さん！」

秋は奪った。

「秋君」

千鶴は秋の名を呼ぶ。

「これは駄目だ！」

「秋君」

呼ぶ。

……………。

「今は大きいじゃない」

「は？」

流石の秋も数歩後退り。

表情が強張っている。

「まさか…」

「小さい頃なんて気にしなくても」

「嘘…知ってんの！？見たの！？いつ！？」

有り得ないという顔で千鶴を見る秋。鬼かお化けでも見ているかのようだ。

「？今は秋君の方が身長高いじゃない」

「身長？」

秋の口が半開きで停止。

「身長でしょ？違う？」

「違わない！そう！俺、あいつより3センチも高いの！アハハハ、ハハハ…ハハ………」

はあ。

秋は溜め息を吐く。

「っははは！秋、まだ小さいのか？」

「おじちゃん！」

背中に隠した手から写真が落ちていたようだ。

男は写真を眺めて大爆笑。

「秋君の方が3センチ大きいですって」

千鶴は勘違いをしているらしい写真屋に言う。
が、

「違うよ、千鶴ちゃん。こいつが言いたいのはい」

「やめろ！じじーっ！！！」

「秋君、爺なんて失礼よ」

「千鶴姉さんっ！」

分かって欲しいけど分かって欲しくない。

秋は必死に、かつ、無意味に手を動かす。それが面白くて写真屋は茶化す。

「秋が言いたいのはい男の勲章、すなわち——」

「口閉じやがれ爺！」

秋はキレ、

「秋君！年上にいけません！！」

千鶴は叱る。

「千鶴姉さん！！」

「おじさんはいいお人よ？」

「そういうこと。ま、おじさんは気にしない方さ。お前が小人者の

お子様つてぐらい」

「うつせえ！黙れ！」

「秋君！……！」

「理不尽だあ！……！！！」

雪のちらつく谷に少年の叫び声は響いた。

谷の子供達（４・５）

「春^{はる}ー、シャンプーまだあ？」

「はい、秋君^{あき}」

伸ばされた秋の手に、千鶴^{ちず}はシャンプーのボトルを置いた。

「ありがと、ちづ……！！！！！！？」

「何なら私が洗おうか？」

「いいって！それより、俺！分かる！？俺なんですけど！！！！！」
流石の千鶴も言いたいことは分かる。

だが、

「大人になると、きつと、洗われるの嫌がるだろうから、今の内に
目一杯可愛がらないと」

という、真つ当な理由があるのだ。

「やめて！ホント俺、大人じゃないけど思春期真つ盛りなの！！」
エプロンをし、袖を捲し上げた千鶴はシャンプーの液を手につけて、
秋の茶髪に触れた。

「ねえねえ、秋君、カッコいいからモテてるんじゃないの？」

「俺？んー……まあまあ。クラスの奴等より一桁多くチョコ貰うくらいは」

最初は優しく、ゆつくりと泡立てていく。

「一桁も！？モテモテだね。彼女も一人や二人？」

「千鶴姉さん、二人いたら二股だから」

「でもいるんですよ？」

「長く続かなくなつて」

先ずは耳の裏。

「どうして？」

「何かさー、一緒にいると飽きてくる」

「そうなんだ」

次はこめかみの後ろ。

「都会の子は遊び好きだと思ったけど」

「遊び好きだよ？」

「じゃあ、何に飽きるの？」

「話に飽きる」

頂点は優しくしないと、秋は嫌がるのだ。

「どんな話をしているの？」

鏡を通して見える秋の茶色がかった、瞼に半分隠された瞳を見詰めて訊いた。

「誰がウザいだのキモいだの、誰がやったただのやらないだのって言うような下品な話」

「秋君はいい子ね」

前髪をそつとかき揚げ、生え際を洗う。

「てか、ついてけない。田舎の血かなー」

そう言つて目を閉じたその表情は暗かった。

……そんな寂しそうな顔をしないで……

「私達が秋君頃の時は、そーねえ……………」

「千鶴姉さん？」

ふいに止まる千鶴の声。

秋は目を開け、鏡越しに千鶴を見上げた。

ぼたり。

「泣いてる？」

「……………うん」

千鶴は手を止めると、シャワーの蛇口を捻る。温度をみると、何も言わずに秋の髪にかけた。

「ちゃっかり俺、千鶴さんに洗われてんのな」

「……………うん」

ぽたり。

二人の会話はそれっきりになり、シャワーの音だけが響く。泡は秋の頬と背中を滑り、排水口へと落ちていった。

「……………千鶴姉さん……………」

「……………うん……………」

「サービスとして付けといたげるよ」

「……………うん……………」

水滴は秋の髪から首を滑り、鮮やかな金髪を濡らして千鶴の目尻を通る。

ぽたり。

「秋君」

「ん？」

「私達……………最高の友達だったの……………四人で……………いつも笑って……………」
私達は林の明るさや優しさに惹かれて集まった。

「時には大喧嘩して……………仲直りして……………」

林がいたから、私は柚里や慎に会えた。

「なのに……………林を失って……………柚里を失って……………」

「千鶴姉さんはひとりぼっちじゃないよ」

千鶴の手を引いた秋は、耳を赤くしながら言う。

「秋君……………」

「おじちゃんも言ってたけど、千鶴姉さんの子供も……………会えなくても生きてんだし……………それに、傍には俺達がいるし……………」

ぶきつちよなのは小さい頃から変わっていないようだ。

「ほんとに秋君も皆、いい子っ」

千鶴は服が濡れるのも構わずに秋に抱きついた。

「ちよっ！」

「あーっ！！！！！」

高い少女のような声。

寝巻きを取りに一時帰った彼が立っていた。

「しゅ、修一郎！？」
しゅういちろう

秋は短い悲鳴をあげると、替えの服を掴んで修一郎の横を通り過ぎる。

「秋っ、待ってよ！」

修一郎も秋を追って出て行った。

「二人とも仲良しね」

谷の子供達（5） 秋と修一郎

「修一郎君、いいの？」

「はいっ！！」

千鶴はベッドの上で携帯を弄る秋を見た。千鶴の視線に気付くと、秋はヘッドホンを外して、近くに投げた。

「俺はベッドを譲らないよ。修一郎が勝手に俺と寝るって言ったんだから」

「秋くー」

「ちいさん、客室を断って秋のそこを勝手に決めたのは事実ですから、怒らないで下さい」

修一郎は深々と頭を下げるから千鶴は下がるしかない。

「今日は冷えるから温かくして寝てね」

「はい。ありがとうございます」

羽毛布団を渡し、修一郎は笑みを溢した。

彼の笑顔に千鶴も笑みを溢すと、そんな彼の後姿を見詰める秋に首を傾げた。

直ぐに秋は千鶴から目を逸らす。

そして、よろける修一郎から布団を取り上げると、敷いた布団に毛布を乗せた。

「あ…ありがとう」

「んっ」

やはり、修一郎と秋は仲良しだ。

「あ…秋」

「煩い」

「どうして…怒ってるの？」

布団に正座した修一郎は、再び携帯を黙々と弄る秋を見上げた。

「煩いぞ、修一郎」

「僕がちいさんといちゃいちゃしてるの邪魔したから？」

「いちゃいちゃ？あーそう。俺、邪魔されたから怒ってんの」

秋は溜め息を吐き、ベッドに潜る。

「秋…」

「黙って寝ろよ」

「……」

カチッ。

修一郎は電気を消す。

「おいっ！誰も消せとは言ってないだろ！」

「僕、明るいと寝れないから」

不機嫌らしい彼は、秋に背を向けて布団に入った。

「知るかよ。俺の部屋だ」

再び溜め息を吐くと、秋はスイッチを探して立つ。壁に手を添わせ、ゆっくりと歩みを進めると、指先がスイッチに触れた。

が、

「っあ！！」

足首に柔らかな感触。

秋はその場に蹲っていた。

「僕、秋に言っただよ？秋は頷いたよ？」

見た目、男の娘の修一郎だ。彼は、立てひざを突いて秋を見上げていた。

「何言っただよ？」

目を逸らした秋は小さく答える。

修一郎は布団から出ると、秋の前に正座した。

「僕、秋に好きって言った」

「へ…へえ…」

携帯が開かれ、戸惑いの隠せない秋の顔を照らす。

「秋」

修一郎は秋を見詰めて離さない。

「…修一郎」

秋は体を縮めて後退る。

「秋、答えは？」

「答えて！何で今日なんだよ！明日…明日に答えようかと…」

そんな彼を修一郎はジリジリと追い込む。

「嫌だよ！秋、チョコ沢山貰ったんでしょ！付き合ったんでしょ！」

修一郎は真剣だ。

「そりゃあ…」

「分かってるよ！男の子を好きになるなんて可笑しいって！秋は普通の人だから、僕を受け入れられないかもしれない。なら、それはそれではつきり言ってよ！」

はつとした時には遅く、秋は修一郎に手首を掴まれて壁に押し付けられていた。携帯が秋の手から滑り落ちる。液晶には、白紙のメー
ルの文面画面。

「秋、片想いつて凄く辛いんだよ？だけど僕は、1年半、秋に時間をあげた」

修一郎はぐつと顔を近付け、彼の勢いのついた黒髪が秋の耳朶に触れた。

修一郎の赤く色付いた頬。

だが、秋は…

自らの腕を掴む修一郎の手を振り払い、小さく縮こまった。

「秋…」

「あげた？なら…お前は俺に誰と付き合っても上手く行かないよう…俺を悩ませる時間をくれたのかよ！」

茶髪を染めたのも…

派手な衣服を着るも…

全ては生きるため。

「俺はな！お前が…憎いんだ！」

「そんな…ど…して…」

修一郎は哑然とする。幼馴染に唐突に憎いと言われたから当然だ。

「分かれよ！」

本当は、

あまり知らない人間と仲良く話すのも、携帯を使うのも、ちゃらちやらした奴も苦手だ。

だけど、厚化粧の同じ高校生とは思えない女子高生と話すし、メルが送られれば、中身の無い返事を直ぐに送る。

間延びした語尾の奴らとも引きつる顔で精一杯の笑顔を浮かべて話をする。

どれもこれも、都会という慣れない地で生きるため。

「8年前の3月17日」

秋は叫んだ。

「8年前…？」

「お前は覚えてないだろうな。お前にとってはただの俺達の誕生日だったんだから」

思い出すのも嫌だという苦々しい顔で、秋は続ける。

「ただの…なんて…」

「あの日から…あの日から…俺は…お前と夏が憎くて仕方がなかった」

8年前の3月の17日は…

「あの日は…皆で…一緒に…お祝いを…」

キツと、秋は修一郎を睨む。

普段、めつたに怒らない秋が怒りを露にしたのに、修一郎は涙を堪えて、唇を強く噛んだ。

「お前達の軍学校進学決定のお祝いをだ」

「だからって…！秋は変だよ！秋は僕達に嫉妬したの！？谷の皆に、

僕達が私達の誇りだつて言われたから嫉妬したの！？だけど、しょうがないだろう！魔法は…望んで得たものじゃないよ！」

魔力は全ての人間が持っている。

だが、それを具現化し、使えるのはほんの一部の人間だけ。

一族で魔法が使える者もいれば、突如、生まれた者に魔法を使える人間が現れることがある。

後者のそれが、修一郎と夏だった。林も同様だ。

「嫉妬じゃない！3人でいつも一緒だったのに、その日から、お前達2人になったんだよ。挨拶しても、谷の人が返すのは前を歩くお前達二人だ」

魔法使いは珍しい。狭い谷では尚更。

「秋―」

「煩い！」

秋は遮る。

「ここが嫌で嫌で、俺は東京に出ることにしたんだ！お前達から離れたくて…一年半前、俺の出発を誰も見送ってくれなかった。それでも別によかった。同じ駅のホームで、谷の皆がお前達をわざわざ垂れ幕作って見送りしてなかったらなあ！」

修一郎君！夏君！行つてらっしゃい！

耳障り。

どんなにヘッドホンの音量を上げてても聞こえてくる目障りな音。

これを自分勝手つて皆、俺に言うの？

俺とあいつらはどこが違うの？

魔法が何なの？

魔法なんて…

魔法は俺から全てを奪う…―

「最後の最後まで俺は惨めで、東京に出てまでお前に苦しめられて！最悪なんだよ！！」

どうして…

どうしてお前もあいつもなんだよ。

「お前には夏も谷の皆もいて！俺は…！」

ぎゅっ…

「何…して…」

秋の爪がフローリングの冷えた床を引っ掻いた。

「秋…謝れば許して貰えるのかな…僕達は秋に許して貰えるのかな…」

「放せ…よ！」

近づくな。誰も俺に近づくな。

秋は荒くなる息を整えようと小さく縮こまる。

「ごめんなさい…ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい」

修一郎はただ謝る。

小さい頃もそうだった。

怒ったり悲しかったりする秋は、一人で片付けるまでは誰の何も聞かない。

塞ぎ込んで小さくなる。

だが、修一郎は放さないで包み込むように秋を抱きしめ続ける。

「放せよ！」

吐き捨てるように威嚇する秋。

「嫌だよ！僕は秋が好きなんだよ！」

ここでは引けない。と、修一郎は細い腕に力を込める。

「押し付けるな！俺はお前なんか！」

「分かってるよ…もう、分かってるよ…だけど…僕は…幼なじみとして…親友として…好きだよ…だから…」

声変わりをしたはずなのに、女の子のように高い声。

秋は耳に響く修一郎の言葉に震えた。

「秋…ごめんなさい。僕は秋を沢山傷付けてた…ごめんなさい。秋…」

「!?!?おい!」

首筋に温かいものを感じた秋は、修一郎を引っぺがして慌てる。

「おいってば!」

「秋…秋…秋いい!?!?!?!」

ぼろぼろと泣き始める修一郎。

彼は、せきを切ったように泣き出した。

「泣くなよ!」

「ごめん…寂しかったよね。ごめん、あきい!?!?!」

「寂しくねえよ!泣くなって!」

秋の声が届かないのか、聞いていないのか、修一郎は秋のシャツにシミを作っていく。

「どうしたら泣き止んでくれるんだよ…」

「あっちゃんのかあ」

と、修一郎。

「あっちゃん呼ぶな!それに、馬鹿じゃない!」

もう、修一郎は何も聞いていないようだ。秋はティッシュ箱を机に手を伸ばして取ると、泣く修一郎の顔に押し付ける。すると、彼は鼻を鳴らし、こてんと両手を広げて仰向けに倒れた。

「しゅうちゃんって呼んでくれないの?」

鼻をかみ、丸めたティッシュを床に投げ捨てた修一郎は言う。

「言うか。餓鬼みたいだし。もう泣くなよ」

「あっちゃん。僕、好きだよ?あっちゃんが好きだよ?」

「またそれかよ…」

転がったティッシュに手を伸ばし、ゴミ箱に投げ捨てた秋は溜め息を吐いた。

「俺は、男とどうこうなんて興味が無い。別に、そういう人間を否定するわけじゃない。だけど、男は好きにはならない」

「それって、ヘンケンだよ。サベツだよ。好きって、男も女も関係ないもん。異性も同性も関係ないもん。なのに、男は好きにならないって言う秋は、僕を否定してる」

「あーっもう！俺が悪かった！ったく、お前は屁理屈が多い」

「秋は僕の言葉を屁理屈でよく終わらせるけど、それこそ、僕にとつては屁理屈だ。でも、秋が悪かったって言うなら…秋は僕を、恋愛の対象としては見られないんだよね…。僕はふられたんだよね…」

しよんぼり。

修一郎は横を向き、じつと暗闇を見詰める。

秋は宙を見ると、再び溜め息を吐き、修一郎の肩を叩いた。

「何？」

「その…さっきはちよつと気がたつてた。色々あつてさ…。俺…本当は…」

「秋？」

その時、顔を真っ赤に火照らせた秋の顔を見て、修一郎は、その意味を察し、体を起こした。

「もしかして僕、脈あり？」

「知るか！」

「秋って、ツンデレだよな？素直になれない質だよな？」

「なんだよ！ツンデレって」

そつぽを向く秋に、修一郎の顔が華やいだ。

そして、

「秋、僕に好きって言つてよ！」

がばつと、秋に抱きついた。秋は目を白黒させて、驚き、足をばたつかせる。

男に抱きつかれている。子供じゃなくて、幼馴染の同年代の男に。

「言つかよ！好きじゃない！」

「いいよ？秋、キスしていいよ？」

暴走気味の美少年は、止まらない。

修一郎は待つ。

長いまつげを揺らして待っている。

「まだ、俺、好きななんて言っていないんだけど！」

「素直になれない秋の気持ちは分かったから。どうしようもないくらい、溢れんばかりの好きが、僕、伝わってくるから」

「お前、絶対におかしい！」

「最初は触れるだけでいいよ。待ってるから。少しづつ、長くしていこう？」

「アホ修一郎！！！」

前屈みの秋。

顔を上げる修一郎。

秋は彼の細い顎に手を掛け、軽く持ち上げた。

「キス…すんのか…？」

「いいよ。秋」

指先で、綺麗な黒の前髪を上げ、

「本気？」

「僕は本気。秋も本気になるよ」

細い人差し指は、秋の茶髪に絡み、

「ファーストキス、まだでしょ」

「なんで知ってたんだよ」

「ついでに言っと、付き合う前に、皆、振ってるでしょ」
「だからなんで…」

谷の子供達（5） 千鶴

「千鶴！すっごい綺麗よ！！」

林が私の手を取って、笑みを浮かべた。

それが微かにひきつっているのは、きつと…

「ありがとう、林」

「うんっ…でねっ…それでねっ…本当に…」

堪えられずに、林は泣き出した。

「本当に…おめでとう」

震える声で、抱き付きたいのであろう衝動を抑えて、私の差し出したティッシュ箱を掴んだ。

瞼を腫らし、鼻の頭を赤くした林は私の大切な親友だ。

「綺麗だな、千鶴」

そこへ、礼服装の親友が現れた。

「慎君！…って！ここは男子禁制、花嫁の園よ！！」

林が頬を膨らませて、慎に怒る。慎は今気付いたかのような表情をするが、きつと、知って来たのだろう。

「私だって柚里君に会いたいけど会わないんだから！」

「林がこれを忘れてくからだ。柚里の部屋の前で右往左往して、俺が部屋を出ようとしたのに慌てて、落っことしただろ」

バサツと揺らしたそれは花束。

「ブバルディアにカスミソウ。お前らしい」

何が林らしいのだろうか。

「ブバルディアは幸福な愛。それで？カスミソウの清らかな心って

…」

慎が博識だ。

「よく知ってるね」

「日ごろの努力」

ぐつと親指を立てる慎は、どこか抜けている。
まず、親指を立てるのは古いような。

そして、花言葉を覚えるのは努力に入るだろうか。

「綺麗なお花は心に響くの!!」

林はぶくつと頬を膨らまして言った。

「お前らしい」

ぐりぐりと林の頭を撫でる慎は、ちょっと緊張しているようだ。

私は慎に水を渡す。

「慎、ちよつと、熱あるんじゃない?」

小声で聞くと、慎は水を慌てて飲み干し、小声で返してきた。

「昨日、飲みすぎてさ…廊下で寝てて、風邪引いた」

昨夜は、林とお祝いで飲み明かしたのは知っている。

結婚式を翌日に控えた私達は、それに参加できなかったが。

「相変わらず、慎はひ弱ね」

見た目では柚里の方が軟弱そうなのに、案外、慎の方が菌に弱い。

「薬飲んだし、お経聞いたし、お祓いしてもらったし、お祈りもした。釈迦が見放してもキリストは見放さない。逆に、キリストが見放しても、釈迦は見放さない。どっちにも見放されたら、現在の医学があるから大丈夫だ」

どの宗教も信じてないくせに。

最初から、医学が一番、確実に安全だと思う。

風邪薬は多くの人間が試しているから、それこそ大丈夫だ。

「柚里は知ってるの?」

「怒られた」

そうだろう。

「林は知ってるの?」

「知ってたら、こそこそ話さない。言ったら殺されるより酷い、生殺しだ」

まあ、そうだろう。

だが、きつと慎は林に怒られることよりも、あのことを心配してい

るのだろう。

意識不明の重体。

あんなに弱った林だけは、私も慎も柚里ももう見たくない。

原因は眞羽根^{まはね}の行方不明だ。

軍の陰謀か知らないが、捜査はすぐに打ち切られ、林は一週間以上塞ぎ込んでいた。

私だって、眞羽根の失踪は悲しい。

しかし、林はずっと彼の世話をしてきた。

眞羽根も林をとて慕っていた。

そんな、彼を理不尽な戦争で失った林の悲しみは私よりずっと大きいのだ。

そんな彼女が暴走したのは、一時は回復したと思ったあとだった。実践だったらしい慎が折った足を引き摺って帰って来た時のことだった。

医務室に運ばれる慎を見て、林が叫んだ。

きっと、同じように怪我をして、医務室に運ばれる途中で行方不明になった眞羽根と重ねたのだ。

魔力の暴走に耐え切れなかった林は倒れた。

それから三日も寝込んだ林。

「なーに二人でこしょこしょ話してるの？」

「なんでもないわよ。ね？ 慎」

「ああ。それじゃあ。林、行くぞ。千鶴、最高の笑顔を見せてくれよ」

「千鶴、またね」

慎の何気なく差し出された手を、林は何気なく握り締めた。そんな二人が微笑ましい。

「千鶴姉ちゃん！起きて！」

夢が遠退き、現実が現れる。

千鶴は目を開けた。

「ん…？夏…君？」

揺すっていたのは夏だった。

「泥棒だ」

彼は息を潜めて言う。

「泥棒！？」

「庭を泥棒が徘徊してる」

「どうして徘徊？」

わざわざ居座るものだろうか。

「中に誰もいないかよく調べてるんだ」

「春君、春君！」

千鶴は並べた布団の隣で眠る春を揺すった。

「何でここにいの？」

「寒いって。春君！起きて！泥棒！」

がばり。

「泥棒！！！」

跳ねまくった髪が勢い良く体を起こした。そのせいで、見下ろしていた夏の額と彼の額がぶつかる。

夏は顔を歪めて千鶴の布団に突っ伏した。

春は何事もなかったように—というより、別のことで頭が一杯で—立ち上がる。

「僕の水田！」

着込んだ衣服で重たそうにしながら、襖にへばりついた。

「駄目よ！危ないわ」

そんな彼を千鶴は止める。

春は4兄弟の中で、修一郎と千鶴を合わせた中でも一番弱いのだ。おまけにこの大雪の中、春には酷過ぎる。

「でも！僕の水田！両親の形見！谷の命！」

「水田は盗られない！てか、どうやって盗るんだよ！」

「酷いです！僕の水田は盗られるに値しないんですか！」

盗られたくないのか、盗られたいのか、一体どっちなのだろう。

夏の言動に春が噛み付くように言い返す。

「そうじゃないよ！土地の権利書でも取られない限り、春兄ちゃんがこの家売るまで水田は盗られないってことだよ！」

「売らないよ！だから、権利書を守る為に行きますよ、二人とも！」
千鶴と夏はゆつくりと立ち上がった。

月明かりに照らされたリビングにいた。

“泥棒”が……

「ぎゃあああああああああ……！！！！！！！！！！」

誰かの悲鳴が、琴原家中に響き渡った。

谷の子供達（6）

叫び、千鶴ちづるにしがみついたのは……

「水田どろばー！！！！！！」

「春君はる、駄目よ！」

夏なつにしがみつかれて動けない千鶴の制止も虚しい以前に意味なく、布団叩きを持参した春が“それ”に振り上げた。
バシッ。

「いてっ」と、それが唸る。そして、転んだ。

「水田泥棒は地獄に落ちればいいんです！！！！！！」
春は口が悪い。

再び布団叩きを振り上げる常時穏健派の彼は、弱った生命に追い討ちをかける気だ。

「春君！その人は泥棒じゃなくて——」

バシィィ……

カチッと丸い蛍光灯が光り、部屋が明るく照らしだされた。

「何してんの？」

眠たげな機嫌の悪そうな秋あきが立っていた。そして、無様な格好をして転がる人を見下ろして言う。

「兄貴」

「一応、我が家なのにな」

スーツ姿の彼は溜め息を吐き、粉雪の積もる頭を振った。

「いたたっ…春、痛い」

左頬を赤く腫らした琴原家長男、冬は、消毒液に顔をしかめた。

「兄貴、ごめん」

「それ、笑える」

大きな湿布を貼った冬に、春は心配顔だが、秋は腹を抱えて笑う。

冬は別に羞恥もせず、彼の額を見て言い返した。

「お前もな、秋」

「ふんっ」

そこには大きな絆創膏。

その姿は不恰好で、普段、都会の格好の秋だからこそ、チャラチャラした外見には尚更目立つ。

この二人―秋の怪我の原因は冬だが―何故こうなったかというところ―

「開かない」

鍵で開けたはずなのに扉は開かない。

「何故だ？」

凍えた指を震わせながら、扉をスライドさせようとするが…

「開かない」

完全に閉め出し状態。

仕方なく、雪に降られながら庭に回る。

そこで懐かしくて…

「おー、クロ」

やはりいた。

野良犬のボーダーコリーが猫のように軒下にいた。エアコンの排熱がちょうどここに熱を運ぶのだ。

旧友に手を振れば、吼えられる。

「お前も俺を閉め出すのか」

よく見れば、小さな白黒の塊がコリーの腹の辺りで蠢いていた。

「もしま…」

繁殖したようだ。

賢く礼儀のある雌犬の機嫌が悪いのはそのせいらしい。

「分かったから、騒ぎ声と毛、糞尿はやめろよ」

頷いたように見えたコリーは子を抱え込んで顔を背けた。

微笑ましいが、それも一時。

「寒い」

朝には一面真っ白だろう。そんな時の谷はとても美しいのだ。

朝日に輝く雪。屋根から下がる氷柱。白くなった木々。点々と温かな雰囲気の家々。

そこに、凍死した人間の体。

いかん。

一気にどす黒い印象に変わってしまった。

「寒くて死ぬ」

ヒートアイランドの東京に合わせた格好の為、家族に会いたい思いで終電に乗って帰ってきたのに、閉め出されて死にそうだ。ここは本気で死体に…

…にやあ…。

「シロ」

猫が擦り寄ってきた。

野良のシロは雪に溶けてしまいそうな体で冬の胸に飛び込む。

「…あつたか」

温かい。

湯タンポだ。

食い物泥棒の猫を可愛がっていて良かったと今更、実感する。

「確かに帰郷を一日早めた。だがな、だからって、家に閉め出され

ることはないだろう?」

家族にちゃんとお土産を買ってきた。ボロくなってきた家の修理もするつもりだ。

「寂しいな」

にやあ。

シロは呼応するように鳴いた。

そして、シロ―彼女―は冬の腕から逃れると、尻尾を揺らして縁側に降り立つ。

「お前もか?」

カリカリ…。

彼女は窓を掻く。

にやあと一鳴きすると、赤い瞳を冬に向けた。

「なんだ?」

と、窓に触れれば…

「開いた…」

窓が開いた。

冬はシロを力強く抱きしめ、頬ずりした。

彼女はにやあと嫌そうに鳴くが、冬はただただありがと々と感謝をする。

「ああ…温かさが身に沁みる」

そして、先に入ったシロと共にいつもの調子で焼酎を喉に通そうと畳の上を歩き回っていた時だ。

ぎゃあという悲鳴と、

「水田どろぼー!!!」

と、我が家で泥棒と勘違いされて叩かれたのは…。

その頃。

「な、なんだあ!?!」

人のもものとは思えないような恐ろしい悲鳴。

秋はドアを開けて外を窺う。

「一体何が…」

一階からだ。

誰の悲鳴だろうと多分何かあったことは確かだ。

秋は下へと向かおとするが、

「待ってよ！」

しゅごいちろう
修一郎だ。

「なんだよ」

「キス！忘れないでよっ！」

修一郎は必死に言う。

「はあ？何言つてんだ！キス？するかよっ」

裾を握る彼を無視して秋は無理矢理階段を降りようとする。

「やだっ！ずっと待っていたのに！秋！あっちゃん！！」

「知るか！ズボン引つ張るな！」

念願のキスを前に、修一郎の目は血走っているかのような錯覚を思わせる。

簡潔に言うならば、必死すぎて逆に恐ろしい。

「秋！秋ってば！」

「放せよ！」

秋は階段を降りようと手すりに掴まり、修一郎はキスしようと秋を引つ張り、

どたっ…ごっ…ごちん。

修一郎諸共、秋を下敷きに落ちたのだ。

冬の為に用意した夜食を、卓を囲んでお腹の空いていない千鶴と修

一郎を除いた皆で食っていた時だった。

「兄貴、マスコミで随分叩かれてますよね」

冬がビールを飲み干した所で春が言った。

「大丈夫ですか？」

「マスコミは嘘つきだ。嘘しか言わない。忘れる。いや、ニュースは見るな」

ばっさり。

政治家がニュースを真っ向から否定した。

冬はうどんを一囓りする。

「冬さん、本当に大丈夫なんですか？」

ビールのお代わりを持ってきた千鶴は心配顔だ。

喩え、冬がどんなに否定してもマスコミの力は大い。

「ありがとう。だが、嘘だからしょうがない」

「兄貴に大物女優の彼女！笑える」

そう言って笑うのは秋だ。写真のことを根に持っているのだろう。

マスコミに叩かれているとは、“やり手の若手政治家が某大物女優と付き合っている！？女関係もやり手！！！”とのこと。

「で？実のところはどうなわけ？秋は分かってんじゃないの？」

4兄弟の中で、唯一辛いものがいける夏が、井に一味を大量に振り掛けて、少々興奮気味に訊く。

「うわっ辛そつ。…兄貴の言う通り、女優と付き合っているなんて嘘っぱち」

“ ってわけじゃないけど…”

ばそりと付け足された言葉。

『！！！？』

春は吐き出しそうになる口元を押さえ、夏は一味に噎せて水をがぶ飲みする。

千鶴の藁を編む手は止まり、修一郎は秋を驚愕の瞳で見詰めながら夏の背中を擦った。

そして、全員の視線がうどんを平然と啜る冬に集まる。

「な？兄貴」

秋はにやけた。

「嘘だつて言っただろ。“付き合っている”じゃなくて“ストーカーされた”なら本当だがな」

これには一同啞然。

「あの大物女優が！？ストーカーですか！？」

と、春。

「冬兄ちゃん、スゲー」

と、夏。

「そーなんだ。皆、なんで兄貴なんかが！？なんて思わないんだ」
秋の思惑とは裏腹に、二人の弟達は兄を讃えた。

「で？どうしたんですか？」

春は楽しそうに笑って訊く。

「くだらん。俺はあの胸でか女より……」

…？

冬の視線の先。

「冬さん？どうかしたの？」

「千鶴ちゃん…君は随分と綺麗になったね」

修一郎以外の琴原3兄弟は神妙な面持ちで冬を見た。千鶴は首を傾げる。

「ありがとうございます。冬さんこそ立派に」

「ビール…いや…シャンパン…軽い奴ないか？」

「あ、あるよ！」

夏が慌てて腰を上げると、シャンパンを取りに台所へと駆ける。

「夏？」

弟が妙に積極的なことに、思春期の子供は精神的にも成長が早いんだと一人納得した冬は、他の弟達も同じ様な少し慌てた表情に、こ

いつらも思春期なのか？と首を傾げた。

「千鶴姉さんはさ、再婚なんて考えないの？」

静まった4兄弟の中から、不意に秋が言い出した。

春と夏の間の不穏な空気が漂い、冬は無表情でシャンパンを煽りながら、然り気無く壁掛けの時計へと視線を逸らす。

「秋、失礼だよ」

修一郎だけは秋の無神経さに怒った。しかし、秋は一切の動きを止めた千鶴を真面目な顔で見る。

「千鶴姉さん、綺麗だよ。半都会人の俺からしても、すっごい美人。けばけばしい胸でか女のあの女優と違って清楚で可憐。ここはもうじじばばつかだし、殆んどが御家同士で婚約者作ってるからあんまし解ないだろうけど、外出たらマジでモテるよ」

「秋っ——」

「再婚はしないよ」

修一郎が怒ったその時、千鶴ははつきりと答えた。膝に乗るシロの背中を撫でた彼女は儚い笑みを溢す。それに、その場の時間の流れが止まったかのように感じられた。

「……どうして？」

冬は抑揚のない調子で訊く。

「ゆり 柚里が好きだから」

誰かが息を呑んだ音がした。もしかしたら隙間風の音だったかもしれない。

「一生独身を貫くのか？」

「貫くんじゃないわ。好きだから、愛してるから、私は再婚しないの。だって、それって、再婚した人に悪いから」

二人は同時に愛せない。

千鶴は純粹な思いで冬に答える。

彼は少し赤くした頬で、千鶴のシロに乗せられた手を取った。

「冬さん？」

「千鶴ちゃん、眠くなければ、俺の飲みにつき合ってくれないか？」

「いいですよ」

千鶴は再び答えた。

心の壁

あいつは突然やってきた。

あの時、あいつと別れてから何年経ったか…。

「お前…やつれたんじゃないか？」

「そうかな。それより、至急お願いしたいことがあるんだけど…」

彼は俺の言葉を聞かずに中へと入る。

「せっちゃんは？」

「あー、あいつ？昼飯に、たこ焼を食いに言った」

「君は？」

「いらね」

「そう。そこで買ってきたお菓子いる？」

袋には俺でも知っている高級菓子名店のロゴ。

益々、こいつはおかしい。

俺に会いに来るのにお菓子折りを、ご丁寧に持って気は絶対にしない。

持ってくるのは厄介事か、減らず口をたたく事だ。

「一体、お前は何を仕出かしたんだ？」

だから、訊いてみた。

「仕出かしたって…別に匿^{かくま}ってとかじゃないし」

彼は勝手に先に進む。

そして、実験結果の書類が散らかったりリビングとも言えないリビングらしき場に入った。

「じゃあ、なんだ？お前はあいつでも予測不可能の行動をする。こんな遠くまで散歩か？」

「そうだね…敢えて述べるとしたら………殺人…かな」
また、物騒な。

「警察は嫌いだ。一人で自首してこい」

「まだ未遂だよ」

ああ、お前は俺を殺しに来たのか。従姉が怖いなどと逃げ込んでき

たこの男を住ませたこの恩人を殺したいのか。

「俺はお前なんかに殺される気はないからな」

「うーんと、僕は僕を殺したいの。だから、ただ君に手伝って欲しくて」

ふつと間の抜けた答え。

こいつといると凄く疲れる。何だかイライラしてきた。

「いいか、俺の質問に沿った答えをしるよ。お前は誰に何をして欲しいのか、具体的かつ簡潔に言え」

すると、

「神影君に僕の記憶喪失で失っていた過去を思い出させて欲しい」

最初からそう言え、蓮^{れん}。

と、言いたくなった。

「最近、夢を見るんだ」

「僕は昔、ある白髪の博士に造られたア。ムとして地球の平和を陰ながら護ってきたんだ。なんて言うなよ。馬鹿らしい」

.....
「君、病んでるんじゃない？」

逆に憐れみの目を向けられた。確かにさっきのは俺の方が馬鹿らしかった。

俺は明後日の方向を向いてお茶を飲む。

煎茶が喉に痛いぐらい沁みた。

「最初は妄想か何かなって思っただけど、最後まで見ると、多分それは僕の過去なんだ」

蓮は真剣だ。

「そこには僕の友人が出てくる。僕と友人がまだ出会っていないは

ずの過去でね」

つまり、

「昔、そいつと会っていたのかもしれないと？」

「うん」

「それで？」

俺は脳内の辞書を引きつつ聞き返した。蓮は首を傾げる。

「それでって？」

「会っていたかもしれない。それでなんだ？」

俺は聞いて損した気分だった。

こいつが珍しく真剣に話すからなんて思った俺が馬鹿だった。

「だから、思い出したいんだけど」

蓮が久々に怯えた表情を俺に見せた。

バンッ。

俺はコップを机に叩きつけるように置いて立ち、廊下へのドアを開けた。

「どういうこと？」

「馬鹿らしかったな。蓮、今すぐ帰れ」

「どうしてさ！君にしか頼めないんだ！」

蓮は叫ぶ。

ああ、煩い奴だ。

「死にたいなら、自分で死ね。俺を捲き込むな。思い出すと言う行為がどれほどまでに危険か知らない奴に俺は協力しない。蓮、帰れ」

「待ってよ！僕はその友人を助けたいんだ！それには少しの手懸かりが必要なんだ！」

蓮の手が俺の白衣の襟首を掴んだ。オッド・アイが必死に見詰めてくる。

「綺麗な紺……」

「何？…突然——」

蓮も気付いたのか自らの口を封じて俺を見上げる。

「お前の眼は綺麗だな。あの子の眼がみつともなく見えるくらい」

「これは両方とも僕の眼だ！…まさか…君は…」

「ああ、重ねてるさ。だから、やめろよ」

推理が下手くそな奴め。

気付くのが遅いんだ。

「だけど……必要…なんだ」

必要…か。

「他人の為か。お前にしてはそれこそ有り得ないと思ってた」

「君こそ。彼女の為に命を懸けた」

「報われなかったが」

「報われたよ。姿形が変わったけど君の傍にいる。だから…」

俺はドアを閉めて部屋のソファに戻っていた。脇の小棚の鍵穴に鍵を入れて開け、中に掛かる無数の鍵から一つを取った。

「神影くー」

「記憶喪失のままお前が生きてこられたってことは、その記憶は生活になくてもいいもの。別に絶対に必要なものってわけじゃない。むしろ、こんだけ年が経ってまで忘れてたもんは忘れてた方がいい。トラウマかもしれないしな。俺は責任を取らない」

地下には多くの部屋がある。一番奥の部屋には政府や軍にバレたらヤバいものが入っており、この特注品の鍵で向かうはその一つ手前の部屋だ。そこにあるものはバレてもなんともないが、扱いが要注意の化学薬品等がある。

「神影君…ありがとう」

「お前の責任だから感謝するなよ」

「そうや。感謝が勿体無いけえ」

この大阪弁の混じったような胡散臭い話し方をするのは…

「雪癒^{せつゆ}、帰ってきてたのか」

「久しぶうな、蓮」

この奇っ怪な地下要塞付きの家の主兼、機械オタクの雪癒だ。

因みにこの機械オタクは作る方ではなく解体が好きらしい。細かい部品とそれらが複雑に組み立てられているところがいいとか…。その内、

細かさと複雑さから人間解体に目覚めるかもしれない。人間の身体に興味を持つのは蓮だけで十分だ。

「せっちゃん、お帰り。お邪魔してるよ」

「午前中に来る思つとつたのに、遅かつたのお」

それにしても、黒髪ちびは青海苔が頬についているのに気付いていないようだ。

「おい、知つてたなら俺に教えてくれたってよかっただろ？」

「忘れてたわ」

じじい。

心中で叫ぶ。

「じじい、言ってるで。そーゆつちよると、土産を買ってきとつたのに」

その手にはたこ焼屋のロゴのビニール。

俺は雪癒に蓮の土産の箱をあげてたこ焼のビニールを掴んだ。

「それ、蓮から」

「干し柿のクッキーだよ」

「干し柿ちょー好きや！」

雪癒が蓮に飛び付くのを横目にたこ焼を皿に移してレンジに入れた。

「蓮、実験開始は食ってからだ」

「うん」

蓮が頷く。

だから、俺は記憶を元に戻してやるしかない。
たとえ…蓮が泣いたとしても。

心の壁(2)

初めて顔を合わせた時、あの子からは生きる意志が感じられなかった。

逃げてても簡単に捕まえられるように、重石の付いた足枷、手枷を填められ、ただ歩くだけでも辛そうにしていた。
ガシャン。ガシャン。

1歩進む度にそれが鳴り、きつと、逃げないようにするのは枷じゃなくてよかった。

僕と同じように、首輪だけでよかったと思うんだ。

敷地を出れば、死なない程度の電流が全身に流れる。

一度、僕は訊いてみた。

「どうして、あんなに痛そうなの付けているの？僕と同じように首輪だけでいいんじゃないの？」

そしたら、教えてくれた。

「お前よりデキのイイコなんだよ」

「出来のいい子？」

「お前よりとても強い。だから、首輪なんて玩具みたいに扱うのさ」

……デキのワルイコと違ってね……

出来の悪い子……なんだね、僕は。

出来のいいあの子は、可愛がられ、辛い実験に使われた。

出来の悪い僕は、失敗する度に殴られ、地下に捨てられた。

地下から痛い体を引き摺って地上へと出れば、僕は少ない食事にありつける。それが出来なかった僕以外のもっと出来の悪い子は、永遠に地下の中。落とされる度に僕はその死体の山を見、腐り行く体

と臭いに再会する。僕はあれの一部となることが嫌で、何度も這い上がった。

その日は落ち方を間違え、右足の骨を折り、左足首を捻挫した。もう無理だと思った。

だけど…

骨と肉と血と臭いにはなりたくないと思った。

誰のだか分からない汚れた骨。

黒ずんだ腐りかけの肉。

床に流れて乾いた血。

死の臭い。

僕は叫んでた。

死にたくないと…

嫌だと…

助けてと…

ドサッ。

「……!？」

何かが落ちてきた。

「ど…して？」

「助けてって…言っただから」

出来のいいあの子が…

緋色の瞳のあの子が…

「………せいし洗祈…？」

「うん」

洗祈が落ちてきた。

「これで先ずは…」

洗祈は初めて来たはずの地下を見渡し、死体を無表情で見下ろすと、丁度の大きさの骨を僕の折れた足にあてがった。そして、自らの衣服を割いて、それで僕の足と骨と一緒に縛る。

「怖くないの？」

僕が初めてここにきたときは怖くて、気持ち悪くて吐いた。泣いて泣いて、地上を目指した。

僕が訊くと、洗祈は小さな声で答えた。

「俺は、この人達をこんな風にした人達の方が怖いよ」

言われた瞬間、僕の中の恐怖が消えた。

本当に怖いのは“死んだ人間”じゃなくて、ここまで彼らを追い詰めた“生きた人間”だ。

「俺の肩、捕まって」

その細い腕で洗祈は、僕を立たせた。

「うつ…」

しかし、左足の捻挫のせいで、僕は床に座り込む。

「そっちも？」

「うん…ごめん…」

「うつん。俺の方がごめん。痛かったでしょ？」

浮かんでいたらしい目尻の涙を、洗祈は拭ってくれた。

「おんぶするよ」

背中を向けてしゃがむ彼。

「いや…僕…重いし…それに」

「それに？」

「僕をおぶってたなら、登れないよ」

言って気付いたことがある。

両足の使えない人間と足枷に手枷の人間が一緒にいても意味のない気がする。

「多分きつと、俺、頭いいから大丈夫」

それは、多分きつと、凄く頼りない発言だ。

「ほら、来て」

僕はどうしようもなく、彼の華奢な肩に腕をかけた。

「前は見ない方がいいよ。目を殺られるかもしれない」

「目を？」

「行くよ」

「行くつて……」

僕は思わず目を閉じていた。それほどまでに強い閃光が視界を埋め尽くしたからだ。

そして、再び目を開けた時には……

「嘘……」

コンクリートの壁に大きな穴が開いていた。

頭が良いと言うより、力任せだ。

「行こう」

「これ……洗祈が？」

「この子が」

ボウツと現れたのは、深紅の炎を纏う虎。

虎はその巨体を洗祈の腹に擦り付けた。

「ありがとう」

ぐる……

「それは？」

「ものじゃない。この子は俺の友であり、俺の一部だ」

虎が僕を威嚇するように低く唸って牙を見せた。

「分かったから……怖い」

「それは……俺が怖いのか？」

言わなかったけど、僕はその時、初めて会った時と同じ恐怖を感じ

た。

冷たくて、鋭い。

けど…

寂しそう。

「違うよ！…その…僕は…虎は苦手なんだ…」

嘘を吐いた。

本当であつて本当でない嘘を吐いた。

「そう。バイバイ」

洗祈がそう言つと、虎は瞬時に姿を消す。

「あれ…あの子は洗祈の魔法？」

「違うよ。あの子の魔法」

「え？あの虎の？でも…洗祈の一部つて…」

洗祈は僕を背負い、枷を鳴らしながら穴を進んで行く。

「あの子は俺の一部で、俺の一部が俺の願いで魔法を使ってくれる。

あの子は俺の願いを聞いて、魔法を使ってくれる」

「そう…なの？」

僕の魔法は本物じゃないから分からない。

きつと、魔法を使う人にしか分からないことなんだ。だから、あの人のくれた知識にはないんだ。

これがデキのイイコと僕の差。

「蓮…だっけ？」

ふと、彼は僕に訊く。

「知ってたんだ」

「うん。ずっと、見てた」

「どうして？」

僕はその時、ある淡い期待をした。しかし、それは違かつた。

「…監視」

「かん…し…？」

「あの…本気で謝らせて」

「うん？」

僕がよく理解できないうちに、洸祈は喋る。

「蓮を監視する。それが、実験中と睡眠時間以外は俺がすること。」

俺は蓮が落ちてもただ見てたんだ」

微かに肩が震えた気がした。

「ごめんなさい。ごめんなさい、蓮。ごめんなさい」

デキのイイコが泣いていた。

「そんな…いいよ。洸祈が見張らずとも、僕には自由がないからね」
デキのワルイコの僕には、首輪を玩具のように扱うことなんてできない。だから、洸祈と違って、喻え本気を出しても逃げられはしない。コンクリートの壁の前で、助けを乞うことしか出来ないのだから。

「それに…洸祈はこうして僕を助けに来てくれた」

「ありがとう」

ありがとうは僕の台詞なのに、洸祈に取られてしまった。

僕は、うん。と頷いて彼の肩に額を乗せた。

「…ったく。僕の地下にこんなもの作って」

穴の進む先。

光の落ちるその上に彼はいた。僕らは眩しさに目を細めて見下ろす

僕らの主人を見上げる。

「紫水…様」

僕は洸祈の明らかな震えを感じた。きつと、怖いんだ。

「ほら、上がって来なさい、洸祈」

おぶられる僕を無視して、紫水は洸祈に言った。

紫水の言葉は絶対。

だから…

「紫水様…その…蓮を…先に」

洸祈は言った。

正直、置いていかれると思った。こんなに怖がる洸祈が紫水の命令に背くとは思わなかったから。

僕は嬉しかった。

きつと、初めての友達になれたのかもしれないと思ったから。

「洸祈、来るんだ」

洸祈の腕が掴まれ、洸祈は紫水に引き摺り上げられた。当然、僕は地に落ちた。

「蓮！」

痛くて痛くて、痛いのか分からなくなる。ただ、僕を見下ろす紫水の機嫌が悪いことだけは分かった。

「紫水様！蓮、怪我して！」

「洸祈。今、僕は酷く機嫌が悪い」

きつと、僕のせいだ。

「紫水…やめて…っ！罰なら僕が受けるから！」

「じゃあ、地下で死ぬんだ。使えない出来の悪い蓮」

「っ…」

そう。

僕は使い捨てだよ。

あなたに使われ、捨てられる。それが僕。

「やだ！蓮を殺さないで！」

洸祈の悲鳴に近い叫び声。ぎしりとスプリング鳴った。ベッドに投げられたのか…。

「なら、実験2のFでもするかい？」

びりつと衣服の裂ける音がした。

「や…やだ…」

「じゃあ、穴を塞ごう。目障りだ」

「やめて！蓮が！」

「洸祈、目を瞑って。怖い時に君がすべきことは？」

開始の儀式が始まった。

僕にはどうしようもできない。

「紫水様の…命令…は…絶対です」

「気持ちいい時は？」

「紫水様の…命令は…絶対です」

衣擦れの音。

僕は聞きたくない。

「痛い時は？」

『紫水様の命令は絶対です』

洸祈と僕の声が重なった。

「イイコだね。洸祈、お前はデキのイイコだ」

洸祈が悲鳴をあげた。

「蓮、おいで」

隅で震えていた僕を、紫水は優しく抱き上げた。

「足なんか折って」

布をほどき、骨を地面に投げ捨てると、持ってきていたらしい器具を僕の折れた足に取り付け、固定する。

「痛かったろう」

汗に濡れた額をそつとかきあげ、紫水は僕の額にキスをした。

「えーっと…蓮はココアが好きなんだよね？」

「うん」

「じゃあ、ココア飲みながら、捻挫した方に湿布貼ろっか」

「いいの？」

「好きなものなんだから、遠慮しちゃいけないよ」

ぎゅっと、僕は紫水に抱き締められる。

「あれ？どうしたの？」

「？」

「泣いてる」

言われて気付いた。

今、僕は泣いてる。

「そんなに、ココアが嬉しかったのかい？」
違うよ。

「ううん…紫水、好き」

「僕も蓮が好きだよ」

僕は紫水と熱い口付けを交わした。

上がった来客用の個室は乱れていて、羽毛布団の羽根が宙に舞い上がっていた。

そして、一枚の羽根が少年の赤い痕の付く体を滑った。

「ねえ…治そうよ」

僕は、洗祈の体に濡れた布をあてた。

「あれかい？」

「洗祈」

“あれ”と、ものの扱いは許せなくて僕は言う。

「あれはあのままほっとけばいいよ。一応、時間を測ってるし」

腕に太い針が刺さっていた。その先の機械のモニターは、上下に力ツカと忙しなく動く黒の線が映っていた。

「蓮、今日は僕のお部屋でお休み」

「紫水の？」

「少ししたら、僕も行くから」

紫水の指先が僕の頬を滑り、胸元で止まった。

「紫水？」

「蓮…お前は…」

頭を撫で、額を付けてきた紫水は言った。

「僕の誇りだよ」

心の壁(3)

「蓮^{れん}！おい、蓮！」

「蓮！しつかりしい！」

蓮は固い体を起こした。

「った…頭…痛い」

「水やけえ。ゆっくりいや」

白衣の袖が長過ぎて、手が隠れている少年は、水の入ったコップを蓮に渡す。蓮は目を瞑ると、ゆっくりと水を口に含んだ。

「ありがとう…せつちゃん」

「お前の魔力で雪癒^{せつゆ}、苦しんでたしな」

と、白衣姿のもう一人。

青年は蓮の白い肌に付く吸盤を外しながら言う。

「神影^{みかげ}え！秘密や、言つたやろお！」

雪癒はぴょんぴょん跳ねて、神影の背中を叩いた。神影は気持ち良さそうにしながら言い返す。

「うつせえ。お前、吐いたんだから蓮にちゃんとかわねえと」

「それも秘密やて！！」

「せつちゃん！」

コップを脇のテーブルに置くと、蓮は雪癒を抱き締めた。雪癒は瞳を幾らか開閉すると、蓮の胸に顔を埋める。

「蓮の方が辛いんやけえ。気いしいな」

「作りものだから、あんまりコントロール出来なくてごめん」

「思い出したけえ？」

作りものだから。と言う蓮に雪癒は複雑な顔をした。

「ちよつと整理させて」

「泣いてる蓮は言わんでええ」

蓮は首を傾げると目尻を流れていたそれに驚く。

「泣いてる…僕…泣いてる」

「ほら、ハンカチ」

「花柄じゃないね。うそうそ。ありがとう」

蓮の嫌味に神影は、慣れているからこそ、本気が分かるので、言い返しはしなかった。水色の綺麗にアイロンのかったハンカチを渡すと、彼は蓮のシャツのボタンをかける。

「どうなったの？」

目尻にハンカチをあてた蓮は訊いた。

「意識不明」

「君が？君、よく過呼吸起こすよね。疲労にストレス溜まりすぎ。3食ちゃんと摂ってないでしょ？睡眠時間は3時間ちよつとでしょ？」

「冗談はよせ。お前がだ」

くすんだ蓮の金髪をぐしゃぐしゃと掻き回した神影は溜め息を吐き、部屋の隅にある白のグランドピアノの椅子に腰掛ける。そして、蓮をじつと見詰めると、白衣を大理石の床に脱ぎ捨てた。

「今日はもう俺、眠るから。勝手にどこへでも行け」

「終電、行っちゃったよ？」

「あーもう！お前、俺のベッド使え。雪癒と一緒に寝る。俺はソファで寝る」

そしてそのまま、神影は蓮達に背を向けて、ソファに寝転ぶ。

「神影はかわええのお」

「本当に」

あまり力の入らない足で立ち上がった蓮は壁伝いにピアノ椅子まで来ると、座り、蓋を開けた。

「蓮も弾けるんやけえ？」

「うん。専属家庭教師付きのお坊ちゃまという設定の巫蓮かんなぎはねぽーん。」

ピアノが鳴った。

「ピアノに関しては毎日3時間練習していたよ」
設定では……

蓮が言う。

「聴いてくれる？」

「我も神影も聴いちよる。蓮、よろしゅうや」

「うん」

蓮は半音が白の黒い鍵盤に指を乗せた。

ぽーん……

「8月1日生まれ。成り上がりの巫家の末っ子」

指先と鍵盤を見詰めながら、蓮は言う。

「巫つて……大層なお坊ちゃまだな。早く気付けよ」

神影は雪癒に半分場所を空け、肘掛けに肘を立てて返した。

「だってこれは、僕が記憶喪失で失われた記憶って設定なんだから。炎に拾われたって設定の所からしか確実な記憶がないんだ」

「そうか……」

「身代金目当てで誘拐されて、誰も僕にお金なんて用意してくれなくて、散々遊ばれてから、結局、死にかけの僕を捨てたという設定。そんな僕を炎が拾ったという設定」

指先は軽やかなステップを利かせているのに、言葉が重たい。

「でも、記憶喪失も記憶喪失で失った記憶もつくられたものだった。僕はね、作り物ばかりでできてた。父親も母親も作り物。僕自身でさえ作り物」

笑えるね。そう言った蓮だけが空笑いをした。

「神影が相手とは珍しいのぉ」

雪癒は細い喉を鳴らした。

「別に珍しくないだろ。半月前ぐらいに一度、相手したしな」

神影も喉を鳴らして言う。

「神影にも私の感覚が移ってもうたか。そんなだから、軟弱なまま

なんやけえ？」

ブルーのライトだけの薄暗いその部屋で、彼らは酒を酌み交わしていた。

ここは神影の寝室だ。

「軟弱だろうと、俺はこの生活に慣れてる」

神影のベッドで眠る蓮の髪を弄る雪癒の向こう、30センチ水槽を泳ぐ小海老を見ながら神影はもう一杯、酒を仰いだ。

「気付いた時には、神影はじっちゃんやけえ？一度、東京の早い空気で吸うて、時間調整するんやのお」

「ひ弱な俺が死ぬ……ひつく」

「甘酒で酔ったか？」

椅子から立ち上がると、ベッドで眠る蓮の頭上に座り、脇の棚から風邪薬の瓶を取り出す神影。

雪癒を無視した彼は、蓮の頭を自らの膝に乗せ、薬と水を準備すると、そつと片腕で頭を上げた。

「蓮」

「ん…せつ…ちゃん？」

「飲め…特製だからお前にも効くから…」

溜め息を吐いた雪癒はただ、二人を見る。蓮は神影に促されて薬を口に含むと、神影が傾けたコップの水を飲んだ。

「休めよ。明日には迎えが来るからな」

「むか…え…？」

「眠れ…蓮」

蓮が素直に眠ったのを確認すると、神影は仏頂面で、蓮の額を撫でて髪をかき上げる。蓮の手が、ベッドに突いた神影の手を握った。

「ダメダメやのお、神影え」

雪癒は黒髪を揺らして神影の横顔を見詰める。

「…」

「マッドサイエンティストの自称が廃るけえ？」

日本酒の瓶を掴んだ彼はワイングラスに覚束なく注ぎ、口に傾け言

った。

「分かつてる。すまなかった。俺のせいだ」

神影は凝ったらしい首を回して返す。

「加減を間違えた。もっと辛い記憶を思い出させた。こいつの願いは記憶喪失で失った記憶を取り戻すことなのにな」

思い出させ過ぎた。

失敗だ。

「限界ギリギリや。これ以上は、私の許せんとこへ行くところやつたけえ」

「これ以上？雪癒、まだ、消えた記憶があるのか？」

「神影え、我にも記憶がある。長い長い年月の。他の奴等よりのお。

我は傍観者。傍観者だからこそ、残された記憶がある。分かるけえ？マッドサイエンティスト」

一定のペースを崩さず、傍観者は酒を飲む。

飲まなくては、ありすぎる記憶に潰されてしまう。

「言えないんだろ」

「けどまあ、蓮の根本は守った。いや、守られておる」

「？」

「蓮は誰の生命なのだろうよのお」

「出身…か」

生まれだけは戻らなかった。

守られた記憶だけは。

僕自身でさえ作り物…

「…思いまで作り物だったら悲しいな」

「蓮も考えたやろなあ。我らが変わらないことが支えや。のお、神影？」

「あ
あ」

父さん

……お前達は未成年だ。どうしても親がいなくてはいけない。璃央はまだ若い。司野^{しの}さんがお前達の父親になるって言ってきた。だから、司野さんにお前達を頼んだ。洗^{しづ}祈^き、崇^{たか}弥^{かや}家の長男として、大黒柱として、お前はかけがえのない家族を全力で護るんだぞ……

ピンポーン

「誰や？」

『俺』

ガチャ

「崇弥？どないしたん！？葬式の最中じゃー」
息を切らし、汗だくの洗祈は夜風と共に由宇麻を退けて廊下に崩れた。

「崇弥！！？」

「……………司野……」

「大丈夫か？」

ほら飲み。そう言った由宇^{ゆづ}麻は洗祈の口に飲みかけの温かいココアを注いだ。

「……………父さん……だよな……」

「司野でええよ。電話しといたからな。琉^る雨^うちゃん、めっちゃ心配してたで。今すぐここに来る言っただけ、崇弥が落ち着いたらそっちに向かわす言っただけからな」

「……………」

無言。

「まさか、行かへんつもりやないだろうな!？」

別にいいじゃん。不貞腐れた子供のように洗祈は確かに呟いた。

ブチッ

血管が切れた。

言い換えると…

「キレた！崇弥！！父親やろ！？大切な大切な家族やろ！？ホントの血の繋がった家族やろ！？息子の崇弥が送らんでどうすんや！！！！慎さん、気持ちよく上に逝けへんやろ！！！！別にやない！理由あんやろ！？深刻な理由あんやろ！？でもな、この世に父親見送らへん理由なんてない！！！！崇弥の理由じゃ父親見送らへん理由にはならんや！！！！」

言い切った。

洗祈はぶくつと頬を膨らますと、司野の胸ぐらを掴む。

分かっているけど納得したくない者の目。

精一杯、虚勢を張る者の顔。

認めたくない。

感じたくない。

そんな崇弥の瞳。

「餓鬼んちよ崇弥。その理由、消し去ってやる」

全ての電気は消され、カーテンで閉め切られた暗い部屋で丸いボールのようなものが仄かな光を醸し出していた。

「何この匂い」

「アロマテラピー？」

「疑問符付けんなよ」

当然、洸祈は呆れきった。

「自分のしてることくらい分かれよ。てか、司野がアロマね」

「癒されへん？」

由宇麻は自身、不自然な切り返しだなと思ってソファで寛ぐ洸祈を窺うように見上げる。洸祈はその視線に気付くと、何も言わずにソファに座るのをやめて由宇麻と同じ様に下のカーペットにへたりこんだ。

「癒される…眠い…」

ゆらゆらと瞳を揺らす洸祈。漆黒のネクタイに漆黒のスーツと、喪服姿の彼はせの低いテーブルに頭を乗せる。そして、伸ばした指でカンと陶器製のそれを弾いた。

「癒されるのは嬉しいけど眠ったら、葬式終わってまうやん」

「葬式…」

全てがモノクロ。

もう二度と訪れることはないと去った実家の一室。
置かれた一つの棺。

全てが…

「崇弥？ホントに眠いん？」

「え？あ、ああ…」

「ん」。アロマテラピー効かん。ま、俺もどうともなかったしな」

「司野も？」

「あ…」

由宇麻は曖昧な作り笑いをし、洸祈も曖昧な作り笑いをした。

「あの…な…」

「いいよ、言わなくて。言わなくても嫌な感じはしないから」
きつとただのアロマテラピーじゃない。

司野が詮索しないと約束したように俺も詮索しない。

誰しも言いたくない過去がある。それを踏みにじられるのは苦痛だ。

それが分かるからこそじつと待つのだ。いつか話してきてくれた時、精一杯返してあげれば良いと思うのだ。

「いや、言いたいんや」

由宇麻は唾を下すと洗祈の腕を力一杯掴んだ。痛いが耐えられない痛みじゃない。洗祈はじつとアロマが香るボールを見詰めて待った。

「崇弥……聞いて怒らんといてな？ いい？」

「怒らない……かもな」

黒いハンカチを胸ポケットから取り出した洗祈はそのボールに掛けた。本当に微かなる光を残して部屋は闇に吞まれていく。

「これで大丈夫だろ？」

「何が？」

「これならもし俺が怖い顔しても見えないだろ？」

「オーラが……」

「じゃあ俺は寝るわ」

ぐたとソファーに凭れる洗祈。由宇麻は慌てて洗祈を揺すった。

「駄目や！崇弥が寝たら連れて行けへん」

「ん、まあ、無理はしない。怒らないよ」

怒られるのは俺だ。

俺は犯罪者。

罰せられなくてはいけない。

『いいかい？君は、悪くないんだ！！ただ君は幼すぎたんだ！！』

二之宮……

たえ幼かったとしても……

あの時の俺は酷く醒めていたんだから。

……。――

「俺な……いーっぱい悪いことしてきたんや」

産まれてから現在に至るまで……

「そのたんびにな、周りの奴らに慰められてきた」

あの時も……

あの時も…

あの時も…

いつも…いつも…いつも……

由宇麻の口から嗚咽が盛れる。

「司野！？辛いなら―」

「黙ってや！……！」

ああ…

醜い自分を…

誰かに受け止めて欲しい…

崇弥なら…

俺を受け止めてくれるやろ？

ここからが本当に醜いところ…

「そして…俺は…」

そのたんびに…

…―そいつらに呪いの言葉を吐いていた―…

「善人ぶって、かつこいい言葉言って、どうせ…俺のこと見えてないんやろって。その言葉は嘘。嘘、嘘、嘘。慰めて喜んで。頼りにされて喜んで。嬉しいか？嬉しいやろうな。そう心の中で叫んで…イラついて…この世、否定して…あんな奴死んでしまえって呟いて、そんな自分が死ねよって呟いて…死ねるわけないやんって呟いて…」

醜い…

言っている傍から…

俺は自分に呪いの言葉を吐いている。

誰かの腕が由宇麻をそっと引き寄せた。そして、その温かい手のひ

らで彼の頬を包む。

「たか…や…」

「怒らないよ…その感情は皆持つてるから」
その言葉を…

俺は信じられへん。

「司野…今の俺の言葉は届かないかもしれないが…なんかさ、それでいいと思うんだ」

頬を包む親指は由宇麻の濡れた目下を優しく往復する。

「その時、お前を止めたられたのなら…」
温かい。

「—それでいいと思う。親友でも家族でも、人間は感情を持っている限り憎まずにはいられない。疑わずにはいられない。そして、大切な人の力になりたいと思わずにはいられない。違うか？このアロマテラピーだって—」

「自分の為言うたら？自分が癒されたくて、崇弥に頼りにされたくて…そう言うたら？」

すつきりさせたくて、由宇麻はやさぐれる。

「ありがとう」

闇を隔てた先で、洸祈は由宇麻に感謝した。

「…何で…そんなこと…」

言うんや。

「意図が違くても、下心があっても、俺は嬉しい。俺は感謝したい。司野、さっき言っただろ？どんな理由があっても父親を見送らない理由はこの世にはないって。どんな理由があっても助けられたら感謝しない理由はこの世にはないって思うぞ」

「……………こんな俺に感謝をくれるん？」

「うん。司野だってこんな俺に感謝の言葉をくれるだろ？」
それは…

由宇麻はこくりと頷いた。

「ありがとうな、崇弥」

ありがとう。

父さん(2)

……。

「つてええ！なんでやねん！」

「何？」

「俺が崇弥^{たかや}の理由、消し去ってやるゆうたのに！」

由宇麻^{ゆうま}は自分でボケて自分でツッコミを入れたようだ。

そんな憐れな由宇麻に洸祈^{こうき}は応えてやる。

「司野^{しの}、超特急で俺を実家まで送って」

「オーケーや！！！！」

それに、由宇麻は笑顔を見せた。

「崇弥、俺が送れんのはここまでや」

「ありがとう」

由宇麻が前方のスーツ姿の男達を睨んで言った。彼らと目が合うが由宇麻は気にしない。感情を露にして睨む。

「監視かいな。堂々と立って場違いも甚だしいやん。PTO弁えろや」

「TPOな」

洸祈は普通に文句を言う由宇麻に笑むと、行つてくると車を出ようとして…

「崇弥」

呼び止められた。

「司野？何？」

「泣きたくなったら俺とこきい。いつでも大歓迎してやるからな」

「今は駄目？」

「へ？」

これは予想外。

洸祈は由宇麻の答えを待たずして彼に抱き付く。

3秒。

「葵を父さんの遺体と二人きりにはできないなあ。お兄ちゃんの胸で泣かせてやんなきゃ。行ってくるよ、司野。ありがとな」

クルリと体勢を変えた洸祈は今度こそ車を降りた。重い空気の漂うその屋敷に歩いて行く。

「泣かへんかった…」

けど、

「震えておった…」

まだ残る洸祈の抱き締めてきた感覚。お日様の匂い。

「俺には分からへんな…」

寧ろ俺は…

「看取られる方やかな…」

この小さな手は…

この細い脚は…

この幼い顔は…

『由宇麻、帰ろう?』

「そうやな、彩樹君」

あやき

「洸祈、トイレ随分と遅かったね。待ってたよ」

あれから3時間30分。

「琉雨^{るう}から話聞いてんだろ？」

「そりゃあね。洸祈が俺を置いてきぼりにして由宇麻に泣きついたって」

クスリと微笑した葵^{あおい}は洸祈の横について一緒に歩く。

「泣きついてない。寧ろ、司野が泣きついてきた」

「由宇麻にちゃんと挨拶しなきゃ。父さんだし」

笑顔を絶やさない葵を横目に見た洸祈は、その頬に手の甲で触れる。

「うわっ！？冷たっ！！何？どうしたわけ？」

「いつものままでいいだって」

「？」

「司野は司野だつてさ」

「由宇麻は由宇麻か」

いいね。

葵はそう評価した。

「とうとう…二人きりか」

吐きたい気分だ。既に吐いていたが嘔吐感が振り返ってくる。

「洸祈が結婚すれば増えるよ」

「何でお前じゃなくて俺なんだよ。お前の方がモテるだろ」

「俺が洸祈に勝っているのは頭の良さだけ」

自信満々に言う葵。

洸祈は素直に認めた。

何故なら満点が100点なら洸祈は2点、葵が1000点のようなものだからだ。

だけど…

「頭の良さだけじゃない。葵は家事ができる」

「家庭的な男はモテると思ったんだけどね」

「お前、そんなにモテたいと思うのか？」

葵にしては珍しい。

と、

「好きな子がいるから」

衝撃告白。

「誰？」

に対して答えるはずはないはずだった。

「せんり千里」

「……………ちい？」

「うん。千里」

あっさりと葵は肯定する。洸祈の聞き間違いではないようだ。

「何で…？」

洸祈は“男”というより“幼馴染み”に驚く。今まで一緒にいたのに気付かなかった。

「好きだから」

と、答える葵は至って普通。

健康体だ。父親の死にショックで、ということでもないらしい。

彼は縁側を進み、ある襖の前に来るとそつとスライドさせた。

「酒？」

あるのは父の棺と一級ものの日本酒と三人分のお猪口。

葵の好きな子の話を忘れて洸祈は目の前の状況を理解しようと頑張る。

「家族皆で父さんの好きなお酒と一緒に飲も？」

「19歳だぞ？」

飲酒は二十歳から…

「崇弥洸祈、貴方を未成年の飲酒の疑いで逮捕します」

そう言った葵は洸祈の手を引くと無理矢理座らせる。

そして、

「飲もう？」

「ああ、分かったよ」

最後に家族で酒を酌み交わすのも悪くない。

「いいなあ。洸祈は陽季^{はのき}さんとイチヤイチャできて」

“イチヤイチャ”なんて…本当に葵か？

「俺は…はあ…踏み出せないよ」

“踏み出す”って…葵か？

「髪を撫でたことないし抱き締めたこともない。キスもまだだし…セック―」

「待てよ、葵！酔ってんぞ！！」

ぼつぽと顔を赤くした葵は洸祈に凭れる。

「だってほら…俺…19歳健康男児だよ？…こう…ムラムラと考えるい？」

“ムラムラ”って…。

「考えない！」

「え！？嘘っ！？もしかして洸祈って…えー！！！？キスはするのに？ムラムラはしない？マジなの？」

仮にも父親の前で変な会話に走る葵。洸祈は酒のペースが速くなる葵からお猪口を奪い取って言った。

「マジだよ」

「うわっ、相手が可哀想だね」

「何で可哀想になるんだよ」

「洸祈、男？付いてる？」

何を言っているんだ。

「はあ！？男だよ！」

「そーだね……ふぁ…眠いや」

と、一人怒りに震える洸祈を置いて葵は畳みに寝そべる。

「風邪引くぞ」

洸祈はそんな彼に喪服を脱いで掛けてやる。すると、葵はにこっと笑った。

「いつも弟みたいって思うけど今日は兄貴だね」

「“今日は”かよ」

いつも兄貴だっつの。

「うそうそ。それともお兄ちゃんって呼ぼうか？お兄ちゃん」

同じ顔が笑いかけてくる。けど中は違う。

冷静沈着。これは表。

眉目秀丽。これは表。

無頓着。これは表。

「葵」

「何？」

「顔、ひきつつてんぞ」

俺はこんな笑い方はしない。

「え？そう？無意識にお兄ちゃんに抵抗したのかもね」

と冗談を…

「お前、19歳にもなって兄貴に泣き顔見られたくない。って人？」

「へ？」

ほら…辛そうだな。

「俺に泣き顔見られたくないなら庭」

「何のこと？俺は別に―」

「はい、二択。どっち？」

葵はぱけつと惚けた顔を見ると、むっと唇を結んで洸祈の胡座の上に体育座りする。腕を導いて自らの首に回させると、彼は小さな声

を上擦らせた。

「…見られたくない…けど、庭は寒いから。洸祈は高温だし、冷え性の俺を温めてよ」

限界だったらしい。直ぐに声を押し殺して震える。洸祈は膝に埋まった葵の頭を抱いた。

「…もう…父さんには…会えない…俺…もっと話したかった…もっと、もっと…話したかった…晴^{せいじ}滋さんに…いくら…駄目って言われても…」

「ごめん…」

洸祈は葵の剥き出しの首に頭を埋めて謝る。

ごめん…

「何で洸祈が謝るのさ…もう済んだこと…」
「ごめん」

……………ごめん。

俺のせいでごめん。

本当に傍にいて欲しかったのはちいだろう？

俺のせいで…

“崇弥”は…

俺達は…

軍にも政府にも縛られた。

いじめなわい。

父さん(3)

すつと滑る襖。

洗祈いひねはつい先程部屋に運んだはずの葵あおいが布団をぼっかり被おほつてよたよた入いってきたことに首を傾かたげた。

「葵？もう起きたー」

と、お猪口を置いたところで葵らしき髪を揺らした人影は洗祈に多い被おほさつてきた。

「おにーちゃん！」

ちよっぴり高いけど葵の声が布団に隠かくつて響く。

「！！！！？あ、葵？」

こんな大胆な行動にでる双子だったろうか…

しかし、大胆な行動はそれだけではなかった。

衣擦いされの音。

闇の中で洗祈に跨またがる葵らしき人は洗祈の服の裾から無遠慮に手を忍しのばせて体をまさぐり始める。

「愛してますわ」

を付けて…

「おい！」

柑橘系の仄かな香水の匂い。これはアイツのトレードマーク。

「誰だよ！」

「崇弥葵たかや。洗祈、どうしたのさ？お腹壊したの？」

と、再び葵の声。

お腹痛いなら治してあげる。と言いながら洗祈の腹をいやらしい手付きで擦る。

堂々とバレバレの嘔吐おうとくなよ！

洗祈は暫くされるがままだったが、暗闇の中で邪悪な笑みを浮かべると、偽物葵を逆に布団の中で押し倒した。

「洸祈？」

「葵、ちよつと刺激的過ぎ。欲情しちゃったじゃん。いーい？いいよね？葵から誘ってきたんだからさ」

肘を葵の顔の両サイドに突き、体を密着させる。唇を指でなぞってキスを…

しないはずだった。

慌ててアイツが正体を見せると思っていた。

しかし、間違っていた。

「なーに？あたしの体に欲情？ふふふ、おねーさん大歓迎よ。ねー、おにーちゃん！」

アイツと葵を繰り返して暑い吐息をかけてくる。

「おい、おい、待て！」

「ワン」

………はあ………やめてくれ。

「月葉、お前も酔ってんだな」

「ああ。お酒を飲まなきゃやってられせんわ」

桂の下から出てきたのは赤毛。

慎の友人で行方不明だった変人の来月葉は未だ布団に頭を隠したまま、襖に背を向けて洸祈に抱きついていていた。

「手向けに来たのにレイラ・リンノースでは入れてくれなかった
ので真奈に訊いたところ、主人のもとへは双子だけとのこと。息子
2が部屋に入つたので裏から手荒に侵入しまして、お洋服を借りた
次第ですの」

「無理してないだろうな」

「あたし？無理などー」

「いや、葵」

「ムカつきましたわ」

その赤褐色の瞳を細くすると仕返しと言わんばかりに洸祈の服に潜った。

「蒼子には十分な拘束と目隠しをしー」

「しなくてもいいことだろ!!」

「金系きんしに出会いました。変装がすぐにバレまして、ちよいと蒼子の恋愛事情を匂わせたら蒼子の部屋に飛んで行きましたわ」
恋愛事情…。

「何言っただよ!」

それに対して、月葉は葵に変わって言う。

「『金の系子いとこが好きで好きでたまらない。しかし、恥ずかしく前に踏み出せない。リードしてほしい』と、ですわ」

金の系子…千里。

「意味が分からないほうが凄いな…これ」

あんな葵の告白を聞いた後では。

「お顔を赤くしておられたから成功ですわ。あの拘束で欲が掻き立つかも。ふふふ」

何したいんだよ。

「では、あたし達も続きを…」

「餓鬼は寝てろ」

洸祈は月葉を服から出すと布団の中に閉じ込める。彼女は暫くうーうー唸ると、布団から顔をひょっこり出した。癖毛が更に跳ねて可愛い。

「餓鬼というあなたも餓鬼ではありませんか。19歳さん。好きしか言えぬ青っ子でしょう?」

「“愛してる”だろ?それくらい…」

「いいえ」

と、

「あなたの全てが欲しい。欲望のままにあなたが欲しい—」
艶の効いた瞳が見上げてくる。

「これくらいですわ」

「アイツは大人か」

「ふふふ。雪子ゆきのこですわね。おアツいこと。あたし、慎に言われたことありますのよ」

「父さんに？」

「『林にプロポーズする』って…あたしで予行を」
懐かしい父の声。

「貴殿は何て言うのかしら？」

「プロポーズに？」と訊くと彼女はこくりと頷く。

「そーだなあ…俺の新子にいこの母親になってください」

「マジですか？」

「マジだよ。失礼だな」

マジで考えた。相手は因みに真奈さんだ。

「ふふふ。慎は『林…俺と新しい生命を育てないか？俺がおしめを替えるから、その…乳を与えてやってくれ』ですわ」

「マジか？」

「流石親子。プロポーズの言葉まで似るのね」

いや待てよ。

全然似てないから。

「子作りを視野に入れて誘う。まあいいけど生々し過ぎますわ。そう言いましたの」

月葉は洸祈の注いだ酒を飲むと洸祈に寄り添った。

「慎、あたしのない乳見て言ったのよ。ついでに蹴り上げといたわ」
「へえ」

月葉の綺麗な髪が蛍光灯を反射する。洸祈は若き父の驚きの昔話に微笑した。こうやって見送るのも悪くない。

「ちゃんと女を落とす方法を伝授したのにいざでアクシデント多発。慌てた慎はあたしが斬ったプロポーズをしたのよ」

あれを母さんに…

「『乳は小さいけど貴方の気持ちは伝わったわ。慎君、愛してる』
これぞできる女の返し方。あたし、林に惚れましたわ」

澄みきった声。

「な、月葉…その声…」

「はい？」

はふつと欠伸をすると月葉は洸祈に猫のように擦りついた。洸祈は寒さを感じて彼女の布団に入る。

「それ母さんの声？」

「林の声ですわ。『洸祈』」

「母さん？」

ふふふ。林の声音で笑うと洸祈に優しく抱きついた。

「『慎が惚れた女性の声。あなたの母親の声ですわ』ご要望はありますか？」

葵を呼ぶ。そう考えたのに洸祈の口は違うことを言っていた。洸祈は月葉に林の面影を求めて囁いた。

「……もつと名前を……呼んで」

「『洸祈………愛してるわ』」

……母さん……

「あーあ、つまないですわ」

月葉は葵から無理矢理借りたパーカーの帽子を被るとすやすやと、眠る洸祈を見た。

「オネムが早い。餓鬼ですわ」と、

「ふふ、その妖精さん、あなたの主人は熟睡中よ。出てきなさいな」

襖の上の障子戸が微かに開き、ほんのり青白く光る物体が見え隠れする。

「はう……」

やがて現れたのは……

「疏雨、でしょう？」

羽の生えた少女。

彼女は月葉の差し出した両手のひらにちょこんと降りた。

「心配したの？」

「……いえ……ただ……ルーは寂しくて……」

素直に言う琉雨。

「かわいいーのね。緋には勿体ないわ」

「……あ……あ……か？」

「崇弥^{こみ}洸祈よ。緋の児。崇弥^{こみ}葵は蒼の児。別に意味はないわ。あたしは年上にしか敬意を込めて名前を呼ばないだけ。あなたのことは何と呼ぼうかしら……そうね——」

「琉雨。来ると思ってたよ」

この声は……

「旦那様！」

半眼にした洸祈はむくつと体を起こした。琉雨は人目を憚らず少女の姿に戻り、洸祈にしがみつく。

「琉雨、おいで」

よつこらせとじじくさい言葉を発すると立ち上がり、琉雨の腕を引いた。

「？」

白い棺。

「父さん、琉雨だよ。俺の大好きな子」

「慎さんの棺……」

そう、崇弥^{こみ}慎の息子、崇弥^{こみ}洸祈と葵以外は慎の棺を見れなかったのだ。

軍が決定したから。

「なあ、視れるか？」

洸祈は訊く。琉雨は棺に近付くと空を見詰めた。

「視えないです。でも、温かいですよ。ほら」

はふっと息を吐いた琉雨は洸祈の手を引いて棺に触れさせた。

「ホントだ」

「優しい気持ちで逝ったようです、旦那様」

「良かった」

「妖子には霊が視えますの？」

と、二人の間に割り込むのは月葉だ。

「いえ、視えるのは魔力です。でも……よう……のこ？」

意味が分からない。琉雨は首を傾げた。

「変なあだ名付けんなよ」

「妖精の子。愛らしいお嬢様」

「うわあ！ありがとうございますっ！！旦那様、妖精ですっ」

「はいはい、魔獣」

「むう」

「帰りますわ」

そんな会話を続けて3時間以上。12時を回った。

「蒼子にこの服を返さなくては……けれど……お楽しみ中かしら？無粋な真似はしたくありませんわね」

「ないと思う……」

ぼやき。眠る琉雨の髪に指を絡ませる洸祈は月葉の背中を見る。

「あら、何故ですの？」

その言葉に月葉は反応を示す。

全く意識していなかった為、洸祈は答えに戸惑う。

「あいつさ……ホントに繊細なんだよ……意味を知り、理解する。理解はあいつの護りなんだ……理解がないと無防備だから知らないものは怖がるんだ。父親の死……独り……怖いんだよ……。だからさ、セックスしたいと言っても……」

「そうですね。縁のあるあなたと違って蒼子はありませんものね。でも……いつかは受け入れるのでしょうかね」

「ああ」

俺のようにではなく……。

ゆっくりと知ってほしい。

「服、返して帰りますわね」
「じゃあな、月葉」

次ぎ会えるのはいつか。

もう会えないかもしれない。

それでもいい。

慎という鎖から外れたあんたはもう…

自由だ。

「あたしの初恋。慎ですよ」

「初耳だ」

「林に負けましたけど…洸祈」
名前を呼ぶ。

「月葉？」

「愛してますわ」

愛していました。

「月葉、愛してるよ」

洸祈は応えた。

沈黙

「洗祈い」

そう言つて琉雨と寝ていた布団に入り込んだのは何故かぐずつてゐる葵だつた。

「んああ？…葵？琉雨が寝てんだから静かにしろよ」

「ひつく…」

背中から響く微かな喉の音。

洗祈は琉雨の髪を弄つていた手を休めて葵に向き直る。葵は頬を上気させて洗祈の胸に顔を埋めた。

「おいおい…どうしたんだよ」

洗祈は背中をぽんぽんと叩いてやって気付く。

葵は薄布を纏っている。これは葵のベッドの薄い青色のシートだ。

「お前…」

多分、この下は裸。

「……………風呂準備しようか？」

こくり。

葵は頷いた。

風呂を準備している間も葵はぴたと洗祈について回る。洗祈はそれを黙認して湯が溜まるまでの間に葵の為に薄めのココアを淹れる。

「ほら、飲めよ」

「……………ん」

椅子の上で体育座りをして体を縮めた葵は喉をならしてココアを一口气に飲み干した。

その時、シートから微かに赤い痕が覗く。

コップを台所に返し様に葵の髪をくしゃりと掻き回すと、やがて風呂の準備完了の音が鳴る。

「入ってるよ。服とつてきてやるから」

伸ばした手を引いて脱衣場に連れていった。しかし、葵はその場に踞って動かない。

「葵、風呂入って体休めろよ」

「……………」

「大丈夫。鍵掛けてるから誰も入ってこれない」

そこで安心したのか葵はよろけながら立ち上がり、シーツを落とした。

「……………」

露になる沢山の赤い傷痕。動揺を必死に隠して洸祈は無言でその後ろ姿を見詰める。

「…何にも……言わないの？」

くるりと顔だけ向きを替える。

「何を言えばいい？」

洸祈が逆に訊くと固まった表情を無理矢理崩して笑った。

「洸祈…ありがとう」

泣きそうな笑顔で…。

葵が鍵を掛けたのを確認すると葵の部屋へと階段を上がった。洸祈の視界の向こうで蠢く影。洸祈はその影が自らの部屋に入ったのを見て薄く開いたドアの前に立った。

「よ、ちい。何か探し物か？」

千里は洸祈の姿を確認して出口が塞がれたことに気付く。

「探し物…だよ」

ジーンズに羽織っただけのワイシャツ。極め細やかな白い肌が見え隠れする。千里は両腕を広げて苦笑した。

「ふん。俺の部屋で誰捜してんだ？」

誰？と…。

「解ってるくせに」

解ってる。

「捜してどうする？」

「謝る」

俯き、悲しそうな千里。

だからこそ洸祈はこう答える。

「俺と一緒に明日、朝一で店に帰るぞ」

強制。

「……っ…僕は…」

「ちに謝罪の気持ちがあるのは伝える。だけど、当分は会わせない。アイツが自らの意志で帰って来るまでな」

「……僕は…がむしゃらにあおを…求めちゃった…あおが怖いって言っただのを無視して……あおに会いたいよ…」

「ちに…」

気丈な千里が床にぺたんと尻をつけて涙を落とす。月明かりの差さない部屋で彼は後悔をする。

そっ、後から悔いた。

千里は葵が好きだと自覚している。

だからこそ、洸祈は千里を赦す。

俺に誰かを赦す資格はないかもしれないけど…

「ちに、来いよ」

動かない。

洸祈は息を吐くと千里の傍らに座ってその頭を…

ごっつ

上から殴った。

何も言わずに千里は洸祈をただただ見る。

「来いって言っただよ！葵に謝りたいんだろ！！葵に会いたいんだろ！！」

「………会って…謝りたい…」

「分かった」と、洸祈は千里の涙で濡れた頬を指で拭い、ワイシャ

ツの釦を留めた。そして、腰の抜けたらしい千里をおぶってやる。

「昔とおんなじだな」

「……………」

「お前と葵がお菓子を取り合いで喧嘩して、葵が家を飛び出して、そしたらお前が泣き出して『あおが僕のこと嫌いになっちゃったよお。どーしよー』って」

泣いて喚いて……

沈黙（2）

ばんっ

「僕のー！ー！ー！」

開いた小さな手がチョコの包みを握りしめた。

「何だよ！俺が勝ったんだから俺のだよ！」

その手をもう一つの手が挟じ開けようとする。

「ずるいよ！何ででつかいのばっか」

「勝負だろ！？」

因みに待ったなしのじゃんけん勝負だ。

「やだあ、意地悪ー…うつ…ひつく…うつ…うああーん！ー！ー！うああー！ー！ー！ー！」

泣いた。

喚いた。

垂らした髪が舞う。

「あらまあ。葵君、一つぐらい千里君に先に選ばしたら？こんなにあるんだし」

と、麦茶の入ったコップを運んできた真奈は涙の溢れる千里の目許をはんかちで拭いてあげる。

「何さ！千里が勝負しよって言うてきたんだぞ！！勝って沢山おっきいの取ってやるって！」

「それは…」

真奈はその穏和な表情に曇りを見せる。千里が言い出したのなら今の千里は自業自得だ。

「ふああ。あーよく寝た」

「洗ー、あおが苛めるよお！」

千里は真奈から離れると部屋に入ってきた寝惚け眼の洗祈の服に顔を擦り付ける。

「あーもう。涙で汚すなよ」

洸祈は一応千里の頭を撫でて部屋を見渡す。真奈は肩を竦め、葵は不良のような目付きで洸祈を睨んでいた。

「真奈さん…何ですか？」

これ。と千里を指差すと真奈は見たままを話し始めた。

「ああ、意地悪だよ！ーじゃん！……おとなげ大人気ないよ」

「お前が一番大人気ないから」

ぺしつと千里の頭をはたくと彼はまた泣き出す。

「こーの馬鹿あ！僕は子供だもん！！！！」

まあ、千里の気持ちは分からないでもない。

まだチョココの包みが大量に残っているというのに千里と葵のチョコの量には2倍以上の差がある。

「葵…」

双子の弟に退いてもらおうと…

「何？」

睨まれた。

「真奈さん…」

洸祈は真奈に助けを求める。彼女はエプロンのポケットを探ると青い包みを取り出した。

「千里君、この飴あげるから。ね？いいでー」

「真奈さん！！」

「良くない！！！！」

前者は洸祈。

後者は葵。

「そういうの葵は…」

と洸祈が付け足すのと同時に葵はバンと机に手を突いて荒々しく立ち上がる。それに千里はびくつと震えて洸祈に身を寄せた。

「あ…葵…」

蒼い瞳に何とも言えない意志を秘めた葵は震えて目を瞑る千里を見

下ろした。

そして…

「何だよ！千里は我が儘なんだよ！！！！うちの子じゃないくせに！そんなに食いたきゃ……櫻さくらの家に帰れよ！！俺ん家で何で…ここの子のように振る舞うんだよ！図々しいんだよ！！！！」

「う…あ…うう……」

「葵！言い過ぎだ！！」

だが、葵の憤りは収まらない。

今度こそ悲しみに涙を流す千里を葵は悔しそうな泣きそうな顔して見た。

「そうやって泣いて喚いて！！！！俺は……」

千里は洺祈にしがみついて泣く。喉を鳴らして息を詰まらせた葵は真奈と洺祈を交互に見た。

どうしてさ。と言葉を呑み込んで…

葵は自分が獲得したチヨコを抱えるとそれらを踞る千里の背中に全て落とした。

「葵！」

洺祈は千里を守るように抱く。その行動一つにも怒りを感じた葵は…

「千里の馬鹿野郎！！！！！！」

部屋を勢いよく飛び出した。

「あおが…あおが…」

「ちい、落ち着けって」

千里の馬鹿野郎と怒鳴られて30分。千里は泣き面で葵を呼び続けていた。

「あおがー」

「ちい！」

ひつく。

長い睫毛の下から濡れた翡翠の瞳が洗祈を見上げる。それだけだったら絵になるのに鼻水が台無しにしていた。

洗祈はティッシュ箱に手を伸ばすと、涙を拭いて鼻水を拭った。

「あああお言ったってどうしようもないだろ？」

「だってえ」

「あーもう。泣くなよ」

「ああーああーあおがあ」

またも泣き出す。

溜め息を吐いた洗祈は服で涙を拭いてくる千里を諦めて背中を軽く叩いた。

と、

「千里、男の子なら自分の正しさを信じるか間違いを謝るかのどちらかだ」

「晴滋^{せいじ}さん」

いつの間にか着物姿で現れた晴滋は洗祈の横に胡座をかいた。

「ひつく…僕は…」

千里が掠れた声で洗祈にしがみつく。

「お前は正しいのか？正しくないのか？」

晴滋の大きな手が千里の頭を優しく撫でた。

「僕は…あおの言う通り…だよ…僕は…自業自得…」

くしゃりと顔を歪ませて長い髪を揺らす。

千里の泣く姿は美しい。

その腰まで伸ばした金髪を纏って小さな顔を隠す。細い手足が女性

特有の守ってあげたい。と思わせる。

男なのにな…

「お前は どうしたい？」

晴滋は尋ねる。

「あおに…謝る」

千里は俯き言い切った。

晴滋さんは凄い。

洸祈は素直にそう思う。

葵の言う通り千里は我が儘だ。我が儘であり何処か自分勝手。

だから自ら謝罪の行動にすることはしない。誰かが引き出してやらないと行動出来ないのだ。

「でも…どーしょ…あお…きつと僕のこと見てくれない…」

葵は自らの知識から正否を理解し行動する。正しければそれ相応の態度を求め、間違えばそれ相応の態度を取る。

今回は千里の理不尽さに腹が立って自らの間違いを謝るという態度を取れなかった。謝れば千里の行為を正しいと認めることのように感じたのだろう。

「ちに謝罪の気持ちがあれば葵は見てくれるさ」

誠意でぶつかれば葵はきつと見てくれる。先ず千里が謝らなければ始まらない。

「僕、あお搜して謝ってくる」

言うが早い。千里は洸祈の服で綺麗に顔を拭くと立ち上がった。

「千里君」

そこを真奈が呼び止める。

「なあに？」

「これ」

飴玉だ。

しかも2つ。

「葵君と半分こしなさい」

「うん！」

千里はそれらを握り締めるとバタバタと玄関に走って行った。

沈黙（3）

「ふあああ…あれ？^{しんせき}洗祈？」

一緒に寝ていたはずの洗祈がない。

「湯たんぽが消えたせいかな…」

どろりで眠りが浅い気がするわけか…

慎は眠い目を擦ると体を起こした。周囲を二度見回すと、するごとなく敷いた布団に横になる。

「あー湯たんぽ…」

そう呟いて目を閉じた。

最近、異様に目が疲れる。

「真奈^{まな}ー？晴滋^{せいじ}ー？」

なんとなく二人が恋しくなり呼んでみた。

「慎？どうかしたの？」

「うおっ！真奈ー！」

静かだったのでつきりいないかと思っていた。

「私の声だけで驚かれると正直悲しいわ。それも慎だと尚更」

うつうつと着物の裾を目尻に当てて泣き真似をする。

と思っていいのか…

真奈の泣く姿は真似なのか真似じゃないのか分からない。今この瞬間も哀しい雰囲気周囲に漂わせている。

「真奈？嘘泣きだろう？」

…うつ…うつ…うつ…うつ…。

「マジなのか！？」

謝るしかない。

謝って赦してもらえない。慎は布団を蹴り上げると畳に額を擦り付けて土下座した。

「真奈！本当にすまない！誰もいないと思ったんだ！だけど…なんか…こう…湯たんぽが…そう！湯たんぽが消えて！…肌寒くて…寒

さをまぎらわすために一人トークをな？…驚いたんだ！」

ふふふ。

「ま…な？」

「慎、嘘泣きだろう？と訊かれて嘘泣きです。と答えたら嘘泣きでなくなるじゃない」

つまり嘘泣きだと…

「はあ。一人トークなんて人には言えないことしちゃったじゃないか」

真奈はあら。と口許を押さえて目を丸くした。

「一人トーク、本当のことだったの？」

「まあ…あいつがいないから」

あいつが…

『慎君？』

『林の横顔…好きだよ』

『ありがとう。暇ならそう言ってくればいいのに』

『バレたか』

『慎君のことは何でも分かっちゃうわ。だって愛してるもの』

『林、愛してる』

『慎君、愛してる』

あいつが…

もういない。

「ごめんなさい、慎」

真奈は慎の心情を察してか表情を曇らせる。

「いいや。俺には林との子供がいるしな」

「洸祈君、慎が連れてきた時は幼かったのに今では皆のお兄ちゃんよ」

俺は最後の命令をした。

洸祈は全てを忘れた。

名を忘れて…

言葉を忘れて…

歩み方を忘れて…

本当に全てを忘れて…

生まれたての赤ん坊へと…

「再出発だな」

「そうね。今は洸祈君より葵君と千里君が大変よ」

「葵と千里が？」

真奈は今日の出来事を慎に話した。

慎は可笑しそうに笑うと布団に再び寝転がる。

「子供達の成長。親としてこれ程面白いものはないな」

「もう」

「面白い。柚里、お前もそう思うだろう？」

もういない友へ向ける報告。

慎の視線の先、綺麗な夕暮れに真奈も瞳を向けた。

……た……た……た……た……。

「真奈、お客さんだから下がってくれ」

「そんなだらしなない格好で？」

まあ。と真奈は寝癖のついた慎の髪を撫でる。慎はそれに対していいんだよ。と真奈の手を取った。

「葵だ。どうやら男同士の会話がしたいようだ」

足音を聞いてくすりと笑った慎を見て、真奈は立ち上がる。

「慎、無理は禁物よ」

「してない…いや…しないよ」

「よろしい」

一度慎の髪に指を絡めると真奈は奥の襖から出ていった。

空き部屋だが慎の昼寝所になっている部屋。

「父さん？」

葵は襖をそつと開ける。

甚平の前をだらしなく開けたままの慎が布団の上でごろごろしていた。

「おーどうした？」

彼は葵を見上げて笑う。

「何にも聞いてないの？」

「どう思う？ほら、おいで」

先程の喧嘩が伝わっていると思った葵は慎に奇妙な返し方をされて戸惑いながらも布団に潜り込んだ。体の向きを変えると葵は胸の前で手を丸めて慎を見上げる。

「温かいなあ。あー湯たんぽゲットだ。で？どうした？好きな女の子でも見付けたのか？」

「好きな子はいるもん」

「だいつくらいけど…」

「葵が選ぶ女の子はさぞやべっぴんさんなんだろうなあ」

「べっぴんさん？」

「美人さんってことさ」

お前達の母さんみたいに。

小さな声で付け足された言葉。

葵は聞き取れずに首を傾げた。

「美人じゃないよ。泣き虫で自分勝手に今日だって…」

そこで慎は目を真ん丸にして葵を見下げる。慎はまさかなあと独白を述べて葵の頭を思いつき撫でた。

「それで？恋じゃなければどうしたんだ？」

「俺って意地悪？大人気ない？第一、俺って大人？」

「お前は どう思う？」

「俺は意地悪じゃないし、大人気くない」
「だけど、」

「とつても酷いこと言つたのは自覚してる……」

「酷いこと？」

「慎が聞き返してくる。」

「父さん……どうしよ……」

「葵？」

「涙が……」

「涙が溢れてくる……」

「葵は慎の甚平をひつ掴むと目を擦り付けた。ごしごしと目を擦る。」

「止まらない……痛いよ」

「痛い！？葵、どうした！？お腹痛いのか！？」

「子供悩みの慎はお腹痛いのか？と訊きながら葵の背中を必死に擦る。」

「葵は沸き上がる正体不明の感情に体をただただ震わせた。」

「……どうしよ……」

「痛いよ……」

「どこが痛いんだ！！？」

「……ここらへん」

「重ねた手を更に強く胸に押し付けた。」

「真奈！晴滋！どうしよー！！」

「何だか本人よりも必死な慎。」

「どうしたの？こつちもどうしようなのに」

「だって葵が！！痛いって！胸の辺りが痛いって！お父さんどうす

「ればいいんだ！？」

「子供のように喚く慎に真奈は呆れることなく葵の体を抱き上げた。」

「葵君、どんな風に痛いの？」

「分かんないよ……千里に酷いこと言っちゃったって思ったら……急に

「……痛いよ……」

「あら……慎、恋の病よ。ほら、貴方の出番」

「え？」とあたふたする慎の腕の中に葵が収まる。葵は「痛いよ」と瞳を潤ませて慎を見上げた。

「葵…千里が好き…なのか？」

「……………だいつくらい……………でも、大好き…」

あらまあ。

「真奈…」

「千里君はいい子よ。なんたってあの子達の息子だもの」

「知ってるよ。俺…なんて返そう…娘をよろしく頼んだ？…ふつつかものですが息子をよろしく頼む？」

「慎、まだ子供。出会いはこれからよ」

「でも…俺…お似合いとか思ったんだけど…」

「もつつ。葵君の痛み、取り除いてあげなさい」

「酷いこと言っちゃったことは謝ったのか？」

葵に向き直り、慎は訊く。

「まだ…でも…あいつが謝んなきゃ俺は謝らない」

くいつと顔を上げて葵は言い切った。慎はぼけつとした表情で葵を見る。

「どうして？」

「一度は自分がどんなに我が儘で自分勝手なのか分からなきゃいけないんだ！そうじゃないと…」

「そうじゃないと？」

「あいつが心配で心配で…」

心配で堪らない。

「世間に出たらあいつ…喰われちゃうよ…あいつ…体弱いから恐い人に殴られちゃうよ…」

「葵…」

「あろうことかセックスなんて強制されて—」

「ま、ま、ま待って！」

慎は反応高らかに葵を強く抱き締めた。

そして、慎の肩越しに見える真奈の表情は固まっている。寧ろ黒い

オーラが…

「慎？貴方が教え込んだの？」

「そんなわけないだろ！俺は“男女交際は健全に”を家訓に入れているつもりだ…男子交際だけど…」

「葵君？そうね、あなたの言う通りだね。千里君は我が儘で自分勝手かもしれない。でもね、千里君は分かっているのよ。自分が我が儘で自分勝手って」

「……………謝ったら…俺は土下座して謝る…」

「それでね。千里君、葵君に謝るって外に行っちゃったの」

“外に”

「外に？」

葵は状況理解に努め、

「え？葵はここにいるのに！？」

慎は頭上にクエスチョンマークを出す。

「洸祈君と晴滋が捜しに行ったわ。千里君、きっと葵君を見付けて謝るまで帰ってこないだろうから」

つまり、葵が外に出たと勘違いした千里は謝りに外に捜しに行き、葵が家にいることに気付いた洸祈と晴滋は知らずに外を必死に捜している千里を捜しに行ったと…

「俺…捜してくる！」

「葵、夏蜜柑なつみかんを連れていきなさい。まだ通信が出来ないお前も千里が見付かったのに気付かず捜して、行方不明になっても困るからな」

慎が言い終わらない内に布団からもぞつと紺の毛並みの犬らしきものが顔を出し、立ち上がった葵の脚に鼻を擦り付けた。

「夏、行こっ」

ぐるっ

喉を鳴らす夏蜜柑。

葵は部屋をバタバタと出ていった。

沈黙（４）

陽が沈みかけた河原に小さな人影があつた。

「ちい？」

洗祈は上から千里らしきそれに呼び掛ける。それはこちらを向くと坂を駆け上がったて来た。

「洗っ」

やっぱり。

肘に擦り傷をつけた千里は涙で顔面を濡らして走る。

そして…

「ちい、危なっ—」

ズシャッ

すっ転げた。

「ひっく…うつ…うつあっ…」

洗祈は慌てて滑るように坂を降りると千里の口を塞いだ。

案の定、号泣。

ご近所迷惑。

隠った声で彼は泣き始める。

「ちい、落ち着けて」

「痛いよお！！うああっ！！！！！」

膝を手で押さえた千里。

傷を見ようとして洗祈は千里の手を片手で無理矢理外した。

傷は浅いが出血が多い。

「ほら、傷診てやるから、静かにしろよ」

こくこくと頷く千里を見て口を離してやると彼はずっと鼻を吸って洗祈の首にしがみついた。

「ちょっと渗みるかも」

「っ！」

傷口を川の水で濯いでやり、ハンカチを二つに裂いて膝に巻く。
一つ一つの動作に痛みを感じているようだが、嗚咽を漏らすだけで堪えた。

「洸、あおがないよ…どこにもいないよ」

「^{あおい}葵な、家に帰ってたんだ。ちいが知らずに捜し回っているんだろ
うなって思ってお前を捜しに来たんだ」

「そうなの？…良かったあ」

安堵する千里。

「良かった？」

「あお、変な人に捕まったかと思って…」

「そっか。家に帰るか。その前に…」

晴滋さんに知らせないと…

深紅の鳥よ。

洸祈の開いた手のひらに小さな小鳥が現れる。緋を纏った小鳥。

「いいなあ。あおの風も洸の火も綺麗なんだもん」

ぐずりながら洸祈の小鳥の頭を撫でた。

「僕の魔法は使えない」

小鳥が飛び立つ。

「ちい…」

「誰かを守ることもできない…自分しか守れない…最低な魔法だ…」

千里が自らの魔法にコンプレックスを感じているのは知っている。

千里の魔法は空間断絶魔法。

確かに自分しか守れない。しかし、それは“今の千里には”だ。空間断絶魔法は完全な会得が難しい。火系や風系のように五官で認識できるものと違い、空間は認識できないからだ。会得できれば断絶魔法の効果範囲は広がるし、応用もきく。

「最低な魔法じゃない」

最低な魔法なんかじゃない。

最も強く、最も美しい魔法だ。

空間からの全ての攻撃を流す。

…誰も傷付けない魔法…

「もつと魔法を上手に使いこなせるようになれば沢山の人を守れるようになる」

「でも…僕は…」

…僕は要らないんだよ…

ぼそりと付け加えられる言葉。

儂い横顔…

ツライ

カナシイ

サビシイ

クルシイ

そんな感情をこつたに混ぜたような横顔。

「もつとって何？僕のお家はもつとなんてきいてくれない…僕の魔法は空間断絶魔法、使えない魔法、最低な魔法、それしかないんだ。そんなやつは要らないんだよ」
要らない。

…使えないやつは要らない…

澄んだ翡翠の瞳が淡い橙を残す西の空を見つめた。

「ちい…きいてくれ…」

洸祈は千里の前にしゃがむと手を後ろに出した。おんぶの合図だ。千里がゆっくりと首に腕を回すのを感じながら洸祈は続ける。

「櫻がどう思おうが…俺はお前の魔法が使えないなんて思わない」

くすっ

「千里？」

笑ったか？

「ああもそう言ってくれたよ。さすが双子だね」

鈴の弾むような声音で洩祈の耳許に囁く。

「こんな駄目な僕を気にかけてくれて僕は…二人に会えて本当に嬉しいよ」

この背中の中の温もり、重さ、全てが気を抜くと見失いそうで怖い。

「ちい……辛くなったら俺達に頼っていいんだからな。お前も崇弥の大事な家族なんだから。たとえお前が違うと思っても俺達はそう思ってるから」

「僕…我が儘だよ？」

「うん」

我が儘だ。

誰も見てくれなかったもんな

「自分勝手だよ？」

「うん」

自分勝手だ。

誰も叱ってくれなかったもんな

ぽたっ

肩に滴が落ちる。

「泣き虫…だよ？」

「うん」

泣き虫だ。

誰も止めてくれなかったもんな

「…意地悪だよ？」

「うん」

意地悪だ。

誰も教えてくれなかったもんな

―が…

「大好きだよ？」

「うん」

分かってるよ。

やがて眠りへと落ちていった千里を洸祈はそっとおぶり直した。

沈黙（4・5）

静かになる部屋。

慎はむくつと起き上がると真奈まなの服の袖を引いた。

「肩揉んでもらえないか？」

「いいけど…そうごろごろしていて肩が凝るのかしら？」

真奈の反語を隠した喋り方。

「最近、妙に疲かれる。なんかダルいんだ」

気にするでもなく慎は肩を軽く回した。

「熱は？そうやってお腹冷しているんだから」

真奈は甚平をなおしてやる。

「違う…と思う」

「そう。まあ、肩は揉んであげるわ」

猫背になった肩を慣れた手付きで揉んでやると真奈は慎に押し倒されていた。

「慎？」

「真奈…」

畳に広がった髪を愛しそうに撫でた慎は唇を結んだ真奈を見つめる。

「疲れたのでしょうか？お眠りなさい、慎」

真奈は然り気無く慎を退かそうとしたが、慎は真奈の腕を畳に縫い付けて離そうとしなかった。

慎、おやめなさい。と真奈は何処か意識の薄い慎に静かに言う。

「本当にどうしたの？」

「真奈…お前は…俺を助けてくれるか？」

悲痛の叫び。

慎は目で真奈に必死に訴える。

「私も晴せい滋も貴方の味方よ？どんなときも貴方に尽くすわ」

貴方に出会ったその日から…

私達は貴方の友。

「俺は…洗祈を…」

口ごもる慎。

「慎、洗祈君は貴方と林の大切な子よ？」

そうでしょう？と真奈は優しく語り慎にかけた。しかし、慎の思いは違うようで何の反応も示さない。

「聞いてくれ…」

「何？」

「俺は…洗祈を…買ったんだ」

人を…

息子を…

買ったんだ。

重大な罪の告白。

真奈はこつつと慎の額に自らの額をぶつけた。

「慎、“100億”…知らないと思っただの？」

息子の値段。

「失望してるだろ？」

「どうして？確かに貴方は洗祈君を買った。でも、それは最善の方法だった。政府に囚われた洗祈君の身を保証して取り戻すにはお金で買っしかなかった。慎、貴方は間違っていないわ」

「辛いんだ…俺は…息子を買ったんだって…痛いんだ…」

慎は真奈を離すと壁に寄っ掛かって胸を強く押さえた。

ここが酷く痛い。

「林はありがとうと言っわ。寧ろ、貴方が洗祈君を諦めていたら空から貴方を殴りに来ると思う」

真奈は慎の柔らかな黒髪を指に絡めて優しく優しく撫でる。

慎はその手を取ると、胸に抱いた。真奈は身動きせず慎が言葉を発するのを待つ。

と…

「真奈…もし…俺がいなくなったら三人を頼んだ」

「慎！縁起でもないこと言わないで！！」

真奈の言葉に慎は「ごめん」とただ曖昧に答えたのだった。

人を買いました。
人を飼いました。

誰が私を赦すと言うのですか？

沈黙（5）

ゆらゆらと僕は揺れていた。

「ああ……ごめんなさい……誰か……僕を赦して」
誰か赦して。

「千里^{せんり}」

「ああ……」

ああ、柔らかかそうな青みがかった髪。
伸ばせば届きそうだ。

あ、触れた。

「僕の自業自得だよ……僕はなんて自分勝手なんだろう……ああ、ごめんなさい」
謝るから赦して。

これあげるから赦して。

「いらないよ」

そんな……僕は赦してもらえないの？

「俺の怒りは治まらないね」

「ヤダ……ああ……厭だよ！」

見棄てないで。

“要らない”なんて言わないで。

ぎゅっ。

アタタカイ。

「あ…お…」

「魘されてた。大丈夫か？」

あおの顔が真横にあつて、僕は抱き締められてるんだと気づいた。
僕は…帰ってきてたんだ。

洸がお家まで僕を抱っこしてくれたんだ。

「大丈夫…じゃないよ。このままずっと…」

「怖かったんだな」

あおは強く僕を抱きしめる。

ああ…

君の温もりの中にいれば僕は君に見棄てられない。

“要らない”なんて言われない。

「あの、ごめんなさい。僕が悪かったよ。だから、ごめん」
夢を追憶しているようでちょっとだけ怖い。

だけど、謝るって約束したから。

「これ…分けてって」

飴玉。

真奈さんがくれた飴玉。

僕はこれをあおにあげないと本当には赦してもらえないんだ。
要らないなんて言わないよね？

あお、貰って。

お願いだから。

「要らない」

イラナイ？

あ…

何て返せばいいんだっけ？

これも夢？

でも、あおの温もりは本物だ。

「…い…？」

聞き間違いだよな？

…―要らない―…

嘘？

意地悪してる？

嘘？

嫌いなもの？

ヤダ…何でこうなるの？

「待つ…て…」

「千里？」

待つてよ。あと少しでいいからチャンスを頂戴よ。

「もう…お菓子なんていらなから…図々しくなんて…しないから…」

「へ？」

「僕は…あおに“要らない”なんて言われたくない…よ…」

棄てないで。

塵だけど棄てないでよ。

「ここがなくなったら…僕は…どうして生きてなくちゃいけないんだよ…」

死ぬしなくなる。

必要とされなくなったら要らないと言われたら棄てられるしかない。

「棄てないで…謝るから…あおの望むことなんでもするから…棄てないで…あおが望むならこの体売ってでもあおが望むだけのお菓子買ってくるから…だから…棄てないで…」

僕を棄てないで。

沈黙（6）

「身体中に…」

千里^{せんり}の痕…

あんな千里は見たことなかった
『好きだよ』

…—^{あおい}葵—…

痺れるような甘い囁き。

あのまま快樂に身を委ねてもよかった。

でもね…—

「怖かった」

得体の知れないあの感覚は俺を酷く不安にさせた。

「満たされるって…怖かった」

知らないから。

その先を知らないから。

「頭が狂いそうで…」

そんなのにはなりたくなかったから。

『葵』

「洗祈？」

ああ…服を取りに行ってくれてたんだっけ。

浴室のドアを開け、タオルの上に水滴を落とす。

タオルを巻いた俺は鍵を開けようと指を伸ばして…

『……………ああ？』

せんり！？

「……………っ！！！？」

体が強張る。

無意識に後退りし、洗濯機に踵をぶつけた。

扉の向こうから息の呑む気配がする。

多分、自分が後退ったのが分かったのだろう。

『葵、落ち着け』

落ち着けるわけがない。

千里の熱い吐息がフラッシュバックする。

……愛してる……

言葉と共に全身にかかる吐息。

……愛してるよ、葵……

怖い。

「な……んで……」

なんで千里がいるのさ。

好きだよ。

愛してる。

体に千里の歯が立つ。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

『ごめんなさい』

そう、あの時もだ。

お菓子の取り合いで落ち込んでるのかと思ったのに案外、すやすやと寝てたから起きて突然謝ってきたのは驚いた。

ごめんなさい。

と、千里が涙を流して何度も謝った。

そして、飴玉を差し出して泣いた。

あの後、俺は…

「せん…り…」

『僕…月葉つきはさんがあおは…僕が好きだって聞いて…。ううん、僕はあおを昔からずっと好きだった…』

俺だって好きだった。

昔からずっと。

『気分が高揚して…あおの部屋行ったらあおは…縛られて寝てたでしょ…』

ただ寝ていたはずなのに、いつの間にか縛られていた。

『大好きなあおの髪を撫でてたら…月葉さんの言葉であおの言葉じゃないって思ってた…』

だが、起きたら千里が俺に被さっていた。

そして、

千里は俺を…
あいつ

『もし、あおは僕のこと嫌いだったら？僕は…厭だった。僕は…あおが離れていくのは…厭だった』

告白するなら、俺だって千里を縛り付ける夢を見た。
だからこそ、怖かった。

本当の気持ち知られることが。
本当の気持ちを知ることが。

…―愛されないならいつそのままこの手に収めていたい―…

醜い望み。自分勝手な欲望だ。

『あおは僕のことどうとも思っていない…そう思って…止められなくなつた。この唇にキスをすれば…この四肢にキスをすれば…きつとあおは…僕から…離れないって…』

俺もだ。

考えると止まらなくなつた。

『あおは厭つて言つた…僕はあおに失望されたし…嫌われた…そう思った…。あおが厭がることはしたくない…傷付けたくない…でも――』

「『愛されないなら…愛したかった』」

愛したかったよ、葵。

彼の哀しそうな声が聞こえた。

だからこそ、俺は鍵を開けていた。

内側へと開けば金の糸が緩やかにウェーブする。
隣には驚き、穏やかになる兄の表情。

ありがとう、洗祈。

ごめんな、千里。

早く素直になることが必要だった。
好きです。
大好きです。

千里、一歩踏み出して近づいてもいいよね。

沈黙（7）

昔、近所のお祭りで父さんが紙相撲大会優勝商品として、チョコの包みを沢山貰ってきた。父さんはそれらを俺達にくれ、そのまま昼寝をしていた洗祈（きし）のもとに一緒に寝に行ってしまった。洗祈が甘いのが苦手で、わざわざ寝ている奴を起こすのもということで、千里（せんり）と二人で分けることになった。

最初は平等に分けようとした。なのに、千里がジャンケン勝負しようと言ってきた。そして、勝って沢山取るとも言った。面倒だと言ったのに、あいつがしつこく言うからジャンケンをすることにしたのだ。

千里のお望み通りにジャンケン勝負を初めて10分もしない内に、千里が負け続けていることに我慢ならなくてルールを無視した。

当然、俺は怒ると、千里に逆ギレされ、起きてきた洗祈に泣きついて俺に非があると喚きたてられた。

俺は大人で、千里は子供だからと。

多少の我が儘は赦してきたが、今回は流石に赦せなかった。

明らかに千里が悪いのに、謝るところか俺が意地悪だと言ってきたのだ。それを真奈（まな）さんは甘やかして、それでは千里を赦してしまうことになる。ついカツとなって俺は酷い言葉を言った。

『何だよ！千里は我が儘なんだよ！！！！うちの子じゃないくせに！そんなに食いたきゃ……櫻の家に帰れよ！！俺ん家で何で……この子のように振る舞うんだよ！図々しいんだよ！！！！』

とても酷い言葉を言った。

千里には櫻（さくら）に居場所がないと知っていて言った。

俺は最も効果のある言葉を選んで千里を深く傷付けた。

最低だ。

と、千里のように喚いた後で思った。

俺は沸々と沸き上がる罪悪から逃れるようにその場から去った。泣

く千里を置いて。

父さんと話をして、真奈さんに事情を聞いて、もう千里が謝るまで謝らないとかどうでも良くなっていた。千里が心配だった。

何故なら、あいつは我が儘だけど、頑固でもあったから。俺はそんなところが好きで大好きだったから。

だから、俺は千里が心配で搜した。

夏蜜柑に千里が見付かったことを教えてもらって、俺は家に慌てて帰った。

膝を擦りむいてまで俺を搜してくれていた千里は寝言でも俺に謝っていた。

厭だよ。見棄てないで。要らないなんて言わないで。

あいつの悲しみ、不安が俺の胸に刺さった。

そしたら、起きて必死に謝る千里をこめんって、抱き締めていた。

千里の言う通りだと思った。あいつは子供で、俺は大人。確かに、

俺は千里より大人だった。我が儘は言わないし、泣き虫じゃない。

だから、大人気なかったかもしれない。別にチヨコにそこまで執着

していないのに、あいつのジャンケンのパターンを読んで連勝して

いた。手加減するとかは、なかった。ただ、あいつの…千里の泣き

そうな顔を見ていたかった。綺麗な金髪も透き通るような翡翠の瞳

も好きで、千里の泣きそうな顔はもっと好きだった。

俺はそんな時から千里が好きで好きで堪らなくて、今まで伝えられ

ないくらい不器用だった。

だから、飴を渡そうとした千里に“いらない”と言ってしまった。

あいつにとつての飴の意味も知らずにだ。

その後、俺は…

あおい

葵は濡れた体のまま、千里の頭を両腕に埋めた。

「千里」

「あ…お…」

ゆつくりと千里の顔が上がる。

そして、あまりのことにぽけっと開いた千里の唇を、葵は問答無用で噛み付いた。

がりっ。

千里はその痛みに顔を歪める。しかし、葵から逃れようとはしなかった。彼は必死に目を瞑って堪える。

長い間、二人はそうしていた。

やがて、それが痺れを切らした千里の伸ばした舌によって口付けに変わる前に、葵は唇を離した。

「これでチャラだ」

くつきりと残る葵の齒形。

「それで…ごめん」

それを葵は消えるまで指で優しくなぞる。痕は直ぐに唇の弾力で消えた。

「赦してくれるの？」

「チャラだから」

「本当に？」

千里は再度、強く確認する。

「うん」

葵が頷くと、千里はニコツと笑い、濡れた背中にとつと腕を回した。葵は微かに体を強張らせるが、すぐに千里の体温を受け入れる。逆上せ気味の葵の鼓動と、緊張気味の千里の鼓動が重なる。

「棄てないで…」

「棄てない」

あの時と同じ。

飴をくれようとした千里に断つたらあいつは必死に棄てないでと

繰り返してきた。

そして、俺は勘違いをしているらしい千里に棄てない。と言ったんだ。

俺は飴なんかよりも…

「いい？」

葵は訊く。

あの時は訊かなかったけど。

千里は片目を開けるとむすっと頬を膨らませた。

「もうっ、待たせないでよ」

思い出した。

あの時、俺は…

「ごめん」

そう言っただけは…

『何言っただけのさ！飴なんかなくなっちゃって俺はお前を赦すに決まってるだろ』

飴なんていない。

『へ？』

千里は俺の腕の中で首を傾げた。

『第一、俺はチョコが嫌いなんだ。飴だって…甘いのが苦手だって知ってるだろ？』

欲しいのは…

『そう…なの？…じゃあ、その手のチョコは？』

『千里、口開けて』

『？』

『はい、あーん』

『ああ？』

『棄てないから…』

欲しいのは千里お前なんだ。

んっ……………。

葵の手が千里の髪を解いた。
鮮やかな金が光り、葵と涙を頬につうつと流した千里を包み込むように舞う。

「好きだよ…せん」

「うん…ああ。好きだよ」

ここは千里が先に倒れるところだと思った。

が、

「おっほん」

洸祈は壁に手を突いてお熱い二人をじーっと眺める。

「洸？」

「なーにが『洸？』だ」

洸祈は呆けてる葵を千里から奪い取ろうとしたが、千里は葵を掴んで離さない。

「だーめ。ああはあげない」

崩れ落ちそうな葵を抱きしめた千里は不適に幸せそうに笑う。

「まさかじゃねえよな！」

洸祈は何かを察して言う。

ふふふ。

葵はお酒と不馴れなキス、それに逆上せが重なりふらふらだ。

洸祈はキツと千里を睨む。

「疲れきってるだろ！？赦してもらえて嬉しいのは分かったから今日はもう寝かせてやれ」

「だって―」

…―ああが興奮してる―…

千里は洸祈に囁いた。

洸祈は言葉を呑み込むしかない。

「このままなんてかわいそーじゃない？」
くしゅっ

葵がくしゃみをした。

「濡れたままだと風邪引くぞ」

「と言うわけであお、一緒にお風呂入る？」

「ちい！」

いーじゃん。千里はその細い四肢で葵を抱き上げる。

と…

葵は朦朧としているがはつきりと首を縦に振った。

「千里…もう…あんなこと…」

「しない。あおの気持ち分かったから大丈夫。ごめんね。ゆっくりと焦らないから」

「…うん」

洸祈は引き下がるしかない。

しかし、これだけは言いたい。

「いいか！我が家の家訓は健全な男女交際だからな！男子交際だけ

ど！」

「洗、ありがと。お休み」

これから起こることは考えないようにして洗祈は二階の琉雨のもとへと急いだのだった。

「ほどほどにしゃがれよ……」

「…旦那様？」

「トイレ行くときは俺がついて行ってやるよ。風呂場の前通るからな」

「ほへ？」

「琉雨、可愛いよ」

麦畑の少年

あの時、

ぼくは死にたかった。

あの時、

ぼくは生きてみようと思った。

あの時から……

俺は生きようと決めた。

「周防^{すおう}……いい響きだな」

おっと。

じじくさくなってしまったな。

「姐さんの勤めていた病院……姐さんが言っていた病院のままでありますように」

何故……私はそんなことを願ったのだろうか？

あの子に出会うことを何となく本能的に感じたのかもしれない

そう、私は…

危機感を感じた。

「毎月20万は払う！そう言っているだろ！」
と、男。

「厭よ！また手術なんていったら足りないわ！！それに…あんな不気味な子がいたんじゃ再婚なんて無理だわ！！！！！」
と、女。

「私だつて厭だ！！！！！」
と、男。

「何であんな子が産まれたの」
と、女。
ガラッ。

「診察は終わりましたけど…入りますか？」
と、看護師。

「いえ…」
と、男。

「じゃあまた…」
と、女。

「…ああ」
と、男。

加賀^{かが}はただ見ていた。

入院費に顔を曇らす親は何処にでもいる。別に珍しくない。
だけど…

「『何であんな子が産まれたの』……か」
誰もあんたから産まれたくて産まれたんじゃない。
と、内心毒づく。

壁に手を突いて早々から厭な場面に出会したことに加賀は深々と溜め息を吐いた。

「また…」

「また…ね」

「そりゃあ、親にあんなに言われて同情するけど…私だって、また“あんなこと”する子なんて欲しくないわ。こっちから願い下げね」「そうそう」

看護師達は再び、勤務に戻っていった。

「また…あんなこと…？」

気になるが、それよりも気になることがある。

「不謹慎な看護師だ…」

「こっちから願い下げはその子の言葉だろう？」

「姐さん…全然違うよ」

周防は変わったようだ。

生命を尊ぶのは医者でも看護師でもない。

人としての常識だろう？

「あの」

「あ、はい」

「院長室は何処にあるのでしょうか？」

加賀は畑とネームプレートはたを付けた看護師を呼び止める。彼女は氣付いたようで、加賀に頭を下げた。

「加賀龍士先生りゅうしですか？」

「はい」

畑はこれからよろしくお願いしますね。と微笑み、案内しますよ。
とカルテを棚に仕舞った。
その時だった。

「ぼくに触るな!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

900号室。

先程から話題の病室からだ。

「きゃっ!!!!!!!!!!」

女性の短い悲鳴。

「何が!？」

加賀が病室に入ろうとドアに手を掛けて…

ガラッ。

中から開いた。

若い看護師が加賀の脇腹にぶつかり、すみませんと小さく叫んで
走り出す。

「由宇麻君!」
ゆづま

知り合ったばかりの畑は加賀の横を足早に通る病室へ。

加賀は動けないでいた。

握力が失せて鞆が垂直に落ち、足元に倒れる。

「……これは…」

一体…何だ。

ベッドに人が、患者が、子供が…

鎖で縛り付けられていた。

長い。とても長い髪が顔を肩を腕を四肢を覆い隠していた。

麦畑の少年（2）

「何ですか、あれは！！小さな子供を鎖で縛り付けるなんて―」

「親御さんは了承済み」

あんな親の了承なんて！

と、言いたいのがクビは勘弁なので口をつむぐ。

「でも…どうして鎖なんて」

「本人に訊いたらどうだ？手にあまる子でね、数多の医者をノイロ
ーゼにさせたんだよ。皆して嫌がるから看護師さんに我慢してもら
っている。そうだ、気になるのならあの子の相手をしてやってくれ
ないか？」

「司野^{しの}…由宇麻^{ゆつま}……由宇麻君」

心臓に重い鎖の少年。

現代医療では治療不可。

心に重い鎖の少年。

900号室。

最上階の最北端。

加賀^{かが}はそつとドアをスライドさせた。

1日経っても変わらない。

鎖に両手足の自由を奪われ、枯草色の長い髪が無造作にベッドに広がる。

その中で死んだように眠るのは司野由宇麻だ。

加賀は音を発てないように重なったままの椅子を崩して、枕横に置いて座った。

現在、午前6時30分。

「君が由宇麻君…お休み中にごめんね。人は寝ている時が一番素顔を見せるから」

「怖いからでしょ？」

誰の…いや、聞き覚えがある。

つい昨日に聞いた声だ。

加賀は顔を上げた。

声の主は司野由宇麻だ。

顔を加賀から背けている為表情は見えない。

その時、安堵の溜め息を吐いていた…

私は何をやってるんだ？

安心してどうする？

ああ…怖いんだ。

由宇麻君の言う通りだ。

ちくしょう！

加賀は一瞬で乾いた口の中を唾液で濡らすと、相手の次の言葉を待った。

何も言わない。

寝たのか？

「ゆ…由宇麻君？」

ダンッ！！！！

由宇麻の片足が勢いよく落ち、ベッドが凄まじい音を發てた。無言の主張なのは分かる。

しかし、

「由宇麻君、私は神様でも超能力者でもないから君の心は分からない」

由宇麻が微かに身動ぎした。

「言いたいことがあるなら言ってくれ」

言ってくれなきゃ分からない。

震えていた脚に爪を立てて加賀は訊ねた。

怖がるな。

こちらの恐怖は伝わる。

特に心を閉ざした者には。

だろう？ 姐さん。

……。
由宇麻は喋らない。

……。
「しょーがないなあ」

加賀は立ち上がるとベッドを迂回し、わざと隠す顔は見ないように

してカーテンを一気に引いた。

紫外線アレルギーなのかどうかは院長に訊いたので問題ないはずだ。

すると…

「眩しい…」

再び顔を背ける由宇麻。

聞こえた。

綺麗な声。

見えた。

綺麗な瞳。

ただの少年じゃないか。

加賀は気を取り直して太陽光を背にして立った。

「私は加賀龍士^{りゅうし}。よろしく、由宇麻君」

『あの子が笑うとこっちも笑っちゃうのよ』

麦畑の少年（3）

日々の私の仕事は毎朝、由宇麻君ゆうまの病室のカーテンを引くことだ。
たったそれだけだ。
そして話し掛ける。

「おはよう、由宇麻君」

「……………おはよう」

あ……………。

おはようって返してくれた。
初めてだ。

『そう、“おはよう”よ。簡単だけど簡単じゃないの。じっくりと辛抱強く』
本当だね。

じっくりと辛抱強く待った甲斐があった。なんか嬉しい。

『“おはよう”って返してくれたからって一気に近付いちゃいけないの』
分かったよ。

加賀かがは乱れた布団を掛けてやるとじゃあね。と病室を出た。

おはようにおはようと返してくれるようになって1週間。未だに鎖

に繋がれている理由は不明だが、毛嫌いはされていないようだ。

「今日はお話してみよう」

と言う“ささやかな目的”を持って、その日も900号室のドアをスライドさせた。

「由宇麻、これ。下着よ」

ドアを開けると、紙袋を落とすように置いた女性がいた。

由宇麻君のお母さんだ。

第一印象は最悪だったが、朝早くから由宇麻君の為に衣服を届ける姿に印象が上がった。

「おはようございます、司野^{しの}さん。私は新しく来た医者^{しよ}の加賀――」
「静かに！」

由宇麻の母親は鞆を強く胸に抱くと、加賀を睨んだ。加賀は反射的に口をつむぐ。

よく分からないが、悪いことをしたのなら謝りたいのに、静かにと言われたら謝れない。

「由宇麻が起きちゃうじゃないの！」

と言うので、

「由宇麻君はもう起きてると思うんですが」

既に起きてる時間だ。

お話しても大丈夫だが…

「あんた馬鹿じゃないの？起きてるばくに会いたくないから起こしたくないに決まってんじゃん。ばくも無駄な話しはしたくないから寝た振りしてるに決まってんじゃん」

と、由宇麻。

「ひっ！！」

と、母親の悲鳴。

由宇麻の母親は転がるように病室を出て行った。

由宇麻は相変わらず髪に顔を隠して嘆息した。

「ねえ、おはよう」

これまた初めて「おはよう」を言われた。返されたのではなく言われた。

加賀ははつと息を詰めるとおはよう。と返してカーテンを引いた。

忘れるんだ。

あんな親もいないわけじゃないんだから。

印象は再び下がり、その日もじゃあね。と病室を出ていた。

「加賀先生凄いですね。由宇麻君におはようだなんて」と、看護師の畑^{はた}。

「どこが凄いんですか？朝、人に会ったらおはようなんて普通です」
ついつい挑発的に言ってしまった。

ああ、私のバカ！

「すみません……」

加賀は頭を下げるのもそこそこにその場を逃げた。

『龍ちゃん！逃げちゃ駄目よ！！逃げちゃ駄目、立ち向かわなきゃ。じゃなきゃ患者さんに笑顔を向ける資格はないわ』
姐さんの声が聞こえた気がした。

麦畑の少年（4）

「はあ」

星を眺めながら加賀は深く息を吐いた。

「ちよつと。人の傍でそんな溜め息吐かないでくれる？」

「起きてたの？」

加賀は窓枠に突いていた手を放すと、逆に凭れてベッドの少年に首を傾げる。少年は鎖を鳴らして体を起こすと、加賀を見ずに答えた。

「起きてた」

「もう1時を回ってるよ？」

勿論、“午前の”だ。

「だから？睡眠薬盛って昼間から眠らせているのはあんたらでしよ？」

「そうなのか？私は君のカルテを見たことがないんだ」
変な先入観を持たずに素で接したくて。

「じゃあ、何しに来てんの？」

「仲良くしに」

小さな頭が揺れた。

そして――

「ぼくは仲良くなんかしない」
言われた。

少し…否、かなりぐさりときた。

「私は…純粹に君に惹かれてる」

この子はなんか違う気がする。と思った。

仲良くなれなくてもいいから、君を知りたい。

「君には姐さんの言っていた周防すおうがあるようで…」

ただ、知りたくなった。

「ふうん…姐さん？“加賀”だっけ？どんな字書くの？」
姐さんに反応を示した。

姐さんはこの看護師だったから、もしかしたら知っているのかもしれない。

加賀は胸ポケットからメモを取り出すと、姉の名を書く。そして、その小さな手にメモを乗せた。

「加賀……姫野……やっぱり……綺麗な名前じゃん」
くすり。

微笑した。

「姐さんを知ってるのかい？」
共通の話題だと思った。

しかし、彼の言葉は衝撃的なものだった。

「うん。ぼくが突き落とした」

……へ？

「由宇麻君？」

意味が分からない。

姐さんは不幸な事故で…

周防病院の…

最上階最北端…

900号室から

転落死した。

「姫野さん、ぼくがそこから突き落としたんだよ」

「君が…姐さんを…？」

嘘だろう？

加賀は由宇麻の指差す先、凭れていた窓を見た。

端に枯れきった芝桜の鉢植え。 渴いた土に刺さるのは白兔が先端に付いた棒。

たったそれだけの窓。

ナース服の姉。

その後ろに…

由宇麻君…。

ここから…

姐さんを…

吐き気がする。

気持ち悪い。

視界が反転した。

「姫野…綺麗な名前…」

囁き声が聞こえた気がした。

麦畑の少年（5）

あれから1週間。

私は900号室には近付いてすらいなかった。

「また……」

「加賀先生があの子の相手をしなくなってから」

「鎖だと破傷風になる恐れがあるから次は縄にするとか」

「動かせるとまたあんなことをしてしまうから完全に自由を奪うしか他ないわ……」

「加賀先生になら心開くと思ったのだけれど……」

「加賀先生……一体どうしたのかしら？あの子に何か言われたのね」

「他の先生のようにならなければいいけど……」

「最近のあの子大人しかったのに……元に戻ったよね」

「私、なんか悪人ですね」
「犇々と感じる罪悪感。」

「悪人じゃありませんよ」

畑は加賀の猫背気味のその背中を叩いた。加賀はその勢いでそのまま机に突っ伏す。

「でも、どうしたんですか？」

由宇麻君に姐さんは突き落とされた。

「あの……加賀……姫野を知ってますか？」

「姫野……さん……加賀先生のご親戚の方ですか？」

「あ、いえ…姉です」

去年からここにいる畑さんは2年前の事件は知っているはずがない。真偽の確かめようがない。

由宇麻君の言葉は本当か嘘か。

…―由宇麻君ならやりかねない―…

「くそっ！私は何を考えているんだ！！」

「加賀先生？」

畑は加賀の顔を覗き込む。加賀ははっと顔を上げると後ろ首を掻いた。

「でも加賀先生…由宇麻君、貴方が毎朝彼に話し掛けるようになってから本当に大人しくなっただんですよ。私達看護師におはようって返してくれるようになったんですよ」

畑は優しく笑う。

「何があつたのか分からないけど、あの子が一瞬でも人になろうとしたのは貴方のお陰です」

私のお陰…―

誰かに頼られるのは好きだ。

誰かに喜ばれるのは好きだ。

だけど…

―ぼくが突き落としたんだよ―

憎んでいるんじゃない。

いや…

憎んでいる。

本当か分からないけどああきっぱり言われて嘘だと思えない。

だけど、本当に心に引っ掛かるのは…

私は君を見失った。

「加賀！」

「へ？」

ついつい呆けた声で返してしまった。

「佐藤^{さとう}…さん」

先輩医師だ。

「お前、由宇麻君から逃げてるらしいな！」

「逃げる？ 私は追われる立場ではないのですが…」

由宇麻君は私を追っていたのか？

ゴンツ。

医者に殴られた。

「いった…何をっ…」

「23人もだぞ！」

「……………23人…？」

「由宇麻君にやられた医者の数さ。半数以上がノイローゼ。精神科行きが2、3人程。残りの半数以上が近付かなくなる。俺もその一人だったりする。そして、そのまた残りが由宇麻君の体に手を出そうとして殺されかけた。さあ、栄えある24人目の加賀はどれだ？」

私は24人目になるのか。
「精神科行きはないな。ぼけっとした顔してるし」
心外な。

「じゃあどっちだ？ 案外どっちもか？ 動けない由宇麻君に手を出して知らんぷり。とか？」

「そんなわけあるか！！！！」

後輩に怒鳴られたにも拘わらず、佐藤は笑むと、畑のように加賀の肩を叩いた。

「だよな。じゃあ、一体どうしたんだ？」

その声が優しくくて…

もう一度。

もう一度だけ、辛い記憶を呼び覚ます。

「2年前…一人の看護師…加賀姫野が自殺をした事件を知っていますか？」

「姫野ちゃんだろ？」

「はい…詳しく教えて下さい」

麦畑の少年（6）

加賀^{かが}は走っていた。

「私は…間違っていた…」

目指すは900号室。

「由宇麻君はその時ぐっすりと寝てたんだ」

「ね…てた？」

「そう。その小さな手に姫野ちゃん^{ひめの}の髪飾りを乗せてな」
寝ていた？

— ぼくが突き落としたんだよ—

嘘寝… も有り得る。

「加賀、信じてないな」

佐藤^{さとう}はふうと深く息を吐くと、加賀の眉間を突いた。
医者に突かれた。

「いたっ」

「鉢植え、見たか？」

鉢植え？

確か…

「芝桜…」

姐さんの好きな花。

「あれ、姫野ちゃんが由宇麻君にあげたものなんだ。毎朝、毎朝、
姫野ちゃんと由宇麻君、二人で水をあげていた」

今はもう枯れきっていた。

「姫野ちゃんが自殺してから… 由宇麻君、全てを失ったかのように

塞ぎこんで。それでも…いや…それだけ…芝桜に彼は毎朝水を与えていた」

と…不意に佐藤は口をつぐむ。

「佐藤さん？」

「ここは…由宇麻君に訊いてくれ…まあ、ある理由から彼は鎖に繋がれることになった。当然、鎖で自由を奪われた彼は水を与えることができなくなったんだ。だからさ、看護師が水を与えようとしたら『それに触るな！』って怒鳴られたんだ。感情を露にしなくなっていた子が凄いい形相で叫ぶもんだから誰もあの鉢植えに触れることはできなくなってしまった」

それじゃあ枯れてしまっじゃないか。

「由宇麻君…ずっとずっと元気なくして…芝桜見詰めてさ…手え伸ばして届かなくて…泣きそうな顔してた」

大切な人がくれた大事なものが少しずつ少しずつ色を無くしていく。できることは見ること。

それはどれほどに辛くて悲しいものか。

捨てたくない思いと汚したくない思い。

由宇麻君はどうしようもないくらい一途だった。

「佐藤さん、ありがとうございます」

加賀は走り出す。

『あの子が笑うとこっちも笑っちゃうの』

と、姐さんはよく言っていた。「竜ちゃんに会わせたいわ」とも。

「きつと“あの子”は由宇麻君だ」

私はまだ、

「由宇麻君の笑顔を見てない」

現在、午前1時。

彼は起きているだろうか？

ガラッ。

「由宇麻——」

見開かれる枯草色の瞳。

同じ色の長い髪。

風が全てを揺らし、舞わせる。

引きちぎれた縄。

白い病人服。

「何を……」

由宇麻は窓枠に脚を掛けて立っていた。

加賀がずっと見損なっていた素顔が夜風に晒されている。

幼い少年の顔。しかし、その裏からは醜い大人を見てきた疲れが滲んでいた。

そして、彼の驚きは歪んで別の何かに変わり、瞳が細くなった。

鋭い……威嚇している瞳。

加賀は溜まった唾を飲み込んで立ち尽くす。

「教えてあげる。ぼくが縛り付けられていたのはぼくが自分を傷つけ、自分を殺そうとするからだよ。だから縛り付けられていたんだ……」

「由宇麻君、降りなさい」

「加賀さん……自殺する前にぼくに言ったんだ。彼氏に名前をからかわれて喧嘩して別れたって。だからぼくは加賀さんに名前訊いたんだ。何て言うの？ からかわれる程変な名前なの？ 教えてよ。って……そしたら……次の日の朝、ぼくの部屋の窓の下で死んでたよ」

そう、彼処でね。

由宇麻は真下を冷えた目で見下ろす。

「降りるんだ、由宇麻君」

「姫野…綺麗な名前だよ。…もっと早く知りたかったな。言えたら…そしたら…彼氏と別れたからって自殺しなかったかもしれないのに…大好きだったんだ…愛してたんだ…」

「だからって何故、由宇麻君が死のうとするんだ！」

「ぼくは暢気に寝てたんだぞ！！真横で飛び降り自殺した彼女を止められなかったんだぞ！！ぼくは最低だ…彼女が遺してくれたこの子ももう死んでしまった…ぼくは死ぬしかないんだよ…」

枯れた芝桜。

その硬くなった葉に手を伸ばして触れた由宇麻はごめんね。と囁いた。

それは自らの髪や瞳と同じ色。

死に逝く色。

「どうして死ぬしなくなるんだ！」

粹に立つ彼を刺激しないように近寄り、加賀は必死に手を伸ばすが届かない。

「お父さんにもお母さんにも捨てられ、唯一心を許した加賀さんもこの子ももういない。ほら、もうぼくには何も無い。生きていけないよ。ぼくはもう死にたいんだ」

粹を放し、空へ腕を広げる由宇麻。一度バランスを崩せば落下して死だ。それこそ、加賀の姉と同じ様に。

彼はポケットから綺麗な桜の髪飾りを取り出すと、その長い髪を結わえ上げた。

「厭だ…私は厭だ…由宇麻君が死ぬなんて厭だ…」

加賀は駄々を捏ねる子供のように言う。
厭だ…と。

もう由宇麻君を見失いたくない…と。

「私では駄目か？」

「もうヤダよ…弟さんも突き落としたら加賀さんに失望されちゃうか」

「由宇麻君！」

ふらりと傾く体。

加賀は支えようと近付こうとして、どうにか倒れるのを耐えた由宇麻に睨まれ、足を止めた。

1年以上、体の自由を奪われていた由宇麻の筋肉はかなり落ちている。

それは立っているのもやつとなくらいに…

「危ないよ！」

「危なくていいよ。ぼくは死ぬんだから」

伝わらない。

由宇麻君には生きてほしい。

「なら…由宇麻君、どうすれば君は生きてくれるんだ！」

由宇麻は長い髪を夜風に靡かせながら月を星を見、加賀を正面から見詰めた。

そして…

「ぼくの傍にいと誓って…いなくなると誓って…そんな人がいなくちゃぼくは生きる意味がないから」

失うのが怖いから…

その恐怖は…

死をも凌駕する。

麦畑の少年（7）

「誓う。私の全てを賭けて…」

「本当に？」

「ああ。私は君の傍にいるよ」
だからおいで。

「本当に？」

加賀^{かが}の動きに目を光らせながらも歩みを見せようとする。

「私は君に惹かれたんだ。それだけじゃ信じてもらえないかい？」
ゆつくりと…

ゆつくりと…
作った笑いは由宇麻君^{ゆしま}には逆効果。普通の子と同じように接しよう
なんて考えるだけ無駄だ。

由宇麻君は人の心に敏感。最初の出会いのように…

「ほら、おいで」

窺うように向けられる瞳は月明かりに葡萄色を見せる。

細い体躯。

流れるような長い髪。

微かに揺れる桜の髪飾り。

震える指先が私の手のひらに…

この時、私は由宇麻君に姐さんの姿を見た。

「……………姫野^{ひめの}」

あ……………。

由宇麻……くん……。

加賀の言葉に手を引つ込めた由宇麻はそのままバランスを崩し、

「由宇麻君……！！！！！！」

二人の手のひらは空を掴んで、由宇麻は落ちた。

……さようなら……

その薄いピンクの唇が別れの言葉を紡ぐ。

にこり。

由宇麻は笑った。

「一生、傍にいる。約束だからな！！！！！！」
ぎゅっ。

加賀は宙の由宇麻を胸に抱いていた。

二人は落ちる。

死ぬのか？

由宇麻君が生きてくれるならいいかも知れない。

強い衝撃。

『龍ちゃん、泣かないの』

『だって！』

『シャルは十分生きたわ。寿命だったの』

『でもっ…厭だよ！シャルと離れたくない！！』

『貴方はシャルを縛るの？』

『一緒に居たいだけ…だよ…』

『居たいのは分かるわ。ずっと一緒だったものね。でもね、貴方が彼女を離さなかったら彼女は逝けない。この世に囚われる』

『それは人だけ…』

『人だけ？全ての生命は皆平等。たとえ知能が高くても死は訪れ、土に還る。違う？シャルも土に還る。そして生まれ変わる。離さないのは彼女を剥製にし、その腕に抱えて閉じ込めるようなものよ。私も貴方もいつか死ぬ。そしたら彼女は？貴方は？』

『どうすればいいの？』

『シャルのことを忘れないで。貴方がシャルを拾ってきた日。シャルが貴方の手からご飯を食べた日。一緒に寝た日。忘れないで。そして、バイバイって送り出してあげるの』

…バイバイ、姐さん…

麦畑の少年（8）

…―龍ちゃん―…

…―姐さん？―…

視界がぼやけて…

「おはようございます」
かが
加賀先生。

ナースが囁いてくる。

それにしても…

天国でも私はお医者さんか。白衣を着ているし。

折角、天国に来たんだから、

「天使がいい…よ…」

白い柔らかな羽を纏った美女の天使。

某、イメージキャラクター、キュー〇ーのような羽を生やした裸の赤ん坊がラッパを持ってうるちよろしているのはなんか嫌だが。

「なあに言ってるんですか」

ナースがその黒髪を揺らして呆れたように返してくる。

金髪じゃないのか…。

妙なところで和風だ。

でも、考えてみればここが天国とは限らない。第一、一応、ここでの天使役みたいなナースに呆れられた。

もしかして、地獄か？

爽やかな朝を迎えさせて谷底に落とし、更なる激しい絶望と苦痛を……。

ナースがどうの黒髪がどうのどころではない。

「寝かせてくれ…まだ地獄は」

もう少しだけ夢を…

ナースさんお願いだ。

もう美女の天使なんていいから。

あれ？

ナースさん？

おっきな注射は反則ですよ！？

ちよつとちよつと！

……。

「ちよつと！……！……！……！」

がばっ。

「注射は厭だあ！！！！！！」

「加賀！」

口を塞がれた。

あれ？佐藤さん？

「ふぐつふあつぐつ？」

何事ですか？

って言いたかった。

佐藤さんは一息吐くにとつと笑った。この人が笑うと周りが明るくなるから好きだ。

ここは仮眠室だ。

畑さんに佐藤さんが笑っている。

やっと佐藤さんは手を放してくれた。

「私は…確か天国に…」

「ナースがご奉仕する天国か。由宇麻君を庇って9階から転落したんだよ」

9階って…普通は即死では…。

「やっぱり、ここは天国なんですか。そして、天国でも医者のお仕事をしろと」

この生前と全く同じ造りの病院で死んでも仕事を続けると。地獄かもしれない。

でも、医者のお仕事には誇りを持っている。

「畑さんに佐藤さんに似た人がいるこの世界で求める人を助けなさいと…由宇麻君に似た子もいるのかな…会いに行かなきゃ」

「重症だな」

佐藤さんらしき人は安堵の溜め息を吐いた。

「加賀先生、貴方は7階のベランダに巧く落ちたんですよ」

私の脈を測りながら微笑んだ畑さんらしき人。

この人の言うことが本当ならば、それじゃあ……

「現世ですか？生きてるんですか？ここは私のいた世界ですか？」

貴女は畑さん？

貴方は佐藤さん？

「そう言うことだ。お前は頭打って軽い脳震盪起こして気絶してたんだ」

生きているわけだ。

「今は？」

「現在、お前と由宇麻君が落ちた日の朝の5時半。もうすぐ日の出だ」

ほれつと佐藤さんは程好い暖かさの缶珈琲を手のひらに乗せてくれた。お礼を言つてあれからの話に耳を傾ける。

「7階の共同エリアのベランダに落ちたお前達は、偶々、病室を無断で脱け出して自販機に甘いもん買いに行っていた患者さんに発見された。俺と七海ちゃんななみで駆け付けてみれば、由宇麻君を抱えてお前が気絶してたわけだ」

ここからが大変だったぜ。

そう言う佐藤さんは何だか楽しそうだ。

「お前達に呼び掛けてたらさ、由宇麻君が起きたんだ。そして、動かないお前を見て俺達にすがり付いたんだ。助けて、助けてって。

気絶してるだけだ大丈夫。でも一応検査しなきゃなって、お前と由宇麻君を離そうとしたら矢駄の一点張り。あの言葉、お前に聞かせてやりたかったぜ」

「ええ。『ぼくのこの身体全てをあげるから加賀先生を助けて』ですって。あの子が必死に頼んできたの」

畑さんは正常ね。と、また脈を測つて言う。

私は畑さんが言った由宇麻君の言葉を繰り返したていたらいつの間

にか笑みを溢していた。

私はまた一步、由宇麻君に近付けたようだ。

「大丈夫って言っても離れないからさ、『加賀を助けるのに由宇麻君の身体を使うには、一度検査しなきゃいけないんだ。だから付いて来い』そう言ったら首を縦にすっぱー振って…検査はスムーズに進んだ。お前の存在は凄いな」

佐藤さんは子供はちよいなと、一度由宇麻君から逃げた身でありながら自信満々に言い、畑さんに呆れられていた。

「あ…それで由宇麻君は…」

「何ともなかったぞ」

コクリと喉を鳴らして珈琲を飲み干し、缶をリサイクルボックスに投げ入れると診てくる。と、佐藤さん意気揚々と出ていった。

畑さんはそれじゃあ。と立ち上がる。

「後でまた。暫くしたら検査しますからね」

「はい」

そして、

「加賀先生」

「はい？」

「由宇麻君、そこにいますよ。気付いてました？」

……………。

布団を持ち上げると、少年が腰にへばりついていた。

「…由宇麻君」

何だか温かいと思っていたのは由宇麻君だった。彼は安らかな寝息を発っている。

「院長命令です。今日から加賀先生は由宇麻君の担当医です。気にかけてやってください」

「はい」

ゆっくり頷いた。

「由宇麻君…約束したからね」
加賀は由宇麻の頬を撫でた。

麦畑の少年（9）

あの時もあの時もあの時も、俺は賣方に助けられた。
ありがとう。

「ゆっくり、ゆっくり」

「……うん…」

ばふっ。

由宇麻は束ねた髪を揺らして加賀^{かが}の腕に飛び込んだ。桜が太陽光を反射して輝く。

「頑張ったね」

「うん」

加賀は汗の浮き出る額をタオルで拭くと、チヨコの包みを手のひらに乗せた。

「疲れただろう？ いるかい？」

包みを取り、摘まんだチヨコ。

由宇麻はパクツとそれを加賀の指から啄み取った。

「手を使って取るの。口で取らない。いい？」

「うん」

そう言いながら加賀の指に付いたチヨコを嘗めとる。ふと…

「由宇麻君、トイレは？」

何だか湿ってる。

「ふえ？」

わけ分かんない。そんな顔だ。

「トイレ行きたくなったら言いなさいって言っただろう？」

加賀は由宇麻の濡れた衣服を脱がして新しいのを着せると、新しく加賀が買った芝桜に目が釘付けの彼の額を軽くこつ突いた。由宇麻は首を傾げて如雨露を掴んで鼻歌混じりで芝桜に水をあげる。

あの事件以来、由宇麻は加賀にへばりついていた。

他の患者の病室に行く時も加賀の後ろに隠れながら付いて行き、患者に加賀の娘かどうか訊かれれば、はにかんで笑った。そんな彼は1年以上の自由のきかない生活の中で筋肉は落ち、彼はオムツの使用を強制されていたためトイレもできなくなっていた。

現在、加賀は少しでも由宇麻に普通に生活できるようにしてあげようと努力している。

先ず、加賀は由宇麻と自傷行為も自殺行為もしないと約束して彼を枷から外した。ただの口約束で絶対ではないが、加賀の強い意思と由宇麻自ら院長に頭を下げたことで許可が出た。

院長自身、由宇麻を縛り付けるのは反対だった。しかし、命より尊いものはない。その命を無下に扱うなら自傷、自殺が由宇麻の意思でも見逃せないと縛り付けていた。

次に加賀は由宇麻のオムツを取って辛抱強くトイレを教えていた。

「トイレは近くない？」

「うん」

咲いた芝桜を愛しそうに撫でる由宇麻は首を縦に振った。開けた風に揺られる桜は由宇麻の愛情と天の恵みに笑顔を見せる。

由宇麻の髪を飾る桜もまた…

「由宇麻君、髪切ろうか？」

「髪？別に好きにしていいいよ」

興味なし。

反応は薄い。

栄養の行き届いていない由宇麻の髪は遠目には麦畑色で美しいが荒

れている。

由宇麻はベッドに広がった髪を一房摘まむと“はい”と加賀に向けた。

「切っていいのかい？髪飾り付けられなくなるよ？」

「それは…矢駄…でも…こんなに長くてもすぐ絡まるし…」

「じゃあ…これくらいは？」

肩より少し上を手で示す。

「うーん。ここでいいや」

それより少し上を由宇麻は手で示した。

「いいのかい？」

「娘さん？って訊かれるから」

息子がいい。由宇麻は切つてと加賀の髪を軽く引っ張った。

「どう？」

「うん……っ……」

「どうしたの！？」

鏡を眺めていた由宇麻は微かに顔を歪めた。加賀は何かしてしまっただかと思つて敏感に反応する。

「なんでも…ない」

開いた唇から漏れる呼吸音。

由宇麻のリクエストに応えて切り終えた後、軽く髪を洗つてやろうと考えていた加賀だが、変更して由宇麻を枕にタオルを敷いたベッドに寝かせた。

「深呼吸だよ」

加賀は優しく由宇麻の胸辺りを撫でる。
早い。

内心焦りで一杯だが由宇麻を焦らせないためにもゆっくりとした呼吸を必死に促す。

「すーはーだよ」

すう…はあ…すう…はあ…。

やがて遅くなる心音。

「どうしたの？髪型に何かあれば…切るならいけるけど…」
生やすのはちょっとだけど。

加賀の問いに由宇麻は首振ると、短くなった髪を摘まんで笑った。

「ありがと。ちょっとだけ…鏡見てたら…親子に見えたから…」

「……………」

「ごめん！あくまでぼくが見えただけで…そんなつもりじゃなくて
—」

「ありがとでは私の台詞だよ」

こんな私を一瞬でも人の親と見てくれたんだから。

そんな言葉を噛み締めて由宇麻の頭を撫でた加賀は立ち上がり、部屋を出ようとしてふらりとドアに手を突いた。

何だ？

「加賀先生？」

熱い。

加賀は自らを客観的に診る。

この喉にくる熱いもの。

頭は熱いのに寒気を感じる。

熱だ。

患者に移したらまずい…部屋に戻らなきゃ。

「どうしたの？」

由宇麻の声。

「午後は佐藤先生さとうが行くから」

「加賀先生？」

「トイレ行きたくなったら言っただよ？」

「……………うん」

加賀は震える身体を押さえ付けて部屋へと歩いて行った。

寂しそつな由宇麻を置いて。

麦畑の少年（10）

「どうつてーどうつてよー！…竜士！…！…！」
りゅうし

静歌…
しずか

ごめん。

歌奈…
うたな

ごめん。

この—

人殺し！…！…！…！

「加賀龍士…龍士！」

名前を呼ぶのは今ではもう先輩しかない。

「…佐藤さん…急患ですか？」

加賀は重い体を起こすとぼやける佐藤の顔を見上げた。

「由宇麻！由宇麻君だよ！…」
ゆづま

「由宇麻、帰るの！」

由宇麻君のお母さんが突然由宇麻君を退院させるって。

「いや！帰らない！」

嫌がる由宇麻君を無理矢理…。

「司野^{しの}さん、由宇麻君の気持ちも考えてー」

「煩いわ！私は由宇麻の母親よ！？他人の家族に口出さないでくれるかしら？」

保護者の決定に俺達は文句が言えない。

だけど…

「ぼくは帰らない！！」

「誰があんたをここに入院させてると思ってるの！」

由宇麻君を自宅になんて危険すぎるだろ？

「加賀先生のいるここに居たいんだ！！」

お前が傍にいないと由宇麻君が何を仕出かすか分からない。

「由宇麻！！！！！！」

「司野さん！」

加賀が由宇麻の病室に駆け込んだ時だった。加賀の目の前で由宇麻は点滴ごと床に崩れる。

ガシャン！

「由宇麻君！！」

焔^{はた}が血相変えて由宇麻を起こした。ふらつく脚で由宇麻はどうにか立つと加賀の姿を見付けてその胸に飛び込む。

「由宇麻君…」

「ふえっ…ぐすっ…」

頬に生々しい平手打ちの痕を遺した由宇麻は泣くのを堪えて堅く唇を結んでいた。

「加賀先生、その子に言ってやって下さい！由宇麻は連れて帰ります！！」

びくっ。

震えてる…

由宇麻の母親、美恵子みえこは由宇麻を後ろから抱き上げる。

由宇麻の歪んだ顔が加賀より高くなり、

「…せん…せつ…」

絶望した顔。

畑は耐えられなくて目を逸らした。

「帰るの。由宇麻はお母さんと新しいお父さんと暮らすのよ」
両親と暮らすのは由宇麻の望みだ。

しかし、新しいお父さんは知らない。

「ふえっ…やあ…やあ…」

溢れるのは涙。

由宇麻の目尻から零れ、顎を伝って落ちる。

「う…ああ…！！！！うああ…！！！！」

そして、彼は号泣した。

それは階下にまでも聞こえるのではと思うほど。

「由宇麻！静かにしなさい！！」

恥を掻いたと言うように頬を赤くした美恵子は由宇麻の口を塞いだ。

「うぐ…っ」

「司野さん！」

加賀は美恵子の手を取る。美恵子はマスカラの塗られた睫毛をしばたかせると加賀の手を振り払った。

「何するんですか！」

神経質なキンキン声。

加賀は言い返す。

「泣いている人の口を塞いで無理に止めるのは心臓に悪いんです！
由宇麻君の心臓のことを考えてください！」
ぐらっ。

加賀に凭れる由宇麻。

「由宇麻君！！」

「苦しっ…い…」

腕から伝わる異常な震え。

「畑さん！」

「はい！！」

ベッドの毛布を畑は手早く取り、加賀は由宇麻を横たえさせシャツをはだけた。開いた口から息が荒々しく出入りする。

「由宇麻っ」

「司野さんを外に」

青くなりわなわなと震える美恵子を佐藤がそつと外に連れ出した。

「由宇麻君、落ち着いて」

汗でぐっしりと濡れた体を拭きながら加賀は必死に呼ぶ。

生きて、由宇麻君！

意識の取り戻した由宇麻を看ずに美恵子は帰った。

「由宇麻君、林檎食べる？」

兎に似せた林檎。

「……………いない」

姫野の桜の髪飾りを胸に抱いた由宇麻は加賀に背を向けて芝桜を見詰める。

「ここところ全然ご飯食べてないでしょ？昨夜なんか味噌汁しか……………」

「お腹空いてない」

「由宇麻君のはたとえお腹が空いてなくても、その日、その日に食べ切れる量のご飯なんだ」

「……………」

何も言わない。

「由宇麻君！おねがー」

「煩い！！出てってよ！！！！！！」

由宇麻の悲鳴にも似た声。

加賀はぐつと押し留まった。

「ほつといて！！！！！！」

パンツと出会った頃と同じ様に踵でベッドを叩いた由宇麻は叫ぶ。
暫くして、折り畳み式の果物ナイフをポケットに仕舞った加賀は頭を抱えて踞る由宇麻をじっと見詰めて席を立った。

「林檎、置いとくね。ナースコール押してくれたら、いつでも僕が来るから」

乱れた布団をそつと掛け直して病室を出る。

由宇麻の押し殺したぐずりが出る瞬間に聞こえた気がした。

「龍士、落ち込むなっ」

佐藤は診察を終えて休憩室に戻ると、俯く加賀の近くにブラックコーヒーを置いた。

「落ち込んでません。ただ……」

加賀はコーヒーの紙コップを両手で包み込んで否定する。

「ただ、なんだ？」

「私……バツイチなんですよ」

「マジか」

佐藤は遠い目をした。

俺はバツイチどころじゃないけどな。

冷える空気を予想して、彼は最後に少し暖めた。

「私、娘がいたんです」

名前は加賀歌奈。

私と静歌の最初で最後の愛娘。

「成功率は30%。これを言い訳にはしたくないけど、手術の成功率は低かった。妻は私に…娘にはもう手術しかない。貴方がいるならきつと大丈夫ね。そう言われました」

とても残酷な言葉。

「……………」

その先が分かる気がして佐藤が息を呑む。

「失敗です。娘は7歳でこの世を去りました」

僅か7歳。

加賀は淡々と話し続けた。

「テレビを見ている時、風呂に入っている時、食事している時、ふと気を抜くと妻の声が鮮明に甦るんです。どうして、どうしてよ龍士。この人殺し。と…」

静歌は私の顔を見ると泣き腫らした顔で私の肩を掴み、強く揺さぶった。他の先生や看護師がいる中で彼女は人殺しと叫び、私を張り倒して実家に帰った。

「数日後、酒に溺れていた私のもとに離婚届と1枚の封書が届いたんです。離婚届には私と妻の名前…封書には……………」

罵倒。

離婚届の簡単な説明と残りは罵倒だけだった。

「あの人達の顔…気遣うような仕草が逆に厭で…いつそ、誰かに責め立てられたかった。じゃないと…妻の言葉が…妻の目が…私を蝕む……………」

鎮静剤の瓶をポケットから取り出して中のものを加賀は口に入れた。

「こうしないと駄目なんです。だから…私は…姐さんの親友である院長の佐木^{さき}さんの計らいで姐さんの勤めていた周防に転勤しました。私は逃げたんです…」

彼処には居たくないから。

「違つのに…私は由宇麻君に私の過去を重ねたんです」

佐藤はただただ頷いた。

「どうやら私は馴れ馴れし過ぎたのかもしれませんが。自分がされて嫌なことは他の人にはしてはいけない。私は由宇麻君に自分がされて嫌なことをしてしまったようです」

「龍士は馴れ馴れし過ぎてない。由宇麻君はまだ幼いんだ。整理には時間が掛かる。たっぷり時間を与えてやろう。な？」

佐藤の肩を叩く手を加賀はい。と頷いて受け入れた。

麦畑の少年（１１）

ぐらぐらする。

「おい、龍士！」

佐藤は大きく傾いた加賀を支えた。

「すみません」

「すみませんじゃない。熱あるじゃないか！」

「ええまあ。だけど、由宇麻君がいつ呼ぶか分からないので」

だから、熱があっても加賀はコールを報せるボードの前に座る。

「俺がここにいるから、お前はそこのソファで休んでろ」

コーヒー片手に佐藤は加賀を脇から支え上げてソファに寝かせた。

「すみません」

「ふらふらだと、いざつて時に役にたたないぞ」

加賀の前髪を指に絡めた佐藤は労う笑みを見せ、白衣を翻した。

900号室を示すランプは赤々と光り、ブザーがけたたましく鳴り響いた。

「龍士！」

佐藤は加賀を揺する。

加賀は唸ると、佐藤の必死さに体を勢い良く起こした。

「どうしました!？」

「由宇麻君のとこだ。どうやらコードが切れたらしい！」

「切れた!？」

それは、ベッドから出たことを意味する。

普通なら夢遊病でもないかぎり、点滴で眠らされている由宇麻のコードが切れることはない。

「もしかして……」

佐藤は急いで内線で受付に繋ぐ。

「七海ちゃん？誰か由宇麻君のどこに行ったか？」

『えっと…由宇麻君のお母様が由宇麻君の病室に忘れ物をしたと…』

案の定。

「何！？それで今、彼女は何処にいる？」

『先程、大きなスーツケースを持ってお帰りに……どうかしめたか？』

「龍士っ！！」

佐藤が振り返った時には既に加賀の姿はなかった。

狭い。

暗い。

寒い。

痛い。

悲しい。

「おか…さん…」

強い衝撃に、由宇麻は目が覚めた。ガチャガチャという音の後に、眩し過ぎる光が入ってくる。

「うつ」

反射で目を閉じる。

「こっちょ」

由宇麻は腕を引かれたので目を瞑ったまま、よろよろと前に進んだ。徐々に出てくる視界。

「ここは…」

「お衣装替えよ」

月明かりだけの薄暗い部屋で病人服を脱がされる。

そして、可愛い熊さんのパジャマを彼女はタンスから出した。

ズボンを履かされる時、しゃがんだ母親の頭が顎下にきた。由宇麻はその甘栗色の髪を弄ると、両腕で抱き締めようとして、触れられずに彼女は立ち上がる。

「あ……」

「どうしたの？」

「……うん。何でもないよ」

「そう。いい子にするのよ、由宇麻」

……由宇麻……

由宇麻は名前を呼ばれて満面の笑みを浮かべた。

「うん、お母さん」

パシッ……

指輪の填まった手が、由宇麻の頬を打った。

「おか……さん……」

勢いを殺せずに尻餅を突いた彼は、脱がされた服を握り締めて母親を見上げる。美恵子^{みえこ}は苦い顔をし、ずりつと後退りすると、由宇麻を抱き締めた。

「由宇麻は私の姉の子。いい？ 姉は貴方を私に押し付けたの。だから、貴方は私を叔母さんって呼ぶの。いい？」

「お母さんは……お母さん」

「私は貴方のお母さんじゃないの。叔母さんよ」

叔母さん。と彼女は繰り返す。

ずっと、ずっと。

由宇麻がお母さんと呼ぶのをやめるまでずっと耳許に囁く。

「……おば……さん」

「由宇麻」

美恵子は由宇麻を強く抱き締めた。

麦畑の少年（12）

「ぼくの世界はスッゴく小さいんだ」

「小さい時からずっとここだからね」

「うん。この子と加賀先生かががいるこの部屋がぼくの世界」

瑞々しい桃色の花弁を風に揺らす芝桜を見詰めた由宇麻ゆうまは腕を広げた。加賀は見せた笑顔に微笑する。

「加賀先生がお父さんだったらいいのにな」

「由宇麻君……」

「それで、お母さんは姫野さんひめの」

そう笑い続ける彼は小さくて幼くて、加賀はそっと、頭を撫でていた。

「ありがとう、由宇麻君」

「こちらこそありがとう、加賀先生」

彼は眠りにつく。

「おじ……おじさん」

「んあ？」

ああ、厭だ。と思った。

煙草を吹かして、だらしなくパンツ一丁でソファーに座り、テレビを見ながら酒とツマミを手に口をクチャクチャと鳴らしている。

ぼくとお母さんとお父さんのお家に異物が一つ。

「裕次ゆうじ、姉さんの子の由宇麻よ」

叔母さんはぼくの背中を押した。ぼくは近寄りたくないのに押すから近づいてしまう。

「ふーん。由宇麻君、おじさんってやめてくれない？それでも美恵みえ子こより年下だし」

おじさんはおじさんで図々しい。ここはおじさんの家じゃない。ぼくはおじさんが厭だ。

「由宇麻、裕次お兄さんね」

叔母さんの肩を掴む指が痛く、ぼくは小さな声で仕方なく「…裕次お兄さん」と言った。

「今日はお休みだし、家族で何処かに遊びに行きましょう?」

次の日の朝、ご飯を食べている時に叔母さんはそう切り出した。

「どこか?」

あ、しまった。

叔母さんはぼくを睨む。

ぼくは黙ってなきゃいけないだった。

「由宇麻も楽しめるところ」

叔母さんの笑顔はどこか作っているように見えた。

「裕次、何処がいいと思う?」

「俺はパス。二人で行ってこい。昨日の酒で頭いてえ」

「そ…そうね」

叔母さんは悲しそう。

ねえ、この人の何処がいいの?

「でも、由宇麻の為に」

ぼくの為?

おじさんはぼくを睨んだ。それは叔母さんのよりすごく怖い。

ぼくは縮こまる。

それに機嫌を良くしたのか、おじさんは臭い息を吐いて立ち上がった。

「しゃーねーな。由宇麻君の為に遊園地でも行くか」

そして、おじさんはぼくの肩を痛いくらい強く叩いて盛大に笑う。

「な、由宇麻くん」

「…うん」

その時のぼくの顔を覗き込んでくるおじさんの顔は怖かった。

「叔母さん……」

「なあに？」

「トイレ…行きたい」

叔母さんに露骨に嫌な顔をされた。だけど、加賀先生が行きたくなったら言ってくれと言っていたからであって、わざとでも嫌がらせでもないのだ。

「お、由宇麻君がトイレか？裕次お兄さんと連れションするか」

そこにやってきたおじさんがぼくを抱き抱えた。ぼくはおじさんの息が臭いから顔を逸らす。

「ありがとう、裕次」

そう言った叔母さんは笑顔を見せた。ぼくにはそれが綺麗な笑顔に見えた気がした。

「おうよ」

遊園地は初めてだと思う。それよりも初めてじゃないのを思い出す方が大変だと思う。

確か、一度だけ家族で動物園に行った気がする。その他には…思いあたらない。

動物園でいつの間にか倒れてて病室に戻っていたことがあって、それからのたまの休日はいつも家で寝てて、ちよつと美味しいもの食べて、いつの間にか家に帰ることもなくなった。その頃の辺りからお父さんとお母さんは仲が悪くなっていった。

病室の前で怒鳴られたら流石のぼくも分かってくる。

ぼくのせい。

ぼくが生きているせい。

そう思っていると段々と心が変わっていく気がした。

テレビの何気ない会話から嫌な言葉だけ耳に響くようになって、目

の前は暗くなる。

深い暗闇の中で誰かを呪う。

ぼくはぼくを呪う。

そして、沢山の傷を体に刻み付けた。

お母さんが怒った。

右足を切る。

お父さんが怒った。

左足を切る。

お母さんが焦った。

右腕を切る。

お父さんが焦った。

左腕を切る。

お母さんとお父さんがぼくが要らないと言った。

窓枠に足を掛ける。

そこに姫野さんは現れた。

ぼくを抱き締めて要るって言った。沢山沢山泣いて傍にいるよって言った。

どうして泣いてるのって訊いたら、泣かない君の変わりに泣いてるのって言った。

彼女はぼくの光だった……。

「なあ、由宇麻」

おじさんがぼくを呼び捨てにする。ぼくは反射的に叔母さんの姿を探して、掛かってきた電話に「お父さんっ……」と焦った顔でぼく達から離れて行ったことを思い出した。現在、叔母さんは遠くの方で携帯に向かって何だか言い争っているように見えた。

「何？おじさん」

「お、生意気な奴め。裕次お兄さんだっつーの」

しかし、ぼくのことを呼び捨てにしたし、ぼくにはおじさんは“お

兄さん”に見えない。茶髪でイヤリングしてネックレスして見た目はヤンキーだけど、中からにじみ出ている気と言うか、雰囲気と言うか、なんかじじくさい。

「ま、いつか」

ほら、こういうところがじじくさい。

「お前さ、美恵子の餓鬼だろ」

つまりは？

「ぼくが叔母さんの子供だと？」

「だろ？」

何を言っているのだろうか。

ぼくが叔母さんの子なわけがないではないか。じゃなきゃ、叔母さんを“叔母さん”とは呼ぶはずではないか。もし、ぼくが叔母さんの子なら、ぼくは叔母さんを“お母さん”と呼ぶはずではないか。

おじさんの言っていることを整理しようと黙って考えていたら、おじさんは勝手にぼくが叔母さんの子だと思って話し始めた。

「あーゆー女、よくいるんだよな。大体、親が離婚すると母親が子を引き取る。夫の仕送りを条件にな」
そうなんだ。

「そこに、俺はつけこむ」

つけこむ？

「おじさんは悪人？」

「まあな」

おじさんは肯定した。

ぼくの頭の中でおじさんに悪い人のレッテルが貼られた。だけど、それ以上はなくて、ぼくは叔母さんが悪い人に捕まっていることになんとも思わなかった。

「俺はな、ちーつと愛想振り撒いてサービスして、金を貰う。美恵子はいつか俺が美恵子を好きになってくれるって思ってた、俺にせつせと貢いでいるのさ」

つまりは？

「叔母さんからむしれるだけむしり取ろうって考えてるわけ？」

「由宇麻は頭いいなあ」

おじさんは肯定した。

「実の息子なのに“叔母さん”なんて呼ばせるとは。お前、愛されてねえなあ」

愛されるとはなんなのだろうか。

敢えて“愛”というものを考えるなら、ぼくは姫野さんを愛していた。

では愛されるとは？

誰かがぼくを愛してくれるということだろうか。

おじさんはぼくは叔母さんに愛されていないと言った。つまり、おじさんは叔母さんがぼくを愛しているか考えたはずだ。

ぼくは叔母さんが愛してくれるなんて考えたことすらなかった。

「おじさん、優しいんですね」

「それが俺の売りだからな。俺、もう行くわ」

「行く？ああ、叔母さんを捨てるんだ」

「正解」

ぼくは離れていくおじさんの背中を見詰めていたら、ふと思った。叔母さんも愛されていないね。

ただそれだけ思った。

麦畑の少年（13）

「裕次は？」

「叔母さんを捨てたよ」

「何を言っているの？」

「おじさんは悪人で、叔母さんを騙してたんだよ」

家族連れや恋人同士がすれ違う中で、由宇麻は淡々と事実を告げる。

「叔母さんは愛されていなかったんだ。愛されることもないんだ」

美恵子みえこは由宇麻のその顔を見てへなへなとその場にへたった。

「どーして…」

「おじさん、言ってたよ。おじさんは離婚した女の人につけこんで愛想振り撒いて、サービスして騙すんだって」

「裕次…愛してるって…」

「おじさんの売りは優しさだって」

そこが限界だったらしい。

美恵子はヒステリーに喚き泣き出した。周囲の人間が遠巻きに見る。

「なんで…なんで！」

「お気の毒様です。でも、愛想もサービスしてもらって良かった

――」

「黙って!!」

怒鳴られて由宇麻は後退りした。

美恵子はなおも泣き叫ぶ。そして、

「あんたのせいよ！」

彼女は由宇麻を睨み付けた。由宇麻はぴくりと背筋を震わせると、美恵子を見詰める。

「何よ！何よ、その目！！あんたが、あんたがいるから！」

公衆の面前で叫ばれる罵倒。周囲は同情から迷惑へと変わり、由宇麻を気の毒そうに見た。

幼い彼の胸元を押さえる手は震え、彼はその場に立ち尽くす。

「なんで生まれてきたのよ！なんで死ななかつたのよ！どうして…
どうして貴方なの…どうして私の子は貴方なの…」

生を否定された由宇麻が踞った。

ずつと握り締めていたらしい遊園地の入園チケットが彼の手から地に落ち、俯く美恵子の涙に濡れる。それを濡れた瞳で見た彼女は由宇麻の前髪を掴んだ。

「どうして！答えなさいよ！！」

胸を激しく上下させる彼は薄目を開けて、喘ぎながら答える。

「知らないよ…ぼく…は…アナタの子じゃ…ないから」

徐々に見開かれる美恵子の瞳。枯草色のその瞳は由宇麻の枯草色の髪を見詰め、平手が高く上がった。

そして、彼女の手のひらは由宇麻の白い頬を叩いた。

パシッ…。

溜まっていた雫と供に彼の頬に赤い跡を付けた美恵子は立ち上がる。

「私は…母親…失格ね…」

彼女はフラリと上半身を揺らすとただ前を見て歩き出した。

茫然とする由宇麻を置いて…。

「由宇麻君！！！！」

加賀^{かが}は遊園地内の医務室のベッドに横たわる彼を抱き締めた。

「せん…せ？」

「ごめん…ごめんね、由宇麻君」

ぽーっとした顔の由宇麻は加賀の肩に顎を乗せてじっとする。そして、備え付けの縦長の大鏡を見詰めた彼は自らの頬に赤い跡を見付けて首を傾げた。

「加賀先生…」

「なんだい？」

「ぼくは…哀しい人を見たんだ…とても哀しい人を…ぼくは…その人が笑うところを見たいと思ったんだ…もう一度…見てみたいと思ったんだ…」

少年はそう呟き、頬の跡を撫でる手に雫が流れた。

…――麦畑の少年は泣いていた――…

麦畑の少年（14）

加賀^{かが}は由宇麻^{ゆうま}を捜そうと病院を飛び出したのはいいが、美恵子^{みえこ}に連れられていたるだろう彼の居場所はさっぱりで、途中から佐藤^{さとう}に連れ戻された。次の日の朝、美恵子の離婚を聞き付け、今後のことを訊きに東京にやって来ていた美恵子の祖父、司野寛二^{しのかんじ}に連絡が取れた加賀は美恵子の家を知り、そこへ向かった。しかし、美恵子の家は留守で、寛二が美恵子に連絡をして遊園地にいることが分かった。急いでそっちに行ったが、遊園地の救護所には由宇麻しか居らず、遊園地内で倒れたらしい彼は命に別状はないが、微熱があつた。美恵子のことは寛二がどうにかすると言うことで、一先ず病院へと、加賀の乗ってきていた車で行くことになった。

「全部、私のせいなんですわ」

司野寛二は膝で眠る孫の頭をしわくちやの骨ばった手で撫でて言った。赤信号で車を止めた加賀は灰色の空を見上げる。

「何故ですか？あなたがいたから由宇麻君を見付けられました。あなたのせいでは」

「先生、本当は…由宇麻、殺す予定だったんですよ」

「！？」

そのたった一言で踏みそうになったアクセルを慌てて留め、加賀は背筋をぶるりと震わせた。そして、心を必死に落ち着かせると次の言葉を構えて待つ。

「いんや…生まれさせるつもりはなかった…美恵子の腹ん中で殺そうとしてたんです」

由宇麻は生まれた時から病院で暮らしてきた。加賀はそれしか知らない。美恵子の出産の状況は知らないのだ。

「ただの推測ですが、由宇麻君のお母様は随分とお若い。その…」
「そうですね。美恵子は誰だか知らん子をその身に宿したんです」
つまり、由宇麻の父親は不明。

加賀が初めて周防病院に行った時に美恵子と言いついていたのは本当の父親ではないと言いつことになる。

「それじゃあ由宇麻君のお父さんは…」

「僕は美恵子に迫ったんです。お腹の子を殺すか、家を出ていくか。美恵子は我が子を取り、家を出ていきました。源さんは美恵子が東京に宛もなく出た時に助けてくれたそうなんです。源さん^{はじめ}は美恵子のお腹の子を知りながら、美恵子の姓を名乗り、父親として結婚し、美恵子を支えてくれた」

加賀は口を閉じる。そして、何も知らずに心の中で彼らを罵った自分を憎んだ。

「先生、言い訳にしか聞こえんかもしれないですけど、僕は美恵子を愛してたんです。だから、道德などと口うるさくしながら僕は美恵子にチャンスを与えたつもりでした。今回は全てなかったことにして、またやり直すんやって」

父親の分からない子が腹の中にいると言う事実を消して、由宇麻の存在をなかったことにして、また、ただの親子に戻ろうと…。

「美恵子は言っただけです。ここにいるのは私の子。と…。先生、道德って何なんでしょうね。娘の幸せを願って娘の犯した間違いをなかったことにして…僕は親なんでしょうか。美恵子は家を出るとき、最後にこう叫んだんです…人殺し…。僕は親じゃなくて人殺しなのかもしれないんですわ」

加賀は反射的にズボンのポケットに片手をつっ込んでいた。

指先に触れるのは鎮静剤の小瓶。しかし、眠くなることに運転中だということはどうにか抑えた。

内心、薬が欲しい。

たったの一言なのだ。

たったの“人殺し”という言葉が重い。

加賀の異常に気付いた寛二が大丈夫ですか。と訊いてくる。

「大丈夫です」

加賀は苦笑いで返した。

やがて、薬に手を出さずに病院の駐車場に着く。

育ち盛りの由宇麻を抱っこした加賀に寛二は頭を下げた。

「今更かもしれないですけど、僕、もう美恵子からも由宇麻からも逃げません。最初から二人を支えていれば良かった。それが“親”だった。今からでもいいなら、僕は少しでもいいから罪滅ぼしをしたいんです」

「司野さん……」

「先生、美恵子も源も若かった。長い目で見れば何てなかった。ただ、がむしゃらに生きていた。美恵子も源も由宇麻を愛していた。それだけは分かってください」

加賀は深く頷くと、美恵子を捜しますと言う寛二に車で送ると言い、由宇麻の傍に居てやってくださいと断られたのでたまたたと歩く彼の後ろ姿を見詰めていた。
灰色の空が何だか切ない。

「……せんせ？」

「起きたのかい？」

加賀は少し赤い頬の少年を見下ろした。由宇麻は加賀の抱っこされていると分かれると笑顔で首に抱き付く。

「うん」

そんな彼の頭を片手で黙って撫でると、加賀は一気に冷え込んだ風を頬で感じながら歩みを進めた。

「加賀先生」

「ん？」

「ぼく、今さっき思い出したんだ」

「何を？」

「雪の日にはお父さんとお母さんと動物園に行ったんだ。お母さんはおつきくて凶暴な動物見ると怖いって言いながら楽しんで、途中で迷子の女の子に出会ったんだ。ぼく達は女の子がお父さんお母さんを見つけるお手伝いをしてあげた」

由宇麻が両親のことを加賀に話すのは珍しい。そのことを察した加賀は遊園地で母親と何かあったのかと思った。

「ぼく達は放送をいれてもらいに行ったんだ。ぼくは女の子の手をしつかり握って歩いていた。それでね、放送がすごい大きな音で流れたのにどんなに待っても誰も来なくて…女の子、泣き出しちゃったんだ」

「それでどうしたの？」

「そしたら、お父さんが捜してくるって。だから、ぼくもって。お母さんが女の子と一緒に待ってて、僕達はあゆちゃんのお父さん、お母さんはどこですかーって捜したんだ」

降りたそうに体を揺らした由宇麻を降ろしてやるとふらつく足を心配して加賀は手を繋ぐ。

「沢山走って、建物の中で見付けたんだ。人が多すぎて放送が聞こえてなかったみたい。あゆちゃんのお父さん、お母さんもあゆちゃんを捜してて、ぼくらは急いであゆちゃんのとこに案内したんだ」

由宇麻の体が揺らいだ。
否、膝から崩れ落ちる。その勢いに加賀と手が離れ、由宇麻は地面に倒れた。

「由宇麻君！？」

「その時のあゆちゃんの顔も…お父さん…お母さんの顔も…綺麗で…綺麗で…」

倒れた彼を抱き上げようとして手を払われる。由宇麻は地面に寝、空に手を伸ばした。

「加賀先生…加賀先生…」

「どこか痛いのかい？」

「怖いよ…もう思い出せないんだ…お父さん…お母さん…」

「思い出せない！？由宇麻君！？」

由宇麻の体は小刻みに震え、指先が宙を掴む。

「分からないよ。ぼくは…ぼくは…」

「由宇麻君…忘れたの？由宇麻君？」

「先生…ぼく…ぼく………」

佐藤に携帯電話を掛けようとした加賀は混乱する由宇麻の声が消えたのに気付いて由宇麻を見下ろした。

そこには由宇麻がいた。静かな穏やかな表情で。

「由宇麻君？」

「雪だ…」

由宇麻の枯草色の瞳は空を見詰め、加賀も空を見上げる。

灰色の空に白い雪。

それらは由宇麻の小さな手のひらに落ちていく。

「由宇麻君、落ち着いた？」

「姫野さん、言ってた。雪は天から降る桜だつて。その時、ぼくら

はお願い事をしたんだ。姫野さん言ってたよ」

「？」

「加賀先生…ううん。龍ちゃん」

加賀は姉しか呼ばなかったそのあだ名に反応した。

そして、ここからは姐さんの言葉だと悟る。

「『龍ちゃんが泣けますように。龍ちゃんが沢山泣けますように』」

「ど…して…」

「『龍ちゃんはいつも背負ってばかりで泣けないから、龍ちゃんが

沢山泣けますように』」加賀龍士先生、姫野さんのお願い事叶ったね」

「みたいだ」

涙が止まらない。

電話中の携帯が落ち、佐藤の名前を呼ぶ声を聞きながら由宇麻は加賀の手を握っていた。加賀の涙が由宇麻の頬に落ちるのを構わずに

由宇麻は加賀の手を握って空を見詰める。
雪を見詰める。

「由宇麻君の記憶がなくなった!？」

いつの間にか熱で倒れていたらしい加賀は勢いよく体を起こした。

「親に関することがな。今覚えてる、てか、感じているのは親に捨てられたことだけ」

佐藤は職員用の仮眠室の扉の前で車椅子に座って加賀に無邪気な笑顔を振り撒いて手を振る由宇麻を見詰める。

「そんな…」

歩くことさえ困難になった彼はそれも苦にしないで「先生!」と笑っていた。

「原因はストレスらしいし、今の由宇麻君にはいいんじゃないか？由宇麻君のお祖父さんがいて、お前がいて。笑ってくれる」

確実に由宇麻の病気は由宇麻の自由を奪っていつている。加賀達医者予想では二十歳まで…か。

少しでも幸せな時間を過ごして欲しい。

「加賀先生ーっ。大丈夫？先生、熱だから近づいちゃいけないって言われているけど熱は下がった？」

「んーっと、ちよつと待ってな。ほら、龍士」

佐藤は加賀の服に遠慮なしに手をつ突っ込むと体温計を引き抜いた。

「ちよっ!？佐藤さん!」

「35.4。平熱低いな。いいぞ、由宇麻君」

佐藤は車椅子の操作にもたもたする由宇麻を抱き上げて加賀の腕に納めた。由宇麻は加賀の顔を見ると女の子のようにはしゃいで加賀の腰に抱き付く。

「由宇麻君は本当に加賀先生が好きだな」

「佐藤先生にはあげない」

「いや、龍士は俺にベタ惚れさ」

「佐藤さん！」

「じゃあ、加賀先生はどっちの方が好き？ぼくだよね！？」

由宇麻は必死だ。

加賀は溜め息を吐くと、当然のように由宇麻の頭を撫でて言った。

「由宇麻君だよ」

「加賀先生さすがだよ！」

「空気読めよ！龍士！」

「空気は十分読んだつもりですが？」

加賀は真面目に返したつもりだったが、

「龍士の阿呆！」

佐藤はツンとして外へ出て行ってしまった。

よく分からなかったが、それでも看病してくれたお礼は言おうと加賀は心に決めて、佐藤の後ろ姿に微笑む。

「加賀先生？」

「ねえ、覚えてる？姐さんのお願い事の話。私が泣けますようにって」

「うん」

「由宇麻君は何を願ったの？」

ただ単に疑問に思っただけで聞いたつもりなだけであった。

由宇麻は真剣な表情で加賀を見ると、頬を赤くしてモジモジとする。子供と言えど、その姿がなんとなくじれったく見えたり。

「由宇麻君のお願いは秘密？」

「あのね……ぼくはね……パパになりたいってお願いしたんだ」
「パパ？」

「ぼく……家族が欲しいんだ」

加賀は無意識に息を止めていたことに気づいた。

「家族？」

「もうやめよ？加賀先生」

首を傾げるその姿が少し…怖かった。

「由宇麻君」

「何？」

「家族、紹介してね」

「うんっ！」

……………

「りゅーしー……！！！」

「はえ？」

「起きろ！」

目を開けると至近距離に佐藤さんの顔があった。

彼は私の顔を覗き込んでいた。

「近いです、佐藤さん」

「この天然たらし魔！」

何なのだろう。起きて早々。

「何のことですか？」

「患者とキスしてんな！」

ああ…。寝る前のことを思い出せば、確かに熱っぽいらしい患者に突然診察途中に告白され、キスしてとせがまれ、キスした…。ような「悪かったですか？あ、熱、移っちゃいますね。ごめんなさい。お願いされたから…。つい」

「つかよ！バカ！」

「バカです。分かりましたから、近いです」

「いいか、俺達付き合ってるよな！」

なんだろう。この人。

「好きですよ？佐藤さん」

「ハテナ入れんな！」

「好きですよ。佐藤さん」

我儘な人だ。

軽く唇を触れてあげると、佐藤さんは俯いてしまう。

「佐藤さん？」

「たらし」

「響さんきょうさん」

「……！龍士のバカ……！！」

真つ赤な可愛い顔で私に触れるだけのキスをした佐藤さんは診察室のドアを勢いよく開けた。

「今日、飲みに行くぞ」

「少しだけなら」

「ああ」

佐藤さんは明るい笑みを見せた。

ああ、私は佐藤さんが大好きだ。

数日前、泷祈君たきいがやってきた。

由宇麻君が洸祈君達の父親になったとか。

「お願い…叶ったね」

嬉しいはずなのにちよつとだけ、複雑だったりする。

由宇麻君のお願い事が叶ったのは嬉しい。しかし、由宇麻君の体が心配だ。

病院に帰ってきてなんて、そう簡単には言えない。

彼の幸せを願う。

それが私の願い事だから。

だけど、怖い。

どんなに彼が幸せでも、病気は治らない。治っていない。

洸祈君の話を聞く限り、昔よりは病気に対して強くなっている。

それもいつまで続くか。

あれから私は年をとった。

これ以上ボケが進行しないか、この年齢にしては早い気がするが一応気にしている。

「由宇麻君…」

君は成長を止めたね。

君はまだ二十歳のままだね。

由宇麻君、君はそのことをどう思っている？

由宇麻君、洸祈君は19歳だ。どう思っている？

由宇麻君、君はもう直ぐ彼に年を越される。どう思っている？

由宇麻君、君は幸せかい？

由宇麻君、私は君の幸せを心から祈るよ。

「姐さん、今年も桜を降らせてください」

ザンコクナトキ

……ごめん……
謝罪を繰り返す

「な……ん……や……これ……」

こんなの……
残酷過ぎるやんけ……

最初にこれを読み切った時、俺は吐いた。体を擦って胃の中のを全て吐き出した。

口の中が酸っぱくって水道水で漱いだ後、ソファアの上に踞った。薄く開けた瞳から見えるのはテーブルに開かれた封筒とその中身の紙。

差出人直筆で書かれたその内容は……

『崇弥^{たかやこうき}洸^{しん}祈^のの出生について』

崇弥^{しん}慎^{しん}から司野^{しの}由^ゆ宇^う麻^まに宛てた遺書だ。

『貴方と言う人間を真っ直ぐ見て、私は貴方にこの手紙を託すことを決めました』
そつ冒頭から始まった遺書。否、手紙。

「崇弥…」

何で崇弥なんや。

何で選ばれたのがよりにもよって崇弥なんや。

由宇麻はいつの間にかある人物に電話していた。

そう、俺の勘が当たっていれば、きつと、この人物は…

『はい、二之宮^{ニノミヤ}です』

「司野由宇麻や、蓮^{れん}君」

二之宮蓮のはずだ。

『あ、童顔君ですか。電話番号教えましたっけ？』

「タウンページから劇場にな」

『おつと。オーナー、口^{くち}軽い』

にー、だあれ？と、遊杏^{ゆうあん}の弾んだ声が電話口から聞こえた。

ん？童顔君だよ。と、二之宮は返す。

どうしたの？と、遊杏が近くで跳び跳ねる気配。

『で？どうしたんですか？』

これを確認すれば真実かどうか判る。

真偽をはつきりさせたい反面、真実だった時、この内容をどう受け止めれば良いのか分からなくて怖い。

「その…蓮君は…」

『はい、僕は？』

訊くんた。

俺は崇弥の父親や！

「蓮君は…崇弥の……兄だったんか？」

『遊杏、僕はこれから大事な話をするからリュウ君の散歩に行つてきてくれないか？』

いいよ。そう言った遊杏は「リュウ君っ」と呼び、犬の吼え声と共に遠ざかった。

『じゃあ、一緒に昔話をしようか？司野由宇麻さん』
二之宮蓮は長い息を吐いた。

ザンコクナトキ(2)

…「ごめん」…
後悔を繰り返す

『—と言いたところだけど、違うよ。僕と崇弥^{たかや}は兄弟じゃない』
「は？」

『……だから、違うって。じゃあ、またね』
また会おうね。

電話は唐突に、一方的に切られた。

「違うん？」

ホンマに？

崇弥は違うん？

蓮君^{れん}やない

「崇弥は…違うん!？」

由宇麻^{ゆうま}はガバツと頭を上げると、自らの頬をつねった。
痛い。

「夢でも妄想でもあらへん!」
違う。

全てが違う。

叫びたいのを堪えて笑みを溢した。
その時だった…—

ドクン…。

「!? あっ—」

ドクン…ドクン…

膝から力が抜ける。

「うつ…うつ…」

ドクン、ドクン、ドクン

『由宇麻! 由宇麻!』

あやき
彩樹の声。

由宇麻はしゃがみ、宙に手を伸ばした。

ドクッ、ドクッ、ドクッ

「あ…やつ…君…」

『すっかりしてよ! 由宇麻!—! 由宇麻!—! ゆう—』

最後に慣れ親しんだ彩樹の言葉が聞こえた気がした。

「童顔君、起きたんなら端に寄つてよ」

誰や?

「蓮君…?」

見慣れた天井。

白い天井。

ここは…

ここは—

「イヤや! 帰る! 俺の家に帰る! イヤや! イヤや! イヤや!」

「童顔君、落ち着いてよ!」

ベッドに腰掛けた二之宮は、上体を回して由宇麻の肩をベットに押さえつけた。

「放してや!—!」

「待ってって、言われてんの」

疲れきった顔の彼は息を吐くと、ぐったりと自らの体重を重石にして由宇麻を押さえることにする。

周防病院。^{すおつ}

一面、真っ白の病室。

それも入院していた頃と同じ部屋で由宇麻は暴れた。

ここは嫌だ。

「ちょっと、ナースコールするよ？病人のくせに脱け出した司野由宇麻さん」

「何で知ってんのや！」

「私だよ。由宇麻君」

ぼさぼさの髪に眼鏡。

穏和な顔の彼、加賀^{かが}は白衣に手を突っ込んで言った。

「か……センセ……」

「由宇麻君、病院に戻って来なさい」

彼は眼鏡の奥の瞳で由宇麻を見詰めて言う。

それは……

「イヤや……加賀先生には迷惑かけたくあらへんのや」

俯き、握った拳がシーツにシワを作る。

「アハハハ、何言ってるの？」

二之宮の嘲笑。

「何って……俺は……」

「迷惑をかけたくない？ピンポン押しても返事がないから入ってみれば、無用心に鍵は掛けずに、意識不明で床に倒れてる。応急措置して救急車を呼び、仮眠中の加賀先生を叩き起こしてもらって。何処に迷惑がないって？」

迷惑かけまくりや……

確かにその通り。

「けど……」

「けど、何？いい大人がホントっ情けないね」

由宇麻は肩を竦めて小さく震える。

「二之宮君、言い過ぎだよ。別に私は由宇麻君に強制しているわけ

じゃない。だから――」

「だから？だから、何ですか？加賀龍士先生。本当に貴方は医者ですか？」

「医者ですか？と、二之宮は真面目くさつて尋ねる。それに、由宇麻は目の色を変えると、二之宮に飛びついた。

「蓮君、失礼やろ！加賀先生は立派なお医者さんや！！」

それ以上は俺が怒るで！そう叫んだ由宇麻。それに対して二之宮は嘲笑を繰り返す。

「事実さ」

「てめ！いい加減にせいや！！」
がしっ

「由宇麻君！」

監査部で半年に1度ある講習会で教わった技術を駆使して二之宮を組臥せた。一般庶民相手に、それも、抵抗しない相手にやるのはタブーだというのに、加賀を侮辱したと勝手に理由を作って由宇麻は二之宮の手首を捻り上げる。

そんな中、加賀は由宇麻の体を上から抱き抱えようとして由宇麻の踝に脛を蹴られた。

「うっ…由宇麻君、痛い…」

は、無視された。

「司野由宇麻さん、貴方、崇弥達の父親になつたんですね。本当の父親に」

にこつと笑う二之宮。由宇麻の行動になんの動揺もせずに、捻られていないもう片手で彼の胸ぐらを掴んだ。

「慎さんの遺書、勝手に読んだんやな！」

ドクッ、ドクッ、ドクッ

額に大粒の汗を浮かべて由宇麻は噛み付くように睨む。

「家族を、裏切られることのない家族を手に入れて嬉しいだろう？好きな人に囲まれて、温かくって心地好いだろう？君の望んだ理想の家族。父親を頼まれた時、心躍ったんだろ？慎さんの余命を嘆くよ

り、手に入るものことで心一杯だったんだろう？」

「俺が慎さんの死を喜んでる…そう言いたいんか！？そんなわけ」
「あるだろ！！！！」

二之宮は勢いよく体を起こすと、由宇麻の小さな体を力一杯壁に叩き付けた。

「二之宮君！！由宇麻君を放しなさい！！」

流石に医者として人として由宇麻をまだ殴ろうとする二之宮を加賀は引き剥がそうとする。しかし、二之宮が瞳を波色に輝かせた途端、加賀は見えない力でドアに飛ばされた。

「！！！！？」

打ち所が悪かったのか、動かなくなる加賀。

「加賀せんせー」

「司野由宇麻さん、あんた、本当に醜い人だよ。自分の家族を手に入れる為に他の家族を壊す。醜い。とても醜い人」

醜い。

そう吐き捨てられる。

なんでや。

確かにその通り…

自分に嘘はつかへん。

俺は何処かで崇弥慎の死を望んでいた…

早く家族が欲しくて…

欲しくて…

温かい雫石。

頬を伝い、二之宮の由宇麻の胸ぐらを掴んだ手に落ちる。

「なんでや…どうしてや…俺は…ただ…」

ただ…

欲しいから、欲しいと望んだ。

それだけなんや…

「なあ？ダメなんか？欲しいから欲しいと望んじゃダメなんか？ただ…家族が…家族の証が欲しかった…俺は家族が欲しかったんや！ただただ欲しかったんや！！」

二之宮の手を捻っていた手を離し、胸を押さえた由宇麻は子供のように泣き叫ぶ。

眼鏡を捨てて、拳で溢れる涙を必死に拭う。

そして、体を小さくさせて喉をならす。

「俺は崇弥の傍に居たいんや！！…一緒に…ずっと、ずっと、ずっと、一緒に居たいんや！！だから、家族が…崇弥が…欲しかったんやあ！！！」

病院には居たくない。

遠くなるから。

ただ、崇弥の傍に居たい。

それだけでいいから…

それだけでいいから…

それだけで…

たったのそれだけで…

俺は幸せになれる。

だから、それだけが……

欲しかった。

ザンコクナトキ(2) (後書き)

昨夜、ふと思い立って「沈黙」のおまけを書いてみました。

勿論(?)、登場人物は千里と葵です。あのあと彼らは一体…!?

みたいな(+|+)

気になった人は作者「フタトキ」↓「活動報告」へ。

*これまた勿論(?)、BLです。ご注意をm(____)m

ザンコクナトキ(3)

…「ごめん」…
懺悔を繰り返す

ぼんっ

「ふえ？」

頭頂部に柔らかい感触がして、涙でぐしょぐしょになった顔を上げた由宇麻。目をしょぼしょぼさせた彼は二之宮ニノミヤに抱き抱えられた。小柄な体躯の由宇麻は簡単に持ち上げられる。

「言えたじゃん、童顔君。これなら加賀かが先生を納得させられるよ。ごめんね、突飛ばして」

状況が把握出来ないでいる由宇麻は喉をひくと鳴らして俯いた。

「おこっ…て…やる…？」

醜いつて。

「素直になれない君に怒ってたよ。加賀先生、早く起きてください」と、二之宮は自らのせいで転がる加賀を爪先でつついた。うっと呻いた後、加賀は一層瞳を緩ませて二之宮を見上げる。

「貴方も貴方です。童顔君の現状を知る医者なら望むならなんて言葉は使っちゃいけない。誰かが24時間見ててあげないと童顔君は死ぬんだ。分かってるはずだ。貴方は助けられる者を最大限助ける医者。まだ将来がある童顔君を助けずに殺すのか？」

「私はもう由宇麻君を閉じ込めたくなかった…」

しゅんと小さくなった加賀。二之宮は疲れきった顔で息を吐く。

「と、怒鳴りたいところでしたが童顔君の必死な気持ちは僕にも分

かる。僕は童顔君の味方だよ」

「蓮君……」

と、由宇麻は抱き抱えられたまま、にこっと二之宮に抱き付いた。

「ちよつと、首が！！」

二之宮が由宇麻の腕力の強さに慌てる。

「ひゃっ」

ぼふんとベッドに投げられた由宇麻はその衝撃に加賀のように呻いて転がる。その姿が滑稽に見えて二之宮はクスリと微笑した。

そんな二人の姿に後ろで加賀が笑顔を見せたのは秘密だ。

「加賀先生、これから喋ることはトップシークレットです。無理ならご退出を」そう言う二之宮に由宇麻はこれから話すことが分かる気がして逃げ出そうと足を布団から出し、

「童顔君……ここで逃げるんなら君を縄で縛りあげて強制再入院させるから」

ぴくり。

二之宮ならやりかねない。

由宇麻は布団に潜った。

「それで？加賀先生は？」

「外にいるって言っても聞き耳たてちゃうから私も聞かせてもらうよ。勿論、他言はしない」

「他言したら貴方の頭の中空っぽにしますから。その医者としての知識もずばっと」

「二之宮君、君は一体何者なんだい？適格な応急措置も、嘘ではないだろう記憶障害を起こさせるとか――」

「それを今から」

色気のある顔で加賀の口に人差し指を立てた二之宮。

一瞬で加賀は押し黙る。

「……お聞き、由宇麻君」

くしゃり。

そして、二之宮は息を呑む由宇麻の頭を撫でた。

悲しい哀しい昔話を始めようか。

由宇麻の頬を涙が一筋流れた……。

ツミルト

雪の降る冬の日、元軍人の崇弥慎^{たかやしん}と元従軍看護師の崇弥林^{りん}の間に双子が産まれる。

その日、産まれたばかりの双子の片割れ、崇弥洸祈^{こうき}が何者かに連れ去られた。

ケースの中の子供の紅く光る瞳。闇にその光は怪しく輝く。

「崇弥の末裔…洸祈か」

蠢く影はケース下のプレートに書かれた“洸祈くん”の字を撫でるとケースを開け、中の白い布にくるまれた子供を抱き抱えた。子供――洸祈はただ影を見て騒がない。

「大人しいな」

影はふつと笑うと産毛の生える白い頬を撫でた。

「洸祈？葵^{あおい}？」

澄んだ女性の声。

赤みがかった茶色の長髪を揺らした小柄な女は白い病人の服を着て暗い部屋の中に向けて呼び掛ける。

愛しの息子達の名を…

「誰かいるの？」

よく分からない存在を感じた女―林はその紅い瞳を細めた。影は腕の中の子供をもう一度抱き直すとクスリと笑う。

「誰！？」

「今晚は、崇弥林さん」

「貴方…何で―」

ガシャン

窓硝子が夜風で内に破片を飛ばして割れた。

「あうつ」

赤子の声。

その冷たさに体を震わせた洸祈は身動きし、声を上げた。

「私の赤ちゃん!!」

自らの子供を確認しようと開け放たれたケースに触れ…

「洸祈!!!!!!何するの!!!洸祈は慎君と私の大切な―」

「この子は僕が貰う」

「貰うだなんて!あげるわけないでしょ!!!!!!」

出産後の疲労からぐらりと傾いた林は壁に手を突いて我が子に手を伸ばす。

「洸祈を返して…」

「もう産めない体ですからね。でもいいじゃないですか。双子なんだし、一人くらいねえ」

その言葉に緋の瞳が見開かれた。

「何言っているのよ!返して!私の子を返して!!!!!!」

「林さん、崇弥の家は櫻の家と同じ軍人の家系。当然、もうこの双子のことは軍に知れ渡っている。そう、この膨大な魔力を秘めた洸祈君のことがね」

「だから何よ!!!!!!っ…」

身体の異常に林はその場に崩れる。影は揺れ、洸祈は小さく震えた。
「なんで…なんで…洸祈を…!!返して…!返してよ!」

「この子はいずれ軍人になる…いや…軍に飼われる獣、兵器になる。林さん、息子がモノとして軍に縛られるのは見たくないだろう?だから僕が貰おう。この子は僕が育てよう」

「勝手なこと言わないで!洸祈も葵も私達が護る!誰にも渡さない!!!軍にも!!!!!!っ…」

林は痙攣を起こす。

元々長くはなかった命。二十歳までと診断された命。

「洸祈も…葵も…最初で最後の…愛しの子…駄目…お願い…」
出産は無理。そう医者には言われた。

「私が…この世に残した…子」

どうにか出産に堪え、我が子を愛することに残り火を使おうと慎と話したばかりだった。

「慎君…と…私の…」

大切な家族。

「何事ですか!？」

部屋の外、廊下から響く看護師の声。ゆっくりと確実にこちらへ向かって来る。

「おーと、時間だ」

影は窓辺に寄った。割れたガラス片がぱりつと音がして砕ける。

「イヤよ…洸祈…洸祈…」

震える体を引き摺る林。ガラスで皮膚が切れるのにも構わず洸祈に近付こうとする。

「林!!!!!!」

看護師じゃない。部屋に飛び込んで来たのは…

「慎…君…」

「林!どうした!!!!!!窓が!？」

息を切らした慎は床に倒れる妻を抱き締める。林は窓を向き、

「洸祈…が…」

影は跡形もなく消え去っていた。

洸祈もまた…。

「林!すぐお医者様が診てくれる!しっかりしろ!!」

「慎君、洸祈が…奪われた…」

弱くなる呼吸。慎は何度も何度も林を揺する。

「林!!洸祈は俺が取り戻す!!だから、生きてくれ」

「慎君…約束…」

「ああ、約束するから」

そこで安心したようだ。林は慎の頭を引き寄せた。

「慎…愛してる」

貴方に会えて良かった。

私達の子を愛して。

「林、愛してるよ」

長い口付けを…

お別れの口付けを…

慎の涙は林の涙に混ざり落ちる。

ごめんね。

洸祈を護って…

葵を護って…

「……………ばいばい」

「林…」

林は慎の腕の中で息をひきとった。

ツミビト(2)

彼はとても幼くて脆弱だった。

心の完成していない彼には実験は辛く厳しかった。

そして、彼はよく泣くようになった。

「洗^し祈^ぎ、ほら、おいで」

「やつ」

蓮^{れん}の開いた腕から逃げるように洗祈はタイルの床を後ずさる。

「大丈夫だよ。僕が支えてあげるから」

「やだっ」

「お兄ちゃんがついてるから」

湯槽から一度上がると、蓮は怯える洗祈を抱き抱えた。そして、震える脛にキスを落とすとそのまま一緒に浴槽に入る。

「ほら、足を伸ばして」

大丈夫だから。

蓮の膝の上で縮こまる洗祈を必死に諭す。

「このままでいいでしょ？」

「いいけど…それじゃあ疲れがとれないよ？」

「…いいから…蓮お兄ちゃん…お願い…」

「じゃあ、僕がちゃんと抱き締めるから力抜いて？」

「うん」

「あううあ…あうっ」

突然、ベッドの中で洸祈が暴れだす。守るように頭を抱えて丸くな
った。

「洸祈！」

ふらふらと足を引き摺った蓮は偶々通りがかった部屋の前で洸祈の
異常に気付いてベッドに駆け寄る。
壁を隔てて…。

「お兄ちゃん…お兄ちゃん…」

「ここにいろよ」

「…お兄ちゃん…助けて…苦しいよ……蓮……」

プラスチックに開いた通気孔から漏れる荒い吐息。蓮は出入口に施
された多くの南京錠を睨んだ。

これを開けられるのは…

「紫水しすいしか…」

「うつ…あう…」

「洸祈！！洸祈！！…紫水は！」

力なく蓮に伸ばされる洸祈の手。蓮は掴もうとするが掴めない。

「蓮、後は僕に任せて」

そう言って入ってきたのは…

「紫水！洸祈が…洸祈が！！」

自らと同じ髪に瞳の父親に蓮はさすが。紫水はベッドの中の洸祈を
一瞥すると息子の頭をくしゃりと撫でた。

「部屋に戻ってなさい。その足、辛いだろう？」

紫水の微笑み。

「洸祈は大丈夫？」

「大丈夫。お休み」

優しく、しかし、強引に蓮を洸祈の部屋の外に追い出した。蓮と入
れ替わりに冷めた目付きの紫水の部下が入る。
目の前で閉まるドア。

蓮は紫水の言葉を信じた。

「紫水が助けてくれる」

と――

「うあああ！……！！！」

誰の悲鳴。

「洸祈！！！！！」

ガラッ

「君！」

洸祈の悲鳴にドアを開けた蓮は彼のもとに行こうとして男に押さえられる。

「紫水！洸祈、どうしたの！！！」

洸祈が辛そうだよ！

「笹原、蓮を連れ出して」

「はい」

「洸祈！！なんで！！放してよ！！」

なんでそんなに必死なの？

なんでそんなに隠したがるの？

「お兄ちゃん…助けて…んっ」

なんで洸祈は助けを求めるの？

「放してよ！！！」

波色に光る蓮の瞳。掴む男が頭を抱えて座り込む。

「なんだ！！頭が……！！？」

そんな大人達を無視して紫水に隠されたベッドに近寄った。

「はふっ…んっ…あう…」

洸祈の泣きそうな声。

目の前で起きていたこと…

「何してるのさ！！紫水！！」

それは大胆なキス。

小さな顎を掴んだ紫水は無理矢理洸祈と唇を重ねていた。

「紫水！嫌がつてるよ！！！！」

^蓮子供の力では大人には敵わない。^{紫水}紫水は蓮を見向きもせず^蓮に洸祈を強く押さえ付ける。

強く、紫水の指先が洸祈の細腕に食い込むぐらい。

「紫水！！やめてよ！！！！」

蓮の訴えは届かない。

ごくっ。

喉を上下させた洸祈。

「んー！！！！！！」

やがて、言葉のない悲鳴を発した彼はびくつと身体を跳ねさせて四肢の力が抜けた。

「…何を……」

「眠らせた。強力だから変な夢は見ない。だから、魔されることもないよ」

魔されていた。

何に？

「だけどー」

「キスする必要はないって？おや、嫉妬かい？」

違う。

「洸祈は嫌がつてた。紫水がちゃんと説明したら…んっあ…」

紫水は肩を竦めると蓮の唇を啄んだ。

「洸祈は我が儘だから。じゃあ、部屋に送るよ」

そして、息子を下から抱き抱えようとして、蓮は両手で紫水の腕を押し返して拒んだ。

「どうした？」

「洗祈と寝たい」

腕にまだ生々しい紫水の指の跡を残す洗祈。

「檻の中でいいなら、ね」

それは牽制だったのだろう。

しかし、

僕は洗祈の傍に居られればいい。

そこが僕の居場所だから。

「中でいい」

ふふふ。そう笑った紫水は蓮がベッドの中に入ると南京錠を全て閉めた。

これで自由を失った。

「お休み」

紫水は男達を置いて白衣を翻すと、部屋を出ていく。

蓮は親指の腹で洗祈の口許の唾液を拭った。

「洗祈、お兄ちゃんはどこにいるからね」

そして、目尻から溢れる涙をそつと舐めとる。

蓮だったとえ医学知識を詰め込んでいなくても分かる。

びくりとも動かない身体。洗祈の全てが停止しているかのように見えるのに、心臓の動きだけは異常に早い。

「動けないんだね」

脳はフルで活動しているのだろう。悪夢を見せようと。

「辛い？大丈夫だよ」

蓮は洸祈の胸に手を当てると再び瞳を波色に光らせた。

何かが洸祈の筋肉の動きを阻害してる。

魔法…か。

僕ならできる。

「動けるようにしてあげるけど叫んじゃ駄目。紫水が来ちゃうから」

いくよ。

と…

「…蓮お兄ちゃん」

「ちよつと、疲れただけ」

疲労に目を閉じかける蓮。

「やだ！置いてかないで！！」

「置いてかないよ。夢が怖いんだろ？僕と一緒に起きてるから」

「本当？」

「うん」

実際は無理に近かった。

眠い。

でも、一人にはさせられない。

うとうとするつもりはなかった。目を開けているつもりだった。

意識が遠のく…

「お兄ちゃん？」

「う！？ああ。どうしたの？」

「…抱き締めて。強く、強く。力を抜かないで抱き締めて」

それは、洸祈の蓮を気遣った言葉。一人にしないで。そう言いたい気持ちを抑えて洸祈は願う。ただ、感触が欲しいと。

蓮はその言葉のまま洸祈を腕の中に納めると洸祈の旋毛にキスを落とした。喉を鳴らした洸祈は蓮の服をはだけさせて、そこにキスし返す。

「くすぐりたいよ」

蓮は身を擦らせる。

「……………はう……………」

スー…スー…スー…。

寝てる。

「お休み、洗祈」

強く、強く。

力を抜かないで抱き締めた。

ツミビト(3)

『この子はもうだめだ。心のない抜け殻は使えない』

……失せる……

『蓮、今すぐ洗祈を――』

……殺せ！……

「紫水……あいつがしてた研究……それは――」

“支配”

「し……はい？」

「そ、“支配”さ」

力を失ったように由宇麻のベッドに転がる二之宮は嘲笑う。 “支配”

”そう繰り返して笑う。

「ねえねえ、童顔君」

ふと笑みを氷らせて由宇麻の病院服の裾を引つ張った。

「……なんや？」

“支配” そう繰り返してばやく由宇麻はベッドに腰掛けたまま上体

を曲げる。それを見計らったように彼の腕を引いた二之宮は傾く由宇麻を抱き締めた。

「何すんのや！」

「ちよつとだけ… 由宇麻君」

カタカタ…

「！」

二之宮が小さく震えている。そう感じた由宇麻はその研究に寒気を感じる。

「……蓮君……」

「あいつはあらゆる面からの人間の絶対支配を目指していた。……ただの拷問みたいなもの」

「拷問！？ 犯罪じゃないか！？」

信じられない。目を丸く見開いた加賀は手にした書類を強く握む。ここは日本だぞ！！

そんなものの存在が許されるわけはないはずだ。

「犯罪じゃないんですよ、人体実験なんてのは… だって政府がやれって命令してたんですから」

法律が許した。

「それに僕らは家族だったから」

「そんなのが家族なわけー」

「由宇麻君、君は分かっているはずだ。君自身使われかけた」家族だった人達に。

由宇麻は頭を抱えて踞る。聞きたくない。そう意志を示す。

「ごめん…」

「俺は俺でけりつけたから… 言わんというや… お願いや…」

「ごめん… 少しか…」

羨ましいと思ったから。

最後の一言はとてもとても小さかった。

「あいつは――」

人差し指が立つ。

「苦痛」

中指が立つ。

「快楽」

薬指が立つ。

「恐怖」

苦痛、快楽、恐怖。三本指が立った。

「これら三点から人間の支配を試みた」

「何や？それ」

と、首を傾げる由宇麻。

二之宮はそんな彼を引っ張って両足で挟んで背中から抱き締める。

丁度、子供に絵本を見せながら読むような体勢だ。

「何すんや！」

「何？って訊いたじゃん。ね、加賀^{かが}先生」

「私に振るかい？今は現状理解で一杯だよ」

「ふーん。じゃ、教えてあげるね、由宇麻君」

「はーなーせ！」

病院服の裾をはためかせて由宇麻は抜けようとするが、体格の差から逃げられない。

「まずは、苦痛だ」

暴れる腕を掴んだ二之宮はぎりぎりと力を加える。

「痛い！」

「次は恐怖」

一つ抜かして、

カチッ

「あ！二之宮君、銃は…」

「護身用です」

病院内で銃持ちの二之宮が一人。

加賀が慌てて取り上げる。由宇麻は半泣きだ。

「いじめっこやあ」

「次は…」

― 快楽 ―

「欲しい？」

クスクス笑った二之宮は由宇麻の目尻に溜まった涙を舌で掬った。

「ひゃっ！？やめてやあ」

それを無視して二之宮はエスカレートさせる。顎を掴み、横を向か
せると柔らかな耳朵を啄んだ。

「ううーっ！！」

「最後はキスかな？ファーストキスはまだなの？」

と、言つて…

…………… ひつく… ひつく… ひつく…

「あ…」

と、二之宮。

「二之宮君！」

ごんっ

「つて！……！」

流石に怒った加賀は二之宮の頭頂に拳を落とすと由宇麻から引き剥
がした。

そして、由宇麻は…

「あああー！！！！ばかやろー！！！！蓮君のあぼんたんー！！！！」
泣きじゃくる。

喚いて泣く。

「あぼんたんつて」

二之宮は言葉の古さにギャップを感じて嘆息した。

「怖かったんやあー！！！！！！」

「由宇麻君、落ち着いて」

加賀はすかさず、二之宮を退かして由宇麻をベッドに寝かす。そして、腕に点滴を刺して、ぽんぽんと布団の上から身体を撫でた。その姿に二之宮はほうっと感心した顔を見せた。

「点滴をさりげなくし、身体の異常を診るとはね。流石、お医者さんだ。さっきの言葉は撤回しよう」

「どうも」

泣きわめく由宇麻に聞こえないよう二人は話す。

「洸祈と同じだね」

泣いていても“洸祈”の言葉に由宇麻は反応した。

「崇弥あ？」

「洸祈はね、苦痛、快楽、恐怖…全てを恐怖と感じていた。だから

…」

…人を愛することも恐怖…

「洸祈は愛するという行為が怖いんだ。愛という漠然としたものにとてつもない恐怖を感じる。それがあいつが洸祈で実験した結果さ

…由宇麻君」

麻酔の影響で薄れる意識の中、衝撃の言葉に目を見開く由宇麻。彼を二之宮は呼ぶ。そして…

「洸祈は危険だ。完全には心を赦すなよ」

ツミルト(4)

「この子が欲しいって?」

「ああ」

「何で?」

「欲しいから」

「もしかしてお兄さん少年の売買でもしてんの? あげないよ」
「いくらだ? 金だろ?」

「……買う人か。身分は?」

「子を失ったただの父親さ」

「へえ。この子はそこらの子供とは違う。高いよ? ただの父親には
払えない」

「100万」

「むり」

「1000万」

「無理だつて」

「1億」

「もーちよい」

「……………」

「100億」

「……………」

「さっすが」

「遊び済みだけいいよね」

雪の積もるアスファルトに素足で立つ少年。外套を着込んだ男は金髪を揺らして、布を纏っただけのその少年の頬にキスをした。少年

は紅い瞳に感情をなくしてされるがまま。

「……………ああ」

対する男は帽子を目深に被り、奥から少年をじっと見詰める。

「その顔は惜しいけど君を売るね。出来損ないで失敗作の割りにいい利益になった。ありがと」

そう言つて片手に前金の1000万の入ったスーツケース、もう片手で少年を押して言う。

「精々、可愛がつてもらいなよ」

音をさせずに雪を踏み締めた虚ろな瞳の子はケースを渡して手ぶらになった男のもとへ。

「彼は命令に従順だよ。例えば」

…―殺せ―…

と、

「…こ…ろ……せ…」

たった3文字。1文字1文字しつかりと少年は繰り返す。体をゆらりと揺らすと彼は一度直立し、男を見上げた。

「――！！？」

紅蓮の刃。

2本のナイフ。刀身には少年の瞳と同じ色の炎が纏う。それを手のひらでクルリと回転させると逆手に握り直した。

「強いよ。ただの父親さん」

「こ…ろ…す…貴方を…殺す…殺す…殺す殺す殺す殺す殺す」
揺れる前髪。

ふっ…

ずぶつと足を雪にとられた帽子の男は少年の刃を避けて倒れ、その体に少年は乗った。

「殺す殺す殺す殺す殺す」
ペロッ

感情を写さない瞳を細めて少年は男の驚きの頬を舐める。そしてにこつと口だけ笑みを見せるとその開閉する唇に乱暴に噛み付き、影でナイフを掲げる。

「止める」

ぴたりと停止する少年。

「ちゃんと前金に小切手をくれたのに裏切るなんてすつきりしないからね。ほら、止めると言っただろ！」

ナイフの刃を男のコートを滑らせる少年の姿に眉を曲げた金髪の男はつかつかとブーツを鳴らすと少年の襟首を掴み、投げ捨てた。

「うっ」

路地の壁に背中をぶつけた小柄な体は地で体を縮める。その白い子供の前髪を掴むと金髪の男は苦痛に顔を歪ませる少年を無理矢理立たせた。

「君は奴隷。違つかい？」

体が震える。

「君は下僕。違つかい？」

閉じた唇が震える。

「返事は？」

「……………はい。紫水様」

何事もなかったかのように無表情になった少年は答えた。

「うん。で、君のご主人は僕じゃなく彼だ。彼の言うことを文句言わずに実行するんだよ。どんなに苦痛なことだとしてもね。たとえば死ねと言われても。分かった？」

「はい」

「ばいばい」

深く深くキスをすると、少年を置いて颯爽と黒のベンツに金を積んで車を発車させる。

話し掛けることも振り向くこともせず紫水は捨てた。

「名前……は？」

「（きし） 洸祈」

「寒いだろ？」

「いいえ」

「そう言わずに。風邪を引いてしまう」

「……あなた様の名前を訊かせてください」

「……（たかや） 崇弥……（しん） 慎」

「慎様、精一杯しますが邪魔と思われたら遠慮なく自殺を命令してください。あなた様の見えないところで死にますので」

……— 洸祈 —……

「はい。何でしょうか、慎様」

「やめてくれ」

「あつ……あう……ごめんなさい！邪魔なら—」

「違う！俺は主人じゃない！！」

「じゃあ—」

「洸祈……！！……！！」

再び降り始めた冷たいもの。それらは二人に優しく降り注ぐ。慎のコートを羽織った洸祈を慎は強く強く抱き締めた。

「慎…様…」

目を見開いた洸祈は震える声で狼狽える。

「あ…の…俺は…」

「違うんだ洸祈…君は…」

人の温かさに包まれて頬を熱に火照らせた洸祈はじっと動かない。
否、動けない。

「洸祈、これは俺からの最初で最後の命令だ」

慎は洸祈の肩に額を乗せて呻く。

命令だ…

「洸祈、今日までのことを全て忘れなさい」

林、

君を愛していた。

だから、

君との最後の約束を…――

俺は残りの生涯を掛けて果たす

「洸祈、愛するよ」

見付けるの遅くてごめんな。

愛情誤差 ― 洸祈の場合 ―

体がダルい。

その日、洸祈（きうし）は朝からベッドで寝込んでいた。

「旦那様、お昼はどうしますか？何ならお粥を作りますが…」

琉雨（るう）がぼんやりと天井を見上げる洸祈を見下ろす。洸祈は暫くぼーっとしたままだったが、はっと息を吐くと、琉雨を見上げた。

「ごめん。何？」

「えっと…お昼は食べますか？」

「要らないや。ごめん、琉雨」

「謝らないでください。これ、ミルクです。少しだけでも飲んでください」

琉雨は肩までの髪を揺らし、洸祈に顔を近付けて額を撫でると包み込むような笑みを見せる。洸祈はそんな琉雨の中に“母親”を見て口を開けた。

「琉雨…」

「はい。旦那様、どうしましたか？」

「お前は…成長したな」

どこまでも洸祈の理想に成長した。

それは、ふと悲しくなるくらいに。

純粹で…全てを赦す。

自らを赦してくれる人へ成長した。

「少しは背が伸びました」

「そうだな」

自らの逃場に育てた。

自分に都合のいい人へ成長させた。

「琉雨」

「はい」

洸祈は琉雨の名前を呼ぶと、彼女の柔らかな茶色の髪を撫でて指先を頬へ持っていく。琉雨の睫毛が彼の小指を擦った。

琉雨の澄み切った緋色の瞳が洸祈を静かに見詰めている。

「お前は、俺をどう思う？」

「どうって…旦那様は旦那様で…ルーの恩人です」

そうじゃない。

「琉雨、お前は分かっているはずだ。俺はとても卑怯だ」

「違います！」

琉雨は首を振って必死に否定する。しかし、洸祈も首を振ると、彼女の顔を両手に挟んだ。

「俺は父さんの死に泣けない。何故か分かるか？俺が殺したようなものだからだ。全て俺のせいだ」

「旦那様、違います！」

「違わない。葵^{あおい}が泣くのも、ちいが傷付くのも、皆、皆俺のせいだ。なのに、俺は逃げて見ないふりをしている」

琉雨は優しい子に成長した。

洸祈も分かっている。

琉雨はイイコだ。

出来の良い子。

だから、

「違います！旦那様は悪くありません！」

琉雨は俺を赦してくれる。

「旦那様は悪くありません。旦那様は誰よりも皆のことを思っています。旦那様はお優しい方です」

涙を浮かべて主張する琉雨の手を憂いを帯びた表情で優しく握った洸祈はその甲に接吻をした。そして、体を起こすと細い体を抱き締める。「旦那様…」と囁くように呼んだ琉雨は洸祈の肩に顔を埋めた。

「旦那様…ルーは旦那様の笑顔が大好きですから笑ってくださいね」
「うん。俺も琉雨の笑顔が大好きだよ」

一生消えない胸の傷痕を癒すように琉雨を引き寄せた洸祈はぱっと手を離してベッドに寝転ぶ。そして、その早さに困惑する琉雨を置いて背中を向けた。

「旦那様？」

「琉雨、今日は一人にしてくれる？夕食も要らないから」

拒否されていることに少女は息を呑む。たとえ、『お願い』として言われているとしても、洸祈の傍にいてきた琉雨には辛く重たかった。

しかし、今まで洸祈は琉雨に本当に優しくかった。信頼されているのかと疑うほどに。もしかしたら、どうでもいい存在なのかもしれないと思ったこともあった。

だから、『お願い』辛いけど少し嬉しい。

琉雨は端から見ればキツイ言葉に滑舌よく「分かりました」と答えると、ミルクの入ったコップを背の低いテーブルに残したまま部屋をそっと出た。

けほっ…。

体がダルい。

琉雨の優しさにすがりたいところだが、敢えて我慢する。ミルクを乾ききった喉に通した洸祈は本棚を漁っていた。

「…あった」

隠したら逆に何処にしまったのか忘れてしまっていた箱を棚の奥から取り出す。

「『宝物』…か」

お菓子の空き箱の側面には汚い字で書かれた『宝物』の字。開ければ、そこには…

「洸祈、大丈夫？」

葵が部屋の扉を開けて立っていた。

「!？」

洸祈は咄嗟に隠そうとしたが遅く、叫んだ葵に箱ごとそれを取り上げられていた。

「返せ！」

「洸祈！返せじゃないだろう！」

奪われ、慌てた洸祈と葵とが揉み合い、それが葵の手から落ちた。けほっ……。

落ちたそれを洸祈が取る。葵はしまったという風に表情を歪めた。

「洸祈、もうやめてよ」

そして、彼は宝物の箱をテーブルに置き、他所を向いて拗ねたようにする洸祈のそれを握り締める手に自らの手を重ねる。

「俺が分からないとでも？」

宥めるような葵の声音。

葵は洸祈の手の中のそれ、薬のシートをそっと取った。そして、それを宝物の箱に入れて蓋をする。

「……失望しただろ」

洸祈は長らく箱を見詰めていたが、葵がじつと目の前に立つので、ベッドに転がり、枕で顔を隠した。

「昔から向精神薬を医者から貰ってたのは知ってたよ。治療を受けたのも知ってる。ねえ、洸祈、もう治療は済んだんでしょ？お医者様がもう大丈夫だって言ってたよ？なのにどうしてこんなに隠してるわけ？」

葵は必死に声を抑えて兄を見る。

「どこでこんなに手に入れているの？」

「……………」

「洸祈、俺の目を見て答えてよ」

家族なのに秘密が多い。

その事実には葵は苛立ちを隠して頑なに回答を拒む洸祈に訊く。

「答えないと全部捨てるから。この部屋くまなく探して捨てるから」

びくり。

洸祈が枕に隠していた瞳で射るような視線を葵に向けた。

実の兄弟のそんな姿が自らに向けられていることに震えた手を、葵はもう片手で掴む。

「洸祈、答えてよ」

声も震えていたが、葵は気にしてないと装って洸祈に迫った。

沈黙が続いたが、洸祈はベッドから降りると、箱を手取る。葵はすぐに奪おうとしたが、洸祈が箱から鍵を取り出したので留まった。鍵は机の引き出しの鍵で、洸祈はゆっくりと解錠すると、中の書類を叩き付けるように床に投げた。

「医者 of 診断書。5件通った。今はくれる薬が一番多いとこの治療を受けてる。時折、薬が減ると遠くに行く」

葵は書類一束を手取る。

「…重度の鬱病」

「葵、ちいとやったか？」

ここではあまりに場違いな質問。

葵は当然、もごる。

「やったって…俺は…」

「これも分かってんだろうけど、俺はお前の何十倍…今なら何百倍もやってる」

真面目に言う洸祈。葵が反射的に目を逸らした。

「嘘…だろ？」

小さな声で訊く。

答えを聞きたくないと言いたげに小さく、できることなら洸祈に聞こえなければいいと…。

「嘘じゃない。お前の双子の兄は赤の他人と夜を明かす人間だ」

しかし、洸祈は葵の質問に忠実に回答する。

「ちいがお前に最初したようなことは序の口さ。胸の傷も背中 of 傷ももう消えない。一生残るんだ」

そう言って開かれたシャツには薄い胸板。しかし、今までは気づか

なかったが、よく目を凝らせば傷が見える。それも無数の傷が。葵は自らの質問の重さに気づく。

「洸祈…俺は…そんなつもりじゃ…」
「出ていってくれ！」

ガシャン…。

琉雨の入れてくれたミルクのカップが壁にぶつかって割れた。

「今日は一人にしてくれ！」

「でも…薬の過剰摂取は…」

「持っていていいい！」

力任せに洸祈は箱を葵に投げつけると布団を頭まで被ってベッドに踞ってしまう。

「…俺は……洸祈が心配で…」

決して、洸祈を悲しませるために来たのではない。それだけは分か
ってほしいと葵は動かない洸祈の作る小山に手を触れた。

「葵」

「うん」

「…ごめん」

「うん」

「……………ありがとう」

そつと頭があるであろう場所を手の甲で撫でた葵は宝物の箱を持って部屋を出た。

「ああ、どうしたの？」

「千里せんり…」

洸祈の怒鳴り声を聞きつけたのだろう。洸祈の部屋を出た葵に千里が駆け寄った。

「洸…どうかしたの？」

「傍にいて…」

葵は何も言わずに抱き付く。千里は洸祈の部屋のドアを見詰めた。

「やめて」

その時、ドアノブに伸びた千里の手を葵が手を重ねて止める。

「でも！」

「千里、俺の傍に」

そして、戸惑う千里の唇を奪った。

「ああ……」

「今日はそつとしてあげて」

「……………うん」

愛情誤差 ― 蓮の場合 ―

「餓鬼んちよかい？君は」

「なんか…二之宮にのみやの傍そばって落ち着く」

「分かったよ、追いつかない。ただし、友達の為に調整してるから、それに触らないでよ？」

丁度、“それ”と呼ばれた試験管に触れようとしていた洗祈しうきは手を引つ込めた。

「にー、くうちゃん寝たの？」

「遊杏ゆあんか。夜更かしするんじゃない」

二之宮の寢室を覗いた遊杏はベッドに洗祈の姿を見付けて、机に向かう二之宮を見た。二之宮は細い銀縁の老眼鏡を外すと彼女を振り返る。

「明日は祝日だよ」

「そうなのか…僕の仕事は曜日関係ないから気にしてなかった」

フリルの揺れるワンピース形のパジャマを着た遊杏は二之宮の腕に飛び込んだ。キャスター付の椅子が軋む。

二之宮は膝に座る遊杏の髪を指で鋤くと椅子を再び机に向けた。机の上には微かに液体が残るマグカップと中の濡れた試験管。

「これなあに？」

「軽い安眠薬をココアに入れたんだ」

「くうちゃんに？」

「そっ」

「今日はどうしたの？」

「さあね。ただ、僕の傍は落ち着くらしいよ」

「監視が入らないからかなあ」

そう言つて彼女が見上げたのは、バルコニーの向こうの夜空。

半月が屋根に半分隠れていて、まるで四分割にしたケーキの残り一切れだ。その薄黄色のケーキに黒い影が映える。

「政府の犬が」

「鷹だよ、にー」

二之宮が吐き捨てるように言うと、遊杏が訂正した。

紅い目をぎらつかせる不気味な鷹は洺祈が夜な夜なベランダから二之宮の寝室に侵入してからずっと、その場を旋回していた。

ここには絶対に近付けない。

何故なら、二之宮蓮^{れん}が軍にも政府にも干渉されない中立の人間だからだ。だから自然と、二之宮家内の者も干渉されなくなるのだ。

崇弥^{たかや}洺祈は何となくそれを感じて、落ち着くと言っているのかもしれない。

二之宮の視線がぶつかりと、鷹は翼を勢い良く羽ばたかせて低く鳴く。

「イヤーな鷹だ」

そう二之宮が言うと同時に跳ねる茶髪を棚引かせた遊杏がカーテンを引いた。

懷で眠っていた遊杏を抱えて階段を下りた二之宮は、リビングからする匂いに顔を歪めた。

ドアを開けると、彼の目に悲惨な状況が映る。

まず最初に目を引くのは台所。

黒い煙が出ている

次に目を引くのは身に付けた遊杏のお気に入りのエプロンを真っ赤に染めてレンジに手を突っ込む洺祈。

そして、無造作にテーブルに置かれた3個のカップラーメン。

「なにこれ？」

二之宮が目を半眼にして洺祈を見ると、彼は視線を逸らした。それも、煙の出るコンロの方にだ。

「二之宮の為に無理した」

ぼそぼそと絞り出される洸祈の言葉。

「うん。僕の為なら君は大人しくした方がいい」

そうして、洸祈は裸足の足を鳴らした二之宮に左頬を平手打ちされた。

朝食を作ってやろうと思った。

「愛妻料理ってやつ？」

まずパンを焼こうと魚焼きに入れた。

「偉い。凄く普通だ」

その間に付け合わせに簡単で無難なスクランブルエッグを作ろうとした。

「気が利くね」

しかし、ふわふわの作り方が分からなかったので、電子レンジに割った卵を入れた。

「目玉焼き？」

5分：ぐらい？

「5分か。分かるよ。爆発したんだね」

と、その前に他の付け合わせをと考えて、思い付いたけど難易度が高かったからカップラーメンを拝借。

「君には目玉焼きすら難易度が高いらしい」

お湯を沸かすことにした。

「それくらいは流石にできるよね」

ヤカンを火に掛けてスクランブルエッグ用のケチャップを冷蔵庫から出した。

「用意周到。いい心掛けだ」

その時、爆発。

「さぞ驚いただろうね」

驚き、咄嗟にステンレス台に手を突いたつもりが、ケチャップを押

し潰し、噴出。

「あゝあ、遊杳の汚して…」

キッチンペーパーでエプロンを拭きつつ、電子レンジを開けたら臭い。

「確かに臭い。うつ…吐き気が」

そしたら、ヤカンがぴーぴー鳴くから火を止めてカップラーメンにお湯を注いだ。

「僕がぴーぴー泣きたいよ」

お湯を注いだからレンジの清掃活動の続きをしようとしたら、パンを忘れてた。

「あ、本当だ。忘れてた」

微かに燃えてたから慌ててコンロの火を消して、手持ちのヤカンのお湯をぶっかけた。

「うわっ…最低」

黒い煙が…。

「もういいよ。君がとてつもなく不器用なのは理解したよ」

「うう…」

返す言葉もないらしい洸祈は唸るだけだ。

「だけど…」

やがて、再び絞り出される蚊の鳴くような声。

「何？」

洸祈が慌てふためいた事件の末に得た右手の小さな火傷に塗り薬を塗る二之宮は息を吐く。

「カップラーメン…3分…過ぎた…」

あ……。

「……………完全に忘れてたよ」

卵爆発によってカップラーメンの匂いの消えたりビングで忘れられた3個は、とてつもなく不自然だった。

「僕のせいじゃない……」

「分かってる……俺だ」

「いや……崇弥の愛情をもっと理解してなかった僕のせいだ」

「ごめんなさい……」

「……………うん。片付けよう」

「そうだな……片付けよう」

結局、片付け、全てをなかったことにする前に遊杏が目を覚まし、台所の惨状に怒ってエプロンに泣くまであと30分。

洗祈の右手の包帯が生々しかった……

愛情誤差 ―陽季の場合―

「……熱い……」

凄く熱いよ……―

とある宿。

流浪舞団『月華鈴^{げっかりん}』が借りている一室のドアを双灯^{そつひ}は勢い良く開けた。

「陽坊、明日の打ち合わせやるぞー」

長い髪を軽く首根で一つに束ねた彼は目的の人物を探して周囲を見回す。

「あれ？陽坊？」

いない？

と思つたら、ベッドに小山が1つ。

「ほら、打ち合わせだ」

無遠慮に双灯はシーツを引っ張った。

確かに陽季^{はるき}はいた。

ベッドの上で丸まっていた。

しかし、懐中電灯をくわえた彼はシーツの中で籠った熱で額を湿らせながら、鼻息を荒くして世界地図を眺めていた。

「何してんだ？」

今まで陽季の奇っ怪な行動を見てきた双灯も、奇っ怪を通り越して気持ち悪い姿に流石に後退りした。

「ひえんひよりれんひあい」

懐中電灯をくわえているので何を言っているのか分からない。

「ま、何でもいいけどよ、明日の打ち合わせやるぞ」

「やだ」

この二文字だけ妙に発音がいい。

そして、陽季はただ世界地図を一心に眺める。

双灯は相変わらずの我が儘に懐中電灯を奪い取った。

「あー!!」

陽季の漆黒の瞳が双灯を睨目上げる。

「地図は後にしろ。何が楽しいんだか。打ち合わせやるぞ」

「ふん！遠距離恋愛の苦しさは双灯には分かんないだろうね！」

世界地図で遠距離恋愛？

「洸祈君じゃなかったか？それとも浮気か？」

「浮気なんてするか！双灯じゃないんだし！」

「俺じゃねえ！！！！」

「先輩、陽季君を呼びに行ったんじゃないんですか？浮気なんて…」

「胡鳥！違うつて！」

温かな笑みの彼、胡鳥がドアから顔を覗かせていた。

「あーもう！俺は洸祈一筋だから！…はあ…東京は遠いなあ…」

こちら北海道。

外に出ればとてつもなく寒い。

「世界地図かよ…せめて日本地図だな」

と、双灯がつっこむが、陽季の視線は大陸のオマケみたいな日本列島の一角、東京にしか向いてなかった。

「洸祈…会いたい…洸祈…会ったらまず愛の抱擁を…キスを…」

その後、あー。や、うー。と、ベッドの上で陽季が身を振り始める。つまり、身悶えていた。

正直、気持ち悪い。

何事にも動じない胡鳥も流石に双灯の背中に隠れた。

「陽季君…なんかまずいんじゃないんですか？」

「もともと陽坊は変な奴だったけど、これは本気でまずいな。洸祈

君に会えなくて相当病んでるぞ」

しかし、クリスマス公演で双灯が陽季と洸祈の大胆な口付けを見てから、陽季は時折、考え込むような素振りを見せても浮かれていた。端から見てもウザいくらいに。

そんな彼が1週間程前に月1のカウンセラーを受けてから、彼は益々更におかしな行動をするようになった。

「陽坊、今回の公演が終わったら墓参りに東京に帰るし、直ぐに会えるさ」

「…やだ…今会いたい…洸祈…洸祈…もう帰りたい…帰りたいよ…」

枕を胸に抱いた陽季が急にしおらしくなる。

その場の空気が少し淀んだ気がした。

「陽季君？」

胡鳥が首を傾げる。

すると、双灯が一步前に踏み出した。

「胡鳥、出るぞ。陽坊、お前は月華鈴の舞妓だ。仕事の途中放棄は許されない。東京に帰ることもだ。院長先生に貰った恩、仇で返したら…俺は…」

「先輩。陽季君も分かっていますよ」

宥めに入った胡鳥が双灯の背中を押す。完全に沈黙した陽季をやりきれない顔で見、胡鳥はぐいぐいと強引に双灯を部屋の外に追い出した。

「すまん…胡鳥」

前をすたすたと歩く胡鳥に双灯は拳を作っては広げてを繰り返して謝る。すると、振り返った胡鳥はピタリと静止して背の高い双灯を真っ直ぐ見詰めた。

「いいえ。先輩なら『先に電話しろよ！お前は昭和の女か！』って叫びながら殴り掛かると思ってたから。我慢したんですね」
あれ？

何か言葉に力が籠ってないか？

そして、口元はいつも通りの微笑を称えているのに目は笑っていない。

「そこまでは…」

「僕の本心です。僕、我慢したでしょう？」

双灯が戸惑い、口もぐると、胡鳥が冷めきった笑いをした。

双灯は胡鳥の意外な一面に冷や汗をかくと、反射的に頷いていた。

「あ…ああ……」

「洸祈…会いたいよ…」

世界地図の上に寝転がりながら東京の位置を指先で撫でる陽季はぼやいた。

「ここが北海道…」

人差し指が独特の形をした北海道を差す。

そして、ゆっくりと南へ指先が降りていく。

「青森…岩手…宮城…福島………栃木…」

そこで動きが止まった。

「両親が亡くなった事故のことを今はどう思いますか？」

「……………どうとも」

「どうとも？なんとも思っていないと言うことですか？」

「はい」

「今もその時の夢を見るそうですね」

「はい」

「どんな感じですか？事故を傍観しているのか…」

「俺は昔の俺になって、あの事故を繰り返しています」

「辛いですか？」

「いいえ。……………ただ………」

「ただ？」

『熱い…凄く熱い…です』

『火ですか？』

『はい』

『怖いですか？』

『いいえ』

『何か言いたいことはありますか？』

『いいえ』

『それでは—』

『……………あの…』

『はい。どうしましたか？』

『あの…夢の中で火に焼かれていたのは……………両親ではなくて……………陽季の指先は小さな“東京”の二文字を隠す。』

『洸祈……………会いたい』

はあと微かな吐息が口から漏れ、彼はベッドから起き上がった。

陽季の着る白の着物の長い袖が皺の付いた地図の上を滑る。

『打ち合わせ……………行かなきゃ』

陽季は胸元を右手で軽く押さえた。

……………カチ……………カチ……………カチ……………カチ……………

耳を澄ませば聞こえる規則正しい秒針の音。

『洸祈……………お前を疑ってごめん』

あるホテルの一室より 【R15】（前書き）

タイトル通り、一応、R15の範囲です。

気になる人は飛ばしても本筋には問題ありませんm（
読む人は持てる妄想力を駆使して読んでください”^
| ^”
m

あるホテルの一室より 【R15】

んっ……………。

「もう駄目ですか？」

人肌を感じる。

「駄目…じゃない」

本当は駄目だった。

だけど、壊れてもいいと思えるぐらい人が恋しかった。

だから、駄目じゃない。

「分かりました」

んっ……………。

「やはり駄目なのでは？」

駄目？

「……………やだ」

「？」

「離れたくない。傍にいて」

温もりが欲しい。

「ふーん。じゃあ、遠慮なく」

「それが本性……」

「ええ、アナタだけに特別に……」

体を繋いで寂しさを埋め合うこの関係に……

【あるホテルの一室より】

「蝶……」
ちようつ

最近、この偽名にも慣れた。

ビジネスホテルの部屋を3日前に取った時、「名前：ないと、なんて呼べばいいのか分からない」と言われたので、目についたホテルのロゴから“蝶”と名乗ってみた。

最初は「蝶……蝶……」とボクを呼ぶ彼を遠くに感じていたが、蝶と呼びながら泣いてばかりいる彼をいつの間にか抱き締めていた。

胸に頭を抱いてやれば、彼は直ぐに大人しくなり、ボクに子供のように寄り添ってくる。

そして、髪を撫でてやると、すやすやと眠った。

「何？」

「もう行くの？」

「うん」

仕事に行かないと。

彼は片手でシーツを胸元まで引き上げて、もう片手でボクのスーツの袖を強く引く。

「君はどうする？」

そんな彼のシーツをそつと取り上げ、隠す物のない裸体に指を這わせた。すると、彼は唸り、ボクの手を払うどころか、引き寄せて昨夜散々弄ってあげたところに持ってきた。

「何？」

「……………で……」

「？」

「行かないで…蝶」

触らせてくれたつて、興奮してない体には説得力がない。

「足りないの？」

コクッ……………

この子は……

「今日は会議だから無理。縛ってあげようか？ボクが帰るまで一人で楽しみなよ」

この答えは分かっている。

「やだ」

……………イヤだ……………

「蝶とじゃなきゃ……」

……………温もりを得られない……………

だろう？

彼はボクと違って、一人を紛らわすのに快感じゃなくて温度差を求めている。この関係は彼にとって温度差を得るのに一番有効だからだ。

「分かりましたよ。君って子は…まだ、したりないんですね。気絶するまでしてあげます」

彼の望みを叶えるために、引かれた腕を振りほどいた。

ああ、可哀想な子だ…。

「蝶…」

結局、彼は気絶なんてじゃなくて、ボクの方が意識が飛び飛びだった。彼は感じてくれるのに、最後までいかない。ボクは彼が気絶しないし、昇天もしないから際限なく、心赴くまま、欲望のままに彼を使った。

そして、ボクは彼の腕の中にいた。

すべすべの肌。

女みたい。

胸はなく、あるのは味気のない筋肉だが。

「蝶、生きてる？」

「…何を訊いているんだい？」

死んでるわけないだろう。

ボクはお返しに彼の首にキスマークを付けてやる。

「君のせいで会議を欠席した」

「いいよ。ヤろう。ずっと…ずっと…傍にしよう」

それは君の願いのくせに。

そうやって押し付けたいんだ。

ボクとやっている事実を。

多分、彼には恋人がいる。

きっと、大事にされてる。

だけど、ボクを求める彼は恋人に何か叶わぬ願いを持っている。叶わないからボクで紛らわす。

彼の愛情は歪んでいる。

だから、恋人と噛み合わない。

不器用な子。

「ずっと……か。ホントにいいの？」

「何が？」

そう……。

「だれか心配しない？」

「心配？……うん、しない。そーゆー仕事ってのもあるけど……皆、俺を信用してるし……ううん、もう皆、俺をほっとしてる。幻滅させたから。でも……もういいや……もう……どうでもいい」

そう言っただけで彼は目を伏せる。

それで君は一人なのか。

だけど、本心は違うくせに。

もういい人間はそんな顔をしないよ。

泣きそうな顔だ。

「ロマンチストなんだ？」

ボクが訊くと、長い時間をかけて首を上下した。

「……うん。女々しいんだ」

餓鬼だからか、現実を知りすぎているからか。

多分、彼は後者だろう。

現実を知るからこそ、ロマンに身を焦がす。

理想を求めて止まない。

「……蝶。だから」

「大丈夫ですよ」

ずっと一緒に幻想に浸ろうか。

「同情しましたから、ボクの傍にいなさい」

どうやら、隠されていたボクの母性本能を彼は引き出してくれたみたいだ。

「ありがとう、蝶」

彼は笑みを見せる。

愛想笑いではなく、自らを嘲笑っているようだった。

「それじゃあ、シャワーでも浴びようか」

エアコンで汗が引いてきたところで、ボクはダルい体を起こして眠そうな彼の頭を撫でる。唸る彼はボクの手を払ってシーツに潜ろうとする。

あれだけ喘いだのだから当然か。

「眠い？」

「うー……うん……」

「でもさ、出した方がよくない？」

「うう？」

唸る彼。

眠くて精一杯らしい。

だが、そろそろ食事の時間だ。

二人で泊まってから何も口にしていない彼に、今日こそは少しいいから食べさせなくては。

ボクはシーツに手を忍ばせた。

「ん！？」

そして、縮む彼の耳にボクは囁いてやる。

「ここ、洗わなきゃ。シーツ汚したくないし」

ボクが彼の四肢を擦ると彼は甘い吐息を吐いて、拒んでいるのか、誘っているのか、腰を揺らした。

「どうしたの？嫌？」

「嫌……じゃないけど……」

「けど……？」

「眠い」

そう真面目に返されるとこちらが困る。

ボクだって彼が眠いことぐらい分かる。だが、彼に眠られたら、彼はボクが彼を本気で喰いに掛からない限り起きてはくれなくなる。喰いに掛かったらボクは1日中彼を抱いて、ボクまでもが食事をできなくなる。

ただ、ボクは彼に食事をして欲しいだけだ。

死なれたら困るし、勝手に犯罪者にされたくない。

「眠いのは分かったから、体を洗ってから寝てよ」

「……………やだ…」

いつからこんなに我が儘になったんだ。

ボクは最終手段に出ることにする。

「……………？蝶！」

「玩具」

ボクは彼に入れた玩具を指で揺らした。

「あ…取れなくなりそう」

「やだ！蝶！」

彼がボクの腕を握る。

「ちよつと踏ん張れば取れるよ。こんなにとろけてるし」

“とろけてる”なんて初めて言ったかもしれない。しかし、事実、ボクを受け入れる彼の中は熱くとろけている。

熱く優しく、気持ち良さそうだ。なんかまた彼を抱きたくなってきたかもしれない。

「踏ん張るって…」

そこに注目してくれてありがとう。

ボクは彼に簡単な例を上げて囁いてやる。

「…っ…！」

理解すると同時に真っ赤になる彼。

「厭ならシャワー浴びよう？」

「……………」

無言。

おや、やりたいのか？

「奥まで入れたい？」

もう、彼の体は熟知している。

ボクは彼の体の中を探り、一点を撫でた。

ぴくっ……

「蝶っ」

「好きだろう？」

体はちゃんと反応しているのに彼はどうして分かってくれないの？
と言いたげに見上げてくる。

「君は嘘つきだね」

「嘘じゃない！」

彼は妙に食い付いてきた。しかし、これこそ嘘つきの証拠だ。

「いや、嘘だ。君は嘘つきだ。自分に嘘をついてばかりいる嘘つきだ」

「違う！」

否定する彼にボクは少々感情的になってくる。

ボクは彼の体に埋めた玩具を一気に引き抜いた。

「あー!!」

「違う？君は弱虫だ。君は傷付きたくないから自分にさえ嘘をつく。
そうだろう？じゃなきゃボクを求めたりしない」

「違う……」

まだ否定する彼。

「違くない。君は嘘ついて自分を守ってるつもりだろうけど、本当
は君は君自身を傷付けている」

「俺は……」

「痛くない？君は飢えているんじゃないのか？」
彼の瞳が濁った。

ああ…今、彼は揺れている。

「君は何を望んでいる？」
言ってから気付いた。

ボクの胸に引つ掛かつていたのはこれだ。
彼の本当の望みが分からない。

彼が全てをかけてを得たいと願うものが。
彼は瞳を揺らす。

不安そうな顔で……

「俺は……俺は……俺は……俺は……」
俺は？

「俺は……」

ボクは彼を抱き締めていた。

彼の肩を力一杯抱く。

彼が震えてる。

「蝶……」

「まだ君には重かったね」

彼がまた泣くから……

精神的に弱っている人はよく泣くらしい。彼も弱っているのだろうか。

ボクと見た目10は違う彼はまだまだ未熟だ。

彼はきつと未熟な体を持て余して未熟な心を傷付けて……

どうやら君は餓鬼なのか。

「蝶……蝶……蝶……」

彼は泣きながらボクの胸を叩く。

「蝶……蝶……蝶……蝶……蝶……蝶……」

彼の動きが止まった。

どうしたのかと思えば、彼は痙攣している。

「大丈夫？」

「蝶……ぎゅってして」

掠れた声。

頭をボクの肩に擦り付けてくる。

「ぎゅって……強く……」

「分かったよ。だけど約束して、夕食、サラダ一口でもいいから食

べて？」

君に拒否権はない。

だって、今の君にはボクが必要だから。

「うん」

「君が泣き止むまでボクは君を慰めよう」

君に同情してあげる。

今だけ、君に“人の温もり”をあげるよ。

「だから、今はボクだけで我慢してね」

虹色の飴玉

ネオンの光を反射して雨は足元をキラキラと輝かせる。

「行くところないのですか？」

「ぱしゃっ。」

騒がしい雨音に微かに混じる雑音。俯き、垂れた前髪の間からの視界にスニーカーが入る。

「親御さんはどうしました？」

周囲の音質が柔らかくなった。跳ねるような音になる。

「未成年が遅くにこんなところでずぶ濡れになって立っていたら危ないですよ？」

傘だ。

雨は止み、雨の匂いに混じって懐かしい匂いがした。

「お節介かもしれませんが君を放ってはいけません。帰るところがないのならこれを使って何処かに泊まりなさい。君はここにいてはいけない」

これを。と、手のひらに万札を1枚乗せて握らせた。

ネオンの光を反射して雨は靴をさらさらと流れる。

「いいですね？」

「ぱしゃっ。」

騒がしい雨音に微かに混じる雑音。俯き、垂れた前髪の間からの視界からスニーカーが消える。

周囲の音質が硬くなった。雨は突き刺すように落ちてくる。

「もう」

傘だ。

雨は止み、雨の匂いに混じって懐かしい匂いがする。

「僕の家来ますか？」

「ぱしゃっ。」

スニーカーを追うことにした。

35歳、独身。

数少ない友人達との飲み会の帰りだった。ほんの少しで真っ赤になる僕は会社ぐるみでの飲み会より友人達の方が―彼らは分かっているから―気遣いをしなくて好きだ。その日も自分でも不思議だと思っぐらい長く付き合っている幼なじみの友人の会社の愚痴を聞いた。友人は僕の性格を知っているから僕の反応を見ずに言いたいことを言う。僕はそれを聞いて自分の会社と比較する。そうだよな。と思えば僕は相槌をうった。

僕は重度の人見知りだ。

“事務的な用事で” “必要だから” そう言う時はまあいい。しかし、問題は必要外の人間関係だ。

無条件でなつく幼児や、寧ろ、僕自身が幼児となる高齢者は問題ないが、同年代とその付近は駄目だ。

人間不信に陥る。

長いこと付き合っている仲なら何ともない。しかし、通るすがり、上司、後輩…

怖い。嫌われている。不安。

全てはストレスとなり、体に消えることなく溜まる。

時折、死にたくなる。

口から溢れる言葉は“もう疲れた”だ。どうしようもなく胃の辺りがむしゃくしゃしてベッドにあたることもしばしば。ベランダに出て“死のう”なんて考えて結局、勇気が出なくておじゃん。

精神病かもしれない。きつとかなり病んでる。

雨の中を僕は歩いていた。友人達との会話は綺麗さっぱり忘れていた。

否、忘れようとしていた。

明日は会社は休みだからとゆっくりゆっくり歩く。

そしたら壁に凭れて雨にうたれる少年がいた。

赤茶色の髪が俯く顔と共に垂れ、拳は薄手のパーカーのポケットに隠れているようだった。

小柄な彼はただただ俯いていた。

僕も昔はあんなだった。人と目が合うのを避けて俯いて歩いていた。恥ずかしいから怖いからそう理由付けてひたすら黙々と歩いていた。ねくら？気色悪い？あっそう。

ならそう思えば？

僕は投げ出さずにストレスとして溜めた。しかし、僕は彼を見た瞬間、ああ綺麗だな。そう思った。

それほどに少年の俯く姿は美しかった。

そして…

「行くところないのですか？」

彼の孤独に足を踏み込んだ。

「服、大きいのしかなくてごめんなさい」
なるべく小さいものを。

風呂から上がった彼はヒタヒタと床に足をつけてやってきた。

見ればズボンを腕に掛け、ワイシャツ1枚だけを着て立っていた。

白のワイシャツから伸びる2本の足は細い。

パンツだけは洗ってどうにかドライヤーで乾かしたものを着てもらったが、

「ズボン、ベルトあるけど」
ベルトもまたでかい。

それにしても…なんて子だろう。

普通、知らないおじさんについてくるか？

そんなことするのは危険だ。親に教わらなかったのだろうか。

もしかしたら危険と分かっていてもついてきたのは危険でいいから。

どうでもいいから。なげやり。

自殺願望？

少年は僕を見上げる。

ルビーみたいだ。

これを緋色と言っただろうか？

「えっ…と」

どうしよう。

あっ…。

「名前は？」

そうだ。これだ。

先ずは自己紹介だ。

少年は開いた口をパクパクさせては閉じる。

「僕は笠岡響^{かさおかきょう}。君は？」

僕から自己紹介すれば話してくれるかな？

「…沢山」

たくさん？

名前？苗字？

「—ある」

沢山ある？

名前が？

「じゃあ、自分が一番好きな名前を教えてください」

「……ひ…わ…」

ひわ。

鶉のことだろうか。

「ひわ、お腹空いてますか？」

……。

ふるふると小さな頭が左右に振られる。お腹空いてないのか。

僕は飲み会で友人から札幌の土産と貰ったチョコレート菓子を鞆から出した。

夜に砂糖は虫歯の元だが。

「好きに食べてていいですよ」

僕はお風呂に入ろう。

「ひわ、寝る場所だけど僕のベッド使っていいー」
すう。

ひわは床に寝転がっていた。

胎児のように体を丸めてチョコレート菓子には手を付けずにすやすやと寝ている。

「疲れてたんですね」

そこで僕の糸が切れた。

思えば敬語をひわに使う必要はないような。

年下にでも敬語は癖で使うが、何となく、友人達のように気を許せそうな気がしていた。

まるで昔の自分を見ているようで…いや…違う。

臆病者の僕は離れ、ひわはまるで…離されたような目をしている気がした。

赤い頬を優しく撫でる。

人とここまで近くで触れ合ったのは久し振りだ。

「明日また考えよう」

熱がありそうなので、額にそっと熱冷ましを乗せてベッドに寝かせた。

僕は敷き布団を敷いて寝る。

思わぬ拾い物をしたな…

虹色の飴玉（２）

ああ、どうしよう。

予想的中かもしれない。

「ひわ、大丈夫？」

……高熱だ。

38・8度。

何度計ってもこれ。

ひわは薄い胸を激しく上下させ、荒い呼吸を繰り返す。

「……どうしよう」

本名かどうか怪しい“ひわ”と言う自称。

家出なのか孤児なのか……はたまた……僕の妄想か。

親を呼ぼうにも住所、電話番号、何も分からない。

病院に連れていこうにも身元不明、保険証も何もない。

下手したら僕は誘拐犯として通報されかねない。

分かるのは彼は下町の裏路地ですば濡れになりながら立っていたこと。

いやまで。

お腹空いてない。

そう彼はジェスチャーした。

家は近いのか？しかし、遠慮かもしれない。

「一体何者なんですか……」

眠るひわを見詰めていたらいつの間にか30分ほど経っていたことに気付いた。

「あ、洗濯物」

休みの日の日課がひわの熱で簡単に狂わされていた。

僕は洗濯物を干そうと重い腰を上げた。

ひわの衣服は靴下にジーンズ。今履いているパンツ。それと黒の長袖のＴシャツにパーカーと紺色のコート。

ここから彼の身元が分かるものはなにも…

「…あつ」

布袋。

紐が口に通してあり、それで絞って閉じるもの。

「びしょ濡れだ…」

一緒に洗ってしまった。

濡れてはまずいものが入っていたかもしれない。

ぎゅちりと縛ってある紅の組紐をどうにか解いた。

「琥珀？」

飴色のそれは琥珀だ。

雫の形をした精巧なそれは光を反射する。

「何…これ…」

火。

炎が中で渦巻いていた。

自然と僕はそれに取り付かれる。こんなに綺麗なものを今までに見たことがない。

「ダメっ」

僕が手にしたそれを熱が奪い去った。僕ははっと我に返る。

「…ひわ!？」

「ダメ…ダメ…」

諛言のように繰り返し、僕の伸ばした腕にくてつと倒れた。

「ごめん…なさい」

変わらず具合の悪そうなひわのそれを袋に戻し、濡れるだろうからハンカチを敷いて、寝かした彼の枕元に置いた。
暫くして、沸々と罪悪が体を蝕む。

「馬鹿…僕はもう」

昔じゃない。

苛つく。

駄目だ。

呼吸が早くなる。

壊したくなる。

死にたくなる。

臆病…こんな小さな少年のダメが僕を酷く蝕む。

この子はきつと怒ってない。ただダメと思っただけ。だけど僕には違う。

怒ってる。嫌われた。厭だ。

落ち着け。

僕はこんなに情けなくないはずだ。そうだろう？

ああ、僕はどうして拾った？

苦しい。

4連休だろ？

一人でおもいつきり休みを満喫するんだろう？何故家に？

何故？何故？何故？

何故僕は…

「牛乳飲むか」

少ない知恵袋からおひとつ。

イラつくのはカルシウムの不足が原因だ。

「きょう…きょう…」

何故声が？

ルビーがいる。

「…ひ…わ？どうしたの？」

「きょう、お外綺麗」

………お外？

まぶしい。

いつの間にか夕方だ。

朝、お昼…忘れてた。

「見せたくて起こしたの？」

……あ……間違えた。

これでは起こすなと言っているようなものだ。

「きょう……いや？」

「あ、ううん。ありがとう」

綺麗。

ありがとう。

「どう？」

「美味しい！」

よく話してくれる子だ。笑った顔が可愛い。

「ねえ、ひわ。お家は何処？」

「何処か遠く」

あ、素っ気ない。

食器のぶつかる音だけが部屋に響く。

苦手だ。

「夜歌」

へ？

「よか？」

「夜歌が多分……お家」

“よか”か……そんな地名があっただろうか？

「帰りたい？……その……よかに」

こくつ。

帰れないということか。

晩御飯を済ますとパソコンを立ち上げる。見慣れた起動画面。

ひわが熱で潤んだ瞳で僕の肩越しに画面を見入る。

爪先立ちの彼は足をふるふるとさせていたので、あまり動かさない体を動かしてひわを膝に乗せた。

はう。ひわが慌てて僕を見上げる。

「見たい？」

こくつ。

滅茶苦茶可愛い。

ひわを胸に抱いて僕はインターネット画面を出す。

「よ…か…」

よかと入力して変換する。

「ある？」

ふるふる。

漢字は分かっているようだ。

「字は分かる？」

「よるのうた」

夜の歌。

確かによかだ。

まあ、いつか。と『夜歌』で検索。

「童話？」

適当に一番上へ。

夜歌はシュヴァルツに伝わる童話の世界。

「死者の帰る場所…？」

天国…か？

「これがひわの帰る場所？」

絵本に描かれた夜歌の写真。

山。森。緑。湖。水。空。

スイスみたいだ。

「もつと綺麗なところ」

これは童話の世界であって決して現実世界ではない。

もう少し先を読み進める。

現在、災厄の影響で今この世界の何処かに夜歌の片鱗が存在しているとシュヴァルツで騒がれている。

わけが分からない。

「ひわはどうして夜歌からここにいたの？」

「捨てられたから」

ひわは捨てられた？

「誰に？」

「夜歌に…夜歌は俺を捨てた」

世界に捨てられた。

「何故？」

「要らないから捨てる。塵だから捨てる。違う？」

「……違うない」

僕もそう。

僕も要らないから捨てられた。

心の中で呼ぶようになった両親という名のあいつら。

母という名のあいつ。

父という名のあいつ。

あいつらの言葉が時に僕を死へと駆り立てる。

いや、駆り立てた。

「……………う…きよ…きょう…」

「あ、ごめん」

大丈夫？ひわは手を伸ばして僕の頬を触れた。

熱い。

「熱ある。お薬飲んで」

コップに水を注ぎ、薬を用意しながら考える。

夜歌とは何なのだろう。

童話の世界なのだろうか。

そんな非現実があるのだろうか。

夜歌という俗称のまた何処かとか。

「ひわ、お薬」

行儀良くカーペットに正座したひわはコップと薬を受け取るとにこ

っと笑んだ。

「きょう、ありがとう」

「沢山寝て、沢山汗かいて、早く熱を治そうね」

「うん」

別れは唐突だった。

朝起きればひわは消えていた。使っていた僕のベッドは綺麗に整えられ、ひわの衣服は消えていた。

僕は慌てて周囲を探した。

僕に気を使って出ていったのではないかと。

暮れまで探したが見付からず、大きな喪失感を背負って帰宅すれば、テーブル上の手紙に気付いた。

きょう、かつてに出て行ってごめんなさい。

きょうに会えてほんとうによかった。

夜歌をどうしてもあきらめられないからさがしに行きます。

きょうみたいなりっぱな人になったら、きょうに会いにここに帰ってきてもいい？

きょうが待つてくれたらぜったいに会いに来るから。

きょう、ありがとう。

たいへんお世話になりました。

きょう、大好きです。

ああ、人との出会いもまたいいのかもしれない。

くすつ。

「いつでも帰ってきていいよ」

ひわ。

惨殺揭示―ゼロ―（前書き）

これもR15とさせてもらいます。

「あるホテルの」は直接的な表現を避けた性的描写がありました
が、こちらは残酷描写多ということでR15です。
ご注意ください。

惨殺揭示―ゼロ―

「一緒に寝よ？」

柔らかな布団にくるまる二人。一人はもう一人の無垢な寝顔に笑みを溢した。

「お手々出していると冷えちゃいますよ？」

そう囁いて布団からはみ出た軽く握られた拳を自らの両手で包み込む。

「う？…あ…」

その思いの外の温かさにゆるゆると瞼を開く一人。

「起きちゃいましたか？」

一人が訊く。

「…起きちゃいました」

一人が応える。

「眠いですか？」

一人が訊く。

「…眠いです」

一人が応える。

「もつと寝たかったですか？」

一人が訊く。

「…もつと抱きたいです」

一人が応える。

「どうぞ」

…―旦那様―…

「10人」

「ふーん」

「先に言った通り、こいつらに戦闘能力は皆無」

「皆無ならどうにでもできんだろ？なんでわざわざ」

「我々がただの人間に刑罰を与えるはずないだろう？」

「まあね。被害もないのに危険だからって理由で駆除。なんて知れたら凄いいことになるしね」

「だから貴様だろう？」

「ただの人間がただの人間を駆除。なんて知れたら知れたで別に普通だからねえ」

「報酬は3000万。無論、成功報酬。後払いだ」

「どーも」

「今回は随分と乗り気だな」

「あんたには関係ないだろう？」

「そうだな」

「すればいい、それだけ」

「それだけだ」

「あ、そーだ。あんた、抱いたことある？」

「貴様に色恋か？」

「鬱憤が溜まってんのさ」

「抱くなんて虚しいだけさ。それはそれでいい薬だけだな」

「そつ。あんたにしては珍しい考えだね」

「何だか貴様に軽くあしらわれるのに慣れてきただけさ」

「そつ？男でも抱いてみる？」

「貴様か？体だけだろ？抱きたいが後が怖い。他の奴らみたくなりたいくないからな」

「賢明だ。俺を本気でモノにしたいなら。今回の報酬みたいなはし

「た金じゃたりない」

「あればいいのか？」

「あんたみたいな下っぱに払えるとは思えないけどね。一生、全身で奉仕してやるよ。そして骨抜きしてやるよ」

「いいな」

「快樂に溺れさしてやる」

「ふっ… 成功を祈る」

「祈らずとも成功さ」

「だろうな」

「あんた面白いな。仕事以外でも来なよ。持ってきた金の分だけ遊んでやるよ」

「とんだ奴だな。ママが泣くぞ？」

「そういう奴だから仕方がない」

惨殺揭示

「おめでとう。君は俺が殺した2番目のモノになるよ」

枯草色の髪。あれは…

「司野！？」

くるつと振り返った青年…男の人は、眼鏡の奥の瞳を見開いて振り返った。

「崇弥！？何で崇弥がこんなとこ居るん！！？」

そう言った司野は満面の笑みを浮かべて俺に走り寄る。

あ、可愛い。と、思ってみたり。

「仕事なん？」

「……………」

つい答えに口ごもると司野と行動を共にしているらしい瑞牧みずまきが俺の泳いだ目線を捉えた。

あの人は苦手だ。

「司野、仕事中だぞ！」

仕事中と言う割りにかったるそうに目を細める瑞牧はくわえた煙草の灰を床に落とす。

俺は心中で床はあんたの灰皿じゃないし、第一ここはあんたの会社じゃないだろ！とツツコミを入れてみた。

「ふーん。用心屋の生意気小僧か。何でお前がこんな寂れた製薬会社にいんだよ」

自らの発言を忘れて興味深そうに俺に質問する。靴を鳴らして前に

立つと身長差から圧倒的な圧力を感じる。俺はヤル気の失せている瞳を睨みながら答えた。

「仕事だ」

政府からの交換条件。

「仕事：用心棒が金のない倒産すれすれの会社で仕事か。赤字まみれの社長を狙う馬鹿なんていないだろうし……仕事ねえ」

探るような顔。否、何しに來たのかとつくに知っているのかもしれない。

すると、司野が俺の着たパーカーの帽子を引つ張った。

「いいやん、仕事なら仕事で。崇弥、いつ仕事終わるん？なあ、今日一緒に帰らへん？^{るう}琉雨ちゃんに鍋誘われてんのや」

今日の夕食は鍋か。

確か今朝、何鍋がいいか皆に訊いていたような。

俺はそれに何と答えたのだろう。

「崇弥？」

その声に現実引き戻される。司野が答えを待つて見上げてきた。

「残念だけど……」

司野が居たんじゃ仕事が終わらないよ。

「司野、行くぞ」

「そんなあ」

きつちりと着こなしたスーツの襟首を掴むと、瑞牧は司野を引き摺る。されるがままの司野はぶくつと頬を膨らませた。

「おい、用心屋」

と、煙草を人差し指と中指に挟んだ瑞牧はおもいきり俺を睨んだ。反射で背筋を伸ばしてしまう。

「何ですか？」

「俺達はあと1時間もしたら帰る。行動を起こすならそのあとにしろ。俺達を巻き込むな」

「……………」

多分、いや、絶対に瑞牧は分かっている。

俺の仕事がどういうものか。

そう、こちら巻き込むつもりはない。寧ろ、居ては困るのだ。

「鍋、食おな」

ひらひらと無邪気に手を振る司野。俺は多分、曖昧な表情でそれを見たと思う。

司野はぽけっと口を開けて首を傾げていた。

惨殺揭示（2）

何で暗かつたんやろ。

「なあ、瑞牧^{みずまき}さん。崇弥^{たかや}どうしたん？」

何だか含みのある会話をしていた瑞牧さんに俺は尋ねた。

「俺が知るかよ。お前、父親だろ？」

そう言われて本当の父親だと自覚する。

確かに俺は父親。崇弥の秘密を親として知っている。

そのことを将来、崇弥と話し合うつもりはないし、それで受けた傷を癒そうとも思わない。

ただ、崇弥がそのことで無理をしないよう見ていたいただけだ。

「ちよつと…すつごく元気あらへんかった」

「俺の推測だが、アイツは多分危険だ」

また危険。

心を赦すな。蓮君の言った言葉が胃の辺りに重くのし掛かる。

「誰かが赦してやらんと居場所をなくしてまうやん…」

「司野^{しゆ}？聞いてたか？」

「…多分危険って言ってたで」

ついつい瑞牧さんの声が神経の中から締め出されていたようだ。俺は姿勢を正して項目にチェックを入れながら瑞牧さんの話に耳を集中させる。

「用心屋は用心棒を貸し出す店。それ以外でも俺達の時みたいに仕事を手伝ったりと半万屋だ。アイツの肩から下がってたの何だか分かったか？」

黒くて細長い。

「弓入れてる奴みたいだったで？それにしては小さかったなあ」

何だったんやろ。崇弥はその身にそれしか持っていなかった。

瑞牧さんは携帯用の熊さん灰皿——可愛い熊の顔と思いきや、獲物を狙うマジな熊の顔だった——を取り出すと短くなつた煙草を押し付ける。

「あれの中身は刀だ」

「刀？」

銃刀法違反…。

「あの反り。あの端から見て分かる重量。間違いなく中は日本刀。アイツの家は武術の家だろ？」

と訊かれても…。

「知らんで」

「“崇弥”は緋沙流^{ひさ}武術の本家だ。それくらい父親として覚えとけ」

「崇弥は強いけど武術家やつたんか」

「お前、アイツの強さを生で感じたことあるのか？」

瑞牧さんは真剣な顔して訊いてくる。立ち止まつた瑞牧さんに合わせて俺も立ち止まった。

「力あるで。組み臥せられたら終わりや。よっぽど動揺しないと隙見せへん」

「緋沙流は魔法と武術を織り混ぜたもの」

「そんで？」

「あれは魔法を使える者、すなわち軍人用の武術の大元だ」
軍人用の武術。

「今の軍で使われているのは緋沙流を極々簡単にしたもの。緋沙流の基本中の基本みたいなものだ。魔法の制御の仕方。各武器の使い方」

つまり、

「緋沙流は人殺しの武術」

「だからって崇弥は人を殺したりせえへん！！！！」

『洗祈は過去に殺人を犯している』

これは、蓮君が俺に告白してくれたこと。

『友人を殺した…と。あいつが言った。僕に』

またも蓮君の言葉が胃の辺りに重くのし掛かる。

「……………司野、よくきけ。緋沙流は魔力が高い程その力を発揮できるんだ」

「崇弥の魔力は…」

それは化け物のように膨大だと。

「そんな奴が獲物である刀を携えてるんだぞ？」

「人を殺すん？でもー」

「殺人とは言つてない。しかし、それに準する何かだ。俺達は何故、監査をしに来たのか忘れたのか？」

『ここ、行くぞ』

『あれ？瑞牧さんと？』

『その言い種はなんだ？』

『でも何で二人なん？新人の頃は未だしも最近は立派な仕事人として一人で行かせてるやん』

『敬語。ま、あれだ…命令だ』

『命令？瑞牧さんに命令！？』

『よたが夜鷹がな』

『瑞牧さん恐いから、皆が仲都なかと総務官殿に頼ったんやな』

『生意気になりやがって』

「命令…やろ？」

「渋い顔した夜鷹からな」

瑞牧さんは渋い顔をして言う。そして、本日5本目になる煙草を取り出そうとして箱が空。

瑞牧さんはチツと舌打ちをした。

「命令はこうだ。辻一製薬を見てこい」

「普通…やな」

「司野由宇麻宛^{ゆしま}の命令だ」

初耳。

わざわざ俺宛。

「もう見終わったから帰るぞ」

会話を切ると、瑞牧さんは俺を置いて早足で先に進む。

「司野、早く来い!!」

瑞牧さんの怒鳴り声。焦りが感じられる。

「せやかてー」

「部下を見す見す危険な目に遭わせられるかよ。命令には従った。

だから帰るぞ!」

だから瑞牧さんがついてきた。そういうことなん?

渋い顔した仲都総務官が出す命令。

その命令は総務官より上の人。

交換条件

緋沙流武術

刀

崇弥の仕事

俺の足は止まって動かない。

「瑞牧…さん……その命令は…多分…いえ…絶対に—」

「1時間。司野、帰るぞ!!」

俺は来た廊下を戻っていた。瑞牧さんの声が廊下に木霊する。
人のいない廊下を俺は崇弥を探して走った。

あの命令は、

日本政府。

「ダメや!! 崇弥!!!!」

詮索はしないと約束した。

けど、

「もう関わったらあかん!」

惨殺揭示（2・5）

「撃退人数、10」

10人。

「潜伏場所、20」

20階。

「目標時間、2」

2時間。

「注意事項、OK」

さあ、

「現在、午後6時58分」
開始だ。

パンツ……

「銃声か！！？司野^{しの}！」

^{みずまき}瑞牧はかなり上で聞こえた発砲音に眉を曲げて由宇麻の消えていった方向に向かった。

「崇弥^{たかや}！崇弥、どこやー！！」

足を縛れさせながらも必死に走る。一つのフロアを走り見て次の階へ。

「どこにいるんやー！」

嫌な予感がする。

ずぶ濡れで出血させながらも俺を見付けてくれた。ならば、次は俺が崇弥を見付ける番。

由宇麻は全器官を集中させる。

少しの変化も崇弥を見付ける手掛かりだ。

しかし、

それは突然だった。

「うっ」

トイレから誰かが現れ由宇麻の口に布を当てた。

一瞬で意識が遠くなる。由宇麻の暴れる四肢は直ぐに力をなくして垂れ下がる。

「囧にさせてもらっ」

そう聞こえた気がした。

「7。あと3。18。あと2。1。あと1」

上は殺せ。

下は動けなくした。

洗祈は感情をシャットアウトして前に進む。

惨殺揭示(3)

血。

「マジかよ」

みずまき 瑞牧は思わず耳を塞ぎたくなるような現実顔にしかめた。

「たすけて……くれ……」

「化け物が……化け物が……」

「……痛い……痛い……痛い……」

廊下に転がる人々。

彼らは両足の腱だけを的確に切られている。

床に転がる人数分の拳銃は全て銃身が何かに貫かれていて使い物にならなくなっていた。

「誰が……」

など言わなくても分かる。

用心屋の店主。化け物と呼ばれている元軍学校のわけあり特待生、たかやこうき 崇弥洸祈の仕業だ。

「た……助けて」

「今、救急車を呼ぶ」

用心屋の邪魔をすることになるとは言ってられない。寧ろ、アイツのせいで有能な部下が巻き込まれたのだ。

しかし、救急車を呼ぶ前にすることがある。

「おい、スーツ着た餓鬼を見なかったか？」

手近な奴を掴んで壁に凭れさせる。

司野は何処だ。

「……知らない……」

「ふん、そうか」

「し……の……ゆ……ま……」

しのゆつま 司野由宇麻。

確かにそう聞こえた。

「司野を知ってんのか!？」

踵を押さえて踞る女性。

女でも容赦なく切ったのか!？」

「司野…由宇麻を…使え…そう言われた…の…」

「誰にだ!！」

「うつ……」

沈黙する女性。どうやら気絶したようだ。

他の者も顔を青くしている。瑞牧は社員フロアの電話をひっ掴むと救急車を呼んだ。

一通りの応急措置をしてやると、短い休憩をする。

そんなことしている場合じゃないが用心屋がいるフロアに息も絶え絶えに行く勇氣はない。

状況を悪化させるだけだ。

それにしても、

「司野を囷にするために命令を下した奴がいるのかよ」

そいつは政府―クロス―に庇護されながらも監査部を裏切った。最低な奴。

「一体、アイツは何者なんだ」

緋沙流習得者^{ひさ}だろうが元軍学校の特待生だろうが何故、アイツが中心で悲劇が起こるんだ。

力ではない。

身元ではない。

それこそアイツは……

化け物だ。

惨殺揭示(4)

熱い。体が熱い。

痛い。体が痛い。

動かない。体が動かない。

狂いそうだ。

「うつ…」

「^{しの}司野！」

あれは崇弥^{たかや}。

俺の家族であり俺の息子。

「…崇弥」

血塗れやで…？

痛いんちゃうん…？

あ…泣かんでや。

そんな泣きそうな顔すんなや。

「や…め…助け…て…」

第三者。

誰や？

崇弥…その刀、人に向けちゃいかんで…危ないやろ？

「お願い…だ…金なら…」

お金で解決はいかへんな。

でも、その足痛そうやな。

臆、切れてんとちゃう？

「いくら…だ…？」

だからお金じゃ崇弥は靡かへんで。な、崇弥？

「アンタの命、3000万で買ってくれるんだ。アンタ、それ以上だせる？その代わりに雇い主を消さなきゃいけないから…ざっと30兆3000万以上。大目に見ても、だけど」

何言ってるん？命は売買するもんやない。

崇弥…どないしたん？

俺に言えないん…？

「む…り…だ。しかし…100億では―」

「桁が違っただけ。アンタにつけば俺は国を敵にしなきゃいけないわけ。いいじゃん別に…アンタ、国に死刑宣告されてんだぜ？お国の為に…さ？」

崇弥…駄目や。

何でそんなになってるんや。

いけない。

「たかつ…や」

「司野、直ぐに塵を片付けるから安静にしてて」
違う違う違う。

「だ…め」

駄目や。

命を軽く扱ってはいかん！

崇弥…。

「かえ…ろ？」

帰ろう？

「帰れないや」

「へ？」

「もう…帰れない。こんな俺に帰る場所なんてないから…」

イヤヤ。

崇弥…。

「何度…言わせりゃ…気が済むん…や…崇弥！」
「……………司野」

動け足。

動け手。

全部俺のやる！

動けや！

「殺しちゃ…あかん。あかん…絶対にや！」

「司野、動いちゃ駄目だ！」

崇弥、傍に居させてや。

なあ、居場所ならあるやんけ。

「俺の…隣…じゃイヤか…？」

俺の隣、空いてるんや。

崇弥に居てほしいんや。

「司野！」

温かやな。

君が抱き締めてくれるとなほあって温かくなるんやで。

だから、

「父さんの…腕ん中…帰って…きてや…」
だから、

「…帰ろ？」

俺が赦す。

崇弥の全てを赦す。

だから……

一緒に帰ろう？

惨殺揭示(5)

「でも…俺は…」

こいつを殺さなくてはいけない。

「殺さない…」

それこそ違反になる。

俺の大切な人が

お前が

殺されてしまう。

こいつは悪いことをしているんだよ？

麻薬の密売。

これで多くの人々を殺しているんだよ？

殺人者。

政府が法律が死刑宣告した。

だから殺していいだろ？

俺の罪に罪を重ねるだけで大切な人が護れるなら俺は…――

人殺しになれる。

「帰ろう？」

砂漠の瞳。しかし、それは濡れていた。

瞳を潤ませた君は腕の中から俺を見上げる。

初めて会った時、

俺は君の目に惑わされた。

俺は君の髪に惑わされた。

好きだよ。

「司野^{しの}、俺の為に喋らないで
全てが狂う。

殺せなくなる。

この震えている男の喉元を一閃すれば男は死ぬ。

「お願い…やめてや…」

ああ、抱きつかないで。

振り払えない。

「…俺は君を失いたくない」

殺さないと失う。

悪党と君。

罪と喪失。

俺は君を取る。

俺は罪を取る。

「司野…いい子だから大人しくしてよ…」

ほら、君が抱きつくから顔に血がついたじゃないか。その柔らかな
白い頬に。

君は汚れちゃいけない。

離れて。

離れてよ。

俺から離れてよ。

「大人しく…なんかせえへん」

綺麗な瞳。

綺麗過ぎて見えない。

しょうがない。

アイツを殺そう。

「崇弥^{たかや}っ！……！」

「ひっ！」

さあ、狙おう。

刀は長くていい。

ナイフより長いから血が余り飛んでこない。

さつきは体勢を低くして狙ったため返り血をもろに浴びたが今は違う。

するりと落ちる君の手。

「司野？」

「崇弥のバカっ！！！！！！！！」

完全に油断していた。

俺は突き飛ばされていた。受け身が取れずに尻餅をつく。

「司野！」

「絶対に…駄目や！」

「退くんだ！！」

そこにおいては悪党を斬れない。

退くんだ司野。

君が庇っているのは最低な奴なんだぞ。

カチッ

「なっ！！！！！！？」

「司野！！！！！！」

「う…ごくな！」

司野の首に掛かる腕のその手首には…

「超小型爆弾」

ご丁寧に解説をする男。

刺激するな。

司野が巻き込まれるぞ。

刺激するな。

惨殺揭示(6)

血が…

一面が真っ赤だった。

「……………!!」

人の叫び声。

耳が痛い。

視界が真っ赤だから何が起きたのか分からへん。
拭わなきゃ。

何を？

人の血液を。

「崇弥^{たかや}！」

叫んでいた。

「崇弥崇弥崇弥崇弥崇弥」

何処にいるん？

“崇弥”

血が、

何故か拭っても拭っても消えへんのや。

「たかー」

「俺はここ」

そこにいたん？

「た…かや…血や…」

拭っても消えないはずだ。何故なら辺りが血溜まりだからだ。
生暖かいぬめつとしたもの。

「崇弥！」

吐きそうになる。

血が…血が…誰の…誰のなん！？

「……………」

悲鳴。

「腕…貫いてる…」

刀が男の腕を貫いていた。

崇弥は男に跨がり、二の腕を刀で床に縫い付けていた。
平然と刀を突き立てていた。

「崇弥！早く抜きたい！！痛がつてるやんか！！！」

「司野、抜いて欲しいの？」

そう静かに訊く。

「この爆弾が発動したら俺も司野しのも吹っ飛ぶんだよ？」
言いながら刀を肉を抉るように回す。

再び絶叫。

「いいから！抜くんや！！！！！」

くすりっ

微かな微笑と共に崇弥は一気に刀を抜いた。

「っ……………」

どうして…

血が噴き出した。

血を塞ぎ止めていた刀が抜かれたことで留めなく流れ出す。
今となつては遅い。

俺は血濡れたスーツを脱ぐと止血しようとして、俺は崇弥に赤子の
ように抱き抱えられた。

手から落ちたスーツは血の中に沈む。

「何してんの？君が抜いてって言ったんだ。君が死を早めたんだ」

そんなこと俺は全然…

「……知らん…かった」

「言い訳にはならないよ」

言い訳にはならない。

「確かに…けど…」

言い訳に言い訳を重ねてる。でも、そんなつもりはなかった。

それだけは分かって欲しい。

「あの…な…あう…な…」

悲しくて涙が溢れてくる。

もう何がなんだか分からない。

すごく悲しい。

「司野、ごめん。泣くなよ」

と、頭を優しく撫でてくる。

揺れる。

揺れる。

俯いて見えるのは血。

ふと…聞こえるサイレン。

救急車にパトカー。

「崇弥…あの人…今ならまだ間に合う…せやから…」

「だから？」

離してくれへん。

腕に力を込めて離そうとするが逆に体が密着する。

「離して！」

「矢駄」

「…うつ」

微かな呻き声。生きてる。

「崇弥離せ！」

「無理」

離さないなら離させてやるだけだ。

おまじない。

『いいかい？崇弥に力に向かっていったら負けだ。君みたいのは口で向かっていつでも負けだ。だから…』

「崇弥！」

『脇腹を擦れば一瞬さ』

「っああ！！！！！！？」

崇弥の腕の力が緩む。

そこを見計らって俺は地に足をつけた。こんな状況だが蓮^{れん}君に感謝をしておく。

「今助けてやるからな！」

俺は男を助けようと手を伸ばし、

「ち、近付くな化け物お！！！！！」

視界が白に染まった。

惨殺揭示（7）

「司野！……！！！！！！！！！！」

強い力が腹に加わる。

誰かの腕。

「目え瞑つとけ！」

誰かに抱き抱えられ頭をその肩に押し付けられる。

ガシャン！！！！！！！！！！

窓の割れる音に爆発音。

凄まじい音は由宇麻の耳から音をなくす。そして、彼は視界も頭も真っ白になった。

「司野！……！！！！！！！！！！」

この声。

この匂い。

「み……まき……さ……」

「司野、骨折つてないか？」

慣れ親しんだ上司の顔がフルで瞳に映る。

手、腕、足、足首、腹、胸、肩、首、頭。

「だい……じょ……ぶ……」

「よし、ちよつと我慢しろよ」

一度瑞牧の顔が由宇麻の視界から遠ざかる。

そして、抱えられた。

「30過ぎの男を抱き上げる日がくるとはな。にしてもお前、軽いな」

ぽふつと床に下ろされる。

と、

「緋！」

あか？

「緋？大丈夫ですの？意識がありませんわ
何か白いもの。」

そこに緋色に染まったものがあつた。

「たか…や…！」

ぐつたりと白いものに体を預けていた。その体を赤毛の女性が探っている。

「崇弥^{たかや}…！！」

「司野、落ち着け」

瑞牧が体を乗り出す由宇麻を押さえると救急医を呼んだ。

「あなたの名前は？」

「……………」

「答えてください」

「なんやこいつ。」

由宇麻は医者^{いしや}の胸ぐらを掴んで立つと突き飛ばした。
立てる。

「何するんですか！」

「邪魔…すんな！俺は司野…由宇麻！3足す20は23…ええか！
…崇弥を…息子を…診やがれや！！！！」

捻^{ひね}っていたらしく痛む足を引き摺^{ひきず}って洺^{けい}祈のもとへ。洺祈の傍に座
ると落ちた手首に指を触れて脈を診る。

「大丈夫や…」

「大丈夫かしら…右腕が折れてますわ。それに左足首も」

赤毛の女性は近くの木片で腕と足を自らはんかちを裂いて添え木
をしていた。

「誰や…」

「緋の知り合いの月葉^{つきは}ですわ。ほら、ちびっこさん…ってあなた支
えられなさそうね」

由宇麻が立とうとして足首を押さえているのを見る。月葉は電話を
かけている瑞牧を呼ぶことにした。

ぐるっ。

「伊予、ありがとう。あなたのお陰よ。彼を病院に届けてくれないかしら」

彼：由宇麻を目で示すと、白いもの…巨大な狼は喉を鳴らした。ぽけっとしている由宇麻の襟首を噛むと前肢を浮かし、

「崇弥あ！！！！」

暴れる。

「あ、司野！」

瑞牧が由宇麻に気付き、月葉に捕まった。

「瑞牧：夏輝^{なつき}：さん？ちびっこはあたしの友の信頼できる子が病院まで運びますから…手伝ってくださいませんか？」

「牙が恐いんだが」

「煩いですね。伊予、宜しく願いしますわ」

由宇麻の体力虚しく洗祈と離れさせられた。

信用商売

「マジかよ……」

「マジだね」

生まれて初めて座った。

「車椅子かよ……」

足に腕の骨を折るだけでもなのに、更に不幸なことに右腕に左足ときた。

松葉杖どころではない。

馴染みの加賀^{かが}が決定したのは、

「看護師さん一人つけて当分は車椅子生活だね」

「って……さあ、苛め？」

「だってねえ。嬉しいでしょ」

だってじゃねえ。

若い美人看護師だ。

当然、女の人。

色々な意味で食欲旺盛な19歳男児の世話なんて普通させるだろうか。

「確かに年上の美人のお姉さんは好きだけど……」

トイレに風呂、食事に着替え。全てを歳の近い美女に世話してもらうなんて……。

「もう俺……世間に顔出せない」

「じゃあ僕が——」

「殴るぞ。男の看護師いねえのかよ？」

男同士なら別になんだけど。

「周防^{すおう}には男性看護師はいないんだよ。美人看護師が細心の注意を払ってお世話しますを宣伝文句にしようかと考えてるからね」

因みに用心屋は葵を代理の店長として普段通りだ。崇弥の実家は末だに軍の監視下。と、知り合いは皆忙しい。

「でもさ、洗祈君一人じゃ無理だよ？ほら考えてごらんよ。一人あたふたして怪我悪化させて、お漏らしなんてしたら末代先までの恥だね」

まったくその通り。

ガラッ

「ふふふ。緋、あたしがその役買ってでましようか？」

来月葉の登場。肩に乗った白いものが小さく蠢いた。

「遠慮する」

「けれども…あたしの推測だと、あと15分したらトイレに行きたくなるんじゃない？ありませんの？」

なんて的確。

「そうゆーこと言わないでくれる？マジで行きたくなるから」

「それはさておき、あなたに渡すものがありましたの」

あっさり話を変えられた。

加賀はただただ見守っている。美人看護師のお姉さんは痺れを切らしたようだ。花瓶をと言って花のない花瓶を持って行ってしまった。

「渡すもの？」

「主人の葬式で渡そうと忘れてましたわ」

と、白いものが耳を立てた。

耳を…？

「伊予ですわ」

と、小さな白い犬が洗祈の膝に飛び乗った。

犬…！？

「なにこれ。病院に動物は禁止だぞ」

「魔獣ですわ」

平然と彼女は一言。

「伊予……ね……何で？」

「慎の友、夏蜜柑の子ですの」

これは巨大な狼になるわけだ。

「夏蜜柑の子で伊予柑。もう一体の金柑はこちらに来る前に蒼子に渡してきましたわ。あら、なついてますわ。あなたの魔力はいい匂いですものね」

身を乗り出した月葉は伊予を下敷きに洸祈に鼻を近付ける。ぐるつと鳴いた伊予は洸祈の肩に収まった。

「重っ」

そこに、再び来訪者。

「崇弥、来たよ」

「二之宮？」

二之宮ははふつと息を吐くと近くの椅子を掴んでどかりと腰を下ろす。

「何しに――」

「世話係りに決まってるだろう？僕は夜の仕事人だから」

「もしかしてあなた……ウンディーネかしら？」

「ご名答。来月葉」

ふふふ。と二人は奇妙に笑う。

「思えば二人つて似てるな」

そう洸祈が言えば無視される。

「男だったのは驚きだわ」

「洸祈って書いてあるから、てつきり変態だと思ってたよ」

「おい！なんで俺の名前使ってたんだよ！」

そう洸祈が言えば無視される。ふくれっ面をした彼は伊予のふわふわした毛を握った。

それに対して、伊予は欠伸をするだけだ。

「あなたの美声のファンは男だけじゃないのよ」

「今後もよろしく」

「ふふふ。いい出会いをしましたわ。ありがとう、緋」

そうこうしている間に、何か感謝された。

「伊予をよろしく」

「ああ」

服の裾から鼻を突っ込む伊予の頭を叩いて月葉を見送る。と、美人看護師が戻ってきた。

「お姉さん。崇弥の好みのタイプだけどあとは僕がやるから仕事頑張つて。あとはじめましての加賀先生も」

加賀の目が泳いだ。二之宮は加賀を見詰めて放さない。

加賀は深く息を吐くと、小さく頷いた。

「あ、ああ。洸祈君の知り合いの方なら…寝る場所は――」

「添い寝だから」

ふふふ。と月葉さながらの笑みを浮かべて無邪気に伊予と遊ぶ洸祈を眺めて、二之宮は加賀と看護師を追い出したのだった。

信用商売（2）

「最悪」

「ほら、上体起こしてよ」

肩を後ろに押されて渋々上体を起こすと、首に温かい布が当てられた。

「もうトイレまでついていつちやっただしさ」

お湯に浸して絞ったそれで二之宮にのみやは優しく洗祈しきの体を拭いてあげる。次に、ズボンを上に上げると露になった足首を拭いた。

「ひゃっ！やめっ」

上がりきらなかったズボンの裾から手を忍ばせて股を拭くときた。洗祈は動く左手でそれを引き抜く。

「そこはいいから」

「崇弥たかやって本当に綺麗だよね」

「変なこと言うな！」

ズボンを下げた二之宮は傍らに置いた服を抱えた。

「お洋服着せてあげますからね！。はい、先ず左手を通して……いいこ、いいこ。次はそっち。いくよ……はい、お仕舞い。良くできたね」

「わざとらしいんだよ！」

「あの美人看護師ならこうなってただろうなって。崇弥、トイレは我慢しなくていいんだからね？体に悪いから」

洗祈の腹を擦った二之宮は彼の頭を胸に抱いて優しく話しかける。静かになる病室。

「恥ずかしくて死にたい……」

知っている仲とは言え、ズボンからパンツまでを下ろしてもらい、排泄している間ずっと支えてもらう。

彼には耳栓をさせているが……

じゃあ、尿瓶か？

最悪だ。

なんかいろいろとヤダ。

今もトイレに行きたいのに必死で我慢している。

洸祈は流れる涙を拭えずに唇を噛んだ。

最近、簡単に涙が流れるようになった。

「厭だな……」

なんかもういろいろと厭だ。

「?…僕は僕の意志で君のお世話をしに来たんだ。恥ずかしいのは分かっている。だからこそ僕を頼って」

「っ……」

「座って」

車椅子をベッドの脇に付けた二之宮は洸祈を支えて椅子に導く。

その間、洸祈は呪文のようにごめんを繰り返していた。

「ごめん…ごめん…ごめん」と。

「はあ〜」

「お疲れ様」

ベッドに身を沈める洸祈。二之宮はその頭を撫でた。

「崇弥、暇な時間何する気なわけ？」

「することなんて……ぐるるう。」

「伊予と遊ぶ」

「寝てるから。そうそう、これ飲んで。治りが早くなるから」

二之宮は医者だけと医者じゃない。

しかし、詰め込まれている医学の知識と経験は他の医者に退けを取らない。洸祈は二之宮の差し出した緑の液体を飲み干した。

「甘い…」

「苦くない。」

「凄いでしょ」

こくこくと洸祈は首を上下に振る。

「じゃあ、一緒に遊ぼう」

「へ？…んっ…」

唇の端に残った液を拭うように舌を滑らせた二之宮はそのまま口付けへと変える。

「ん…あ…はふ…」

「最近会えなかったでしょ？鬱憤、溜まってたんだ」

「何で…俺…なんだ…よ！」

「だってほら、崇弥って可愛いから。その目とか頬とか手とか足とか。皆、可愛いんだもん」

「可愛いと言われても…なあ？」

「崇弥」

ふと真剣な表情を見せるのは二之宮。彼はその顔とは裏腹にベッドに入り込むと、洗祈の耳朵を噛んだ。

「お金貰って男と寝たって本当？それもジャッジメントと」

耳を塞げないように耳朵をくわえたまま彼は訊く。

「寝てない」

「じゃあー」

「襲われた。最悪」

つうと頬を伝う涙。拭えずに洗祈は舌打ちをした。

「だけど、どうして流れるんだ…」

「どうせ金だらって。札束放り投げてさ、クロスのブローチ見せつけて俺を放置しようとした」

「崇弥…」

「だからさっ…両腕折ってあげたんだ」

と…

さも普通に

さも無邪気に

さも可愛らしく

彼は泣いて笑った。

二之宮の曇らせた表情に洗祈はかくつと首を傾げる。
何で？

「怒ってる？」

「……………崇弥」

「何？」

「君が政府に頼る他ないのは分かってる。それを盾に体をいいように弄ぶなんて最低な奴らだ。だけどー」

「腕を折るな？何言ってるの？二之宮は俺に好きでもない奴に体売れって言うの？また館の清せいのようになれって言うの？」

「洸祈！！！！！！！！！！」

体の自由のきかない洸祈を二之宮は凄いい形相でベッドに押さえ付ける。

くすんだ金髪がさらりと二之宮の頬にかかった。そして、金と紺の瞳が歪む。

「どうして…君は…今回の依頼だって…」

言いかけて、二之宮ははつとした。

「今回の仕事、盗み聞きしてたんだな」

洸祈は曖昧な顔で二之宮を睨み付ける。

「……………」

二之宮は顔を背けた。

「してたんだな。悪いか？」

それを肯定と受け取った洸祈は逆に挑むように言う。

「……………悪い」

二之宮は答えた。

それは否定。

今、洸祈を否定することは、二之宮自身をも否定することになる。

それでも否定する。

「お願いだ…」

二之宮は呻く。

「体を大事にして…人を大事にしてよ…」

「あんな奴ら大事になんかできない。俺の大切な人達の安全が保障されたなら…俺は政府も軍もぶつつぶす。跡形もなく。人も建物も

武器も。全部だ」

「駄目だよ。絶対にだ」

「二之宮の言葉、矛盾してる」

悲しい矛盾。

「僕は…」

二之宮の言葉は途切れる。

体を弄ばれてほしくない

人を傷付けてほしくない

矛盾。

一つを取れば一つを捨てなくてはいけない。

どちらもは無理。

「二之宮はやっぱり変わった。変わらないのかも知れない。きっと、二之宮は出会ったのが俺じゃなくても同じことを言う。同じようにキスをする。同じように触れ合う。俺と出会ったから矛盾となった」
崇弥洸祈という人間に出会ったから。

「崇弥…君は…」

そう、またも洸祈は間違えてしまった。

あの時のようによく知りもせずに。

綺麗な瞳を輝かせた二之宮は馬乗りになり、骨折の他に打撲傷が至るところにある洸祈は低く唸った。

「もし崇弥葵に会っていたとしても駄目って言ってキスして触るって？」

「……………そうだろ？」

「崇弥…君、最低だよ」

最低。

一番下のランクへと洸祈を引き摺り下ろす。

「まさか僕をそんな人間と思ってたの？」

「思ってたな」

「僕は久々に怒ってるよ」

そう言った二之宮は洸祈の口腔に舌を滑り込ませた。それを押し返

そうとしては舌が絡み合い、口からは喘ぎが漏れる。

「んっ…う…あ…やめっ」

「崇弥…君の天然に僕は…癒され慰められる…でもね…時々、厭なくらいその天然にイラつきを覚える」

「何…言って」

「そう、今だ。今の君、苛つくし…そそる」

「にの—」

「煩い」

再び繰り返される行為。

「やめっ—」

「謝れ。僕に謝れ」

「何で…ん…だ…よ…」

「君の“生意気な小僧”の称号通りの口調でお得意の脅しを使えよ！もう自分を売るような言葉を使うな！そう僕に誓いやがれ！！！！」

「…」

そうさ。

第三の選択だ。

口腔の絡み付く舌に前歯を立てた。二之宮は顔を歪めて舌を引き抜く。

「イタッ」

「随分生意気になったんだな。俺に誓いやがれとはね」

片腕で洗祈は二之宮を強く抱きすくめた。

「崇弥…僕の方が年上だろ？」

「…ごめん…最近の俺、どうかしてた。殺すしか考えずらねずに…今思えば、他の方法があったはずなのに…」

「……………」

小さく呻いた二之宮。

「崇弥…追加事項」

「？」

上げた瞳はいつもに増して力強かった。洗祈は身構える。

「“殺す”を使うな。殺戮は考えるな」

「殺戮……」

「君の力は殺戮だ。君の為にも由宇麻君ゆつまの為にも」

「何で司野——」

「軍の計画に司野由宇麻が組み込まれてしまいかもしれない」

「そんな——」

洸祈の体が震え、二之宮を引き剥がそうとして唇を奪われた。

「……君のせいじゃない。しかし、由宇麻君が役人である以上、政府にはもう捕まってる」

「司野を護らないと！司野はどこだ！？」

「ここだよ。僕の子が視てくれてるから大丈夫。それに彼にはカミサマがいる」

「あんなやつ信用っあ……！」

病服に手をかけた二之宮は効果的な遣り方で洸祈を沈める。肩に齒を立てたまま二之宮は囁いた。

「彼は由宇麻君に相当入れ込んでいる。由宇麻君に訊いたのだけど中にいるのは——あやき——というらしい。彩樹あやきは多分——さいじゅ——のことだ。“さいじゅ”は生命力のカミサマ。由宇麻君の元氣はそこからだ。聞くとところによると二十歳、由宇麻君は彩樹に会ったらしい。由宇麻君が病院を脱け出したのは？」

「二十歳の誕生日の数日後……」

「由宇麻君に病院から家まで、それだけの体力があるはずはなかった。しかし、今は何ともない。発作は起こすらしいが比較的元氣だ。病人の由宇麻君にしては元氣過ぎる」

不安。

「司野に負担は！？カミサマがいなくなっても司野の体は大丈夫なんだよな……！！？」

心臓の上を撫でた二之宮はにこつと笑顔を見せた。

「先月、診させてもらったよ。大丈夫。寧ろ、一般人には程遠いけど由宇麻君の体は丈夫になってきている。カミサマのお陰だよ。千せん

里君と同じさ」

「氷羽^{ひわ}…」

「今、彩樹がいなくなっても完全に病院生活だけど体に異常は起きない。安心した？」

こくり。

二之宮はその額をかき揚げてキスをしてやると布団を洩祈に掛けてやる。

「今日はもうオヤスミの時間。僕がここで舞台を演じてやるから。ウンディーネの美声でオヤスミを」

「…司野に会えないかな」

「明日ね」

明日また…―

信用商売（2・5）

彼に異常が起きたのは、彼がこの病院に獣と共に担ぎ込まれてから
こんこんと眠っていた時のことだった。

やっと目を覚ましたかと思えば、彼は全身を痙攣させて呻き声をあげていた。

「由宇麻君！……！」

「うつ……つ……あ……あ」

由宇麻の細い指が空を握る。
何かを求めて口が動く。

「しっかりとするんだ！」

「あ……つ……つ………」

ビクッ……

体が大きく震えると力が抜けて腕はパタリと落ち、頭はかくりと横
を向いた。

緩く閉じた瞼に細い枯草色の髪が掛かる。

…ピッ…ピッ…ピッ…ピッ……

呼吸補助機器が白く曇った。

「………先生……戻りました」

幼い顔を更に幼くした由宇麻。涙の跡の残る頬を加賀はそつと撫で
た。

「由宇麻君……本当に成長していないですね」

加賀の横で機器を外す看護師は驚きと困惑を含んだ声を出した。

「加賀先生と畑先輩は患者さんを知っているんですか？」

看護師、畑の後輩の看護師が由宇麻の衣服を戻しながら首を傾げる。

「産まれたその当時から彼はここに入院していたのよ。そして二十
歳……彼の成長は止まった」

「へえ、いいなあ」

場が静寂に包まれる。

若い看護師は萎縮した。

「すみません…」

「人間は新陳代謝を繰り返して成長していく。それが時を止めたかのように止まった。そんな前例はない。つまり、何かあっても私達には対処が限られる。歳をとらないが由宇麻君は死と常に隣合わせなんだよ」

加賀はただただ眠る由宇麻を撫でる。

「由宇麻君…生きて」

「たか……や…」

由宇麻のベットから投げ出された片手が何かを掴んだかのように握られた。

信用商売（3）

アナタは何を犠牲にするの？

由宇麻に異常があつたと二人が知つたのはその日の深夜だつた。

「司野！……！」

「崇弥！傷に障る！」

部屋扉が開いたかと思うと、柔らかそうな茶髪を揺らした洸祈が手足にギブスを付けて跳ねながらベッドに寄つた。

「何をしているの！」

「離せよ！父さんのところへ行かせろ……！」

洸祈の前に看護師の畑が氣遣うように止めるように現れる。それに洸祈は鋭い目付きを向けた。

邪魔をするな。

畑は体を強張らせる。

「畑さん、彼は由宇麻君の息子の洸祈君だよ」

加賀が説明すると畑は怯えたように洸祈から遠退いた。

「司野は？」

「大丈夫だよ」

「大丈夫？本当に？」

医者嘘つきだ。

洸祈の記憶が訴える。

たとえ馴染みでも医者は真実を教えようとしなない。

嘘も簡単に真実にすり替える。

父さんの時のように。

『崇弥さんが昨夜お亡くなりになりました』

『お医者さんは大丈夫って言ってたのにね』

『俺…もつと話したかった…もつと、もつと…話したかった…』

『しょうがなかったんだよ』

あの医者は大事に至るその時まで嘘を貫いた。
それも、“父親の死”までだ。

だから、

信用できない。

「……………大丈夫やで」

「司野！」

洸祈の目は見開き、儚い微笑を残す由宇麻に向く。
瞳を潤ませた由宇麻はとても小さな声で囁いた。

「崇弥…ぎゅってさせてえな」

「何言ってんだよ」

「ついつい言い返す。」

「ほら…はよさせてや」

力なく上がる腕。

疲れているのか、小刻みに震えているのが分かった。

「崇弥、ほら」

「ちよつ…二之宮…」
このみや

洸祈は二之宮に押されて、由宇麻に覆い被さるような形になる。

そして、

「崇弥あ」

嬉しそうに

本当に嬉しそうに
由宇麻は笑った。

そして、

洸祈を抱き寄せた。

アタタカイヒトノヌクモリ。キモチイ…

洸祈は暫くそれに身を委ねていた。

「司野、疲れてんだろ？休めよ」

洸祈は自分の体重で押し潰さないように左腕で自らを支える。

「…会いたかったで…」

優しく洸祈の頭を撫でる由宇麻。

「俺も」

その心地好さに洸祈は目を細める。

「顔…もつと見してえな」

「…え…」

「崇弥の顔…ずっと見れてない気がするんやけど…」

「そうか？」

俺は別に…。

そう呟くと、由宇麻は「そうやな」と苦笑混じりで応えた。それが
苦しそうに聞こえて洸祈は自らの間違いに気づく。

俺は成長する。

司野は成長しない。

「ごめん…司野…」

不謹慎過ぎる。

「いいんや…俺は変わらへんけど、成長期の崇弥は…どんどん…か
つこよくなるからな…父親として…司野由宇麻として…崇弥の顔は

ずっと見てたいんや…」

だから見してや。

洸祈は顔を上げた。

「その顔…」

しかし、由宇麻は拗ねた風に唇を尖らせる。

「？」

「崇弥、駄目や」

眉をしかめた由宇麻は手を伸ばし洸祈の両頬を思いつきり左右に引き伸ばした。

痛い。

「ひいの！！！！」

洸祈は目尻に涙を浮かべる。

「痛そうやな」

くすり。

すると、由宇麻にしては珍しい笑い方をして頬を離した。当然、洸祈はむっと膨れる。

「何したいんだよ！」

「これや…」

とても満足している由宇麻。

「はあ？」

「作られた顔より…全て失せた顔より…怒った顔の方がええよ」
気付く。

言われなきや気付かなかった。

俺は…作った顔をしてた。

「崇弥…俺はな…琉雨ちゃんに接している時の…顔とか…俺が髪撫でた時の…顔とかが好きなんやで…」
につこり。少年の微笑み。

てか、司野が髪撫でた時の顔って…。

「ちゃんと見てたんじゃねえかよ！」
ちよつと恥ずかしい。

すると、ふつと由宇麻が真剣な表情をする。

「崇弥……もうあんな顔せえへんでな？」
と……願う。

それは、

感情の失せた殺人鬼の顔。

俺は由宇麻に失望されたのか？

厭だ。

「俺は……結果的にあいつを……殺したんだ」

自殺……ではない。

自爆……ではない。

「俺が追い込んだ」

2回目の殺し。

その時、俺は無だった。

罪悪に押し潰されそうになる。いや、罪悪感なんてないのかもしれない。

ただ……痛い。

由宇麻の指がずっと洗祈の頬に滑った。まだ赤いそこを由宇麻は優しく撫でる。

「崇弥」

囁き声。

「偉大な瑞牧^{みずまき}さんの言葉やで……」俺の言葉を聞いた。それでいい」

や」

「だけど……」

俺は殺そうとした。

「『まだ言うのか？俺は忘れた』や。崇弥……大好きやで」
ああ。

こんなにも……

看護師や医者、二之宮がいる前で洸祈は由宇麻の額にキスを落とした。

愛しい。

「な……！！！？た、崇弥！！？」

真っ赤な顔で由宇麻は自然体の洸祈を見る。洸祈は表情を弛めた。そして、

「大好きだよ」

司野。

……大好き……

もう逃げてられない。
もう隠してられない。

洸祈はその胸の内に隠した醜い過去を言葉に乗せようと決意した。

「司野……受け止めてよ」

そう囁いて……。

「崇弥？」

由宇麻はその瞳に光を移す。

「俺の生きざまを受け止めてくれるかい？」
受け止められるかい？

こくり。

小さく頷く由宇麻。

洸祈はゆらりと二之宮を向く。

「二之宮…お前の過去を頂戴」

俺の到らない推理が当たっているなら…、

「いいのかい？」

そう二之宮が訊き直す。

二之宮、やっぱりお前は知っているんだな。

「ああ。もう逃げていられない」

この空白に不自然に塗られた色の理由を。

信用商売（4）

やかた
館の話をしよう。

館は少年の売春をしている店。

そこで少年達は自らの体を売って金を儲ける。そこにやってくる少年は孤児や親に売られてが多い。

儲けは客を取っただけ貰える。だから、羽振りの良い客を捕まえ、沢山のお金を貯めて一人立ちできるようになると皆出ていく。他と違い少年達の衣食住は保障され、薬や暴力といったのは禁止されている。

ただ、仕事が入れば断ることはできない。

良いのか悪いのか。

それが館。

「死にかけてた俺を救ったのがある旅人だった」
どうしたの？

俺を抱き上げたあの人の感触が今も残っている。

「あの人は自分の命を削り、契約という形で俺を助けた」
今もこうして生きているのはあの人のお陰。

「あの人は俺を館に連れて行った。そして、館の店主に契約を売り、そのお金を俺にくれた」

泣きじゃくる俺にあの人は「君を養えるだけの知識とお金を手に入れたら君を迎えにくるから」そう言った。

「それからずっと、館の屋根裏に俺は居たんだ。その時の店主はあの人と親しくしてたから、俺を大事にしてくれた。でも、店主が亡くなってから俺は、次の店主の命令で売り子となった。俺は1日3

人。多い時で5人を相手にした。いつかあの人が俺を迎えにくるのを待って」

だけど…

あの人は迎えには来なかった。

「今ではもう館はない。俺の契約もあの大火事でなくなった」

今はただ、あの人に会いたい。

「崇弥^{たかや}、もう部屋に行こう？」

二之宮^{にのみや}が荒い息遣いの洗祈^{いっしき}の頭を撫でた。

「そつや。崇弥、無理せえへんでええ」

呼吸補助機器を付け、くぐもった声で由宇麻^{ゆうま}は言う。

「最後まで聞いて…」

だが、洗祈は退こうとはしなかった。

「そんなに焦らんでー」

「焦るさ！時間がないんだ！！早く…早く…早く…しないと…」

「……崇弥」

二之宮は洗祈を抱き締めた。車椅子に座る彼は微かに身動きする。

「蓮^{れん}……」

「由宇麻君のことも考えて」

由宇麻の瞳を紺は捉えた。

「崇弥、ちよつと休ませてな」

その言葉は効果抜群だった。洗祈は目を閉じて呼吸を整えると分かつたと頷く。

二之宮は車椅子を反転させた。

「司野、ごめん」

「崇弥……ごめんな」

「崇弥、トイレ行く？」

「……こくつ。」

「二之宮、ごめん…本当にごめん」

「謝り過ぎ。君から濃厚なキスを3回してくれたらチャラにするよ
そう言えば洸祈は気が休まる。」

「それに、連れションならいいだろう？」
くすり。」

「何それ」

洸祈は膝の伊予柑いよかんを撫でた。

「んっ……………」

名残惜しそつに唇を舐めた二之宮は眠る洸祈の前髪を鋤いた。

「ねえ、加賀龍士先生かがりゆうし、洸祈の様子は？」

「覗きは向いてないみたいだ」

薄く開いたドアをそつとスライドさせ、加賀が顔を出す。

「男の着替えを覗いても楽しいとは思わないけど」

皮肉をたっぷり込めた二之宮の言葉。

加賀はただただ微笑を残しただけであった。

「あれだけの爆風の中で手足の骨折だけで済んだのは、飛び降りた
洸祈君を伊予柑が受け止めたから。火傷がなかったのは彼の魔法の
属性だと、そっちの専門医は言っていた」

火系の魔法が爆風を和らげ、防いだ。それでだ。加賀は眉をひそめる。

「専門医が言っていたのだけれど、膨大な魔力に驚いていたが、この子の魔力は生まれては消えている。と…」

二之宮は目を見開いた。

「循環のサイクルが異常に短いのは…それでか…」

流石、専門医だ。とぶつくさ呟く二之宮。

「加賀龍士先生、魔力は全ての人が持っています。勿論、貴方にも」
初等教育で習うものだ。

「しかし、魔力を魔法として具現化できるのは一握りだけ。条件としては魔力に何らかの属性があるもの。崇弥みたいに火だったり、葵君^{あおい}みたいに風だったり、そして、具現化が難しい空間だったり。属性は様々。そして、ある一定量以上の魔力を蓄えられる器があることだ」

この器は生まれたその時から全ての人間にあり、大きさは決まっている。

「器が小さければある一定以上の魔力が蓄えられず、属性があっても具現化できない。逆に器が大きくても属性がなければ無しか生まない」

属性と器。この二つがあるものを魔法使いと呼ぶ。

「崇弥の場合、属性は火、器は巨大ってわけだ」

それが膨大な魔力の要因。実際はもっと複雑だが。

「まず、魔力が器たつぷりに蓄えられる。ゆっくりゆっくり。気の遠くなるような時間をかけて。普通の魔法使いの魔力の循環のサイクル^{サイクル}ってのは簡単に言うところ」

二之宮は簡易台所に近寄るとコップを手に取り、水道水を蛇口を捻^{ひね}って、ぎりぎりまで注ぐ。

「器ぎりぎりまで魔力が溜まると蛇口は捻^{ひね}られ、止まる。そして—」
バシャッ。コップの水を勢い良く流した。

「魔法を使えば蓄えは消えていく。そして、全てを使い切った時、再び蛇口は捻^{ひね}られ、魔力は溜まり始める」

次はチヨロチヨロと水を注ぐ。

「一度なくなると一定量以上の魔力が溜まるまで魔法は使えず、半日から1日で使えるようになる。完全に器を溜めるとなると36時間から48時間」

溜まりきった水を再び流した二之宮は溜め息を吐いた。

「これが専門医の言葉から考えられる崇弥の現状」

一気に捻られたそれ。

水はコップを直ぐに満たし、二之宮の腕を伝わって滴った。

「生まれては消える。さ」

水は生まれては消えていく。

「崇弥の異常な早さの魔力の回復は崇弥の器の大きさだけでなく循環のサイクルが人と違うせいだったわけだ」

「何故？」

では人と違う何だ？

「分からない。崇弥慎と崇弥林には特殊な何かは…いや…崇弥林…なのか？」

加賀の瞳を二之宮は睨んだ。わけが分からず、加賀はすくむ。

「加賀龍士先生、崇弥の資料を出来れば僕に出来ないか？崇弥が19年前に行方不明になった病院がここなのは知っているんだ。本来なら、崇弥の実家がある山梨の病院で生まれるはずだった双子が」

「それは…」

無理が。

「加賀龍士先生にその権限がないなら院長に桐からの要請とでも言つといて。絶対に他言はしない。崇弥の為なんだ。いや、僕の為なんだ。僕は崇弥のいない世界で生きられない」

お願いします。

二之宮は床に額をついて土下座をした。加賀は二之宮の行動に目を見開き、後退る。

「僕は幾度となく洗祈に救われた。命だけじゃない…心も救われた。それなのに僕が洗祈に返せるのは洗祈に貰ったものの1にも満たない。今、この瞬間も僕の重荷を洗祈が全て背負ってる。そして、僕

に降り掛かるはずだった痛みを全て受け止めているんだ」

だから…

加賀は暫く茫然とすると二之宮の肩を叩いた。

「桐だね。私に権限はないけど、佐木院長に伝える。私からも頼むから」

………ありがとう。

ぼそっ。

微かに赤面した彼はぱっぱと膝を払うと、よろしくお願いします。と頭を下げ、加賀にドアを開けた。

「何かあればナースコールをしてね」

「はい」

信用商売（5）

からから…

「由宇麻君！？」

「しー。静かにせいや」

由宇麻はよろよると、眠る洗祈（せんき）の病室に入ってきた。

「寝てなきゃ！」

二之宮は由宇麻を支えて自分が座っていた椅子に座らせる。

「ここまで来るのに一苦労。少し歩いただけなのに心臓ばくばくやなんて俺、どんだけひよろいんや」

弱々しい笑顔を彼は溢した。

「分かつてるなら何で来たわけ？」

「一人やと何だか怖くなつて眠れんのか」

由宇麻の胸の辺りを撫でる二之宮は彼の額に大粒の汗を見付けてタオルで拭いてやる。

「それに、蓮君（れん）の話し相手になろう思てな」

「僕には本があるんだけど」

小さな机の上には分厚い一冊の本。

「邪魔やったか？」

「ちようど読み終わつたからもう一度読もうかなって」

そう言つて、二之宮は由宇麻の膝に本を乗せた。

「どんな話なん？」

「少女と時間に追われる大人と時間泥棒の話」

「ワケわからんで。どんなところが好きなん？」

「女の子」

「それ、怪しい発言ちゃうん？」

「そうかな。好きだからしょうがないってね」

クスリと笑い、首を傾げる由宇麻の上着を直してあげる。

お礼を言った由宇麻は本を恐る恐る開いた。

「そんな怖がらなくても。ホラーじゃないって」

「せやけど、こんな豪華な表紙やと怖そうや」

「なにそれ。ふふふ、由宇麻君は面白いね」

二之宮は洗祈のベッドの端に座って笑う。

「崇弥^{たかや}やけど…」

字を追いながら由宇麻はポツリと言った。

「館？」

「……蓮君^{れん}は… “あの人” って知ってるん？」

「滄架^{そうか}だよ」

二之宮はポケットからチョコの包みを2つ取り出すと、1つを由宇麻に投げた。顔を上げてキャッチした由宇麻は聞き返す。

「滄架？」

「由宇麻君は知らなくていい。誰も知らなくていい。僕だけが知っていればいいんだ」

「せやけど、崇弥の命の恩人なんやろ？崇弥には教えたって…」

「滄架は死んだ。その大きな原因は崇弥との契約」

“あの人” は自らの命を削って、洗祈を助けた。

「崇弥を助ける為に命を削ったからか？」

二之宮は口を閉ざす。

「蓮君？どないしたん？」

由宇麻は本を机に置くと、黙り込んだ彼の横に座って同じように黙る。

やがて、二之宮はゆっくりと口を開いた。

「君には知る権利があるんだろうね… だけど、僕はこれをうまく言えるか分からない」

「聞かせてや。蓮君」

「分かったよ」

彼は一言一言区切って言葉を連ねていく。

「僕はね、崇弥よりも長く、館にいる」

洗祈が紫水しすいに売られてから、洗祈を失い、光を失った僕は死人のよう
うで使えないと直ぐに捨てられた。

捨てられた先は館。

「僕は捨てられたその時から売り子をしていた。最後の紫水の命令
に従って。馬鹿だろう？僕はね、捨てられても紫水が好きだったん
だから」

使えない子。そう簡単に切り捨てられても僕はあいつが好きだった。

「散々、僕を痛め付けた人だけど…家族だからかな」

父親だからかな…。

「今は…今はどうなん？」

由宇麻が独白のように訊ねてきた。

「憎んでいる。洗祈を縛るあいつを憎んでいる。あいつをあの場合か
ら引き摺り落とすだけじゃ物足りない……殺す。僕はあいつを殺す
まであいつを赦さない」

ぎりっ。

齒軋りが響く。

由宇麻は背筋を震わせて、洗祈の、ベッドから出る手を握り締めな
がら二之宮を見詰めた。

「由宇麻君、崇弥は…死ぬ定めだったんだ」

「死ぬ定め？なんや…それ…」

「滄架はそれを止めた。自らの命を代わりに差し出して」

唐突に始まったそれ。

「何で崇弥が死ななあかんのや！」

「やっぱり駄目だ…」

途絶えるそれ。

「俺は崇弥の父親や！駄目やない……」

不自然に途切れた話は先が気になる。由宇麻は表情に影を落とす二

之宮の体を揺する。

「蓮君！蓮君は崇弥の何を知ってんのや！」

「言えない……僕は……言えない……ごめん……」

「教えてや！蓮君！！」

由宇麻は引き下がらないし、引き下がれない。すると、そんな彼は誰かの手に口を塞がれた。

「司野、二之宮を虐めんなよ」

「崇弥！？」

二之宮が顔を上げる。

「二人が煩くて起きた。もう遅いんだし、二之宮は帰って寝ろよ。」

司野も病室に戻れ。他の人の迷惑だし、加賀^{かが}先生の白髪が増えるだろ」

そう言う洸祈のことで騒いでいた二人を片手で払う仕草をし、欠伸をする洸祈は背中を向けて目を閉じた。

『……………』

「二之宮、眠るなら家に帰ってからにしろ。風邪引くぞ
ぽてっ。」

洸祈がベッドの縁に座って頭を揺らす二之宮に触れば、彼はコテンと倒れた。

「おい！」

「うっっ……」

……寒い。

と。

「しょうがないな」

洸祈は二之宮の靴を脱がして両足をベッドに上げると、自らの布団を片手であたふたと掛けた。

「オヤスミのキスはしませんの？」

夜風と共に窓から入ってきたのは赤毛の女。

「しない」

らいつきは
來月葉の問いに洸祈は即答する。

「あら、ウンディーネが可哀想に」

「二之宮が？何でだよ」

「分かつてるくせに。ウンディーネがどれほどに貴方が好きなのか」

「何を言つて…」

「あたしは盜賊。情報の盜賊。盗んだウンディーネの情報はこう。

出身地不明。紫水と呼ばれる父親らしき人間にありとあらゆる戦闘教育を施され、人体実験に使われてきた。実験は成功し、作られた魔力を得た彼は紫水の『完全支配』の実験台に。後は緋あかの知っている通り」

「だから？」

「二之宮蓮にはあなたしかいない」

「それで？」

洸祈は車椅子に乗ると、片手でゆつくりと扉に向かって操作する。

「あなたはウンディーネに何を望んでいるのかしら？」

「何も」

「嘘ね」

窓枠に腰掛けていた月葉は洸祈の車椅子を押し始めた。

「自らに縛り付けたいのかしら？」

「何故？」

静まり帰った廊下を二人は進む。

「復讐」

エレベーターの位置を示す蛍光板の光が月葉の瞳を照らした。

「復讐？」

洸祈は聞き返す。

「恨んでいるんじゃないの？」

「何故？」

「緋は聞き返すばかりね」

「うん」

エレベーターに乗り込むと、洸祈は地下のボタンを押した。エレベーターはゆっくりと地下を目指す。

「あなた、覚えているのではなくて？」

「何を？」

「過去を」

「何言つて……」

固いコンクリートを二人は進み出した。

「まあ、いいわ。あなたは……」

「月葉？」

「1つだけ言えることがあるの。あたしを信用しちゃだめ」

チン……

エレベーターは目的地に着いたことを知らせる。

そして、二人の目の前には一人の女が立っていた。

洸祈は咄嗟に車椅子の向きを変えるが、月葉が邪魔をした。

『崇弥洸祈。おかえり』

女は笑う。

口元だけ笑う。

「……………アリアス……………アリアス・ウィルヘルム……なのか？」

『迎えにきたよ』

女は一步前に踏み出した。

信用商売（6）

…アリアス・ウィルヘルム……—

『迎えにきたよ』

「月葉…お前…」

洸祈は月葉を見上げた。

「ええ」

ヒールを鳴らしてアリアスの隣に立つ月葉。

「あたしはこっちの人」

『そういうこと』

黒髪に黒服。

全身が黒のアリアスは洸祈に歩み寄った。

「来るな！」

『片手に片足では逃げられないね』

ヒタリと伸ばした手のひらが洸祈の左頬に触れた。洸祈の瞳が彼女を捉える。

「触るな」

『一緒に来てくれるなら』

「売りに出されるんだろ？厭だね」

『だから貴方の要求は呑めない。実力行使しなきゃいけないから』
緋色に輝く洸祈の瞳に怯むことなく、アリアスは言った。

「崇弥洸祈、貴方が全ての元凶なんだ。これくらいしても当然だと思っが？」

黒い革手袋の指先は洸祈の耳朵を撥る。
そして、

「全く思いませんね」

鋭い刃が二人の目の前を一閃した。アリアスが腕を切られる間一髪で背後に跳ぶ。

「下がって」

洗祈の前に立つたのは茶髪の青年。翻ったコートから微かに見えたのは、クロスにS。

シュヴァルツ商団。

「これはこれは。『スーベリアの若騎士』じゃないか」

アリアスはふふふと不気味に笑う。その片手には細い針。

「シュヴァルツ商団護衛です」

アレンは剣を構え直して言った。

「通りで、リヴァ・シュヴァルツ・コーティの気配がムンムンと」

「ムンムンねえ…」

長い髪を一つに高くくくったリヴァは柱の影からアレンの横に出た。

「アレン、ムンムンか？」

「ムンムンと言うよりメラメラです」

「それは？」

「暑苦しい…」

ごんっ。

「よく言っ たな」

「い…たい…」

リヴァの鉄拳に顔をしかめても切っ先はブレない。

「と、言うわけで、アリアス、捕まってもらおうか」

続々とシュヴァルツ商団の面々がアリアス達を取り囲んだ。

「洸祈君、大丈夫？」

「え？…あ…アクアさん…」

月葉を見詰めたままだった洸祈はアクアの声にハツとする。アクアは笑むと、洸祈の車椅子を反転させた。

「ごめんね。洸祈君を巻き込んだんじやつて。アリアスをやっと思付けたと思つたら、どうやら目的地がここで…先に言つべきだったのに…」

「言つてたら、俺、すぐにここを離れていました。リヴァさんは正しい」

「でも…」

「利用できるものは利用するのが当たり前です。それに俺にとつてもアリアスは敵ですから。寧ろ、あなた達のお陰で助かった。片手片足じゃあ、自爆すらままなりませんし」

「自爆つて…！洸祈君、あなたは―」

洸祈を心配するアクアを洸祈自身が片手を上げて止めた。それに商団長リヴァの姿を見て、アクアは反射的に黙る。

「あの戦争狂は捕まえなきゃ。世界の平和の為に」

乾いた嘘っぽい笑み。

洸祈は車椅子から片足で立ち上がると、ぴょんぴょんと跳ねて地下の駐車場出口に向かう。

「洸祈君！？何処へ…」

「あんなのの近くに居たくないし。それに、二之宮このみやはともかく、司し野はこれ以上危険に晒せない」

暫く隠れます。

洸祈はアクアに背を向けると、シュヴァルツ商団とアリアス、月葉を置いて、よろよろと歩みを進めた。

「洸祈君、その怪我じゃ…」

「二之宮に聞かれたら…谷にいるって言うてください。それと…」

司野の傍に居てって……」

「谷？あ、洸祈君！」

アクアの制止も聞かずに、彼は後ろの緊迫した空気を無視して進んだ。

「で？アリアスと共謀者を捕まえ損ねて、何？」

「行っちゃいました」

翌朝、ここ最近の疲れが溜まっていた彼は、昼過ぎまで寝ていた。起きれば、シュヴァルツ商団護衛が足元で土下座の体勢のまま寝ていた。

二之宮は寝起きからこの優男を見たことに無性に腹が立って蹴飛ばすと、彼はベットから転がり落ちて悲鳴をあげたというわけだ。

「崇弥^{たかや}が谷に行くって？」

「ですからそう言っ……」
「ごんっ。」

「重要なことなんだ。本当に谷に行くって言った？」

「いいましたよっ！」

リヴァだけで十分なのに、二之宮にまで殴られたことになり、彼は躍起になって答える。

「洸祈：行かなきゃ」

「それはダメです」

「君に言われる筋合いはない」

二之宮は背筋を伸ばすと、椅子に掛かっていたコートを掴んだ。そこをアレンが止める。

「どいて」

「まだ伝言があります」

「どうせ、追うなでしょ？昼ドラじゃあるまいし」

二之宮は片手をドアに掛けるが、アレンがその手首を握った。

「いいえ。司野さんの傍に居てと」

彼の歩みが止まる。

「……………ちっ……」

「あの…蓮？」

「崇弥め。僕がそう言われたら動けないの分かっててだな」

「谷が何か？」

頭を掻き、ベットに大の字になった二之宮にアレンもベットに腰掛けて訊ねる。二之宮ははあと大きく溜め息を吐くと、アレンを睨んだ。

「君には関係ない。ただ、僕は崇弥にはあまり谷に行つて欲しくないんだ」

「なぜ？」

「谷は……怪しいからさ」

「つまり？」

戯れに聞き返したアレンは手持ち無沙汰に剣を膝に置いて、ポケットから愛用の布を取り出し、丁寧に剣身を磨き始める。

彼にとっては本当に戯れだった。

「谷の人間の死因の多くは、原因不明の心臓系の病」

「はい？」

「崇弥の母親もそれで死んだ。谷は何かおかしい。危険だ。血筋なのか…土地なのか…」

「気のせいですよ。偶々です」

「偶々、」

崇弥の母親も、

僕の友人も、

崇弥あおい葵も……ね」

「え？」

アレンは剣身を磨く手を止め、二之宮を見詰めた。
一気に静寂が満ちる。

それはまるで、昼の喉かな時間が死んだようだった。

涙

「千鶴さん、お久し振りです」

「洸祈君！」

「……！？」

手足のギプスを見て、そこまで送ってくれたお巡りさんに頭を下げた洸祈に彼女は走り寄って勢いよく抱き締めた。洸祈は背中を高い生け垣にぶつけて顔をしかめながらも千鶴を支える。

「おかえりなさいっ……」

瞼に隠された彼女の瞳から流れる涙。

洸祈はそつと背中を撫でた。

「うん。ただいま」

「春」

「洸祈さん！お久し振りです！」

とてととと、厚着で覚束ない足取りの春は、洸祈に走り寄って抱き付いた。洸祈は同じ年なのに小さくて軽い春をしようがなくおんぶしてやる。

「わあ、洸祈さん、力持ちだ」

「春が軽いんだよ」

だが、ドアを背にしているとはいえ、片足で立って片腕で支えるのは軽い春でも辛い。

「洸祈さん、洸祈さん」

春が上目遣いで洸祈を呼んだ。

丸い大きな瞳が綺麗だ。

「何？」

「葵さん、千里さんは元気ですか？」

「うん」

「琉雨さん、呉さんは元気ですか？」

「うん」

「彼氏さんは元気ですか？」

「うん？」

何を言っているのかよく判らなくて、洸祈は首を傾げた。

「用心屋さんも陽季さんも元気なんですね？良かった」

春は本当に変な奴だ。

「急にすみません」

けじめとして座敷で頭を下げる。

「いえいえ。ここは洸祈さんや葵さんの実家ですから」

春が炬燵から出した裸足を寒そうに擦り合わせながらゆらゆらと頭を下げ返した。

「僕も千鶴さんもずっと待ってました。義兄のこと……」

「父は夜明け頃、眠ったまま息を引き取りました。医師は痛みや苦しみはなかったはずだと言っていました」

「良かった……」

ぽたっ……

「春？」

「電話に出たの……千鶴さんで……っ……千鶴さん……ずっと……ずっと……ずっと……泣いていました……僕は……っ」

琴原家で最も軟弱な春は、家族の為に泣ける強い人だ。

鳴咽を漏らす彼の後ろから現れた千鶴は毛布を掛けてあげる。

「春君、朝から熱っぽかったし、今日はもう寝よう？今夜は私が行くから」

「でも…僕は大丈夫で…」

「^{あき}秋君が許さなと思うよ。だから、お休みなさい」

「……………はい」

千鶴は春を支えて階段へと向かい、洸祈に頭を下げた。

襖の間から白のコートを着た千鶴さんが見えた。
何処かに行くのだろうか…。

「千鶴さん、どちらへ？」

「大丈夫。春君をお願いします」

「帰りは…」

「明日、帰ります」

明日？

「どちらかにお泊まりですか？」

「ええ。お休みなさい、洸祈君」

「気を付けて…………お休みなさい」

腕の中の春が寝返りをうつた。

ここには2度来たことがある。

1度目は本当に俺達がちっさかった時。

葵と父さんと。

俺はその時のことを全然覚えていない。

幼かったのだから当然だ。普通、5歳時の記憶なんてあるか。

葵はあるらしいけど。

あいつは俺よりも記憶力がいいからか。

そこで初めて、母さんの兄弟と会った…らしい。

2度目は俺が精神科医に勧められて療養に来た時。

春が一人で暮らしていた。

千鶴さんとは千里のことで定期的に連絡を取り合っていたから、冬^{ふゆ}さんと秋君は東京、夏君^{なつ}が軍学校に進学、春が実家で一人なのは知っていた。

しかし、千鶴さんから事前に連絡を受けて門前で待っていた春と目が合ったと思ったら、名乗ってもいないのに突然ハグされたのは驚いた。

『姉さん！』

俺は女じゃなくて男だ。

それに、“姉さん”って…俺の“母さん”のこと？

それにしても、見た目は葵が父さん似、俺が母さん似と言えど、母さんに間違えられて男の俺が抱き締められることは予想外だ。

『姉さん…姉さん…』

『春君じゃないの？』

千鶴さんのくれた写真で見た“春”という人に似ている。

『姉さん…僕は春だよ？姉さん…僕は春です。姉さん…いつも呼んでるでしょ？春って…僕のこと…春って』

春は同じ年だから俺の母さんのことを覚えてるはずない…のに。

『あなたの名前は春。あなたは私の弟よ。って』

それって？

『姉さん…会いたかった。春だよ。あなたの弟です。僕、こんなにおっきくなりましたよ』

春は俺の胸に額を当てて泣いていた。

今日と一緒だ。

「洸祈さん……千鶴さん…は？」

春が起きたようだ。

声が掠れているような。熱かな。

「出掛けたよ」

「あのね…秋…倒れたの…。兄貴が…入院させて…」

まさか…千鶴さんの出掛けた先は？

春が俺に抱き付く。

「兄貴も千鶴さんも教えてくれないけど…っ」

春が震えてる。

春が…

泣いてる。

「千鶴さん…お医者さんの前で姉さんの名前出したんです…秋の…発作が原因で倒れたから…」
解ってしまった気がする。

母さんと秋君は同じなんじゃないかって。

「僕は分からないです…どうして…僕の家は…亡くなってしまう人が多いいだろう…って。…秋を失ったら…もう…僕は…」

俺は春を慰めることはできなかった。

だって…

「春、お前がそんなんでどうする」

苦しいのはお前だけじゃない…

「お前は秋君の兄だろう？」

俺だって“兄”なんだ。

「冬さんも千鶴さんも泣くの必死で我慢してんだ。春、お前は泣くのか？」

俺だって我慢してんだ。

お前にもできるだろう？

お前は家族の為に歯をくいしばれる強い人なんだから。

「うん…っ」

春が大きく頷いた。

涙（2）

洗^{しゆせ}祈^かが仕事中に爆発に捲き込まれて骨折と打撲で入院していたが、失踪。

はや1ヶ月は経っている。

俺は眠る前の至福の読書を邪魔するように鳴った電話の子機を荒々しく取った。

「はい」

その時、自分でも驚くぐらい低く、獣が威嚇するような声音が出た。

『あ…葵^{あおい}？』

びくびくした窺うような声。

この声…！！！？

俺はその声に自らの声音に驚くよりももっと驚いた。

立ち上がりかけた俺は俺の膝枕で眠る千里^{せんり}を落としかけて、慌ててソファに座り直す。千里が膝の上で寝返りをうった。

一呼吸吐くと、極力声量を小さくして一番聞きたかったことを訊く。

「元気？」

『…ああ。元気だよ、葵』

「すつごく心配したんだから」

『ごめん』

でも、元気なら良かった。

「今どこ？」

『母さんの実家』

母さんの実家は…谷。

俺は安堵から肩の力を抜いてソファアの背凭れに体を預けた。手から子機が滑り落ちる。

カツツ…なんか硬い音だ。

と、股のところで何かが蠢いていることに気付いた。

「ん？」

「…うう…痛い…」

千里だ。

子機がぶつかって起きたようだ。唸った彼は頭を押さえて頭を俺の膝に押し付ける。

てかつ…そこはっ…！

「千里、離れろ！」

俺は千里を無理矢理端に退かした。

少し理不尽だがしょうがない。

千里が動くからいけないのだ。

膝の上で動くからいけないのだ。

しかし、優しく退かしたつもりが、力が籠ったのか、千里がソファアから転がり落ちた。

「ぐっ」

あ、鼻打ったな。

俺は妙に醒めた頭で冷静に判断し、千里の頭を打った子機を取り上げていた。

「それで？ここ1ヶ月どこにいたわけ？」

『……………』

呼吸音が聞こえるから無言のようだ。

「琉雨ちゃんには心配させたくないから見舞いはどうにか止めた。警察に届けようかと思ったけど」

『しなかったよな？』

「そりゃあね」

役人の世話にはなりたくない。

その先には洸祈が骨を折った仕事を依頼した政府がいるのだから。

「洸ー？」

等と明るい声でいいながら、頭を擦る千里の顔は怖い。

そんなに痛かったか？

『ちいか』

「今ねー、お兄さんが居ないお家でエロいことしてるんだ」

爆弾発言。

『琉雨と呉くれがいんだぞ！』

その言葉は洸祈と一緒に俺も言わせてもらいたい。
が、

千里はニコニコなオーラだけ出して、唇を重ねてきた。

確かに洸祈がない間、千里は心配だよ。と言いつつ、キスの回数
は増えるわ…勝手に風呂と一緒に入ってくるわ…。

それでも期待している自分が憎い。

でも、未だに戯れみたいに触りつことキスしかできていないのだから
しょうがない。

「わけない…よな」

「何考えてるの？今はそれどころじゃないでしょ？」

その時、一度唇から離れた千里の舌が俺の首筋を舐め、噛み付いた。
「っあ！…！」

またかつ！

どうしていつも噛み付く！？

「こー、よく聞こえてる？」

『ちい！』

くすくす…

千里の指先は噛み付かれて脱力した俺のパジャマのボタンを外しに
かかる。

洸祈の焦り声のBGMの下で1個…2個…と笑いながら。

「せんっ…電話」

俺はどうにかそれだけは言う。

千里は頷いて子機を俺の口元に持つてくると、問答無用で深く口付けをし、わざと淫らでやらしい音を出す。洸祈に聞こえてると意識すると火照りが止まらず、逆に千里の攻めをいつも以上に感じて、口の端から漏れる声も止められない。

暫くこうしていた。

「ってことで、ここからはお子様は禁止だから」

「あっ!!」

本当に楽しそうな千里は、俺の体の隅々を撫で回す。

背中を撫でたり、尻を撫でたり、太股撫でたり…お前はオヤジか!

!!!!

『ちよっ! 葵、大丈夫か! ちい、無理矢理じゃないよな!』

そんな洸祈は優しい。

「疑うの? 言つてあげてよ、ああ」

開けたシャツから覗く素肌に頬を猫のように擦り付けてくる千里。

くすぐつたい。

だから、本音とは裏腹に俺は、

「やめ! 離れろ!」

と、反射的に叫んでいた。

洸祈の息を呑む音。

千里はポカンと口を開け、「嫌がるああはちょーそそるね」と、胸の尖りに噛み付いてくる。

「あっ!」

「今日は…洸が見付かったお祝いだね」

それは受話器の向こうの洸祈に向けられた言葉。

「ああ、あの時はキスしたね。あの時はパンツ一丁で二人で触れ合ったね」

何をばらしてるんだ!

「あの時は僕ら、生まれた時の姿でいいかな…一緒に抱き合って眠

ったね。あの時はあおだけ気持ち良くしてあげたよね」
何を……

「でもあお……次は僕も気持ち良くしてよ……」
これらは俺だけに向けられた言葉。

『葵、帰るから！お兄ちゃんも帰るから！』

洸祈の言葉はもう入ってなかった。

頭に詰まっているのは千里の言った意味を考えることだけ。

あの時は千里が「まだ怖い」と言った俺を膝に乗せて、少し違和感があったけど、気持ち良くしてくれた。

次は？

千里がしたように俺が千里を気持ち良くする？

それって……

『洸祈さん！？』

春、俺、帰る！お世話になった。ありがとう。千鶴さんにも伝えてくれるか？

え？あ……ああ……分かりました。行ってらっしゃい。

行ってくる……」

……千鶴さん……

あ……

千里の動きが止まった。

ぴっ。

彼は俯き、俺の胸に額を押し付けて子機の電話を切る。

「千里」

「……………なに？」

泣いてると思った。

しかし、言い返そうとした俺の邪魔をするようにキスをしてきた彼の表情は、俺が力一杯抱き締めてしまうほど苦しそうだっ

「あお？どうしたの？」

「お前は俺達の家族だ。琉雨も呉も欠けちゃいけない。洗祈も欠けちゃいけない。勿論……お前も欠けちゃいけない」

「僕は……母さんが好きだよ」

「うん。千鶴さんも欠けちゃいけない」

それにしても……

「お前さ、笑うのも泣くのもヘタクソ」

「うるさいよ！」

笑うとか、泣くとか、

すっごく……

「微妙」

だけど、

「だけど……」

嬉し泣きとか、
すっごく……

「最高の顔だよ」

ご褒美に今日ぐらいは千里の望みを聞いてやろう。

千里が泣き顔に必死に歪んだ笑みを浮かべて大きく頷いた。

「洗に手紙…来てたの言い忘れてたね」

千里は口で呼吸をする葵を抱き締めて言った。

「……………あ…あの手紙？」

「うん。でも、明日には帰ってくるからいつか」

眠そうにする葵の手を布団の中で握った千里は小さく笑う。

すると、葵はもぞもぞと動きだし、亀のように背中を上にして丸くなった。

「ああ？」

「かた…づけ…なきや」

どうにか起き上がるうとするが、千里からだただただ停止しているだけに見える。

「ああには沢山気持ち良くしてもらったから、明日までに僕が片付けてあげる。だから―」

千里がそう囁くと、葵は耳まで赤くなった顔を隠すように千里に背を向けて丸まった。

「おやすみ、ああ」

「……………おやすみ……………千里」

灰樹

2月7日。

l t a l e | 60階、6025号室に午後9時に来い。

「寒い…頭痛い…帰りたい…」

コートの前を掻き合わせると洸祈は背中（うしろ）を丸めた。

t a l e …メインストリートに位置する超高層ビルの名だ。

差出人不明。

崇弥（たかや）洸祈宛。

『どー思う？』

『軍か…政府か…こんなの出しそうなのこれくらいしか思い付かないよ』

『…政府？』

『人目についても大手を振れるのは政府だからねえ』

『情報でもくれるのかな…』

『ないない。行かない方がいいと思うけど』

『でも…一応は…差出人書いてないの間違いかもしれないし』

『なら、個室に呼ぶかい？』

『聞かれたくないとか』

『行くならそれなりの武装するんだよ？心配だから』

『ありがと』

二之宮との会話。

1階には巨大な舞台がある。そこでオペラやらなにやらをするのだ。

2階には小会議室等。

3階にはレストラン等。

4階からはホテル。

当然、階が上がるほどその値段は高くなる。

60階は最上階。

つまり…金持ちだと思われる。

「あつたか…」

中は温かい。

私服の洗祈は人目も気にせずにエレベーターを押した。降りてきたエレベーターには誰もいない。ボーイが近付く前に洗祈はそれに乗り込むと59を押した。

銃…ナイフ…陣紙。

ある…ある…ある。

然り気無く体に手を当てて武器があるのを確認して、それら全ての位置を脳に叩き込む。

ーリンー

59階。

「大丈夫だな」

怪しい人陰なし。一応胸を撫で下ろした洗祈は上への階段に足を掛けた。

「案外手薄」

というか誰もいない。

無邪気な笑い声が凭れた壁の中から聞こえるぐらいだ。

「油断した…」

現在、上着をひん剥かれた洗祈は柔らかなベッドにジーンズとワイシャツ姿で転がされていた。

勿論、上には白銀の青年が…

数分前。

ポーン

「…腑抜けた音」

6025のプレートを睨んだ洸祈はふうと息を吐いた。
ガチャガチャとドアを開けようとする音。
洸祈は身構え、

引きずり込まれた。

暗い。見えない。

カチャ

退路が絶たれた。

誰だ？

ガンッ！！

「つて！」

踵を打った。

カーテンは何処だ？

これはベッド。

もつと奥だ。

首を護りながら奥へと素早く後退る。

触った。

洸祈はカーテンは一気に開け放った。

部屋が薄暗く写し出される。手紙の主は…！？
それは、見えたような気がした時だった。

微かな笑い声の後、洸祈はベッドに抱き付くようにされて転がった。
「頭いてえ…」

現在。

「久し振り」

白銀の青年は変わらぬ顔で微笑んだ。

琉雨がくれた深緑のシルクのネクタイに後手で縛られた洸祈は手紙の主を睨む。

「ほつんと久し振りだな」

「うん、久し振り」

頭痛いのにプラスして変なのがきた。

「この布団ふわふわ…寝かせてくれよ…」

頭痛いの治るかも。

洸祈は会話を終了させてベッドに身を預けた。

「やだ。こんなところに呼んだんだから俺のしたいこと分かるだろ？
寝かせるつもりはないんだけど」

だらうな…。

陽季は手慣れた風に洸祈のワイシャツの釦を外していく。洸祈は身を擦ると俯せになってそれを阻止した。

「頭いてえの。そうじゃなきゃ捕まんなかった」

「じゃあ、今しかチャンスはないわけだ」

なぜそう解釈する。

「マジなんだけど。今も喋る度にずきずきする」
考えると痛みが増す。

すると、陽季はうつと唸った洸祈を反転させた。

そうして、洸祈に跨がった陽季は洸祈の額に手を当てる。

「熱…ある」

そうなんだ。

痛いだけかと。

「そして…ナイフに銃がある」

ちやっかり抜き取られていた。陽季は何でと恐い顔して洸祈を見下ろす。

「不信だったから」

「何で？」

何でって…そりゃあ…。

「差出人不明」

だったからだよ。

「え？…書き忘れてたんだ」

陽季は一人で納得。

そういうオチですか。

「分かった？熱あるからそつとしてくれよ」

「そんな…今日やつとこさ学習の成果が出せるかと思ったのに」

着々と準備すんなよ。洸祈は陽季のその意気込みに寒気を感じる。

「今日を逃したら…次はいつ会えるか…」

陽季の悲しそうな瞳。洸祈は自分の好きなそれが濁ったのを見て、ぐつと息を呑んだ。

卑怯だぞ…馬鹿。

「何する気？」

「きもちいこと」

「具体的には？」

「実際にやってみればいいじゃん。な？」

よくない。

体を起こした洸祈は陽季に背を向ける。

「何？」

「ほどいて。これ、琉雨るうがくれたから大切にしたい」

「琉雨ちゃんばっか…」

むすつと膨れた陽季は洪々と洸祈のネクタイを外した。
その瞬間、

「着物つて脱ぎやすく？」

下に敷かれた陽季は洸祈に上を剥かれてじたばたする。

「おい！」

「実際にやってみればいいんだろ？葵が下に敷かれてくたくたにな
つてたから俺は上ね」

「ま…さか…葵君は初体験はもうお済みで…？」

滅茶苦茶怖じ気づいているのは陽季だ。

「ちいのリードで」

「千里君？マジ！？」

「マジ」

……。

「何すりゃいいの？陽季」

「俺がやる！洸祈退け……！」

「矢駄。何？やっぱここ？」

「ひゃ！やめろよ……！」

「もっと可愛い声だしてよ」

「うつ……」

「陽季？」

「馬鹿！馬鹿！洸祈の馬鹿！」

「うつひどつ」

「俺に触んな……！」

「っ…な……？」

「俺がやる……！」

「いい」

「良い？」

「遠慮するだよ……！」

「えっと……ここを……」

「やめっ！」

「え〜と…次は…ここ？」

「ひっ」

「で…っと…どう？」

「っ触んなー！！俺に任せろー！！！！」

「んだと！俺は勉強してきたんだぞー！！！！」

「俺がやるー！」

ああ、やっぱり。

「俺がやる！」

俺と陽季って…

「馬鹿陽季……………」

「馬鹿洸祈……………」

ほら、餓鬼みたい。

「ばーかばーか陽季のばーか」

「ばーかばーか洸祈のばーか」

いっつもこうだ。

……………っ。

……………すう。

『このっ——』

—ごちん—

「馬鹿は二人ともだ……………」

俺らはバカです。

洸祈撃沈。

陽季撃沈。

高級感溢れるベッドメイクは酷く乱れ、互いの衣服に手を掛けた二人は上半身裸でベッドに突っ伏した。

「双灯そつひい！」

陽季は着物に拘束されながらも双灯を睨目上げる。

陽季を無視した双灯は洸祈にワイシャツを羽織らせた。

彼は、ありがとうございます。と軽く頭を下げる。

「うん。洸祈君、俺の部屋に来なよ。熱出てんだろう？陽坊と馬鹿って言い合って熱酷くしたらなあ」

「う〜」

額に触れた双灯の手のひらの冷たさに洸祈は目を細めた。

「今から俺ら二人ですっげー濃い初夜を過ごすの！邪魔すんなよ！」

「！」

「このエロ餓鬼！陽坊、いつからこんなにエロくなった！！まさか…俺のPCで官能小説読んでたのお前だな！！？」

事前学習って官能小説かよ。

ム力つく…。

洸祈はかくつと双灯に体を預けると温まった手を彼のシャツに滑り込ませた。

双灯は微かに目を見張る。

「エロサイト見てた双灯に言われたくないな」

そんなこと知らずに陽季はあーやだ。とベッドに転がった。

今の陽季には双灯の前で洸祈がベッドに腰掛けているようにしか見えない。

「洸祈君！何する気だ！」

双灯の囁き声。洸祈は朦朧とした意識の中で双灯の体をまさぐる手を増やした。

いい体…。

筋肉あるなあ…。

洸祈の戯れは続く。

「一通り見させてもらっただけどやよさんには劣るね」

陽季は洸祈の髪に手を伸ばして笑う。

「変な目でやよちゃんを見んじやない！」

双灯は体裁を取り繕いながら洸祈の片腕を掴んで引き摺り出そうとした。

しかし、

疼く。

胸が疼く。

「双灯さん、行こ」

洸祈は双灯の腕を引くとベッドから降りる。

「ちよっ！洸祈君！！」

当然双灯は洸祈の行動に動揺した。視線で陽季を見るが陽季は逆にイラついたようでふんつと鼻を鳴らして手で払う。

「陽坊！」

「洸祈の看病よろしく」

もしこの時、陽季が洸祈の異常に気付いていたら……

灰樹（2）

あの手は…

何なんだ。

いつの間にか懷から部屋の鍵を洸祈（こうき）に取られていた双灯（そうてい）は開けっ放しにされていたドアを閉めた。

「どうしたんだよ、洸祈君」

シングルのベッドを撫でた洸祈はそこにのろのろと登り這う。

「俺は君が熱だつて言うのに二人で煩く、やる。やらない。って騒いでたから止めたただけだ」

レモンティのルームサービスの電話を掛け終えた双灯はその長い髪をくくり直すと、取り出したタオルを水に浸して絞り、洸祈の額に乗せた。

洸祈は双灯の行動をじっと見詰めると、自らのワイシャツに指を掛ける。

「何も君にどうこうなんてこれっぽっちも……って！」

脱ぎ始めた洸祈。

双灯は眉をひそめてそれを阻止しようとした。

「何で止めるわけ？」

傾く顔。

「何で脱ぐの！？」

驚く顔。

そんな双灯の身体に、再び洸祈の指は触れた。

「何を…っ！！？」

誘うような指先。

後輩の親友であり愛情の対象。

それが崇弥^{たかや}洸祈だろう！？

双灯は後退るがそれを洸祈の腕は許さない。

仕舞いには双灯も洸祈と共にベッドに倒れていた。双灯はがばりと体を起こすと壁に背中を付けて滑る。

洸祈はというと、

—ワイシャツを脱ぎ捨てた。

「いいよ」

洸祈は誘う。

動けないでいる双灯に跨がり、半身をさらけだして。

誰だ？

これじゃあまるで…—

「水商売…じゃないか」

「清いと書いて“清”。ほんの一時期は優しいと書いて“優”だった。無料だから買って」

俺は洸祈君の素性を知らない。

洸祈君は陽坊が連れてきた。

何処だか知らない場所から…—

「洸祈君…君は—」

「娼婦みたいなもの」

洸祈は飽き飽きしたと言わんばかりに双灯の腕を引く。

「ねえ、買ってよ」

妖艶な笑み。

指先を柔らかい舌で舐めた洸祈は艶やかな笑みを浮かべた。

「無理だ。俺は男とやる趣味はないんだ。知ってるだろう？ やよちやん一筋。報われなくてもな。だから大人しくするんだよ」

娼婦。

洸祈君は水商売を。

だからなんだ。

洸祈君は男をも落とせる。

「疼く…胸が疼く…」

「やっぱり具合悪いんじゃないか。俺は胡鳥のところで寝かせてもらうから洸祈君はここで休み」

早く逃げないと。

彼のペースに巻き込まれる。

双灯は乱暴に洸祈を退けようとして…。

「…お願いします」

潤んだ瞳が訴える。

「俺は…」

「…買ってください」

火照った体が訴える。

「お願い…やって…」

疼くから…

洸祈はベッドに腰掛けた双灯の衣服を脱がせるとその上に重なった。

「好きにしていいいよ」

魅せられる。

未知の体験に双灯はその手を伸ばした。

「陽坊…ごめん」

もう止められない。

灰樹（2・5）

由宇麻は捜していた。

「崇弥あ…」

何処におるんや…。

6025号室。

ポーン

腑抜けた音。

「どないしよ」

「誰？」

この声…は？

「陽季君！」

「洗祈…ね」

ベッドに伸びた陽季は遠い目をした。由宇麻はその肩を揺する。

「崇弥は何処や！」

「双灯のそこだよ」

気だるそうな瞳の陽季は枕に顔を埋めて唸った。

蓮君の言った通りの展開や…。

「これは蓮君からの警告や」

「二之宮？」

蓮君、もっと早く言うて欲しかった。

「蓮君がな」

『由宇麻君？』

『そやけど』

『昨日さ、崇弥に変な手紙きたんだけどね』

『そうなん？』

『今夜9時。超高層ホテルtaleの最上階。60階の6025号室に呼ばれたんだ』

『超VIPやん！』

『差出人不明でさ、調べたら今日、その劇場である団体が公演したんだよね』

『団体？』

『流浪舞団、げっかりん月華鈴』

『陽季君が差出人？』

『月華鈴の誰かだと思うよ。それでね、90%の確率で陽季君だと崇弥を部屋に呼びつける目的は？』

『久々にお話するんやろ？』

『はあゝ。そろそろだと僕は思うんだけど？』

『そろそろ？』

『エッチしたいとか』

『はあ！？え、ええエッチ！！！！？』

『98%の確率でそうだととして』

『エッチ確定なんやな…』

『崇弥はどういう反応を示すと思う？』

『想像させるん！！！！？』

『想像させるの』

『…崇弥なら…断る…かな？』

『僕もそう思うよ。でも夕霧君、ゆうきり断られて下がる人じゃなさそうだから…』

『強姦！！！！？』

『言っていないでしょうが』

『だって…』

『二人でやる。やらない。って取っ組み合うかもね。でもね、重要なのは―』

『なんなん！？』

『あいつ…熱あるみたい』

『何で止めなかったんや！』

『だから止めてって言いたいんだ。崇弥の体調は僕の方で逐一管理しているんだけど、今現在、急に体温が上がってる』

『最初に言うことやる！！！！』

『そっか。僕が知る時期から崇弥は風邪引きやすい質だったけど、最近妙に風邪を引く』

『病気？』

『抵抗力が落ちているんだ。このままじゃ…君より酷くなるかも』

『治せへんの！？』

『分からない。多分…原因は……………呪い…』

『呪い？そんな非現実的な―』

『魔法はあるのに？魔法なんて目的によつては黒魔法とも呼ばれるんだよ？呪いは本来の目的を達した黒魔法の一種さ』

『じゃあ、呪いはどうやったら消えるん？』

『まだ研究中。呪いはあいつの過去が原因だから…それに…。それよりも、崇弥の館暮らし知ってるだろう？』

『水商売やな…』

『あいつに風邪みたいな刺激はそう言った時の意識を無意識に浮き上がらせる。防衛本能か…抑制が利かなくなるのか…』

『体を売るん！！！？駄目や！！！！』

『陽季君には好都合かも。やりたくないって好きな人がやってって言い寄るんだからな』

『イヤや！そんなんじゃ、崇弥は誰にも渡さへん！！！！』

『崇弥は君のものじゃない。ものとして見るのは炎と一緒だよ。そんな奴に僕は弟の傍に居て欲しくないね』

『…ごめん。せやな…崇弥はものやない。忘れてまうところやった…ありがとな』

『陽季君に限ってないと思うけど…10%の確率で誰かに…ただでさえ38度越してるんだから…捕まったら…。それも軍や政府だったら。最悪だな。僕は崇弥を護ると誓ったんだ。だから—』

『そのホテル何処や?』

『ありがとうございます』

『お互い様や』

灰樹（3）

「双灯そうつひい！！！！！！！！」

と、陽季はるき。

「崇弥たかやっ！！！！！！！！」

と、由宇麻ゆうま。

「どうしてだよ！！！！！！！！」

陽季は双灯に馬乗りになった。今にも殴り掛からん勢いだ。

「それは……」

抵抗せずに双灯はどもる。

顔を怒りに赤くした陽季は拳を振り上げた。

「この――」

「陽季君、落ち着きい！！！！！！」

由宇麻はそれを寸で受け止めて振りあげた。

痛みに陽季の顔が歪む。

「邪魔するな！！！！！！！！」

獣の瞳。

由宇麻をはね除けた陽季は再び双灯に向き直った。

「お前は！！！！！！」

顔面に上がる石のような拳。当たったら骨が折れん勢いだ。

「陽季君、怒るで」

そこに落ちる由宇麻の一言。

「なんでっ！！！！！！！！っ」

陽季はネジが切れたように動かなくなった。

「双灯さんから降りい」

降りない。

由宇麻は陽季の腕を掴んで引き摺り降ろす。力を無くした彼は床にへたりこんだ。

「…だつて…なんで…」

苦しいはずだ。

辛いはずだ。

憎いはずだ。

悲しいはずだ。

「陽季君」

力一杯由宇麻は陽季を抱き締める。泣きじゃくる陽季を優しく優しく。

「好きやもんな。崇弥のこと好きやもんな。好きな人が誰かに身を捧げたなんて厭やもんな。憎いもんな。悲しいもんな。殴りたくなるもんな。見たくなくなるもんな」

どうしてこうなるんだよ。

陽季の声。

陽季を胸にきつく抱いた由宇麻は茫然とした双灯に囁いた。

「早く服着い」

「俺は…」

「崇弥がやる？事情は分かってる。そこにボーイが居るから相手してや」

「そしたら…」

「陽季君の部屋で待つとき」

「はい…」

「崇弥、起きてえな」

陽季を宥めた由宇麻は、死んだように眠る洸祈（こうき）を揺すった。

「う………しの」

目を開けた洸祈はシーツを引き寄せて体を起こすと表情に影を落と

した。

「言いたいこと分かるやる？」

「滅茶苦茶にしたんだよね…」

「そうや。先ずは服着るんや」

洸祈の着替えを手伝う由宇麻は苦い顔をしてその状況を理解しようと努める。

「立てるか？」

「……立てない」

熱はまだある。

「崇弥、俺の質問に正直に答えるんやで？」

「……………うん」

洸祈はゆっくりと顔を上げた。

「何をしたか覚えているか？」

「…うん」

かくつと洸祈は頭を垂れる。

「崇弥が双灯さんにやってって言うたんやな？」

「うん」

「どうしてや？」

「……………疼くから」

震える手で胸を押さえた。

「疼く？」

由宇麻は訊く。

「胸が苦しくて…疼いて…どうしようもなくて…」
踞る洸祈。

曲がる背中。

「館の時と—」

「同じ…体が求めた…俺は売ったんだ…。自分の体を売ったんだ…。
疼く…疼く…疼く…疼く…疼く…疼く疼く疼く疼く疼く疼く疼く—」

疼くんだ。

「崇弥！しっかりせえ！！！！」

由宇麻は洸祈を抱き止めた。

「助けて…疼く…もう厭だよ」

苦しい。

「どうしようもない…そうやな…俺がおるから…」

悲しい。

「頭がどうにかなっちやいそうだよ…」

痛い。

「大丈夫や…俺がおるから」

辛い。

「喉元に何かが…せり上がってくるようで…」

虚しい。

「崇弥…泣きい…」

寂しい。

「司野…司野…司野………」

熱い。

「ここにおるで」

…—疼く—…

灰樹（4）

ふわりと白が舞った。

意識の薄れている^{はるき}洸祈を後から抱き締めた陽季^{はるき}は、由宇麻^{ゆうま}を見詰める。

「司野^{しの}さん、俺に任せて。双灯^{そつひ}をお願い。俺、今会ったらとんでもないこと仕出かすだろうし」

「そやな。だけど陽季君、崇弥^{たかや}は連れて帰るからな」

「……………ああ」

揺らぐ瞳。

会えなくなる。

「大丈夫や」

何が大丈夫なのか。

曖昧なのに由宇麻の言葉は陽季に響く。

「洸祈」

壊れ物を扱うように…。

そつと…。

そつと…

「陽季…」

呼んでくれた。

「嫌いになった？陽季とは…セックスしようとしなのに…双灯さんとは…しようとするんだから…うつん…したんだから」

二人が互いに貪り合うのが想像できてしまう。

吐き気がする。

だけど…。

「嫌いになんかならない…でも…嫉妬した。双灯に嫉妬した。俺は

まだまだなんだって…」

「違う…。陽季は…傷付けたくなくて…」

双灯ならいいのか。

でもさ、やっぱり俺はまだまだなんじゃないか。

まだ、お前の中では俺は弱いんじゃないか。

「洸祈…好きだよ。だからさ、このままでちよつといさせて」

胸の鼓動を微かに感じ、普段より少し高い体温を感じ、柔らかい髪と頬の感触をゆっくり味わう。

「この感じ…大好き」

陽季は掠れた声で囁いた。

「うん」

洸祈は小さな声で囁いた。

「洸祈、俺達が最初に会った日のこと覚えてるか？」

「うん…雨の日」

あれは雨の日だった。

ずぶ濡れになりながらも洸祈の手だけは放さなかった。
でも…

お前を見つけたのは…

…—雪の日—…

酒の匂い。

甘ったるい空気。

見るからに花街だけど。

「ここどこだよ…」

陽季は着物の袖を揺らしてとぼとぼと歩く。

月華鈴の皆で死んでいった施設の子供達の墓参りに行った。いつか俺もここに仲間入りするのかと考えていたら煮え切らない感情が湧き出てきて一人で宿に帰ろうとした。

しかし、迷子。

治安の悪いこの世の中で全財産——といっても子供のお小遣いよりちょつと高い程度だが——を懷に忍ばせていたから1日泊まるぐらいなら問題ない。

けど、怖い。

小窓から漏れる少女の喘ぎ声。

薄いカーテンから少年と男のシルエットが浮かぶ。

異常だ。

「菊さん…」

何処にいるんだよ…

ここで泣けば誰かが構ってくれるが何されるか分からない。毅然としてなくては喰われる。

陽季は泣きたいのをぐつと堪えて前を見た。

と…

「その人」

柔らかない声。

左耳から聞こえる。多分、娼婦か何かだろう。

陽季は無視して通り過ぎようとした。

「迷ってるんでしょ？」

ずばりと言い当ててくる。ついつい陽季は振り返っていた。

赤みがかかった茶髪に緋色の瞳。窓から顔を出した少年は笑顔を見つけた。

俺ときつと変わんない年だ。

陽季は少年の笑みに見とれた。

「何処に行きたいの？」

少年は訪ねる。

「え…つと」

宿の名前は？

分らない。

近くの店の名前は？

分らない。

………。

「橋！おつきな橋が…」

「二股に分かれている川？茶店が近くにあつた？橋は竹？」

記憶を掘り出す。

橋は…

「竹だつた」

「やはた八幡橋」

八幡橋というのか。

「そのまま真つ直ぐ行つて。暫くしたら大きな街道に出るから川に沿つて右にずっと行けば橋が見えてくるよ」

見れば、遠くの方に街道と川が見える。陽季は頭を下げると体の向きを変えた。

もつと話をしたかつた。

すると少年は呼び掛ける。

「俺、せい清」

清。

名前を噛み締める。

ああ…

「その髪目立つからこれで隠すといいよ」

清は綺麗なシルクの布を陽季に放り投げて寄越した。

「あ…ありがとう…」

「もうこんなところに間違っても迷っちゃいけないよ」

儂い微笑。

どうして君みたいな優しい人が体を売らなきゃいけないんだ。
どうして…

俺達だって学なんてないから芸で日々の生活費を稼ぐ。

一緒じゃないか。

ただ清はあそこに辿り着いた。

生きる為にあそこに辿り着いただけ。そうだろう？
名残惜しい。

ああ…

「清？」

清の華奢な肩に腕が伸びるのが見える。

「起こしちゃいましたか？」

女が清に凭れる様にして体を起こした。裸の女は陽季を見付けて清
とは違ういやらしい笑みを浮かべる。

陽季はじやりつと砂を踏んで後退った。

「余所見？だーめ。今は私が買い主なんだから」

「ごめんなさい」

「清は可愛いのね」

その白い頬にキスをする女。
見るな。

帰るんだ。

早く。

しかし、

目を背けられない。

体が動かない。

清は小窓から離れようと、陽季の目の届かないところへ引っ込もうとするが女の腕がそれを許さない。

「せーい」

清の着物に指を掛ける女。

「お客様！」

羞恥に顔を赤くして必死に着物を押さえる清。

「茉莉^{まり}よ、清」

目を背ける。

体を動かせ。

あそこにはあそこなりのルールがあるのだから。

陽季は無意識に拳を強く握っていた。

「茉莉さん！なんで―」

「アナタの為にお客さんを増やしてあげる」

「いやだっ」

現れる滑らかな肌。

綺麗だ。

息を呑んでいたのは陽季だけじゃない。いつの間にかショーに見入っていた通行人も息を呑んでいた。嫌がっているその姿でさえ見物でしかない。

「はい、オワリ。清、時間ぎりぎりまで堪能しましょう」

女に引かれる瞬間、陽季は清と目が合う。

泣きそうな瞳。

その時、陽季は目を逸らした。

「見たかよ、あれ」

男が囁く。

「マジ上物じゃん」

下品な笑い声。

「今夜戴きに行くかな」

脂臭い。

こんな奴等に…

「くそっ」

舌打ちした陽季は清がくれたシルクを被って道を駆け出す。

一瞬でも俺は欲しいと思った。

あいつらと同類か…

頬に熱いものの存在。

ああ…

…俺は惚れたんだ…

灰樹（5）

泣かないで、しんじ洗祈。

「泣かないよ……………」

「たがや崇弥？」

ゆうま由宇麻は首を傾げる。

洗祈は窓に凭れていた体を起こすとフロントガラスの奥を紅い瞳で見つめた。

「しの司野…降りして」

膝に掛けていたコートを羽織ってドアの取っ手に手を掛ける。

「なんでや？」

チラチラと視線を揺らして由宇麻はハンドルを切り、やがて停まる車。

「ここからは帰れるから」

「ちよつ、崇弥崇弥！」

由宇麻の手は空を斬って白い息を吐いた洗祈は夜風の中へと足を進めた。

「…………雪」

やっぱり。

粉雪が視界に柔らかく舞う。

洗祈は掴めないそれに手を伸ばして抱いた。
そして呼ぶ。

「司野…」

自らのコートを洗祈に掛けるお人好しに…。

「なんや？」

ズボンのポケットに両手を突っ込んだ由宇麻は空を見上げて返した。

「何かさ…もう…」

呑み込む言葉。

「自分を殺すことは赦さへん」

分かったか？崇弥。

由宇麻は温まっている手のひらで無意識に握られた洗祈の拳を包む。それを見つめた洗祈は白くなった甲に滴が落ちたのに気付いて自分が涙を流していることが分かる。

酷く脆くなった

誰かの手を求めるようになった

要らないと振り払ってきた

それを

求めるようになった

見たくないが無視してきた

それを

求めるようになった

弱く弱く…

脆く脆く…

今にもこの身を
投げ出したくなるくらい

罪を犯して
目を叛けた
そんな俺に
求める資格はないと

握り締めたこの手のひらで
あとどれだけの人を
苦しめればいい？

苦しめれば俺は解放される？

あとどれだけの罪を
重ねねばいい？

重ねねば俺は解放される？

あの時の
アナタとの
約束を…
果たせば…

『君を解放しよう。私が全てを終わらせてあげる』

氷羽^{ひわ}の為に…――

「司野…」

洸祈は手のひらに積もっては消える雪を見て由宇麻を呼ぶ。

「なんや？話なら車で話さへんか？」

「寒いならコートいいのに…」

「寒くあらへん。崇弥が心配なんや」

童顔が見詰め返してくる。

なんで…

「司野…」

「なんやって返さなあかん？」

ちよっぴり呆れた声。

「返さなくていい。ただ…俺は答えに困ってるんだ」

「答え？」

全ての。

何を考えたいのか…。

「司野…」

「なんや？」

返すんだ。

「死にたくない？」

「死にたくない」

そっか。

と…

…―馬鹿やな―…

「司野？」

背伸びをした由宇麻は洸祈にフードを被せた。身を振る彼を由宇麻はそのまま抱き締める。

「俺にはテレパシーなんてもんはあらへん。だから餓鬼じゃなくなつた崇弥が何考えてるか分からへん」
「ただどな

「なあ、崇弥：俺はこの手を放す気はあらへんからな。絶対にや…絶対に放さへん。俺な、崇弥の傍が心地いんや。だから俺は放さへん。たとえ崇弥が振り払つてもこの腕を体を使つても放さへん」
「俺は陽季に二之宮、多くの人を傷付けたんだよ？傷付けるんだよ？」

放したくなるだろ？

「だから？俺は案外丈夫なんやで？そうじゃなきゃ崇弥の横に立てへん。陽季君も蓮君も崇弥に傷付けられても丈夫だから横に、傍におるんやないか」

二人に積もる雪。

由宇麻は笑う。

「寒くて震えてるくせに」

「ぎゅってしてもええんやで」

その瞳が綺麗で…

「父親を抱き締めるやつがいるかよ」

つい意地悪をしたくなる。頬を膨らました由宇麻は洸祈に額をぶつけた。

「お熱あるな。洸祈君、お父さんがおぶってやろっ」

そして、彼は脇に手を入れ、

……―
俯いた。

「おぶれないだろ」

足をぶるぶると震わせながらも洸祈を引き摺るようにおぶろうとする。洸祈は由宇麻から離れると彼を後ろから抱え上げた。

「崇弥ぐらい身長あれば楽々に運べるんやからな」

「司野ぐらいの身長でも楽々に運べるんだからなくすっ

二人から溢れる笑み。

「司野さ、雪好きなんだろ？」

「大好きや」

小さな口で夜の空気を吸い込むと、由宇麻は洸祈の胸に顔を埋めた。

「なんで？」

「聞きたいか？」

「そりゃあ聞きたい」

司野のことならなんでも。

「俺の重さだけ背負わせるなんて不公平だろ？」
背負わせてくれよ。

由宇麻の瞳が揺れた。

いいで。

と...

「雪はな...」

...くしゅん...

あっ.....。

「司野...」

「？」

「くしゃみ可愛いな」

マジで可愛いな。

「司野...」

「？」

「早く帰ろつか。そんで風呂入ろっつぜ。俺が洗ってやるよ」
ちやつかり爆弾発言。

由宇麻は洗祈から慌てて降りると後退った。

「一人で入れるわ！」

「まあまあ、帰ろ？」

「せや！帰ろ」

由宇麻のパーカーの帽子が揺れる。洗祈はそれに手を伸ばしてやめた。

そして、落ちたその手に息を吐く。

「司野…」

「なんや？」

「はすの花…いつ咲くんだった？」

「蓮？分かんない」

「そう…」

要らないと振り払ってきた
見たくないが無視してきた
それが…

振り払われる時が近い。

「調べたるか？」

「いや…いい」

『僕が散るその時』

「蓮が散るその時」

『笑ってくれよ？』

「泣いていいか？」

じつと洗祈を見詰めた由宇麻の瞳が見開かれる。

まさかやろ？

掠れた声で囁いた。

灰樹（6）

彼の罪を赦しますか？

NO

「しーの。ほら来いよ」

開けたドアの端から顔を出した由宇麻は頬を赤らめて言う。

「こんな遅くなかったら一緒に風呂なんて入らんかったんやからな
！」

ツンデレ…。

くすっ

「じゃあ、遅かったら司野しのは俺と一緒に風呂に入ってくれるんだ」
否定するかと思いきや。

「……その時はしゃーないな」
新種のツンデレだ。

「何そのカッコ」

でかいバスタオルを脇の下から巻いている。
女か？

「ええやろ…別に」

ツンデレ再発。

ふーん。

「ま、いいけどさ。でもな、そーゆーの逆にそそられて何仕出かす
か分かんないから」

すると、由宇麻は赤い顔を更に赤くして唸った。

「だって…崇弥たかやはそーキン肉マンみたいやけど…俺…全然やし…」

「いやいや、キン肉マンはヤダから。皆厭だから」

「じゃあ…」

細い。

瞳をぱちくりさせた洸こう祈を眉を曲げて見下ろした由宇麻は桶に取っ
た湯を一気に頭から掛けると風呂に飛び込んだ。

「なんや、じろじろ見るんやな…！！！！？」
ずるっ

由宇麻の体が傾いた。

「司野！」

心臓が跳ね、苦しくなり、足を滑らせた由宇麻を洸祈はその腕に納
める。

「心臓わりいのに」

荒い息を吐く由宇麻の洸祈の背中を撫でる。

「しゃーないやろっ！崇弥のせいや！！」

湯を揺らして反対まで退き、体を浴槽に預けた由宇麻は目を閉じた。

「司野、ちいとか陽季はののけとかとおんなじだよ？」

「だからなんや…俺は崇弥みたいのがいいんや」

薄目を開けて洗祈を観察する。そして、伸ばした指先で窪みを縦にすつとなぞった。

「俺は貧弱や」

違う。

「司野は強いよ」

俺よりずっと。

腕を引いたら簡単に両腕に納まる。

これじゃあ崇弥がお父さんみたいやん。そう微笑する由宇麻はやっぱり強い。

「司野、こんなことしてあれだけどさ」

「？」

「お前の感触で欲情しそう」

男のくせにさ、瞳はでかいし、髪は少し短いけど、女の子にしても通用しそうだし。

「尻が柔らかい。腰が細い―」

バシャッ

水をぶっかけられた。

「ごほっごほっ…ごほっ…っ」

「ばかつ！…もう出る！…！！！！」

「うそうそ。俺が出るから。まだ入ったばっかしだろ？」

浴槽を立つ洗祈。

縮こまる由宇麻は減った湯に顔を曇らした。

「崇弥だつて入ったばっかしやんか…」

しゅんと聞こえてくるようだ。

「司野がゆっくりできないんなら俺は出るよ」

磨りガラスのドア。

洗祈は取っ手に手を掛けた。

「崇弥がおらへんなら出る」

振り返った彼の目に映ったのは濡れた瞳。

「それじゃあ意味ないだろ？なら俺はもう少し温まる…」

洸祈は踵を返し、

「崇弥がおるならここにおる」

赤い頬。

笑いを噛み殺した洸祈は由宇麻の頭を優しく撫でた。

「その髪、洗ってやるよ」

「髪くらい……」

「させてくれよ。あいつが俺にしてくれたこと誰かに残したいんだ」

『蓮の花が散るその日まで』

——…傍にいるから……—

「崇弥？」

由宇麻はぼーとしている洸祈に声を掛ける。洸祈ははっと意識を戻すと前に座る由宇麻の頭にお湯を掛けた。

「いい子にしてろよ」

「んー」

「崇弥」

「？」

「何か聞こえへん？」

……………。

「電話だな」

「こんな遅くにだれや？」

由宇麻は淵に乗せた頭をあげると浴槽を出た。

くしゅんとくしゃみをする由宇麻。洸祈は入ってるよと促すと顔を輝かせてうん。と元気な返事をする。

脱衣場はエアコンのお陰で温かいがやはり何処か肌寒い。

午前2時切った朝早くにメロディーは哀しく響いていた。

「……………」

洸祈は水滴を拭き取りながら電話に無言で対応する。

『……………』

何これ…

相手側も無言だ。

「誰？」

『……………』

無言。

洸祈は苛立ち、切るからと怒鳴り、受話器を置こうとしたが、

『崇弥洸祈か』

この声…。

ピタリと動きを止めた洸祈。

「誰？」

『前前回…いや…君には前回…暴れる君を牢獄に放り込んだ人間さ』

……………政府だ。

灰樹（7）

「何でここに電話したんだ！」

ここは司野しのの家だぞ！

『ヒステリックだなあ。僕は司野由宇麻ゆづまさんに用事があるから電話したんだ』

嘘つけ。

「夜中に？」

『もう「早朝に？」だよ』

電話口の男に焦りはない。

まるで――

「俺が出ると分かっていた……」

『司野由宇麻さんは君の父親代わりだろう？別に君が出ても驚かないさ』

代わりじゃない。

父親だ。

『それで司野由宇麻さんは？』

「いない」

『ふーん。じゃあ、明日にでも会社に電話するからいいよ』

居ると知っていて言っている。

「司野は出ない」

『君は何処まで彼を縛る？別にいいだろう？司野由宇麻さんが望んでいるんだから』

望んでいる？

『昨日：それはもう朝早くに僕のところに電話してきたんだ。その時は所用で出れなかったけど。彼が電話してきたんだから掛け直した。分かったかい？』

なんで司野が政府に？

それもこいつに……。

「何で司野がお前なんかに―」

「うつ！！！！！！！！！！！」

呻き声。

「司野！！！？」

振り返るとパジャマ姿の由宇麻が胸を押さえて床に倒れていた。
置き損なつた受話器が音を発てて机にぶつかる。

「司野！おい、司野！！！」

「たか…っ…助け…って…」

「どうすれば―」

―ソファ―に寝かせてあげて―

青い体に黒曜石の瞳。

二之宮このみやのこのスイは洺祈しんきの肩に停まる。

何故ここにスイがいるのかは置いといて、洺祈は踞る由宇麻をソファ―に寝かせた。次を促す前にスイは応える。

―直に収まるから―

苦しそう。

「でも―」

―なら、名前呼んであげなよ。こういう時、人は人の温もりに安心するんだ。そつと…優しく…安心させてあげて―

「崇弥たかやっ…どこっ…」

「司野、ここにいるよ」

「もつと…近く…もつと近くに…たか…や…」

伸ばされる手。

洺祈はそれを握ると胸に抱く。

「大丈夫…大丈夫だから…由宇麻…大丈夫だから」

「イヤや…苦しい…痛い…もう…楽に―」

「させない！絶対に楽にしてやるか！！皆、皆、勝手に死んでく！何だよ！目が見えなくなつたから俺達に会えなかった。次の蓮の花

が散る時に命尽きる。苦しくて痛いから殺してくれ。何だよ！！そんなに会いたくないのかよ！！！！そんなに簡単に諦めるのかよ！！！！そんなに死にたいのかよ！！！！皆勝手だ！！！！！！！！」

― 洸祈、落ち着いて。恐怖は伝わるから―

恐怖

スイは洸祈の頬に頭を寄せる。

落ち着いて…落ち着いて…。

繰り返される言葉。

洸祈は興奮で跳ねた心臓を押さえると物悲しげな表情をした由宇麻をおもいつきり抱き締めた。

「ごめん…司野…」

「…ごめんは俺の台詞や…」

―落ち着いた…大丈夫だよ―

スイが由宇麻の額に降りる。由宇麻は自らの心臓を触ると本当や…と安堵の溜め息を洩らした。

―逆上せただね。それが原因だよ。蓮^{れん}が言ったでしょ？なるべくシャワーで済ませること。月1はリラックスの為に逆上せない程度、人肌より少しだけ高い程度のお湯に浸かること。逆上せているようなら横になって逆上せが抜けるまで待つこと。いい？―

「すまんなあ、スイ君」

―どういたしまして―

テーブル上の小箱を探った由宇麻は額のスイに餌をやる。

「ご飯忘れてたな、ごめん」

―さくらんぼくれたら許すよ―

「うん。待っててな。崇弥も食うか？」

「うん」

『それより僕を忘れてないか』

受話器から洩れる言葉。

「まだいたのかよ！」

「え？崇弥何や？」

台所に立つた由宇麻には聞こえないのだ。洗祈は慌てて何でもないと取り繕う。由宇麻は首を傾げると冷蔵庫に顔をつ込んだ。

さくらんぼさくらんぼ

由宇麻の陽気な歌声。

「二度と電話掛けてくんな」

『司野由宇麻さんから掛けてきたらどうすれば？』

「出んな」

『ふーん』

洗祈は切ろうとして男の言葉に手を止めることになる。

『相変わらずだね、蓮は』

蓮？

『懲りずに作ってたとはね。未練たらたらとアイツの声を埋め込んで寂しさをまぎらわしてたとは。羽音から判断して小鳥だろう？…』

飛べないアイツの代わりか？馬鹿な子だ』

よく分からないけどムカつく。

だけど訊いてしまう。

「…アイツ？」

暫くの沈黙。

そして、

『愛人』

………？
「愛人んー！……！？」

「崇弥！？誰と話してるんや！！俺に來た電話やろ？変なこと喋らんで貸しいや」

いつの間にかさくらんぼの入ったボールを抱えた由宇麻が洸祈の受話器に手を伸ばした。

ガチャン

切った。当然、怪しみ眉を潜める由宇麻。洸祈は苦笑い。

「誰や？崇弥、誰や？」

さくらんぼを取ろうとしたその手を掴んで訊く。

「…二之宮」

「何で切るん？」

「その…二之宮が…教育上悪いこと言うからさ」

「俺の方が年上や。正直に言うんや、崇弥。誰や？」

由宇麻の厳しい追求。

「…ほら…さ…」

「何や？」

「男同士のセックスの仕方とか…いかに…相手を気持ち良くさせるか…とか」

案の定。退いた由宇麻はソファーに踞った。二之宮なら話を合わせてくれる。

この作戦は成功だ。

いつの間にか寝てしまった由宇麻の頭を撫で洸祈は考える。

「二之宮に愛人…スイのはその愛人の声…明らか女じゃん」

いや、女って変じゃないけど。

でも、二之宮の性癖から見れば…。

一体、あの男は何者なんだ。

何故司野は電話するんだ。

二之宮の愛人って…

洸祈はうつとし、ゆっくりと眠りに落ちた。

眠いや…―

SubEpi sode―過去の一部―

俺達が出会ったのはある夏の日の長い夕暮れ時だった。

小川を跨ぐ橋に腰掛けていたあいつに危ないと声を掛けようとした時、彼は俺の前に現れた。

2メートル近くの高さのある橋から飛び下りた彼は、着ていた袴の裾を靡かせて着地した。そして、小川の水をピシヤリと跳ねらせながら優雅に歩いて俺の前に立った。

「君は…誰？」

俺は不思議な感じを纏う彼に訊いた。彼は「きみにはぼく達が違う者だと分かるんだ」と俺に笑顔を向け、

「きみの名前、洗祈せいきでしょ？」

質問に質問で返された。

「どうして知っているの？」

「知ってるさ。きみを愛する人は皆、きみを洗祈って呼んでる」

「あ…い？愛って何？」

聞き返すと、彼は俺の唇に問答無用で自らの唇を触れさせた。その時の俺はそれが愛情表現の一種だと知らなくて、首を傾げていた。

「きみって本当に鈍いね。幼稚園…だっけ？そこで女の子にキスされてたろう？それが愛さ」

思い出せば、同じことをされた。訳も分からなかったが。

確か、好きなの。とか言ってキスをして走っていった女の子を、茫然と見送っていたら、ふと、物陰から千里せんりが寂しそうな顔を覗かせていた。

『千里？』

『洗ばっか……キライ』

そして、あいつはスタスタと何処かへ消えた。

「分かった？」

「……………うん」

なんとなくだけど。

「ねえ、それで君は誰？」

重要なことを忘れていた。

「ぼく？ぼくは氷羽^{ひゅ}だよ」

「ひわ？」

「そう、ぼくは氷羽。氷の羽^はって書いて氷羽」

氷羽は頷くと俺の手を握って歩き出す。

どこへ行くのだろう。

俺達3人は今夜、夏祭りに行く予定だった。しかし、葵^{あおい}が熱を出したので、一人で待ち合わせ場所のこの橋に来たのだ。

氷羽の向かう方向は夏祭りのやっている川原とは真逆。

森へ向かっている。

橋を渡り、俺は氷羽に手を握られたまま、細い半人工的な草の踏まれた道を登る。

「ねえ氷羽、どこへ行くの？お祭りはあっちだよ」

「いいから。花火、すごーい楽しみにしてたんでしょ？」

確かにそうだけど。

ならば何故、川原から離れるのか。氷羽が森に向かう理由が分からない。

付き合ってられないと思って引き返そうと思ったが、氷羽に手を強く握られて振り払えない。しょうがないので、彼の言葉を信じてついていくことにした。

それに、千里を一人置いてはいけない。

「洗くんってさ、ずっと見てきたけど、いつも何考えてるのか分かんない。洗くんはいつも何考えてるの？」

そんなこと……

「初めて訊かれた」

「まあね。でも、きみだけに言わすのは不公平だね。そーだなあ」

彼は勝手に話を進めて、勝手に考えて、勝手に話し始める。

「千里はきみが好きでも嫌いでもなんでもない。なんてどう？」

「好きにしなよ」

俺はなんだか苛ついてぶつきらばうに返す。

「そっか、分かってるんだ。千里にとってきみは“人”。ただの構ってくれる人でしかない」

そっだよ。

分かってる。

千里と俺の間には常に葵がいる。葵がいて俺達は“親友”なのだ。千里と俺だけでは噛み合わない。

「はい、ぼくのことは言った。これで公平だ。ねえ、きみは何を考えてるの？ずっと、気になってたんだ。教えてよ」

言わせてもらいたい、それは氷羽のことじゃなくて千里のことだ。ただ、千里はぼくでもあるんだから」

氷羽はそう言い訳をした。

「じゃあ訊くけど、いつの俺が考えていることを訊きたいの？」

「いつもだつて。教えて言うなら、きみが起きている時」

いつも同じことを考えているわけ――

「あるでしょ？」

彼はそう言い切る。

「何で訊きたいの？」

しかし、あるでしょ？と言われても思い付かず、俺は“ある”と断言する彼に逆に理由を訊きたくなっていた。

「何でかって？それはきみを知りたいからでしょ？どうでもいい人

間にこんなこと訊かないよ。それに、本当の友達になるにはこんなところは大切になって」

氷羽は森の奥の神社までの石段に足を乗せて言う。そして、カランと下駄を暗くなってきた空に響かせると、踵を揃えて、腕を引いたままの俺を見下ろした。

「ね？ 洸くん」

大きくて綺麗な翡翠だ。

「友達？」

俺が氷羽を見上げて再び訊くと、彼は大きな溜め息を吐いた。

「友達だよっ！ あーもう！」

そして、怒りだす氷羽。

訳が分からない。

氷羽は頬を膨らますと、髪と振り袖を靡かせて俺を前へと引っ張った。

「氷羽っ！ 早いよ！」

階段を１段飛ばしで進む氷羽のせいで転びそうになる。

「花火が始まるんだから早く！」

カランッ……

大輪の花火が見えた。

「わぁ！ 凄い！」

「特等席。ちゃんと見れたでしょ？」

「うん！」

俺の大好きな花火だ。

寂れた神社の屋根の上は確かに特等席だった。少し罰当たりな気がするが。

「大丈夫、ここの神様にはもう人に影響を与えるほどの力はないから。信仰を失った神なんて……」

……ごみ以下さ……

「氷羽？」

「つと、洸くん、ぼくは本気できみと本当の友達になりたいんだけど」

氷羽は友達になるということ諦めてなかったらしい。

「だから教えてよ」

「うーん。友達になるのはいいけど、俺には俺がいつも考えてることなんて思い付かないよ」

「じゃあ、きみの望みを聞きたいな」

「望み……何でもいいの？」

「うん」

「えっと……」

望みって…。

俺の望み？

「じゃあ……」

その時の餓鬼の俺の望みは、

「誰かを愛してみたい」

だった。

誰かに何か良いことをしてもらったらありがとうと感謝する。そして、今度はそれを他の人にしてあげなさい。

そう、父さんに教わっていた。

だから、俺のことを洸祈と呼んで愛してくれる人達にありがとうと

感謝して、

誰かを愛してあげたいと思った。

氷羽は花火の光を頬に受けながら笑みを見せ、

また俺の唇に自らの薄ピンクの唇をくっ付けてきた。

「ぼくはきみの友達として望みを叶えられるよう頑張るね」

「え？じゃあ、俺も！」

何かしてくれるなら返さなきゃ。

「じゃあ、きみはぼくの友達としてぼくを愛して」

それは俺の望みだ。

「違うよ。ぼくの望み」

再びくっ付けられる唇。

ただくっ付けて何がしたいんだろうと俺は考えていた。

そしたら、氷羽が重ねた唇から舌が伸びて、俺の唇の隙間から齒列をなぞる。

「？」

「口開けて。本物のキスはこうなんだよ」

俺が愛するのにも、氷羽が愛されるのにも、本物のキスが必要なら…。

俺がそつと開けると、氷羽の舌が口内に滑り込んできた。

ふわふわな柔らかい舌は俺の舌をつつき、つつき返すと、舌を舐めるように絡ませてくる。

「ひ…わっ…」

「ぼくを愛して… 洗くん…」

そして、俺達は随分とこうしていた。

「洗くん、ぼくらは友達だね？」

氷羽はいつ見ても綺麗な髪を俺の体と千里の体に散らして抱き付き、花火を背に体を重ねて訊いた。

「うん。氷羽は俺の友達だよね？」

「勿論。ぼくらは友達だよ」

そして、俺達は友達になった。

その後も、氷羽が言う“人間同士の愛し方”を言い換えるなら、性交を氷羽とした。

沢山キスをして沢山氷羽を愛したつもりだった。

しかし、この体を繋げたのが氷羽の体ではないということが、俺達の間を、愛し愛され、それでも友達という関係にしていた。

氷羽はよく俺にヒトについて語った。

それらを今もまだ一言一句違わずに記憶しているのは、氷羽がヒトを語るときだけは冷静だったからかもしれない。

彼は、

ヒトは馬鹿だと蔑み、

ヒトは脆いと嘆いた。

「ヒトはヒトを傷付ける。分かるかい？ヒトは同じ種で傷付け、殺し合う。生きる為に齷齪あくせく働く蟻以下だ」

あいつの手に生まれる小さなナイフ。

「これをヒトは何の為に使うと思う？」

「俺は父さんに危ないから触るなって言われてる。でも、何かを切ったりするものでしょ？」

「そう。本来は生きる為に作られたものだ。だけど、ヒトの思いが

…」

チクリと胸に痛みが走った。

見れば、氷羽の手が俺の胸にナイフを突き立てている。

「氷羽？」

「これを殺す為の道具に変える」

氷羽がナイフを抜いたと思ったら、俺の体には傷一つ付いてなかった。

「憎しみが、悲しみが、ヒトにヒトを傷付けさせる。たとえ、そこに形として見える利益がなくなるとも。他の生き物は違う。何らかの利益の為に動く。ヒトの言う道徳から見れば、ヒトが最も愚かだ」

ナイフを弄ぶ彼は、ヒトを批判しながらも、とても苦しそうな顔をしていた。

「だけど…どれもこれもヒトには感情があるからで…だからこそ、ヒトは絆や平和という言葉を使える。洸くん、ぼくを愛せてる？」

「分かんない。氷羽は？」

「さあ。ぼくはヒトじゃないし。でも、愛されてるのかな…洸くん」といって温かい

ナイフを光に変えて消した氷羽は俺に抱き付く。

「洸くん…もしさ…ぼくがきみの大切なもの壊したらどうする？」

大切なもの？

家族。

それに……………千里。

「直すよ」

俺が真面目に答えると、氷羽はくすりと笑って喉を猫のように鳴らした。

「駄目だよ。先に怒らなきゃ。ぼくを怒らなきゃ」

「何で？わざと氷羽は壊すの？」

「違うけど、怒って欲しいな。簡単に受け入れられてたら愛されるように感じないもん」

「じゃあ、その時は氷羽を怒る。俺は氷羽と友達やめる」

大きかったあいつの瞳は細められ、長い睫が作った影のせいで黒く見えた。

今思えば、あの時の氷羽の表情には何も意味はなかったのだろう。彼らは永遠の命の代償に心を失なっていたのだから。だけど、俺には氷羽が寂しそうな顔をしたと思った。

「うん……その時はやめよつか……友達」

俺はヒトで、

彼はカミサマ。

俺には心があつて、

彼には心がない。

なのに、

彼にはヒトらしさがあつて、

俺にはヒトらしさがなかった。

氷羽の夢を見てこんなに穏やかでいられるのは久し振りだ。

氷羽…。

かつて俺が愛した者の名。

呼び掛けて、司野しのが隣にいることに気付いて口を閉じる。

「彩樹さいしゅ…司野を護ってくれよ。俺には絶対は言えないから」

枯れ草色の髪を指に絡めようとすれば、指の間からサラサラと流れ

落ちた。

『護るさ。お前に言われなくても。絶対に』

彩樹の声。

俺の手を払い、彼は立ち上がる。

『由宇麻はぼくが護る』

二回言った彼は寝室のある二階への階段に通じるドアを開けた。

「一つ聞いていいか？」

『ぼくが答えられる範囲なら』

彩樹は俺に背を向けたまま答える。問答無用だった前回と違って大
人しいのは少し気になるが、まあ、聞いてくれるなら嬉しい。

こいつなら俺の要望を聞いてくれそうだ。

「お前は俺が嫌いか？」

『大嫌いだ』

予想通り。

司野を護ってくれるのに俺を嫌わない理由も必要もない。

司野が好きなら。

「殺したいぐらい？」

『ああ』

これも予想通り。

彩樹の声音に偽りは感じられない。

「じゃあ、殺してくれ」

『は？』

彩樹が俺を見る。

「俺は氷羽を助ける。罪を償う為に氷羽を俺のどんな犠牲を払って
も助ける」

氷羽に与えている苦痛に比べたら…俺は手でも足でもくれてやるよ。

『それで？』

「氷羽を助けたら俺を殺してくれ」

『どうして？』

彩樹は無表情。

興味なさそうだが、いいんだろ？お前は。

「お前は俺を苦しめたいだろうが、俺は司野に迷惑掛けたくない」
すると、彼は司野の細い足首を見せて俺に歩み寄り、指先が俺の首に触れた。

小さな両手が首を包み込み、親指が氣道を撫でる。

『お前はこの子に死ぬなんて勝手だと言った。だけど、お前が一番勝手じゃないか？』

俺の言葉に喜びもしない彩樹。

彼は何か変わったのかもしれない。

『この子の手は汚させない。この子が気に入ってるからね。だから、あの方に頼め』

彩樹は俺の耳に口を近づけると、囁いた。

『あの方をお前がもし助けたとしたら、あの方に殺してくださいと頼め。ぼくはあの方の苦しみを消したいだけだ。全てはあの方が決めること』

そして、俺の首から手を離し、開けっ放しのドアを通過して階段を上っていった。

―死にたいの？―

肩に止まったスイが鳴いた。

「今は死にたくないよ。ちょっと行ってくる」

―どこへ？まさか…―

ご名答。

「なんかさ、あいつの誕生日なんだよね。今日って」

―じゃあ彼には秘密にしといてあげる―

サンキュー！。

灰樹（7・5）

「暇だなー」

想像が現実なるとか考えて興奮してたのに一気に冷めた。
暇だけが残る。

鞆のあれやこれやもまたいつかまで使えず重荷になる。

「馬鹿みたい」

すっげー馬鹿みたい。

考えてみれば、ありとあらゆる場面で俺は惨めだ。

「炎の時も司野さんの時も二之宮の時もさっきも」

馬鹿みたい。

「間違ったり…手遅れだったり…何にも出来なかったり…」
本当に使えない奴。

いつだってそう。

肝心な時に俺の手は届かない。

「かつこ良かったのって最初だけかなあ」

自分で言うのもあれだけど…。

最後は馬鹿みたいに辿り着く。

「やっぱ俺が上でしょ」

俺の方が身長高いし。

キスだって8割俺からだし。

でも…

寝てる時は洗祈の方が積極的。

いや待て。

推してるのは俺だろ？

俺が喘ぐのか！？

キモいな…。

ほら、洗祈が喘ぐとすると…。
いいかも。

それに構図もねえ。

潤む瞳。

微かに開閉する唇。

汗ばんだ額。

弾む―

「馬鹿やろー！！！！！！！！」

何考えてるんだ馬鹿っ！

ああ……虚しい。

灰樹（8）

眠れねえ。

「テレビつと」

ニュース、ニュース、ニュース、ニュース、ニュース……

「ニュース……だけね」

暇。

陽季はベッドに横付けされている机の上のメニューを見た。

「早すぎる朝御飯にするかな」

サラダ……だけでいつか。

内線に掛けると直ぐにボーイが出る。

サラダを頼むと分かりました。と返してきた。

カーン

——ルームサービスです——

ドア向こうから聞こえる。

陽季がドアを開けるとボーイはキョロキョロと部屋の中を窺う。
なんなのだろう。

「何？」

「は！すみません」

ぺこり。

「はい、代金」

陽季はサラダを置いた彼の手にお金を乗せた。ボーイは一度俯くと、
ぐつと顔を上げる。

「何！？」

「あの！その！」

ぱくぱく。

ワケわからん。

目で後ろを訴える。

「変な人でもいんの？」

「その…こちらも…」

一度廊下に出た彼は特大のケーキを持ってきた。

ケーキ？

「頼んでないんだけど」

「……………匿名希望の方が貴方にと…本当はサラダの代金も既に頂いてまして」

そーゆーこと。

「アメリカで言う賄賂。こんなでかいケーキを運んできたお礼」
握らせるとにこりと笑んだ。

それにしても…。

「匿名希望ねえ…何でケーキ？ボーイさん、その匿名希望さん、この宿泊客？」

げっかりん
月華鈴の誰かだろう。

そうひ
双灯か？もう怒ってないのに。

「いえ…じゃあ私は」

早い。逃げるように去る。

「にしてもでかい。朝からケーキか…サラダもう1皿の方が良かった。皆にあげるかな」

でも、俺にはケーキよりも欲しいものがあるんだ。

カーン

陽季がサラダのフォークを持った時だった。

「誰？」

覗き穴からは見えない。
間違い？

カーン
「誰？」

誰も見えない。

カーン
開けてほしいのね。

ガチャ

開けたが誰もいない。
逃げる誰かの姿もない。
陽季はドアの向こうを見ようと身を乗り出した。
ぐいつと腰が引かれる。

「うわっ！！？」

そして、

んっ

誰かが抱き締め、キスをしてきた。

これは…

俺のお日様だ。

「何で―」

「ハッピーバースデー」

…―しんき 洸祈―…

キスだ。

「なんで…」

「黙って。煩くしちゃだめ」

洸祈は俺の体を引き寄せて優しく唇を触れてくる。
まだ夜は空気が乾燥しているからちよつと洸祈の唇はカサ付いていて。

嬉しかった。

よく分からないけど、洸祈が目の前にいる。

お日様が俺を抱き締めてくれている。

「洸祈…」

「何？」

「もつと…強く抱き締めてよ」

「うん」

「二十歳の誕生日おめでと」

「何で知って…」

ていうか、俺は完全に忘れてた。

「前に訊いた」

そうか？

そんなことよりも洸祈がいる。

「俺の妄想じゃない」

「司野には内緒で来た」

陽季は洸祈に力強く抱き付いた。
本物だ。

「電車ないからヒッチハイクしたんだ。人生初」

「馬鹿。危ないだろ？」

洸祈は頬を膨らました。

「折角祝いに来たのに……」

「嘘だよ。ケーキお前だろ？」

「ケーキ？」

へ？

「違う？」

「いや……その……俺をプレゼントしようかな……なんちゃって」
可愛すぎてこの場で押し倒すところだった。

「最高のプレゼントだ」

ケーキは結局分らず仕舞いだけど。

そこでだ……俺達には当然のようにオチがあった。

「あはははは」

渴いた笑いをする陽季。

「あはははは」

渴いた笑いをする洸祈。

二人は自動施錠で締め出されていた。

ボーイに開けて貰わないとな。

Sub Episode — 包む光 —

「立喜^{たつき}い」

気だるそうな声。

「何？因みに、飯が不味いつて言ったら追い出すから
俺は子供だからって容赦なんかしない。」

すると、

「頭が痛いよ」

スプーンを置いて、彼はうーうーと唸る。

「ああ、俺の頭も痛くなった」

こんな餓鬼んちよの相手とは。

「昨日は早くに寝たか？」

「夜の9時だよ？」

「何時に起きた？」

「朝の8時だよ？」

11時間睡眠って多いのか少ないのか分からない。

「ゲームのし過ぎか？」

「立喜が出来なくてムカついて投げたゲームをコンプリート？したよ」

あーあー。マジでムカつく。

「はい、氷羽^{ひわ}のそれはゲームのし過ぎだな」

「じゃあ、立喜のせいだあ」

はい？

何故、俺のせいになる？

「俺をお家に閉じ込めるから」

そうきたか。

「俺は大学で忙しいんだ。衣食住提供者に失礼だぞ」

「お外に行きたい！砂場で遊びたい！」

こいつはあ！

「お前が作った砂場の落とし穴でマンションの人が転んだからって、俺が謝ったんだぞ！？全く懲りてないだろ！！試験勉強にバイト！炊事洗濯！これ以上、俺に迷惑掛けんな！」

「たっ…きい…」

またこいつは…。

堪えきれずに落ちそうになる涙を拭っては鼻を噉り、ご飯を喉を鳴らしながら食べる。

何でこんな直ぐに泣くんだよ。まるで俺が悪いみたいじゃないか。やめろよ。

「氷羽、堪えるなら隠れて泣くんだな。そーゆーのムカつく」

いっそ、目の前で大泣きされた方がマシだ。

俺は箸置きに箸を置くと、残ったものにラップを掛けてリビングを出る。

「たっ…」

「もう寝るから。食器はそのままにしてくれればいい」

俺は氷羽からわざと目を逸らして寝室に入った。

進める予定だったレポートを書く気にもなれず、ベッドに転がる。

不思議とお腹は空いていなかった。まあ、あんなことがあれば空かなくても普通だが。

最近、食えることがだるくなってきた。作ることじゃない、食べることだ。

体が重い。

頭が回らない。

もう氷羽のことなんか忘れていた。いつも寝ているベッドが母親の腕の中のように気がして、俺は瞳を閉じた。

「いって言ったのに」

だるい体を引き摺っていつものように朝飯を作ろうと台所に立てば、

氷羽の食器が洗われていた。
あれ？

思えばテレビの音がしない。
いつもは起きた氷羽がソファに座ってテレビを見ている。
現在8時30分。

「おい、氷羽？」

あいつに決まった寝室はない。俺と一緒に寝たり、勉強で遅い時は
気を遣ってソファで寝る。背凭れで見えないが、まだソファで
寝ているのかもしれない。

「まだ頭が痛いのか？」

が、

いない。

「氷羽？」

俺の部屋にも何処にもいない。

もしかして…なのか？

「家出……か……」

マジかよ。

家出って…雪野瀬ゆきのせになんていやあいんだよ。

「氷羽をよろしく」

なんて言っただけに行っちゃった奴だけど、定期的に連絡は超越
すし。

「家出して帰ってこないなんて知れたら殺される」

あいつなら俺をいかに事故に見せ掛けて殺すかで悩むだろう。

あいつはかなり変わってる。

大切なものは何と訊かれて親の名も激愛する妹の名も言わず、土地、
地位、財産とも（言うような性格じゃないが）言わず、ましてや悪
友の俺の名など言うことなんて………あつた。

あいつは俺の名を言ったんだ。

「大切なもの？…君」

「は？伊緒ちゃんいおは？」

『大切なものだろう？伊緒は僕の妹だ』

『大切じゃないわけ？てか、何で俺？』

『伊緒は妹として大事だけど、大事と大切は違う』

『は？同じだぞ？知らないのか？』

『確かに同じだ。人の作った紙切れの上では。でも、僕にはこの一文字の違いがとても重要なんだ。そのことを踏まえるなら僕は妹のことが大切じゃない』

『大切じゃないとは…妹の為にわざわざフランスからワインを直送させるぐらいなの？』

『多少の犠牲はやむを得ない。そう思えるものが大事なもの。自分の全てを切り捨ててまで護る価値があるものを大切なものと言うんだ。それが君さ。ま、僕にとってはだけど』

『だから、何で俺？』

『だって好きだし』

『……………近寄るな』

『矢駄なあ。僕が君とキスしたいと思ってるように見える？』

『見えなくもない』

『伊緒が好きなんですよ？』

『言うなあ！！！！』

『ま、僕が言いたいのは、たとえ時代が違えど、僕は君に会うと思う。時をも越える腐れ縁でね。ほら、それくらい長い付き合いをするんだから大切に決まってるんじゃない』

『前世でもこんなで来世でもこんなだから大切？ないない』

『そうかな。僕は大学の入学オリエンテーション前から君に会ったことがある気がしたんだけど？』

『俺はない』

『ふーん。伊緒も君に気があるようだし、妹共々よろしく、悪友』

『え！？待って、今何て？伊緒ちゃんが…え！？』

『気がある』

『ホントか！？』

『いつもお土産にお菓子を買ってくるお兄さん程度だけだね』

『あ…そう…』

そんなよく分からない雪野瀬が預かってくれと連れてきたのが氷羽だ。

信用してるからこの子を暫く預かってと言われて早半年。

いつ連れて行ってくれるんだと一方的に掛かる電話で言っと、彼は「氷羽は元気？」と、話を逸らす。

伊緒ちゃんとここに預けていいかと訊くと、君しか信用してないと嬉しいような嬉しくないようなことを言う。

そして、切る直前には、大切な氷羽を護ってくれと低い声音で念を押される。

氷羽が消えた。

「探さない」と

信用されてる分、それに答えたい。

俺はコート片手にマンションを飛び出した。

Sub Episode—包む光(2)—

「……氷羽^{ひわ}」

それは誰の為にあるの？

「立喜^{たつき}……」

氷羽は立喜を濡れた瞳で見上げた。緋の瞳から流れるそれはまるで血の涙。

「探した」

朝飯に昼飯。

腹減りを通り越して腹が痛い。立喜は小柄な氷羽を抱き上げると彼が見ていたそれを眺めた。

「氷羽…これは…」

「お家」

お家と呼ばれるのは大理石でできた立派な墓だ。
あるはずの名前がない。

誰のと訊く前に氷羽は答えた。

「友達のお家。ねえ、立喜。この世に神様っているのかな？」

「俺は神様も魔法も信じない」

そんなことは家族を失ったあの時から夢見ることをやめた。

赤十字職員として人々を助けた両親が3年振りの帰国で、空港からのタクシーが事故に遭って死ぬなんて。それも相手は酔っ払い運転理不尽だ。

偶然が起こすのが事故なら、その偶然を創った神様なんて死んでしまえ。

天秤の傾いた世界を創る神様なんてそれこそ最悪の犯罪者だ。

この考えは偏っている。そんなこと知っている。だけど、うつん…だからこそ、傾いた天秤を正す裁判官を目指す俺は、傾いた世界の存在なんて信じちゃいけない。じゃないと俺は馬鹿みたいじゃないか。

最初から土台が傾いていたらたとえ天秤を正しても無意味じゃないか。

「立喜！駄目え！！」

氷羽はぎゅっと立喜を抱き締める。立喜ははっと目を見開くと流れていた涙に気付いて氷羽から目を背けた。

「ごめんなさい。立喜、ごめんなさい。ごめんなさい」

「謝るなよ…氷羽。謝るのは俺だ。言い過ぎた…だから…その…帰るぞ。明日は休みだし、久し振りに野球でも」

「立喜、大好き！」

結局、墓や友達に関して訊けなかったがそれでいいと立喜は氷羽を下ろして手を握った。

俺達はどうやら仲直りできたようだ。

しかし、俺と氷羽の物語はそう長く続かなかった。

「氷羽、ごめんな」

ただの風邪が俺の体を蝕むようになったのはこれから少し先の出来事。氷羽の風邪は治ったのに俺のは長く長く続いた。気付いた時には遅かった。

立てなくなること自力で食事ができなくなることこの時は予想もつかなかった。

最期にしたことは雪野瀬^{ゆきのせ}への手紙を書いたこと。

氷羽のことを頼んだ。

雪野瀬へ

お前の言うことがもし正しかったのなら…

また会えるだろう？

そして…

そこに氷羽を入れてくれよ。

今度は3人で一緒に暮らそう。

一緒に笑って、一緒に泣いて、一緒に生きよう。

「君は本当に…」

…—雪野瀬^{れん}、また会おう—…

「また会おうね、立喜」

立喜ゆづり由宇麻より

「大切なもの？車」

「つまらない」

「何を期待してる？」

「僕って書いて欲しい」

「ないない」

「見ないから僕の名前書いてもいいよ」

「書くかよ！お遊びなんだから何でもいいだろ？」

「お遊びで何でもいいなら、僕でもいいじゃんか」

「外車とか書いたらなんかカッコいいじゃん」

「うわっ幼稚だ」

「うつせえ！モテたいんだよ」

「今時それはないよ。君はモテるよ？だけど、噂がモテなくしてる」

「噂？」

「僕との同居。昨日、原^{はら}さんが『皋月^{さつき}先輩は朔^{さく}先輩とできてるって

本当ですか？』って訊いてきた」

「否定したよな！」

「できてはいないと答えたよ」

「“できては”かよ」

「嘘は吐けないから。同居は事実。ねえ、書いた？回収箱回ってきたんだけど」

「か・い・た！！」

Q：大切なものは何ですか？

↓ポルシェ

と同居人達。

n a m e：朔由宇麻^{ゆづま}

Q：大切なものは何ですか？

↓朔由宇麻と氷羽^{ひわ}君。

n a m e：皋月蓮^{れん}

「氷羽君の大切なものは何？」

「蓮お兄ちゃんと由宇麻お兄ちゃんだよ。二人とも大好きっ」

君の囁き

「ビターじゃん！」

特大ホールケーキにはしゃぐ^{しづき}洗祈。

シャワーから出た陽季^{はるき}はその横顔に微笑した。

「なあー」

「早く食おうぜ！！」

「だからさー」

「なあなあ、早くっ！さくらんぼだけじゃお腹空いてたんだ」

洗祈は少量のクリームを頬に付着させていることに気付かずにお腹を摩り、物欲しそうにおいしそうなスイーツを見詰める。
すると、

ぶちっ。

誰かの血管が切れた。

「洗祈！」

ケーキに目が釘付けの洗祈を陽季はベッドに押し倒した。

「何？」

首を傾げるのは洗祈。

「わざと？」

陽季は額にかかった前髪を指先で退かして緋い瞳を見詰めた。洗祈はクスリと笑ってそれに返す。

「わざと」

「ほんとっ焦らすの好きだな」

「大好きだよ」

――陽季が――

囁かれる言葉。

こういう時、陽季は無性に洗祈を抱き締めたくなる。

「マジで可愛い」

陽季は洸祈を抱き締めた。

「可愛いって言われても… かつこいいがいいんだけど」

“ かつこ可愛い ” ならどう反応するだろうか。

と、顔を上げた洸祈を見ながら陽季は考えてみる。

「何それって言いそう」

「？」

「つまみ食いはだーめ」

「なんで分かったの!？」

答えの代わりに彼は頬のクリームを舐めた。

「それよりさ、ケーキは後にして…」

「？」

クエスチョンマーク。

洸祈は本当に分からないと呆けた顔をした。

何で？ 分からない？

「裸で交わってからデザートにしようって意味だけど」

… 1 … 2 … 3 … 4 … 5 秒たった。

「えー!!!!？ ケーキの蠟燭の火消したいんじゃないわけ!？」

焦らすってそういうこと…

「シャワー入って来たんだよ？ ベッドに押し倒したんだよ？」

「蠟燭だろ？」

何でだよ… 蠟燭なんて餓鬼じゃんか。

それとも S M プレイ？

なわけないけど。

「しょうがないなあ…… 蠟燭ね」

「うん！」

何故か洸祈が楽しそうです。

「なあ、火、大丈夫か？」

考えてみれば火が嫌いだったはず…。

「陽季の顔が見てるから」

はいはい。

陽季はケーキの蝋燭に灯りを灯す。その間、洸祈はぎゅっと目を瞑っていた。部屋の電気を消せば誕生日ケーキの完成だ。

「そんで？消していいの？」

「じゃあ…崇弥^{たかや}洸祈、陽季の二十歳の誕生日をお祝いしてハッピーバースデイを歌います！」

いやいや、待て！

お前は音痴だろ！！！！

「ハッピーバースデイ〜トゥ〜ユ〜、ハッピーバースデイ〜トゥ〜ユ〜、ハッピーバースデイ〜ディア〜…」

歌が止まる。

陽季はちぐはぐな曲に眉をしかめながらも洸祈の方を向いた。

「どうした？こっ…」

キス。

「陽季、誕生日おめでとう」

最高の誕生日だ。

君の囁き（2）

蝋燭が消え、暗くなる部屋。

捕まえた。

「最高の誕生日とプレゼントありがとう、（こ）洗祈」

「あ、うん。ケーキ食べようよ」

「ばーか。プレゼントだろ？」

陽季（はるき）は今度こそ洗祈をベッドに押し倒した。

「あれはその場のノリで……」

ノリで言われて堪るか！

「今だから言えるけど……ここに公演に来るって分かってから1週間、毎日お前想ってた」

想って……想って……想って……自分慰めてた。

あーんなことやこーんなこと。

「それはもうお子様には言えないような……例えば――」

「言うな！」

俺はこの部屋と昨日1日付き合ってきたから何処に何があるか分かる。

陽季は片手で鞆を探ると洗祈にそつと囁いた。

「俺の研究馬鹿にすんなよ。15パターンは俺の頭に入ってる。強

情なお前には3パターン目が多分有効」

「3パターン目？」

そう、3パターン目は…。

「これを仕掛けたりね」

手に持ったそれを洸祈の頬に触れさせた。

格闘すること10分。

それから20分後…

夢中になっていた。

暗いのが残念。

洸祈の顔が良く見えない。

だけど…

「っ…洸祈…」

陽季は洸祈の唇に酔う。

「愛して…る…陽季っ…」

洸祈は陽季の唇に酔う。

…もう放さない…

「いつ!？」

「ごめんッ!」

つい力を込めてしまった陽季は洸祈の腕を掴んでいた手を放した。すると、洸祈の自由になった手が陽季の首に回った。

「だめ。放さないで……陽季が傍にいて感じさせてよ」

「ずっと…傍に…いる…」

洸祈の体に酔う。

「う…ん」

陽季の体に酔う。

「俺…やつちゃった…」

洸祈はくたつと陽季に身を寄せる。

「言っなよ！」

顔を更に赤くした陽季は力なく抗議した。

「俺…下…かよ」

「下だ」

どうにか洸祈は下にできた。

おまけ知識だが、一度立場が決まればよっぽどのことがないかぎりそれは変わらない…らしい。

陽季は洸祈を抱き寄せた。

「なあ、上手かった？」

気になる。

洸祈は顔を赤くすると陽季の胸に頬を擦り寄せた。

「実のところ戸惑ってる」

何にだ？

「何か…陽季とだと…さ…」
もごる。

「失敗したなら言ってくれれば—」
「違くて…」

…―体が反応するんだ―…

「へ？」

どういう意味？

「館の時はただやってた…それからも…」

澄みきった声。

「慣れてた…」

この一言は辛いな。

官能小説で勉強した陽季とは違う。洸祈は生で体験していたのだ。つまりそれは最初ではないということ。

そんなこと分かったた。

だけど、

“最初”は俺が良かった。

「誰かとキスするのも…何とも感じなかった。ただの慰め合い。汚れていく自分をもういいやって捨ててた」
でも、

「陽季とのキスは違った。あの時…初めて嬉しいって思った。ちょっと恥ずかしいって思った」

そう…あの時、初めて俺は洸祈の新しい表情を見た。

「今回も…今までは弄られて気持ちいいって思ってた。でも…何か違う…胸が一杯になった。満たされた気がした…初めてセックスしてるんだって思った…変かな…」

つまり…

俺は…

「変じゃない」

嬉しい。

俺は洸祈と一緒になれたんだ。

「マジで嬉しい」

客じゃなくて男として見てもらえてたんだ。

俺が“最初”だ。

陽季はまどろむ彼をもう一度きつく抱き締めた。

俺の荷物の奥底には銀の懐中時計が入っている。

その中には亡くなった両親の写真と装飾の施されたコインがある。
そのコインに刻まれているのは俺の本当の名前と洸祈の名前。

それは…絶対服従の証。

館のおばちゃんが洸祈と交わした契約を買い取り、その証として役所で貰ったもの。

紙ではなくコイン。

「何ですか？これ」

「今までは紙だったのですが…色々と要望がありましてこのような形になりました」

「契約書代わりですか？」

「ええ。しかし、これには物理的作用を起こさせることができます」
「はい？」

「主人である貴方が望めば契約対象者をいつでも服従させられます」

『止まれって望めば止まるの?』

『止まります。貴方の契約内容は絶対服従。なので死またはそれに準ずること以外なら服従させられます』

『ふーん。契約書だけじゃ反抗されるからか…』

『はい。つきましては、貴方の本名が必要になります』

『え?陽季は…』

『偽名では…調べることもできますが、あくまでもこれはご希望の方にです。』

『本名ね…』

『どうなさいますか?』

『—』

『はい、分かりました。少々お待ちください』

『落としたらどうなるの?』

『貴方以外はこのコインは効果を発揮しないので落としても問題ないです。役所の方に来てくだされば再発行致します。その場合、落としたコインに力はなくなります』

『今ここで望んだとして効果ある?』

『効果があるのは貴方から大体半径2キロメートル円内です』

『逃げられたら?』

『役所の方に来てくだされば位置を特定できます』

『便利だね』

『どうぞ』

『ありがとうございます』

『これの使用に当たり、注意があります』

『何?』

『これを使って服従させるということは、対象者の意志を無理矢理曲げることになり、対象者にかなりの負担がかかります』

『それで?』

『服従には問題ありませんが、使う度に対象者の意志が消失します』
『人形になるわけだ』

『はい。使用にはお気をつけを』

『分かりました』

あれを使えば洗祈は俺の言いなりになる。

俺は最低だ。

洗祈の自由を願って館のばあちゃんから契約を買い取ったのに、自分と契約させている。希望者だけのコインだって作らせている。怖いんだ。

俺から離れてしまわないように…

切り札を用意している。

正義のヒーローのふりしてる。

ごめんな洗祈…

俺はこれを…

手放せない。

君の囁き（3）

「……………今……………何時？」

「うめ 洗祈は瞬きを繰り返した。

「…6時だよ」

日の光を受けて赤くなった彼の髪を陽季はるきは優しく撫でた。

「帰ら…な…きゃ…」

洗祈はぎしりとベッドを揺らして体を起こそうとするが、途中で力クツと膝を折ってベッドに突っ伏す。

「力が…入んない」

「もう少し休んでからにしたら？」

「駄目だ…司野しのにバレる」

「バレたっていいさ。司野さんにお前を力ずくで家に返す権利はない」

ルームサービスで頼んだボールに入った木の実を陽季はそっと洗祈の口に入れた。

「甘い…」

「ココチだよ。体力回復に役立つんだ」

「魔法使いじゃないのによく知ってるね」

「ま…まあ…ね」

もごる陽季。

洗祈は口を閉じるとベッドに腰掛ける陽季を見上げた。

「似たようなのにユークラシットって言う実があるよね。朱色しゆしきの豆粒りゅうりゅうみたいなやつ。店の近くにあるしそろそろ食べ頃かな。琉雨りゅうにもあげよ—」

「おい！！！！」

陽季が怒声をあげていた。

洗祈に掴みかかる。

「それはユークラシットじゃない！魔獣に与えると死ぬぞ！！」

くすっ

「大正解だよ、陽季」

洸祈は啞然とする陽季の耳に囁いた。

「なっ……まさか……！！？」

「補足説明をしてやるよ。確かにユークラシットに体力回復促進効果がある。しかし、それは俺が言ったものではない。“朱色の豆粒みたいなやつ”これはユークラシットと良く間違えられるユークラシスだ。因みにユークラシットは赤銅色で雫のような形の実をつける。俺はこいつが咲かせる漆黒の花が好きなんだ。で、だ。ユークラシスは食えると幻覚作用を起こさせる。麻薬みたいなもの。依存性はない。しかし、一気の食い過ぎは身体に悪い。頭痛、嘔吐に悩まされるので注意が必要。で、これは人間の場合。魔獣にこれを与えると良くて瀕死状態。悪くて死、または消滅だ。野生化している魔獣はこれを本能的に危険と分かるが、使い魔や護衛魔獣、護鳥など人に使役されているものはそういった感覚が鈍っているのでこれまた主の注意が必要。はい、補足説明終わり」

「嵌めたな！」

陽季の頬が怒りに赤く蒸気し、洸祈の胸ぐらを掴む。

「陽季、悪いことは言わない。魔法使いでない者が魔法薬を造ろうなんて考えるな」

揺れる漆黒の瞳。

「……そんなの……洸祈には関係……ないだろ……」

「陽季が造ろうとしているのが事実なら俺は止めなきゃいけない」
「どうして……！！……！！」

見逃してくれと陽季は目で訴える。

しかし、洗祈はふるふると首を横に振った。

陽季は泣きそうな顔を見ると仰向けの洗祈に馬乗りになって彼の腰からナイフを抜き、首に突き付ける。

「俺には…必要なんだ…」

緋い瞳は俯く銀髪から目を叛けない。

「ココチ、ユークラシス、タシ、純水…そして、人の…それも子供の綺麗な血」

動揺を見せる陽季。

「何動揺してんの？子供の血を採取するつもり…もう採取したのかな？そんな奴が材料言うだけでビビるなんてね」

「黙って…洗祈…」

黙らない。

「もつといいこと教えてあげる。どうせ陽季は子供の血に困ってるんでしょ？選んだ方法からして陽季は危険が伴う代わりに早くそれを製造したいんだろ？次の新月は来週の火曜日。１リットルの血液を集めるには沢山の子供が必要。施設の子供が適任だけど罪悪がそれを戸惑わせる」

「黙れよ！」

ナイフが洗祈の首の薄皮を切った。そこがつつすらと赤く滲む。

陽季はびくつと方を震わせるとナイフを退こうとして洗祈に腕を掴まれた。

「そう、大正解だよ。魔法使いの血を使えばいい」

恐怖に顔を歪めた陽季は必死にナイフを退こうとする。

「何しているの？チャンスだよ？魔法使いの血を使う代わりにそのココチの量を２倍にすればいいだけだよ？」

「やだっ！！洗祈！！！！」

滲んだ血は流れてシーツを染めて行く。

「魔力が高い魔法使いの血を使うほど製造の危険度は低くなる。一石二鳥だよ、陽季。俺は化け物って呼ばれるくらい膨大な魔力があるんだから」

「やだ!!やだ!!!!」

「っ!」

激しい目眩に襲われた洸祈はナイフを離した。

陽季はナイフを投げ捨てるとまだ浅い傷をベッドのシーツを破って押さえる。

「洸祈!!洸祈!!」

気道を潰さないように陽季は優しく強く押さえる。

「陽季…まだ…話は…終わってないよ」

「喋らないで!」

「いや…喋る—」

開いた唇に陽季は噛み付いた。

「喋るならキスする!」

「何度…キスしたって言うよ。陽季…聞いて。お前を…力づくで止める権利は…ない。でも、止めてくれ—」

キス。

「魔法薬製造には…全ての生物がもつ…魔力の流れが重要なんだ。

魔法使いは魔力の流れに…敏感だけど…陽季は…—」

キス。

「違う。失敗しても…^{このみ}之宮^やみたいに…失敗とは分からない。だから—」

キス。

「陽季の造ろうとしている…万能薬が毒薬になる可能性だって…十分に…あるんだ—」

キス。

「それに嬉しい?…子供の血を使った万能薬で…治ったとして…嬉しい?…—」

キス。

「死ぬ…かもしれないんだよ?…身体…に影響を与える魔法薬は…

危険なんだ。拒絶反応…だって起こす。万能薬を使う前より…酷い後遺症が…残るかもしれない」
ぽたっ

「…止めよ？」

ぽた…ぽた…

洸祈の頬に落ちる雫。

「だって…必要…なんだ…どんなに…手を尽くしても…治らないんだ…寝込んで…」

「？」

「院長先生が…」

児童養護施設の院長。

陽季の…否、月華鈴^{げっかりん}全員の母親代わり。

「早くしないと…死んじゃう」

子供のように涙を流す陽季。

「原因は？」

ぎっくり腰…って。

「は？」

「ぎっくり腰って！院長先生が死ぬ…！って叫んでたんだよ…？」

ああ…死ぬな。

「ぎっくり腰って知ってる？」

「不治の病って…万能薬しか」

陽季は泣いてさがる。

どうすればいいんだよ！と…

「誰が言ったの？」

「双灯^{そうち}に聞いて…蘭さんに確認して…菊さんにもう一度確認して…
ことさんにやっぱり確認して…やよさんに確認したんだけど…不治
の病って…」

ああ…皆ね。

何てことを…

双灯さんから始まって最後の希望の綱の弥生^{やよひ}さんも切れたと…

完全にかかわれてるよ。

「陽季、大丈夫だよ」

「何処がだよ…」

ぐずる陽季。

洸祈は血が止まったのでシートを取ると、陽季を力一杯抱き締めた。

「院長先生が…院長先生が…」

「陽季、ぎっくり腰は…」

『しーにーまーせーん!』

頭に直接響く大音量。

……………?

漆黒の蝶。

「二之宮か…」

窓の向こうでヒラヒラと飛んでいる。

『はーるーきー君、あーけーてーよー』

陽季はスツと立ち上がると窓の前まで行き―

「うつせえ!…!…!」

カーテンを閉めた。

『魔法薬の効き目はどうやらあったみたいだねえ』

「ホントだね」

二之宮と洸祈の間で交わされる言葉。

「何だよ、効き目って」

頬を膨らまして陽季は訊く。洸祈はカーテンを引き、蝶を中に入れ

ると答えた。

「何ともないじゃん」

『この声。頭痛くないだろ?』

「ほんとだ…でも、一体いつ…」

『さーてね』

そんな曖昧な言葉に陽季の反応はあまりなかった。

それよりも違うことに頭がいつていた。

「で、死なないって!?!二之宮、不治の病治せん?!?!?!」

『不治の病は治せないから不治の病ね。可哀想に…』

陽季はいじけてベッドに潜り込んだ。

「二之宮、陽季これでも随分堪えてるんだから」

『知ってるよ。それはもう悲惨だねえ』

「陽季」

洸祈はしくしくと泣く陽季から布団を剥がす。

「ぎっくり腰ってのは—」

『ストーップ!—』

遮って陽季の頭に留まる蝶。

『陽季君、僕なら治せる』

「ほんとに!?!?!?できることなら何でもするから」

「陽季!」

遅かった。

『そーかそーか。じゃあ今日あったこと逐一教えて。特に3時以降。

ぜーんぶね』

つて…!?!?!!

「二之宮、何訊いてんだよ!?!」

『何?話せないの?院長先生の命よりも大切なのか?』

うぜえ…。

陽季は顔を輝かせて洸祈の二度目の訪問からを詳しく細かく話始めた。後、2分もしたら濃い夜のことを語り出しそうだ。

洸祈はしょうがないなあと微笑した。

『その首、後で僕の家おいで。破傷風にならないようちゃんと消毒しなきゃ』

洸祈とだけの通信。

洸祈は頬を赤らめて話す陽季を見詰めて頷いた。

ぎっくり腰の正体を知って月華鈴メンバーに怒鳴り、笑われ、二之宮にありとあらゆることを話したことを後悔する日は近い。

君の囁き（3・5）

「『それはもう、可愛い声だったんだよ』で？どうだった？」

ニヤリと陽季の言葉^{はるき}を引用した二之宮^{にのみや}は、消毒液を付けた脱脂綿で傷口を消毒しながら訊いた。

「うつさい」

「エロいねえ」

そして、染みる痛み^{いたみ}に顔を歪めて毒づいた洸祈^{こうき}の肩をＴシャツを擦り下げて見る。

「いーっぱい痕付いてる」

……いーっこ……にーっこ……

「数えるな！」

洸祈は軽く数え始めた二之宮の膝を蹴った。

「動くな。傷が開くぞ」

不意に真剣になる二之宮。

洸祈はむつと顔をしかめた。

それに打って変ったように笑みを見せる二之宮。

「二之宮？笑うなよ」

「うつん。笑ってない。微笑^{えいご}んでるの」

「ふーん」

ひらりと舞った手のひらは洸祈の頬を撫でた。

「あつたかい」

「もつとあつたかかったでしょ？」

「まあね」

抱きしめてきた二之宮の首筋から少しだけ香水の匂いがする。二之宮の細い指はＴシャツの襟首から洸祈の背中に進入した。

「あつたまつた？」

「うつん。あつたまつた」

洸祈の指も微笑む彼の頭を撫でる。

「繋いだ手、すごくあたたかったでしょ？」
「うん」

「洗祈、もう夕霧ゆきぎりから離れちゃいけないよ」
「うん」

「浅い傷は自然治癒が一番。呼吸が苦しいだろうけど我慢してよ？」
首に包帯を巻き終えた二之宮は頃から首根までをすつと撫でた。
「喋る分には小さい声なら余り問題ないけど…飲食は止めて欲しいんだ」

「はあ？」

「てのは流石に君でも無理だから…あ、点滴でもいいんだけどね…ま、置いて、堅いのは嚥下する時に喉を大きく開くから傷が開きかねない。だから、柔らかいものを治るまでは食べて」

「うん」

「キスは柔らかい？なんて訊かれても堅いつて答えるから。あ、僕のは柔らかいよ」

アホだ。

軽く二之宮は洗祈の唇に自らの唇を触れさせる。
触れるだけ。

だって…

もう…俺には好きな人がいるから。

すると、うつすらと意識が遠くなってきた。

「眠いや…」

なんやかんやで昨日からちゃんと寝てない。

「眠いの？なら、僕のベッドまで行こ？」
添えられる手。

二之宮のベッドは気持ちい。

洸祈は首を縦に振り、二之宮の肩を借りる。
地上への階段。

ヤバイ…眠い。

ヤバイ……………。

「崇弥？あと少しだから」

分かってる。

でも、眠いんだ。

瞼が重い。

胸は苦しいのに眠い。

「ちょ…崇弥、まずい！」

何がまずいんだ？

眠い。睡魔が。

もう…

寝かせて…よ。

夢遊

誰かが俺の手を強く握って引つ張るんだ。

…―何処へ行くの?―…

…―貴方の生まれた地へ―…

「目、覚めた?」

「ここは…」

暗い…。

「ぼく達の秘密基地だよ」

懐かしい気配が動いた。カーテンの引かれる音がする。

次の瞬間、光が視界を埋めた。

眩しい…。

「びつくりしたよー。いきなり倒れるんだもん」

「ごめん」

「謝らなくていいよ。ここ悪いんだから」

彼はトントンと俺の胸を人差し指でつついてきた。擦ったくて体を擦ってしまう。

「あははは」

それが面白いのか、彼は楽しそうに俺に覆い被さって胸をつついてきた。

「もうやめろよ」

笑い疲れてベッドに伸びると彼は同じ様に俺の横で伸びる。

「今日はどんなお話？」

暫くして、澄みきった声で訊いてきた。

「ん」

珍しく何も思い付かない。

「じゃあ、ぼくがお話考えてあげる」

「聞かせて」

ある日、ある国のお姫様は怪物に拐われます。そして、勇敢な騎士が怪物を倒して、お姫様を無事救出。結婚してハッピーエンド。

「王道だな」

「やっぱり王道だよな」

俺達は王道、王道と言い合う。

「お、元通りだ」

すると、いつの間にか俺の胸に耳を当てた彼はドクンドクンと柔らかな声音で笑った。

そして、

「ねえ、いい？」

不意に見せる潤んだ瞳。

「3日も経ってたな」

「辛いんだ」

するりと額に伸びる手。

俺が気絶してた時、必死に自制してたんだな。

「いいよ」

俺は四肢の力を抜いた。

俺の魔力なんかよければどうぞ。

「ありがとう」

彼は微笑んだ。

体が動かない。

「ごめん」

彼は罰が悪そうに謝ってくる。

「謝るなよ。ここが辛いんだからさ」

俺はトントンと彼の胸を人差し指でつついた。
くすっ

「今日はここに泊まっていきなよ。動けないんだし、ぼくも寂しくないし」

ね？

仔犬のような愛らしい顔で見上げてくる。

「じゃあ、泊まる」

当然、俺は言葉に甘えた。

彼の見えない尻尾が振られているようでなんか嬉しい。

それに、

俺にはここしか…

——居場所がなかったから——

「えーつと…」

彼は首を傾げた。

「これじゃないか？」

俺も多くの一つを手にとって参加する。

「残念。はまんないや」

周りと似ているが似ていない。

「おはよ」

微笑してきた。

「おはよう」

だから、微笑して返した。

広がるピース達。

彼の手元には未々小さい未完成の絵。

「手伝っていいか？」

「勿論だよ」

俺の横に位置を変えた彼は俺にぴたっと寄り添う。きつと近付けたその耳で俺の心臓の動きを診てくれているんだろう。

「うゝん。乱れてる。大丈夫？落ち着いて」

「夢を…見たんだ…」

鮮明な夢を。

「怖かったの？」

背中を優しく摩りながら訊いてくる。

「…分からない。ただ…見たんだ…俺は…」

見たんだ。

「駄目つ。早すぎるよ」

シャツの裾から入れた手で直に胸に触れた彼は諭すようにそこを優しく撫でてきた。

心臓が突然その動きを緩める。

「もつとゆっくり、ゆっくり」

澄んだ声が語りかけてくる。

「今日は顔色悪いよ。もう少し休んだら？このパズルは後でまた一緒にやろう？」

でも…。

「休んだら眠くなる。眠ったら夢を見る…イヤだ…」

「じゃあ、お話聞かせて」

俺に覆い被さった彼は俺のシャツを脱がしながら聞かせてとせがむ。

「今日は駄目だ」

「えー聞きたかったのに」

「お話は聞かせるよ。駄目なのはこっち」

はだけたシャツから見える俺の体に彼は吸い付く。その頭を少し乱暴に掻き回すとむすつとされた。

「疲れたら夢を見ないよ」

“ 顔色が悪いから ” だろ？

と、

「この匂い…」

バレたか。

だから拒んだのに。

「あれほと言ったのに！」

珍しく怒られた。

しかし、俺にも言い分はある。

「お前を力ずくでやってやるって言われたから」

「ぼくは簡単に逃げる事ができるよ。でも、心臓が悪い君は…！」
そう言うと思ってた。

だけど…。

「銃だよ！？いくらお前が逃げ足早くても簡単に―」

「どのぐらいなの？」

有無言わずに彼は訊く。

真っ直ぐ俺を捉えて。

卑怯だよ。

これで俺は正直に答えなきゃいけない。

「…3…時間…」

「それで？」

「……6人…」

「それで？」

「…8…回…」

「ばかつ」

彼はその細い体躯で俺を抱っこし、部屋を出て廊下を歩いた。

「あんなところに…君を返すんじゃないかった…」

「俺の恩人だから」

「…そう…だよね…」

水場に来ると、俺の衣服を全て剥ぎ、水の張った桶に浸す。

そして、自分も脱ぐと俺を支えたまま水を浴びた。

「ごめん」

「謝らなくていいよ。今日は許さないから」

完全に怒らせてしまった。

「夜は外に出ちゃいけないよ」

隅々まで細い指先で洗われる。擦ったくて体を擦っても止めずに。

「ぼくは君が好きなんだから、自分を大事にしてよ」

温かい声。

「お客様、今日はどういたしますか？」

「好きにしていよいよ」

お前なら許せるから。

眠い。

眠い眠い眠い眠い眠い眠い。

誰かが俺の手を強く握って引っ張るんだ。

……何処へ行くの？……

……貴方の死んだ地へ……

夢遊（１・５）

二之宮にのみやが用意した布団の中で丸まったそれが小さく唸った。

「ホンマにかわええけど…原因は何なんや？」

「僕のキスの後だから…」

彼が伸ばした指先が汗ばんだ額を撫でる。

「蓮君れんのキスが原因！？」

「だと思っわけ？」

「ないわな」

そして、薄いピンクの唇を触れた二之宮のその指を濡れた舌がぺろりと舐めた。

「本当にどうしようか…原因が分からないことには打つ手なしだし

…」

はう……小さな舌が必死に二之宮の指にしゃぶりつく。二之宮は暫くそれで戯れると、唾液の付いた指先を物足りなそうにする口から抜き、自分の舌先で舐めた。その姿を見ていた由宇麻ゆうまは、ごくりと喉を鳴らした二之宮に「なーに見てんの？」とにやつかれてふいと真っ赤な顔で俯く。

そして、

「俺が！！！！！」

彼はその小さな体を抱きかかえた。

「？ただの公務員の君に原因が分かるの？」

「“ただの”は余計や！」

「一タツツコミ入れてさあ、関西人なのは重々承知してるから受け流して本題に入ってよ。で、“俺が”何？」

「関西人だからツツコミを入れるんや。は置いといてや、蓮君が原因を究明するまで崇弥たかやは俺が世話したる」

宝物を手に入れたように表情を崩した由宇麻は軽く握られた手に指を差し込んだ。すると、その手のひらが由宇麻の手を強く握り締め

る。

由宇麻から零れる笑顔。

二之宮はその笑みに呆れ切った顔を向けた。

「あーそう。僕が寝るのも惜しんで原因追究に身を費やす間、君はこーんなに可愛い崇弥でハーレムを味わうわけだ。最悪」

「俺は崇弥のお父さんや！息子のお世話は当たり前やる！」

「それに下心は微塵もない？」

絶対あるだろ。

二之宮は答えを聞く前に確定済みだ。

「うつ……………ある。だってかわええもん！」

「うんうん。可愛いねえ。でもほら考えてみなよ。原因を究明するには崇弥が僕の傍にいた方が良くないかい？」

「……………良くないんじゃないか……………とか思ってた……………するんやけど……………」

色々と彼の気持ちは分かるが、「はいそうなんだ」と簡単には頷けない。

二之宮は由宇麻を弄るのが好きだ。

楽しすぎる。

「崇弥は僕の家で預かる」

「イヤや！」

「崇弥の為だ」

――崇弥の為――

君はどちらを取る？

崇弥と自分。

どっちが大切？

「イヤや！イヤや！！なあ、ええやろ？ええやろ？蓮君、お願いや……！！」

君は本当に欲に素直だ。

これが、崇弥の自由と比べられた時、君はどうするのだろうか。彼の自由を縛るのかな…。

「我が儘。はいはい、折れた。僕が折れるよ。ただし、崇弥が起きてからね。崇弥の記憶が気になるから」

二之宮は素直に自らの欲を認めた彼の為にあっさり引き下がってやる。

「そやな…全てを忘れてるかもしれへんしな…でもええん!？」

「しつこいと僕は嫌うよ」

「ありがとな!！」

由宇麻君が笑うと、なんか心が温まる気がするんだよね。

夢遊
(2)

「あ……あ……」

止めて…止めて…止めて…。

言う通りにするから……。

もう止めて…。

た や

「うっ……あ……あう……」

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

謝るから土下座するから……。

もう赦して……。

.....
たかや 宗弥！

バスタオルを腰に巻いた由宇麻は彼の肩を揺すった。

「崇弥！崇弥！」

「あ.....う」

体を丸く縮める彼。

「崇弥、大丈夫や。俺や、由宇麻や。お父さんや」

「や……て……やめて……ごめん……さい……ごめんな……さい……」

震える体。

「大丈夫や」

由宇麻は彼の体を持ち上げるとその腕に抱っこした。

「大丈夫や…大丈夫や…」

震えが収まった彼を由宇麻は一息吐いてベッドに寝かせた。
やがてゆるゆると上がる瞼。

「崇弥、起きたん？大丈夫か？何処も痛くない？」

そして、彼に伸ばされる由宇麻の腕。

彼は緋色の目を見張ると素早く体を起こして後退った。

「たか……まさか……俺のこと……覚えてへんの？」

うつすらと瞳に溜めた涙を見て由宇麻は泣きなくなるのを堪える。

駄目や。泣いたらあかん。

「えっとな……」

と、

彼は怯えながらも由宇麻の腕を引き、ベッドに引き摺り込んだ。そして、由宇麻に驚く暇を与えずに、彼の体をまさぐり始める。

「何するんや!!!?」

「今すぐ…今すぐ気持ち良くしますから…どうか…ぶたないで…下さい…」

バスタオルに触れる彼の手。

「止めてや……！！！！！！！！！！！！」

由宇麻はびくりと体を震わせると彼を突き飛ばしていた。

「ごめん！ たか……や……」

化け物でも見るような恐怖に満ち溢れた目。腕で肩を抱き、小さくなる。

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！何
でもしますからごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ぶた
ないで！！」

全身を恐怖に震わせる彼。彼はごめんなさいを繰り返す。

「崇弥！童顔君！どうした！？」

そこに二之宮が老眼鏡に白衣のまま入ってきた。

「あら。童顔君、無垢な崇弥を襲ったのかな？」

「……………襲われたんや」

「そうかそうか。襲ってたらベランダから突き落とすところだったよ」
自分の白衣を脱ぎ、茫然自失している由宇麻の肩に掛けると体育座
りで踞る彼の前に座った。

「何もしないからこの問いに答えてくれ。君は洸祈か？清か？」

「……………清」

「僕は狼の親友だ。君のことは狼から聞いている。狼の歌を好きだ
と言ってくれた狼の大切な親友ってね」

「……………狼の？」

顔をゆつくりと上げた彼。

「そう」

見慣れたくすんだ金髪と同じ金と紺のオッド・アイに安心した彼は
濡れた瞳を二之宮に向けて、堅く閉じられていた口を緩める。

「……………狼とおんなじ…狼は？」

「記憶が混乱しているんだね。館で狼が僕に君を託したんだ。君が
寝ている時だったから怖がらせちゃったね。ごめんね」

「狼は大丈夫なの？炎症に殴られてない？」

「大丈夫。殴られてない」

くしゃりと二之宮が彼の髪を撫でると最初はびっくりと肩を震わせた
が、やがてしゃっくりをあげて二之宮に泣いて抱き付いた。

「由宇麻さん、こっち来て」

由宇麻は二之宮の彼の扱いの上手さに悲しそうに溜め息を吐き、首
を横に振った。

「…無理や…怖がられてもうた…もう崇弥を泣かせとうないし、あ
んな目で見られとうない」

「あつそ。じゃ、崇弥は僕の家で預かるね。清ということは…うま
くいけばあんなことやこんなことができるわけか」

二之宮はニヤリと口の端を吊り上げる。

「蓮君^{れん}！！」

それに怒りを覚えた由宇麻は眉をしかめた。それを見た二之宮の瞳は鋭さを増し、唇は堅く結ばれる。彼の泣く声しか聞こえなくなつた部屋で二之宮は由宇麻を睨み返した。

「由宇麻君」

感情の隠つた紺の瞳が由宇麻を鋭く射抜く。

「あんたは父親だ。崇弥の傍にいたい。崇弥が欲しい。そう言つたよね。この子も崇弥^{しょうみ}^{しん}だ」

泣き叫ぶ彼の頭を撫でた二之宮の言葉に由宇麻は表情に影を落としたり。

「今のこの子は清。あんたの知る^{しん}^{しん}じゃない。毎日毎日何人もの老若男女と寝てきた。汚れてる。でもね、本質は変わらない。実験台にされても、全ての記憶を失つても、犯した罪の重さに押し潰されそうになつても、羞恥に堪えて心を空っぽにしても、崇弥^{しょうみ}^{しん}だ。清を拒むということは崇弥^{しょうみ}^{しん}を拒むということだ。あんたは拒むのか？拒むというなら僕の権力とコネを使ってあんたを崇弥^{しょうみ}^{しん}の父親から落とす。僕をナメるなよ。あんたをあの家から追い出すことだつてできるんだ。勿論、崇弥^{しょうみ}の視界に入らないようにすること。誓いを裏切つて僕を失望させないでくれ」

だつて、と道を求めることをせずに止められずに溢れる涙を白衣の袖で拭う。ひつくと喉を鳴らした彼は自分の頭を掻きむしつた。

そして――

「…清君、俺は由宇麻や」

右手を開く由宇麻。彼は二之宮にしがみついたまま由宇麻を見つめる。

「由宇麻君、清は目を見て判断するんだ。そんな怯えた目じゃ近付かないよ」

怯えてるんか…。

怖がつちやいけない。

崇弥の方が怖いんや。

悪夢に魘されて起きれば知らない世界。殴られると思って仕事を真つ当しようとするれば突き飛ばされる。

めっちゃ怖いはずや。

「俺な、君に会いたかったんや。俺の大切な人がな、君の昔の頃に似てるらしいんや。あいつ、無口で意地っ張りで負けず嫌いでしょう分からん。だから君に会いたかったんや。君を昔のあいつを知りた
いんや」

温かい手のひら。

彼は由宇麻の手に自分の手を重ねた。

「好きなの？」

掠れた声。

「大好きや」

「その人もきつと…貴方のことが好きだと思っよ」
くすり。

微笑む。

その貴重な笑みに抱き寄せたくなる衝動を抑えて由宇麻は彼の手を握った。

「清、彼は君のお父さんだ。呼んであげたら喜ぶよ」

「おとーさん？」

理性は消え去り、由宇麻は彼を抱き締めていたのは言っまでもない。

夢遊（3）

「清せいとは言い難いね。微妙だ。清の記憶いじきしかないのに洗祈しきと同じ行動を取る」

「本質は同じなんやろ？」

「初対面のはずの僕を蓮れんお兄ちゃんと呼ぶかい？第一、僕はまだ狼ろうの親友しんゆうって言っただけで名は名乗っていない。君が僕の名を一度呼んだが、その時、清は泣いていた。嘘泣うせなきじゃない。泣いていた」泣き疲れて眠る清をその腕に抱っこした由宇麻ゆつまは泣き腫らした顔に笑んだ。赤く火照らしたほっぺをつつくと清は唸り、由宇麻の肩に顔を押し付ける。

「…そーやな」

それを繰り返しては頬を擦り寄せる由宇麻。

至福しふくの笑顔が二之宮にのみやの苛立ちを上げるとは知らずに…。

「真面目に聞いてないでしょ。没収するよ？」

由宇麻より高いその身長と目で脅す。

「いーやーやー！」

「子煩悩め。梨々姉りりさんの夫になって子供ができた時には僕の前で子供とべったりして自慢話を夜通し聞かされるんだろうなあ。あーやだやだ」

ふとしょんぼりする由宇麻。

二之宮は何をしたのかと頭を掻いた。

「由宇麻さーん？」

「あ…な…。…は…は…」

「“は”？」

ハスって何？

聞きたいが聞けない。

そんな顔。

二之宮は由宇麻のほっぺをおもいつきり左右に引き延ばした。

「ひゃうはあう!？」

「崇弥^{たかや}を戻すために作業に集中するから連れて帰って。清は崇弥洸祈の人生の中で最も不安定な時期だ。とても脆い。君のちよつとした態度に神経が磨り減らされる」

重大責任。

由宇麻は引つ張られて赤くなった口元を摩りながら身を堅くする。

「でも、比較的に甘えん坊だから誠心誠意を持って接すれば大丈夫だよ」

甘えん坊という言葉に由宇麻は笑みを溢した。

「うん!」

先程、我が子を抱いた由宇麻さんを見送ったが、事情説明で省いたことがある。

急に眠いと言った崇弥と二階への階段を上がっていた時…崇弥の意識が遠退き始めたその瞬間だ。

歪んだ。

崇弥の魔力が荒れ、空間が歪んだ。その揺れと崇弥の機械的な言葉に驚いて崇弥を抱いたまま階段を転げ落ちた僕は暫く気を失って目を覚ますと崇弥は腕の中で幼くなっていた。

顔かたちが子供の頃へと。

魔力の歪みと同時に発せられた言葉。

「夜歌^{よか}…」

それはシュヴァルツで語り継がれてきた童話の世界。

「死者の帰る場所」

崇弥洸祈は……

「夜歌に帰らないと……か……」

夜歌に帰らないと。と確かに繰り返した。

「まさか…死んでないよな…崇弥…」

早く元に戻さないと。

こんなことで僕は崇弥を放してたまるもんか。

僕は洗祈を絶対に手放さない。

夢遊（3・5）

「ゆー、ゆー、ゆー！」

「うーん」

「ゆー！！」

「ひゃっ！！？」

耳に響く大音量。

由宇麻はふわふわと目を分けると緋が飛び込んできた。

「たか…清君！」

二階の寝室に清を寝かして自分はソファーに寝ようと目を閉じかけた時だった。

ゆー。と慣れてない呼称につい無視しかけてどうにか開けると物体が飛び込んできた。

それは清。

「なんやあ？」

眉をしかめて返す由宇麻。

それに…びくり。

「あう…ごめん…なさい」

闇に消える清。

「あ…清君！」

言い過ぎたかも。

由宇麻はソファーから出ると清を探して手を伸ばし…。

「いたっ！」

すってんころりん。

もう無理や…。

「ゆー…ゆー…ゆー…」

あ…仔猫が泣いておる。

由宇麻は体を起こすと鞭打って立つ。

「清君、ゆーはここやで」

カーテンが翻った。

そこか…。

「ゆー…ゆー…ゆー…」

端から漏れる月明かりに緋の瞳が揺れている。由宇麻はそろそろと足下に注意して清に近寄った。

「清君、ここにおるで」

「何処っ」

目線高くを清は見渡す。

俺が這いつくばってちゃあ、見えないか。

「ゆー…ゆー……つく…ひつく…ふえっ…うつく…」

まずいますまずい！

突いていた膝を立てて由宇麻は清を抱いた。

「ゆーや。ここにおるで」

「ゆー！」

お父さん。は消え、ゆー。となった由宇麻は清の頭を撫でるとソファーに戻る。

「で？どないしたん？」

「狼ろうがいつもは一緒だから…」

寂しいのか…。

比較的に甘えん坊だから。

父さん嬉しいで！！内心叫んで由宇麻は清の泣き顔にティッシュに当てた。

「俺と寝ようや」

「うん！」

夢遊（４）

『……………』
二人は固まった。

……………ぶつ。

片方が噴出す。

青みがかった黒髪が揺れた。

「あははは…っはは…」

腹を抱えて笑い出す。

「ゆー…怖い…」

彼の笑いが止まった。

……………ぶつ。

片方が噴出す。

長い金髪を首元で縛った頭が揺れた。

「ああ嫌われてやんのー」

腹を抱えて笑い出す。

「ゆー…怖い…」

彼の笑いが止まった。

『殴りたいかも』
二人の声が見事に重なった。

「預からないと駄目？」

葵あおいの表情は険しい。

それもそうだ。

久しぶりに現れた由宇麻ゆしまが連れてきたのは小さな子供。

それも、何故か幼くなった姿の家族を。

それもそれも、その子供にあるのは清せいという名の時の記憶のみと言
う。

葵には兄の“清”なんて時代は知らない。そのためか、同じ顔の子
供が他人にしか見えない。

「弟やろ！？」

「第一印象が最悪だから」

兄といえど年下に何にもしてないのに「怖い」なんて言われたらム
カつく。

「笑った葵君が悪いんや！」

由宇麻は「双子やろ」と頬を膨らました。

「千里せんりだつてイヤだろ」

葵は清否定派として千里を呼ぶが――

「僕のことはお兄様と呼ぶんだよ」

「……おにー……さま……？」

「よおーくできました」

彼は店長一（子供）をちゃっかり調教していた。

「千里君！」

「千里！」

「ああ、僕は洸のこと預かっていいよ。今だけだからねえ」

「こんな素直なのは今だけ」………《と主語
を隠して清の頭を撫でる。

「たーだーし、」

そこに千里は条件を付け足した。

その内容は、

「呉君と琉雨ちゃんるうはレイラさんと旅行中。今週は僕らやりたい放題する気だから夜は気に掛けられないよ？」

「やりたい放題？崇弥たかやも交ぜて遊べばええやんか」

「ああ、聞いた？」

にやり。千里の笑みは裏があると言いたいようにしか見えない。

まあ、裏しか見えない葵は、昨夜のことあつて痛む腰を摩ってそっぽを向いた。

「俺に振るなよ」

.....。

すると、とてとと足を進めた清は由宇麻の脚にしがみつく。

「ゆー……ゆー……ゆー……」

それは仔猫の泣き声。

「どないしたん？」

膝を折って同じ目の高さになると、清は由宇麻に抱き付いた。

「……置いてかないで……」

「夜には迎えにくるから。お兄さん達と待っててな」

もう慣れたと言いたげに清を抱きしめる姿は、同じ顔の葵をイラつかせる。

まったく、双子というのは色々と面倒だ。

由宇麻が清の頭を撫でると、潤んだ瞳で、それでも彼はこくつと頷いた。

こういう時は素直に退き下がる。妙なところで洺祈と同じだ。由宇麻を困らすために我儘を言えればいいものを。

そして、ソワソワと三人の足下をうるちよろ歩く清。

葵は溜め息を吐くと彼を胸に抱えた。

「洺祈きうしを預かるよ」

「清…か…」

「清…ね…」

フローリングでジグソーパズルに夢中の清をソファで寛ぎながら眺める葵と千里は同時に呟いた。

「聞いたことある？」

と、千里。

「あるわけないだろ」

答えた葵は千里の促した手に合わせて彼に身を寄せると、頭を押さえて溜め息を吐く。

「どれくらいだっけ？ 洸の失踪…」

「さあな」

「覚えてないんだよね」

「ああ…。はつきり言うと言語記憶が曖昧なんだ。臆気にしかそこら辺は思い出せない。月華鈴には3ヶ月間いた。それだけは確かだ。双蘭さんがそう言っていた。でも、いつから洸祈が消えたのかは分からない」

洸祈には“清”と呼ばれていた時期があり、それを家族である俺達に秘密にしていた。

その中で何か壮絶なことが洸祈に起きたのは間違いない。

「子供だったからあんまり覚えてない？」

「分からない。その時だけの記憶が曖昧な気がしないでもない。確か、お前は？」

「何言ってるのさ、その頃…えっと…あおが熱出した夏祭り、あの時、僕、祭りやってたところこの河原で倒れてさ、暫く家から出させてもらえなかったじゃん。だから知らないよ」

「そうだったな」

そこで、千里がキスをねだる仕草をしたので、清がパズルに夢中なのを確認して、葵は唇を触れるように重ねた。

「ゆー…ゆー…ゆー…」

「由宇麻か」

清が瞳を潤ませてできたパズルの周りを意味もなくぐるぐると回
いや、あるのかもしれない。由宇麻にできたのを自慢したいとか…
？本当に、清は由宇麻に懐いている。

さらにム力つくぐらいに。

「こ…清、由宇麻は夜だよ」

「ゆー…ゆー…ゆー…」

しょんぼり。

「１０００ピース。やる？」

確か棚に…。

葵は箱を取り出して清に見せる。

すると、彼はできたパズルを裸足で踏んだまま、こくりと頷いた。

「ああ、ごはん」

葵のいなくなったソファーに寝転がった千里は見ていた昼ドラが終
わり、料理番組に代わった頃、呻き声を出す。

「何がいい？」

葵は清と共にジグソーパズルを進めながら聞いた。

「ビビンバ！」

丁度テレビにそれが映った時だった。

「めんど。清は？」

「……………ゆー」

「可愛いけどム力つく」

しかし、葵は溜め息一つで諦めた。

「洸祈は…お茶漬けが地味に好きだよね」

あの味は好物のようで、すぐ面倒になると、彼のメニューはお茶
漬けだった。あと、普通の味噌汁。

洸祈はシンプルな日本食が好きらしい。

「じゃーおっちゃづけー！」

それに千里がソファアの背もたれから体を乗り出してはしゃぐ。

「はいはい」

葵は頷くと、テーブル用の椅子に掛けてあつたエプロンに手を伸ばした。

「美味しい？」

「美味しい」

こくり。

洸祈が面白いかも。

葵は清の口をティッシュで拭いてあげる。

「今、無性に嬉しい」

兄の世話なんて早々できない。

「みたいだね。愉快犯の顔だ」

千里も愉しそうだ。

俺達二人とも愉快犯だ。

「写真撮って後で見せよつと」

千里がデジカメを登場させた。

彼は笑みを見せると、葵と清の間に入る。

「三人で撮ろ！」

そして、葵を世話をしている清と一緒にシャッターを切った。清がカメラのレンズを見詰めると、小さくはにかむ。

案外、おませさんだ。

「あおがお母さん、僕がお父さん、清が息子。ね、おかーさん」

千里はその姿に目を細めると、同じように清の笑みに微笑んだ葵の唇を奪って再びシャッターを切った。すると、すぐに葵がむすつと膨れる。

「消せ！ばかつー！」

「馬鹿で結構」

千里はカメラをテーブルに置き、葵の顎に手を添えて、平然とかなり濃いキスをした。

「んっ……！」

清が見てるっ……！！！！

葵はぎゅっと瞑った目で訴える。

しかし、清は……

「おかーさん、おとーさん」

違う意味で“ぎゅっ”だった。

葵と千里の首に抱き付く清。

「わぁお！裏ルートだ」

千里はおおはしゃぎ。

「おかーさんはちよっと……」

葵は微妙。

「清、寝ちゃっていましたよ、お父さん」

『と、俺に言われてもだ。傷だらけで動けない司野しのに直接訴えてくれ』

「そーですね。由宇麻、帰れそうにないですか？」

『無理』

救急車のサイレンを背景に瑞牧みずまきはぶつりと電話を切った。

まあ、大変そうだからしょうがない。

「早速だな」

「早速だね」

由宇麻、仕事中に殴られ重症。清の迎えには来れず。

清はすでに眠っている。ならば、自分達の睡眠中に煩く騒ぐことはないだろう。明日になれば「さんねんだったね」だけで済む。

すつと伸びる指先。

「清がいる」

葵は千里の手を反射的に掴んだ。それがとてつもなく早かったのは、このところ毎夜毎夜に慣らされた成果なのかもしれない。

「寝てるもんね」

「ん？……………っ！？やめっ」

しかし、これは慣れてなかった。キスしようとするそれは拒む気はなく、激しくなるそれに碎ける腰を必死に両手で支えていたら、ソファーに寝かされていた。

身を掀る葵は千里の下。

「やめ？違うでしょ？」

などと言いつつ準備に掛かる。

「あのねー」

「何？」

葵は服の裾から入ろうとする手を食い止めて聞き返した。

「今日、面白いもの手に入れたんだ」

「何？」

ポケットから出てきたものは…想像していたものであったりする。だからなのだ…

「玩具」

「近寄るな馬鹿！！！！」

胸へと向かおうとする指は方向を変えてズボンに掛かった。

「フェイント」

止める間無く脱がされる。

「もう反応？」

うるさい！！！！お前が時間掛けるからだよっ！！！！！！

「見んな！」

パンツを凝視ときた。葵は手で隠し、千里は玩具を隙間から押し付

けた。

「っ…あ」

「手え放して」

千里の片手で捻り上げられる葵の両手。

「やりたい放題だし、いつもと違うシチュエーションもいいですよ？」

「あ…んっ…う…」

「肯定ね。体は嘘をつかない」

制御の失せた千里の目が光る。

だからイヤなんだ。

この瞳の後の千里は抑制があまり効かない。俺を好いていることは痛いくらい分かるが。

千里とは最初に約束を半日ぐらいかけてした。何が赦せて何が赦せないか。俺は千里に無理矢理や強制だけはやめてくれと頼んだ。千里は頷いて了承してくれた。そのかわり、スキップなら受け付ける。千里の欲求を完全に無視はしないこと。それを俺は約束したが、千里は案外欲望に素直で困る。

最近俺を扱うことに慣れてきたと言っている。事実、俺自身、あいつになんやかんやで流され始めている。素直に認めるが、俺は気持ちいいことが嫌いじゃない。勿論…千里とでも。

だから、なんかイヤだ。

俺の理性がそういう関係をまだ拒んでいる。千里は恋人であっても親友であることには変わらない。と、言うより、千里は親友という感が日常では強い。俺にとって、千里が恋人だと認識し出すのはキスの時からだ。

しかし、千里はお構いなしで話を進める。ここで葵が本気で拒めば彼は手を止めるが、彼は今、完全に千里に流されていた。

「電気消すから脱いでてね」

そして、千里が葵に最後に付け足した注文はかなり意地悪だった。

夢遊（4・5）

狼はいつも俺に優しくかった。

いつも俺を護ってくれた。

いつも俺を抱き締めてくれた。

狼はいつだって俺の正義の味方だったんだ。

『狼、ずっと一緒だよ』

『うん。ずっと一緒。僕たちは離れない。何があっても……』

「……おかーさん、おとーさん」

「あつ……清」

暗闇の中で葵は衣服をひっ掴むと最速で着た。

「どーしたの？」

千里は涼しい顔で闇の中をふわっと舞う。

「ゆーは？」

「由宇麻ね、お仕事が長引いて今日は迎えに来れないって」

「……そうなんだ」

俯いてじっと動かない。

「由宇麻が居なくて寂しい？」

葵が訊くと、

「狼がいない……ゆーがいない……寝れないよ」

「だって」

千里が振り返る。

微妙な時でかなり辛いけど眠れば忘れられる。それに、一人ぼっちは本当に辛い。
葵は清に頷いた。

三人掛けソファの真ん中に座った千里の膝を枕にすやすやと眠る清。千里はそつとその前髪を鋤いた。

「蓮さんのお蔭で洸が戻ったとしてあおは訊くの？」
横に座る葵を向く。

「……………」

俯き加減の葵は無言だ。

「あお？」

「う…」

肩に掛かる重量。眠りに入った葵の頭。彼の口は小さく開き、そこから微かな吐息が漏れていた。

「可愛い」

ここまで無防備なのは逆に珍しい。千里は柔らかな頬の感触に身を堅めた。

そして、ちよっぴり赤いそれに千里はそつと触れる。

「あう…」

葵は垂れていた肩を竦める。

「あう…」

清は膝の上で寝返りをうつ。

「双子だ」

同じ仕草だ。でも…

「今はあおなの」

千里は清を膝から下ろし、着ていた上着を掛けた。そして、ゆらゆらと揺れる葵と向き合う。

「あお、辛いでしょ？」

髪を撫でるだけで美味しそうな顔を見せる。

「僕が楽にしてあげる」

伸ばされる千里の手。

「清が起きる」

それが掴まれた。葵はむくりと起き上がると、痺れ固まった体を解していく。

「トイレ行くから」

そして、彼は立ち上がりかけて、

「！」

倒れた。

ぐたつと一人掛けソファーの方に顔を突っ伏す。

「ああ！」

「……大丈夫」

「待つて！大丈夫じゃないよ」

千里は葵に再び手を伸ばした。

「清がいるって言うてるだろ！しつこいと怒るぞ！！」

しかし、払われたそれ。千里の顔が引きつった。現在、彼は葵の意図を必死に探っている。しかし、千里には、葵に今この瞬間言いたいことの方が重要だと判断した。

「怒りたいのは僕だ！」

葵の腕を握った千里は廊下へと引きずった。葵の言葉など無視して風呂場の前まで引き摺ると千里は葵を放し、葵はその場に尻餅を突く。

「せんー」

「葵ー！！」

名を呼んだ。

それは千里が本当に葵に話を聞いて欲しい時に使われる。

葵。

葵は動きを止めた。

しゃがみ、高さが同じになったところで千里は葵の額に自らの額を擦り合わせた。

「葵、熱ある。なんで辛いつて言ってくれなかったの？……それに君の体調に気付かなくてごめん」

頼らなかった葵に怒ってる。

頼られなかった自分にム力ついている。

教えてくれなかった葵に怒ってる。

気付かなかった自分にム力ついている。

「辛い…頭が痛い…吐き気がする…寒いし熱い…それに…」
キス。

二人の繋がり印。

いつだってどちらかがどちらかを支えてきた。今は千里が葵を支える時。

「疼いて辛い」

千里は葵をその腕に優しく抱っこした。

「先ずはそこを治してあげる」

疼きが消えるまで葵は千里に触れていた。とくとくと流れる千里の血液は葵のよりかなり遅い。それは葵のが早いせいかもしれない。

「看病して」

葵の指先が千里の頬を触れかけ、肩から背中に回された。

清と入ったお風呂のシャンプーの香りが千里の鼻を撫でる。千里は抱きしめ返すと首筋に額を埋めた。温かい首に冷えた頬を押し付ける。

「する。VIP待遇だね」

「ありがと」

そんな君が大好きだ。

「愛してる。葵」

「うん」

僕たちはずっと一緒。
僕たちは離れない。

何があっても……—

夢遊（5）

一人ぼっちのカミサマは言いました。

「ぼくと友達になろうよ」

少年は頷きます。

だから、彼らは友達になりました。

ずっと一緒だと約束しました。

何があってもずっと一緒だと……

少女は彼に言いました。

私があなただの物語を紡ぎましょう。

背中の羽が大きく羽ばき、彼女は空へと手を伸ばしました。

愛する彼の手を掴むために……。――

「んっ…うっ…あっ……もうっ」

「やだっ」

千里は葵せんり あおいの胸に突っ伏した。

「…早い」

鼓動に囁く千里。

「もう無理…」

体に這わせた千里の舌に葵は艶のある声を漏らす。

「物足りないよ…」

我が儘な子供の声。

「ああ、お願い」

「駄目っ…くたくた」

「むっ」

はむっと唇を啄む千里。そして、そのまま濃いキスへと変える。

「だ…から…もっ…せん」

「最後。最後の一回だから」

いいでしょ？

千里の瞳が潤む。

あ、かわいい…

はあと溜め息を吐いた葵は肩の力を抜いた。

「最後の…一回。俺のことは…考えなくて…いいから…味わっていいよ？」

了解しました。

自制心はハンマーで一崩しし、千里は葵の柔らかい四肢をぎりぎり

まで曲げる。

「頑張るから許してね」

楽しむから許してね。だけど。

「ゆー…ゆー…ゆー…」

ふらふらと歩みを進めた清せいはある部屋の前に来た。

早朝5時。

彼はそつとドアを開ける。

「ゆー？」

全裸の千里と葵が安らかに寝ていた。千里は葵を護るように抱き締め、葵は千里に少しでも触れようと身をぎりぎりまで寄せている。

清はベッドによじ登ると二人の頭上を這って葵の背中にきた。

もぞもぞ。

清は葵の背中にぴたっとくっついて布団に潜る。

「おかーさん」

目を閉じた。

「くしゅん」

「千里、大丈夫？」

「清に布団取られたからだ…」

パズルに夢中なその背中を千里は怒りたいけど怒れないと複雑な気持ちで睨む。

「朝は何かいい？」

「お粥。僕が作るから葵はソファで休んでて」

千里は小さな花卉の散りばめられたエプロンを身に着けた。

くいつ

「清」

千里は清を見下ろした。

「おかーさん、苦しそう」

リビングの奥を指す清。千里は火を消すと棚を探った後、葵のもとに走り寄った。

葵の吐息は荒い。

「ああ、おでこ出して」

「…あ…うん…」

お徳用、冷えぴたを貼り終わると葵は顔をしかめて千里を抱き締める。

「お粥…まだなんだけど」

「熱…ない？…俺から…移ってない？」

熱い手のひらでそつと千里の額に触れた。

「うん。昨日は…」

熱があるのにエスカレートしてベッドの中でやったことに千里は今更だけど謝ろうとして…。

「辛い…忘れられた。気持ち良かつ…た…」

葵の濡れた瞳は揺れている。千里はごくりと喉を鳴らした。

「この瞬間にでも熱で苦しそうなあおに激しいことしようかと思つた…けど…お休みが先だね」

「…うん。清のことよろしく」

ゆっくりと閉じられる青。やがて寝息を發て始める葵。

しかし、千里の顔はチクリと痛みが刺したかのように微かに歪んでいた。

くいつ

「大丈夫だよ」

そして、おかーさん。と甘えた声を出して葵にすがる清の頭を優しく撫でた。

「ゆーは？」

なんか清の切り替えが早い。さっきまで葵の手を握ってぐずっていたのに。葵を見て心配になったのかもしれない。

「まだお仕事」

「すぐ来てくれるって言ったのに…」

しょんぼり。

あーあ、店長がしょんぼりって、なんかこっちまで落ち込むかも。

「あお、朝御飯」

ソファーに席を移した千里は葵を抱き起こす。

「おかーさん、ご飯だよ」

「ああ…ご飯…」

スプーンを摘むように取った葵は重いのか、頭を俯かせた。その頭を千里は持ち、汗ばむ額を乾かすように前髪を上げてあげる。

「早く食べようよ」

清はさほど深刻な顔をしていない。ここまで落ち着きがないのは千里だけなのかもしれない。

「うん…いただきます」

千里が手を合わせると清は楽しそうに口に運び始めた。

「あお、食べて」

「お腹空いてなくて…頭痛い」

カランとスプーンは手から落ち、床に跳ねる。千里はそれを拾うと、流しに持って行き、新しいのを食器棚から持ってくる。そして、彼は「あお、食べて」そう繰り返す。

「食べたらずいていいから」

千里は冷ましたそれを僅かに開いた葵の渴いた唇から入れる。
お粥を嚥下する葵。熱がかなり酷くなってきた。額は燃えるように
熱い。顔色が悪い。

千里はその衰弱に内心狼狽えていた。思ひ出してはいけなひのに思
い出してしまふ。

『お父さん！お父さんってば！』

弱くなる呼吸。

イヤだ。

『ヤダ！僕を置いてかないで！お父さんっ！』

僕とお母さんを見捨てないでよ。

行かないで。

僕を一人にしないで。

『パパ、死んじやだよ！！！！！！！！！！』

このままじゃ葵も……

「死なないから……安心しろよ」

！？

「なんっ……でー」

「……千里は……不安な時……目を逸らす」

泣き顔を見せようとしない。いつも無理矢理にでも笑う。

「俺は……普通に……丈夫だ」

千里は唇を噛んだ。

でも、僕は泣かないよ。

だって……泣いたら皆いなくなってしまうから。

『お前が誰も傷つけずに生きていたいと言うのなら、誰にも泣く姿を見せるな。誰にもお前の弱い姿を見せるな。弱いと思わせたらお前を私益に利用する奴が近づく。いいな、弱い自分を誰にも見せるな。見せたとき、お前はその力で大切な人を傷つける』

祖父の言葉でこれだけははっきりと覚えている。

泣いたあの時、僕は父を失った。

だから、僕は泣かない。泣けない。

泣いたら葵がいなくなっちゃう。

「飯、食つよ」

「無理は…」

葵は千里からスプーンを取るとお粥をゆっくり口に運ぶ。

「うん、美味しい」

「電話だ」

「俺が」

店長不在時は葵が代理の店長だ。

立ち上がりかけた葵を千里は座らせる。

「僕が出るよ」

「駄目だ。千里は…駄目だ」

「僕じゃ頼りない？」

「お前は…櫻だぞ。駄目だ」
そう、僕は櫻に追われてるから。

僕はここにいる。

僕は洗のいるここにいる。

僕は洗を利用して。あおは違うというけれど、退学後、櫻に帰れと言う祖父から逃げて洗の店に行った。洗は軍から解放されている。だから、洗の傍なら安全だと思った。

僕も祖父から解放されると思った。

僕は軍学校に入る代わりに自由を手に入れた。それも、卒業するその時までの束の間の自由を。

退学をしたのなら約束通り、櫻本家に帰らなきゃいけなかった。でも、退学して、行く場所考えて、怖くなった。

もう…殴られるのも地下に閉じ込められるのもイヤだった。

それに、二人から離れるのはもっとイヤだった。

祖父のせいだよ？

僕を洗祈に会わせた。

僕を葵に会わせた。

僕に親友を作らせた。

父の死に何もかもを捨てて祖父の道具になろうとしたのに、僕に光を掴ませた。

本来、僕の人生で掴むはずのなかった光を掴ませた。

僕には籠の中の小鳥にはもうなれなかった。

僕は洗祈に謝りたい。

僕は葵の傍に居たい。

助けて。
たすけて。

狂いそうな僕を助けて。

まただ。

葵の腕。

あつたかい。

「ごめん。お前を…こんな狭いところに閉じ込めて…」
どうして謝るの？

閉じ込めた？

違うよ。

「謝るのは僕だ。ああは僕の為に言ったのに、僕のことを信頼してないんじゃないかって勘違いして苛々をぶつけようとしたんだから」
「お前は親友だろ。信じてるよ」

うん。ありがとう。

でも、僕を信じちゃだめ。

だって、あおが一番で…洸が一番なんだから。

「蓮^{れん}お兄ちゃん！」

そう言い合っている内に清が受話器を握っていた。

「清…」

蓮だったことに葵は溜め息一つで済みます。

「おかーさんとおとーさんのお家だよ？ん？…おかーさん、蓮お

兄ちゃんが呼んでる。急いでって」

「僕が」

千里は洗祈の頭を撫でると受話器をもらった。

「蓮さん？あおは今熱で―」

『いいかい、よく聞いてよ』

「なんですか？」

『今すぐそこから離れるんだ』

夢遊（5・5）

それ以上、闇を見ちゃいけない。

「清、その窓開けて！」

「うん」

清は千里の指した窓を開ける。そこから入るのは漆黒の胴に紅蓮の瞳の小鳥。

「鳥？」

「ああ！僕に体を預けて！！」

小鳥の登場に疑問符を出す葵にコートを掛けた千里は彼を背負おうとした。それに何？と葵は体を退く。

「あの鳥が後で説明するから！清、付いてきて！」

「うん！」

千里は洩る葵を背負い、洗祈（しき）が作った黒曜石の御守り付きの鍵束をひっ掴むと小さな洗祈を呼んだ。

清を連れて今すぐそこから離れるんだ！！！！

『蓮からの伝言。清と洸祈は過去と現在で入れ換わったそうです』

「清のいた過去と洸祈のいた現在が入れ換わったってこと！？」

千里の腰に腕を回した葵は千里の背中と自らの腹の間にいる清の頭に乗るセイと言う名の小鳥に問い掛ける。

『それも一部の記憶だけを残して。清は清として生きてきた時だけの記憶を。もし同じなら洸祈は過去を忘れ、清から後の記憶だけを持つてる』

「何でそんなことに！？」

『呪いです。呪いにより、洸祈の魔力が暴走して空間を歪めた』

「何で呪いが―」

「ああ！」

千里が会話を途切れさせた。

「先に訊くことあるでしょ。セイ君、何故逃げるの？何から逃げればいいのか？」

現在、セイの言う通りに二之宮蓮の邸宅にのみやれんに向かっている。

『清が奪われないようにクロスから逃げて』

クロスが指すのは――政府――

「政府は何故清を欲するの？洸が手に入れられないから？清に洸の記憶はないし、洸本人である可能性は寧ろ低いよ？」

『洸祈が拒むから詳しくは話せないけど、清にも十分利用価値があるから』

「洸……」

君は一体何者なの？

千里は乾いた唇を軽く舐める。その背中に葵は額を付けた。

「熱…つらい？」

「ううん。…千里、清をもといた場所に帰して、洗祈を連れて帰ってからだよ」

分かってるよ。

だけどさ、葵…泣きそうな顔だけはしないでよ。

「あいつにもう隠し通す自信はないだろうしね」

千里はハンドルを切った。

生きる代償

「洗祈御用達の薬屋……か」

葵は千里に肩を借りたままてくくと歩く。

「あおは蓮さんに会ったことないんだっけ？」

冷えぴたの上から額を撫でた千里は葵の腰に然り気無く手を回して満足そうだった。

「ん……ない」

「僕も」

「せーちゃん、早く！」

弾むような少女の声。

「遊杏ちゃん！」

遊杏は長い髪を揺らすと千里と葵の後ろに回って押す。

「ちよっ!？」

葵は赤い頬を千里の背中にぶつけた。

「いたっ……」

「くうちゃんの弟のおーちゃんだあ！」

安易な。

遊杏を交えてとろとろと歩く葵に彼女は急かす。

「政府に見付かっちゃうよ」

空を指差す遊杏。見上げた千里の目に鳥が見えた。

「まさか見付かった？」

「大丈夫、あれは桐の大黒鴉、レイヴンだから。にーのお客さんの
寧猛そうな鳥が空を旋回している。」

「なら、早くしないとね」

ほっと一息吐いた千里は葵をお姫様抱っこし、歩みを早めた。葵は

だるいのか、恥ずかしい構図にもなにも言わずにされるがままだ。

「いる…」

ふと、遊杏が辺りを見回した。

「何が？」

「政府」

ぴんと張りつめる空気。遊杏の波色の瞳が辺りを見る。
そして、

「セイ！！！！今すぐ通信を切って！！傍受されてる！！！！」

“セイ”にセイと清が**せい**びくりと反応する。

「あうっ！！」

清が遊杏の形相に千里にへばり付いた。

「清、小鳥のセイだよ」

―遊杏、ごめん―

セイが茶髪に頬を寄せる。

「早く帰さないと…ちびっこくちゃんが連れていかれたら過去に帰せなくなっちゃう。そしたらくくちゃんを過去から取り戻しても現在でくくちゃんが消えちゃうかもしれない。兎に角、くくちゃんを安全に取り戻すにはちびっこくくくちゃんが必要！」

洸祈が消えるかもしれない。

その言葉に、遊杏の後を追って葵は千里から降りると、ふらつく足で清の手を引っ張って走った。

「何処行くの？」

「狼に**ろう**会わせてやるから」

うん。と勢いよく頷いた彼は逆に葵を引っ張った。

「金髪君に弟君、僕が二之宮蓮だよ」

「わあ、綺麗な眼」

千里がキラキラと目を輝かす。

「そう？」

この瞳にはあまりいい思い出がない。蓮は不機嫌に目を閉じた。

「綺麗。あおは海の色。蓮さんは深海の色」

「深海は冷たいね」

益々不機嫌顔。

「冷たい？深海は暖かいよ。それに落ち着くと思う」

.....。

「それは初めて言われたよ。悪い気はしない。寧ろ、嬉しいね」
くすつ。

「蓮お兄ちゃん」と抱きつかれた蓮は、清の手を握って白衣を翻した。

「千里君！葵君！」

と、レイラ。

「千里さん！葵さん！」

と、琉雨。

「千兄ちゃん！葵兄ちゃん！」
と、呉。

「三人ともどうしたの！？」

千里は葵に肩を貸しながらリビングに入った。

「説明するから座って」

完全にダウンした葵をレイラが介抱している傍で蓮は全員を見回す。

「崇弥^{たかや}と清の状況は皆に話したね。解決には清を過去に送り、崇弥を現在に連れ戻せばいい」

「僕ですね」

と、呉。

「そ。呉君の時制空間転移魔法。空間だけでなく時も移動できるそれで清を過去に連れていく」

「でも、僕の魔力じゃ精々2年前が限度です」

悪魔の魔力をもつてしても流石に限度がある。それに、行きだけじゃなく帰りもある。人数も重要だ。

「僕の魔力を使ってくれればいいよ」

老眼鏡に白衣を脱いだ蓮はソファアの背凭れに投げ掛けた。

「で、千里君は呉君と僕と一緒に来て」

「僕？」

葵の額のそれを張り替える千里は首を傾げる。

「ボディーガードよろしく、用心屋さん」

しかし、

「…俺が…行く…」

葵だ。

「高熱の君にボディーガードは無理だ。ここで休んでて」

「大丈夫……だから…」

「駄目だ」

「俺の…兄貴…だ…！」

額を垂れる汗。千里が強情な葵を収めようとする。それに、蓮の意見の方が正しい。

今の葵が行っても……

「今の君は足手まといだ。はっきり言って邪魔だ」

容赦なく蓮は見下ろす。

「いいか……！」

葵は立ち上がると蓮の胸ぐらを掴んだ。青は紺を強く睨む。どちらも退かない。しかし、蓮がその手を払うと、葵はよろけ、ぎりぎり体勢を保った

「俺が……今の店長だ！千里は……連れていかせない……俺を……連れてけ……」

強情に食い下がる葵。千里は葵が倒れた時、いつでも助けられる位置に立つ。

はあ……

更に蓮の瞳が冷えた気がした時だった。彼の溜め息が部屋に静寂を満たす。

「そんなに崇弥の過去が知りたいのかい？」

ぴくっ……葵は反応した。

「そんなの……知りたいに……決まってるだろ……！！」

「最低だね。崇弥の過去は酷く醜いし、穢い。誰が見せたがる？特に葵君、君にはね」

唯一の家族には醜い自分は見せたくない。

だけどさ、洗祈。それって本当に家族なの？

「……………俺も行く……………！！！！！！」

葵は叫ぶ。

悲しみを浮かべた顔で。

洸祈は俺を置いていくの？

絶対に引き下がらない。

千里と蓮の目線が絡み、小さく頭を下げた千里に彼は握り締めていた拳を緩めた。

「解った。ただし、倒れても助けはしないからな。這ってでもついてこい」

しっかりと両足で立った葵。

「遊杏、琉雨ちゃん、千里君はこの家を頼む」
頷く3人。

「レイラさんは熱がある崇弥と葵君の為に準備しといて」
唇を引き締めたレイラ。

「蓮お兄ちゃん…」

清は蓮の手を握った。

「清、帰るよ」

生きる代償（2）

日に焼けた畳。

俺の手が力なく握られていた。

ここは……

「おはよう、清君^{せい}」

上を向けば剥き出しの蛍光灯が遠くに見える。

そして、

男が俺を組臥せていた。

誰……？

「……放して」

頭が痛い。

体が熱い。

「厭だね。起きたらおっきくなつてて私はびっくりしたよ」

シャツに濡れた手が潜り込む。

「……知らない」

「ま、いいよ。お金はあるからさ。清君にそっくり君」

執拗に胸を撫でてきた。

「……知らない」

「いい体だ。清君よりしっかりしていてそれでいてしなやか。やり

甲斐がある」

捲られ、さらけ出される上半身が熱を持つ。

「……知らない」

「大丈夫。私に任せて」

男の舌が這う。

気持ち悪い。

唇に舌が触れる。

「閉めてないで開けて」

駄目…開けちゃ駄目…

「強情だ」

肥えた指が額に触れて、首を反らされた。喉が締め付けられているようだ。

「可愛い」

歯が首筋に立つ。

「あっ…っ」

ぞくりと悪寒が全身を駆け巡った。それに開けてしまった唇を奪われ、舌が入ってくる。

「あっ…っう…や…」

駄目…

気持ち悪い。吐きそう。

びくっ。

男の膝が刺激してきた。

「っ！」

「淫乱」

屈辱。

やめて…

腹を指が這う。

やめて…

下半身へと確実に向かう指。

やめて…

体が動かない。

ヤダ…

イヤだよ……………タスケテ。

てすけて。

「…陽季…」
はるき

陽季…陽季…陽季…陽季…陽季。

………タスケテ。

あの時、助けてくれた。

あの時も助けてくれた。

「陽季い……」

助けて…陽季。

怖いよ。

「今は私のものだよ」

…ものは矢駄。俺は人形じゃないよ。

ズボンが脱がされた。

陽季………早く助けて…。

男の手に反応してしまう。

「うつ…あ…」

そうだ。

この体は…

『満たされた気がした』

陽季だけに捧げると誓った。

「他の奴の痕なんて付けるんじゃない」

その痕は…

陽季との繋がり証。

赤くなつた痕を吸われる。

陽季が消える。

分かんない。どうしてこうなるの？

陽季、どこ？

一人にしないで…

「やつ…」

「じゃあそろそろ…」

衣服が奪われた。空気に全てが晒される。

そこは駄目。

「陽季…やだ…陽季…」

「黙ってくれ」

痛みが走る。

やめて…。

「陽季…陽季…陽季…」

「他の男の名前を言うな！」

殴られた。

自らのシャツの腕で口を塞がれる。男は乱暴に胸を噛んだ。

痛みが走る。

やめて…。

「そそられるよ」

気持ち悪い。吐きそう。

脚が開かれ曲げられる。

やめて…。

陽季が消える…。

やめて…。

陽季…陽季…陽季…陽季…陽季…陽季。

……タスケテ。

ガタッ

「時間過ぎてる」

誰かが襖を開けた。

「邪魔しないでくれ。金ならそこだ」

男は動きを止めて誰かを睨む。

「乱暴する客はお断り。さつさと帰るのね」

誰かの後ろからまた二人の人が入ってきた。

「くそつ。もう来ないからな」

「大切な店子が壊れて使えなくなるよりマシだから」
男が離れる。

.....助かった？

「で、清のそっくりさん。アナタは誰かしら？」

「...分らない...」

あら、そうなの。

そのクリーム色の髪の女の人は俺の口枷を外した。

「私は炎^{えん}。それで、アナタと同じ顔のちーちゃんな餓鬼見なかったかしら？」

「...見なかった...」

「そう。狼^{ろう}に探りを入れて。ま、狼の計画でも仕事中に一人で逃げるような勇気は清にはないだろうけど...」

清...って...

誰？

後ろに付いていた一人が踵を返す。きつと、狼^{ろう}つてののところに行つたんだ。

炎と名乗った女の人は俺の服を掴み、残ってたもう一人に何か指示をする。その男は服を手渡されて同じく踵を返した。

「えつと...ん...今はアナタを...めんどいわね。...清と呼ぶわ。いい？」

「いい...です」

自分が誰だか分かんないし。

炎は押し入れからシーツを一枚取り出すと肩に俺の掛ける。

「先ずは美樹浩^{みきひろ}のここに行きましょう」

「美樹浩？」

「大丈夫。診てくれる」
何が大丈夫なのだろうか。

「美樹浩、怪我してないか診てくれるかしら？」

「はいよ、エリーナ」

赤い髪の男の人。眼鏡がよく似合う。白衣まで着て、お医者さんだ。しかし、炎はお医者さんに対して牙を剥いた。

「え・ん!!」

まるでコントのようだ。

「それで？彼は？」

俺を美樹浩はじろじろと見る。恥ずかしいかも。

「さあ。記憶障害が起きてる。自分の名前すら覚えてないの」

「ふーん。さ、見せて」

「？」

何を？

「シート邪魔」

美樹浩は俺からシートを奪う。勢いで俺はベッドに倒れた。

「あんのデブ爺がね」

「あーあれ。錯^{さく}君大変だったなあ。ん？2種類の痕がある。この子、売りじゃないのか？記憶は薬でーとか」

「それを美樹浩が診んでしょ」

「エリーナの仰せのままに」

「え・ん!!!」

仲良し夫婦みたい。

「薬はなし。傷はなし。きつと売りだったんだろうね。じゃなきゃこの体はないない」

「でしようね。ま、怪我と中毒がなくて良かったわ」

よしよしと炎に撫でられた。気持ち良くてつい俺は目を細めてしま
う。

「この子愛されてるね」

美樹浩はふと言った。

愛？って？

「？」

首を傾げる炎。

「この顔で売りにしては痕が少ない。この痕見てごらん？大事にさ
れてるよ」

「陽季…ね。聞こえたわ。直ぐに陽季を見付けてあげる」
そうだ。

よく分かんないけど、俺は陽季に会いたいんだ。
本当に優しい人達だ。

生きる代償（2・5）

「炎！清は！？」

「あら、狼。それは私が言いたいわね。お仕事中にそっくりさん残して消え去るなんて」

「そっくりさん？」

狼は炎の背後からひよっこりと頭を出した。

くすんだ金に同じ色と紺のオッド・アイ。

えっ…と。

……………誰かに似てる？

「清？」

口が半開きのままでちよつとアホっぽい。

「頭おかしくなったの？狼」

「はあ！？」

「清は一夜にしてこんな青年にはならないわ」

あ、からかつてる。

怒りに赤くなつた頬にキスをした炎はベッドに腰掛ける俺に狼を突き飛ばした。

小さな体が宙を舞う。俺は一応、狼を受け止める。

「ちようどいいわ。狼、その子を浴室へ。お世話よろしく。アナタ、清の保護者なんだからお世話好きでしょ？あと、夕食の残りを灰（かい）からもらつてあげて。そしたらこの薬を飲ませなさい」

包装の中には白のタブレット。狼はむっくり体を起こした。

「こんなヤバそうなもの飲ませるわけないだろ！」

「風邪薬よ。食後しか服用不可だから」

あつさり。狼は意外な表情をするとそれを握つて、徐に俺の手を引く。

「行くよ」

炎の優しさは狼には伝わらないらしい。炎が可哀想だ。

俺はシーツを纏ったまま彼の後ろを床をヒタヒタと進んだ。

座った俺の後ろに立った狼は俺の髪に鼻を近付けた。

「貴方から清の匂いがする」

「…お日様？」

皆がそう言うから。

「本当に清にそっくり…大人になったら清はこうなるのかな」
さあ…。

狼は泡立てたタオルで優しく体を洗ってくれる。狼の動きはお世話に慣れているようだ。

「…やつ…」

しかし、うとうとしていたら指先が俺の体に滑り込んでいた。

「大丈夫、怖くないから。綺麗にしてあげる」

違う。そこは駄目…だ！

近づく指を必死に押し返した。だが、狼は俺の気持ちを理解してくれず、ぽけつとして強引に力を込める。

「うっ…あ…」

「気持ち悪いだろうけど我慢して」
掻き回される。

「やつ…だ…」

矢駄…っ。

「はる…き…」

止まらない。涙が溢れてくる。

どうして！

どうしてなの！

イヤだよっ！

陽季…陽季…陽季…陽季…陽季…！！！！！！

「……やめて……」

「せ……い………っ」

狼はピクリと手を止めるとゆっくりと抜いた。

「……これ以上…俺から…陽季…を…取らないで…」
もう奪わないで…。

「…ごめん…ね。好きな奴の…なんだね…」

その柔らかいキスを俺は拒まなかった。

洗われ、ふかふかになっていた自分の服を着た俺は狼の後ろに付いて歩いていた。

「灰さん」

「かみちゃん！わお！ホントに清君に似てるね」

「かみちゃん？」

狼がかみちゃん？なんで？

「“ろう”って“おおかみ”って言う字だから。おおかみの“かみちゃん”。センスないよね」

「酷いよっ、かみちゃん！」

しかし、彼女は楽しげだ。がらんとした食堂らしき場所だから寂しかったのだろうか。

「何かくれる？」

「うーんと…」

灰さんと呼ばれた若い女の人は冷蔵庫を探る。

「アップルパイだけいい？」

皿に乗るパイ。それは俺の手に渡るが、狼はじっと目で追ってきた。
何？

「アップルパイ……」

狼の目が据わってる。

「かみちゃんのじゃないよ」

「もうないの？」

「あれで最後。ゆんちゃんが実家から送られるリンゴをお裾分けしてくれるまで次はありません」

死刑宣告でもされたような顔。その顔を見ていると、俺のせいじゃないのになんか罪悪感がある。

「……………はあ……」

狼が深く溜め息を吐いた。

狼と清の部屋にお邪魔し、端に立ててあったテーブルを戻して、俺達はもらったパイの皿を真ん中に座敷に座った。

じー。

何だろう？

俺はパイを摘み、持ち上げる。

じー。

狼の目線も上がった。

もしかして……欲しいの？

「いる？」

「い、いない」

はあ……ならいいよ。

じー。

凄くじれったい。

じー。

……………。

じー。

……………。

俺は最後の一切れを半分にして皿に残し、狼の方に寄せる。

「いないよ」

そう言うくせに皿のパイしか見ていないじゃないか。

「お腹一杯だから」

俺が目線を逸らして手元の半分を一口食べると、

じー。

ちらっ。

.....。

じー。

ちらっ。

.....狼の目を見るな！無視するんだ、俺！！

！！

狼は皿のアップルパイを頬張った。一口で。

幸せいっぱい顔をする狼。

やっぱり食べたかったんだ。

名残惜しそうに指先を舐めるので、俺は食い掛けだが狼にあげた。

「ありがと」

お礼を早口で言うつとパイを一口で食べる。

「好きなの？」

「大好き」

と、即答。

可愛い。

ついつい狼を撫でていた。

「突然清も僕を撫でてくる」

ふと、狼が言った。

「そう？」

だけど、俺は清を知らない。

「そうだよ。本当にあなたは清にそっくりだ。でも…炎の言う通り、あなたは清に似て非なる人だ」

さっきとは違う罪悪感がしてくる……

「…ごめん。清って子を…覚えてなくて。自分の素性も覚えてないし。覚えているのは…皆って言う誰かと…大好きな人だけ。何の手掛かりにもならないね…ごめん…」

俺には謝ることしかできない。それしか俺の持ち物はないから。

ごめん…狼。

「あ…」

狼の表情が固まった。

どうしたのだろう？

「狼？」

言葉を失っている狼は眉を曲げると腰を上げ、低い窓枠に腰掛ける。その姿はまるで…

「死ぬの？」

何故…俺はそんなことを訊く？

「死なない。でも…僕は…まずい…」

「どうしたの？」

近付いた俺に狼は抱き付いてきた。勢いを殺せずに一回り小さい狼と共に倒れる。

「清が…いない…。あなたは清じゃない…僕は清を…探さないと…」

清…！っ…」

動揺してる。

苛ついているんだ。これは先に吐き出させたほうがいい。

俺は狼に言わせることにした。

「清のこと忘れてた…最低だ！くそっ！清！！」

彼は自分に腹が立っている。俺との時間に俺を清と重ね、清を一瞬でも忘れたことを。

でも、彼は忘れていないと思う。ただ、俺が清に似ていただけ。それに、あまり言いたくないが、狼もこの従業員で、彼には清を自由に探せる力がないのだからちょっとだけ清の見つからない現実を心の奥にしまっただけだ。

それにしても、狼は清が本当に大事なんだね。

いいなあ……

「狼」

俺の腕に納めると、狼は体を震わせて泣き始めた。
嗚呼、やっぱり。君は子供だ。

「探してくるから薬飲んで寝ててよ」

彼は一通り泣くと、立ち上がった。強く擦ったせいか、目じりが赤い。だが、意思のある目をしていた。

「うん」

俺は見送ることしかできないんだね。

狼はああ言うけど、狼は悪くない。

「悪いのは俺だ……」

俺は誰だ？

「何故あんなところに居たんだ」

何故だ？

……陽季。

「陽季……」

眠いや……。薬のせいかな。

俺は狼には悪いが、眠らせてもらうことにする。

でも、なんとなく……清はもうすぐ帰ってくる気がする。

だよ、清。

夜中にしょんぼりとした顔で床についた狼をそつと胸に抱いた。

お兄さん

ヒトは複雑だ。

複雑な思考が習慣や衝動、ありとあらゆるものを更に複雑にする。

それはまるで壁のようだ。

虫が繭を作るようにヒトは壁を作る。

ここは“自分”。

誰にも干渉されたくない“自分”。

だけど、あの時の彼にはなかった。

壁も何もない。

あるのは“自分”だけ。

しかし、晒された“自分”は綺麗だけど……

真っ赤。

血の色に染まっていた。

無理矢理開かれた壁の奥。

突き立てられた爪に傷付いた“自分”。

真っ赤なそれを晒して彼は小さく踞っていた。

彼にとつての最初、彼の体に『売り』を教えたのは僕だ。

「厭がっちゃ駄目。客が付け上がる。気持ちいって顔しなきゃ」

「やつ……だ」

昔の僕もそうだった。だけど、無意味だつて知った。寧ろ、自分の不利になるだけだ。僕は身を持って知れなんて厭だ。君には何となく、そんな思いをして欲しくない。

「じゃあ、好きなこと思い浮かべて。何でもいいから。やってる時はそれだけ考える。客の質問には「はい」。それだけでいいんだ」ただの処世術。分かつてよ。たったそれだけでいいんだ。そうしたら自然と慣れる。喘ぐことも純情ぶるのも何もかも慣れる。

全てを習慣にするんだ。

あつて当たり前と自分を騙せ。僕は客に買われた飼われ犬だ。ワンと鳴いてみる。可愛く尻尾を振ってみる。僕はできるさ。ワンでもキャンでも鳴ける。尻尾だつてご飯のゴミの前でも振れる。

だつて、本当の“自分”を壁に閉じ込めていれば汚れないんだから。だから、厭がる彼を押さえ付けて無理矢理イカせた。何度も何度も気持ちいって言うつて何度も言った。喘いでつて何度も指示した。最初、彼の剥き出しの“自分”を傷付けたのは僕なんだ。

ごめんなさいって謝って泣いて、彼は気絶するその最後まで僕を拒んだ。

ごめんなさいも泣きたいのも僕だ。君じゃない。なのに君はいつだって謝る。君は全然悪くない。悪いのは僕だ。君には壁を作れない

と言つのに。もう君には誰も恨むことも憎むこともできないというのに。

君にはもう誰も愛することはできないのというに。

恨まれることも憎んでもらうこともできないのに、愛されることを期待した僕は最低だ。

彼にその時の記憶はない。

少しばかり症状を偽って記憶障害が起こる確率が一番高いものを手に入れ、口移しで飲ませた。僕の思惑通り、彼は忘れた。折角忘れてくれたのだから、僕は彼を変えることを諦めた。その代わり、事務員に体売って、彼を僕と同室にした。そして、僕は優しい“お兄さん”になった。僕はいつでも彼を護るナイト。沢山泣いて沢山痛め付けられた体を隅から隅まで綺麗にするのは僕の仕事。調教好きの変態に溜めさせるだけ溜めさせた熱を出してあげるのは僕の仕事。

僕は彼の体の全てを知っている。

だけど、時々見せるあの氷った瞳は知らない。
闇に謝る君は知らない。

自らの火で戒めのように体を焦がす君は知らない。
直ぐに治るのにそれを繰り返す。肉の焼ける匂いを漂わせて火を押し付ける。そして、赤く腫れたそこに爪を立てる。やがて、爪と指の間が赤く染まり、体を流れていく。また火を押し付ける。肉が焦げる。血が流れる。何もかもを血に染めて、ふらふらと風呂場に入る。そして、風呂から出てきた彼は爪の付けた傷の一つ一つに治癒を掛けていく。そして、何事もなかったように僕の腕に入る。

嗚呼…

僕は君の心を知ることができない。

だからこそ、

僕は彼の心を僕自身の手で創ることにした。

だから……僕はまず、知らない彼の心を踏みにじった。

すやすや眠る彼の視界を持ってきた布で塞ぐ。

起きて…起きてよ。

…なあに？

紅い鮮やかな光を灯すマッチの先を僕は震える指で彼の開いた手に押し付けた。

っ！！！！？

彼の反射的に握られた手が炎を消し去る。

熱いよ！何！？見えないよ！

彼は完全に目を覚ました。なら、これからだ。

僕は二本目を擦った。音で分かったようだ。

マッチだよね！誰！やめてよ！

もつと焦って。いいこだから焦って。

僕は彼の着物を掴み、前を広げた。露になる無数のキスマーク。今日の彼の相手は2人。午前中に若いお姉さん。午後たっぷりを中年のおじさんと。そのおじさんは彼がお気に入りだ。1週間に1度は彼を指名する。抱けるだけ抱く少年愛の最も最低なパターンだ。

僕は表情に変化がないから客が少ない。あの時も僕は廊下に響く彼の泣き声を聞いていた。今日はどこを痛めているだろうから優しく扱わなきゃとか準備していた。僕は彼のお兄さんだから。たった一人の家族だから。

だから、僕は君の全てを知ってなきゃね。

体も心も僕は知ってなきや。

分かんないことなんてあっちゃいけない。

紅く輝く炎。

君の綺麗な瞳の色。

血に染まった色。

君の色。

僕は燃えるマツチを肩口に押し付けた。あがる悲鳴。それが僕にはジャズのように聞こえる。心地好い。

皆紅く染めなきや。

君の色に染めなきや。

そして、僕を呼ぶんだ。

助けて、助けてって。

君は僕がいなきゃ生きていられなくなるんだ。

僕に依存して僕を求めて。

僕に君を見せて……

指先が視界を隠す布に引つ掛かった。
僕と彼の視線が重なる。

光の写らない紅。

「だ、大丈夫？」

もう慣れた僕の演技は完璧だ。

僕は君の“お兄さん”だよ。

君は“お兄さん”に助けを乞うんだ。

助けて…助けて…

狼^{ろっ}。

さあ、狼^僕を呼んで。

「……………助けて…氷羽^{ひわ}」

無茶苦茶に振り回した手で傷付けた目尻から流れる血と涙が混ざり、
紅い雫が流れた。
まるで血の涙…―

「氷羽…助けて…痛いよ…怖いよ…氷羽…氷羽…氷羽…氷羽…」

氷羽。

「な…何言ってるの？僕だよ？狼だよ？」

ねえ、君が言うべき名は“ひわ”じゃない。

狼だよ！

「氷羽…助けてっ…氷羽っ…」

やめてよ。

僕は狼だよ。

呼んでよ。

ねえ、呼んで！

呼んでよ、清^{せい}！……！！！！

僕はマツチを擦る。

謔言のように氷羽を繰り返す彼の顔に近付けた。

「氷羽あ……」

どうしたら君は僕の名前を呼んでくれるの？

ううん。

呼んでくれなくていい。

ただ……

氷羽
それは言わないで。

僕ヲ見テクレナイソノ目ハ

イラナイ。

「氷羽…俺をヒトリにしないで……」

僕はマッチの先を彼の左目に突き立てた。

「……………」

視界が溢れ出る何かで歪んだ気がした。

悲鳴が聞こえる。

誰かの絶叫。

僕は隅に踞って両耳を両手で塞いだため、溢れるそれを止められなかった。

嗚呼

……誰か僕を呼んで……

嗚呼

……誰か僕を求めて……

痛いよ……心が痛いよ。

大切だった。

なにを捨てたっていい、そう思えるくらい大切だった。

ねえ、氷羽。

俺、好きだった。

お前が好きだった。

俺、氷羽のことを愛してたんだ。

ねえ、氷羽。

俺、お前に酷いことした。

謝ったって赦してくれないことぐらい分かってる。

何度ごめんって言ったって、俺が赦せないのは分かる。

ねえ、氷羽。

これは俺が卑怯だから、

赦してくれないなら、

俺もお前と同じ代償を払うから。

お前を殺した俺を殺して、
殺して赦して……

氷羽。

「起きた？」

訊ねると、今の今まで唸り声をあげていた彼の唇が微かに動いた。

「……………狼？」

「そうだよ。“狼”だよ。」

「ミキさんが、それが外せるようになるのは2週間後ぐらいだって」

「“それ”？」

もう慣れたのかな？

「目の包帯だよ」

「包帯？……………あれ？」

目に巻かれた包帯に触れた彼は首を傾げる。それを見たとき、僕は痛みを感じていない彼に安心したというより、何も覚えていない彼に安心した。

あの後、炎に怒られた。商売道具に傷つけたことより、彼を傷つけたことに怒られた。不思議だった。炎はそういう人だとは思わなかった。彼を大事そうに抱き締める姿はまるで別人だった。そして、その姿をただ見る僕はまるで機械人形だと、僕自身思った。

「どうして？」

「まあ、ちよつとね。僕がいなかったら……」

僕は何を言いたいんだろう。

本当は分かっている。

「狼？」

僕って単純だよ。

彼に好いてもらうために僕が今しようとしていることは……

「僕がいなかったら清の目、見えなくなっちゃうところだったんだよ」

取り返しのつかない嘘を吐くこと。

「だから、僕の傍にいるんだよ、清」

これが君に吐く最初で最後の嘘になると誓うよ。

「僕が君を護ってあげる」

だから、

「じゃあ、狼、ずっと一緒だよ」

「うん。ずっと一緒。僕たちは離れない。何があっても……」

君に吐いた嘘を赦して。

生きる代償（3）

「遊杏^{ゆうあん}、お前に任せたらなら」

「ボクちゃん、がつてんだよ」

地下。

呉は息を吐くと葵^{あおい}と二之宮^{にのみや}の手を握った。すると、はっと二之宮を見上げる。

「こんなに…」

「まあね」

含みのある二人の会話に葵は首を傾げた。

「では、時間と場所は？」

と…

呉の言葉に二之宮は葵を見た。

いいかい？と目で訴える。

「覚悟はできている」

葵は返した。

「10年前の11月10日。東京の下楽^{からく}、八幡橋^{やはた}に」

4人の視界が白に染まった。

「こ…こは…」

葵は目の前の情景に言葉を失った。呉は漆黒の瞳を細め、二之宮は

清^{せい}の頭を優しく撫でる。

「下楽、花街さ」

人を売り買いする荒んだ街。

「洗祈は…」

誰も言わずとも分かる。

子供がここにいる理由は売る為だけだ。

自らの体を他人の快樂の為に……

「行こう」

二之宮は清の手を引いて足を進めた。

「狼^{ろう}ちゃん心ここに在らずね」

狼ちゃんなんて呼ぶな。

玩具に遊ばれ、あられもない姿を晒しながらも内心で毒づく。

「アタシを見て」

女口調やめる。男のくせに。

感じるところを的確に付いてくるから容赦ない。くたくたの体が直ぐに熱を持ち始めた。

「むーっ。今日の狼ちゃんは意地悪ね。アタシ、意地悪しかえしちやうわよ?」

まずい。

客がサディスティックな笑みを浮かべた。長期戦に持ち込まれるのは勘弁だ。

「ごめんなさい。今は貴方が僕の愛する人……」
触れるだけのキス。

のはずだったのに…。

「んっ…お…きゃ…さま…」
食われる。

「…狼ちゃん…可愛いわ…」

感じてはいけないのに感じてしまう。 氣に入られてはいけないのに 氣に入られてしまう。

「アタシの心に火が付いたわ」
間違えた。

両手を万歳させられる。

「あの…乱暴は…」

自分で言うのもあれだが…館は売り子への暴力は禁止だ。

「しないわ。今日は狼ちゃんをたっぷり可愛がってあげる」

瓶が光に鮮やかな色を見せた。

これは確か…

「下町で流行ってるのよ」

一瞬でハイになる。

「違反…です…」

リストから外れた物は使用不可である。

「飲んじゃえば分からないわ。ね、狼ちゃん」

やめる。麻薬だぞ。

どろりとしたそれが体に塗り付けられる。 ひりひりとする痒みに身を振った。それが刺激となって全身を駆け巡る。

「っ…」

弱いそれでは苦しいだけ。 体の舌で掬った客はついでと胸に齒を立てた。 体が異常に反応してしまう。

くそっ！

媚薬と化したそのせいで僕は無意識に媚びていた。

「気持ちいかしら？」

虚ろな客の目。 まだ瓶には半分残っている。

「駄目…です…から」

「厭よ。狼ちゃん、飲んで？」

ハイになつたら理性を失う。そしたら制限が効かなくなる。

「狼ちゃんの愛する人はアタシでしょう？」

愛してたつて出来ることと出来ないことがある。これは出来ないことだ。

狼ちゃん。囁いた客は瓶の中身を感じるところに塗って虐める。

「あつ…っ」

「辛いでしょう？今のアタシ、狼ちゃんに対してだけさだわ。飲まないと苦しいだけよ」

じろじろと苦しむ顔を見て欲情する男。

変態が。

しかし、それよりも弱い。手が使えないので脚でどうにかしようとするが、

「駄目」

片手で動きが押さえられた。

熱が溜まる。

苦しい。

「狼ちゃん、お口開けて」

顔を叛けてそれでも堪える。両手を使う客は無理矢理口を開かせることはできないはずだ。

と…脚の手を放した客は瓶の中身を口に含むと下を刺激して開いてしまった唇に重ねた。

「……!?」

んー……!!!

ごくん。

「狼ちゃん、アナタから誘ってみてよ」

意識が朦朧としてくる。

まずい。

「あ…っ…」

ふわふわしてきた。

「おねだりは？」

「は…っっ…」

変なことを口走るなよ。と心中で叫ぶ。

「狼ちゃん、可愛い」

可愛いわけあるか！

「いいここにはご褒美が待ってるのに」

僕はねだらない。ねだれば全てを許すことになる。

駄目だ。

「清ちゃんはおねだりできたのになあ」

清？

「清…に…これを…」

「たつくさん。狼ちゃんより暴れて嫌がるから大変だったの」

こんなものを清は…—

「あなたのせいね、狼ちゃん」

「ど…して」

「だって、あなたにも使っちゃうかもって言ったらね…」
へ？

「狼ちゃんの代わりに飲んでくれたわ」

分かんない。

清、どうして僕を助けようとする？

「狼にはやめてよって、約束だよって。本当に…清ちゃんは—」

ああ、君はなんて…—

「馬鹿な子よね」

「だれも信じて疑わない」

清はもうだれも疑えない。疑ったらあの時のように失ってしまう。

「本当に馬鹿で…優しい。優しすぎて…」

そうだよ、清は優しい。この僕を守ろうとするぐらい。

「クスリをあげてあげたくなるの」

もしかして清は…。

「清…が…」

あいつは意識が混濁して…。

「清…」

こいつのせいで…？

「狼ちゃん？」

あいつはまだ幼いんだ。

薬なんて負担が掛かりすぎる。

そんな無垢な子に無理矢理薬飲ませて…。

「何で…清は仕事を…」

ちゃんとこなしていた。従順な奴隷。まるでロボットのような。しかし、感情がある。好きなものがあれば、嫌いなものもある。だから、彼は無理矢理は嫌がる。だけど、僕に言わせて見れば、あれは誘っているようにしか見えない。でも、清は本気で嫌がっている。清の体はもう拒絶しか知らないからだ。

そして、そんな清を好む奴は皆、加虐性愛の持ち主ばかりだ。

だから、こういう変態は、

「虐めたくなるの。清君って歪めた顔が素敵だから」と、言うんだ。

素敵？

皆そうだ。虐めて楽しむ。

そのせいでよく風邪引くし、悪夢を見て飛び起きる。ふと意識がなくなるし、酷い時は発作を起こす。

清のせいなのかな？冷静に対応できない清が悪いのかな？
ねえ、違うよね。

「狼ちゃんは沈着冷静。だから時々違う反応を見なくなるの」

客はキスを再開して楽しむ。

そう…僕は冷静沈着。

だけどね、あんたが清を殺そうとするから冷静でいられない。

「狼ちゃんやっとお薬が効いてきたのね。その顔よ」

何でだよ。

ム力つく。清は悪くないのに人は…客は虐める。辱しめる。

人殺しは殺されるべきなんだよ

蓮、殺すんだ。

「あ…っあ…」

駄目だ。理性を保て。

「狼ちゃん？なあに？」

全身を弄られる。

そんなのどうでもいい。

殺したい。

清…僕を止めて。

指先が意思を持って動く。

殺せ。

駄目だ。

「狼ちゃん？ねえ、狼ちゃん」

「清…止めて…」

あらお誘い？と暢気に言う客の首に手を掛けた。

「ちよつ…！！狼…ちゃ…」

人殺しは殺されるべきなんだ。

「清…清…清…」

ねえ、清は悪くないんだよ？

僕の愛する清を返してよ。

「清を…返して…よ」

「な！！」

客の顔が青くなっていく。

可哀想に。

清を虐めた罰だ。

生きる代償（４）

「狼、おいで」

あ、撫でてくれるんだ。
でも怒っているだろう？

僕は殺そうとした。

「でも殺してない」

殺せなかったただだよ。

「つまり、殺してない」

君がいなければ殺していた。君に会わなければ殺していた。

「ホントに？」

偶然だよ…。

「俺は偶然とは思わない」

確かに君はそっくりさんだけどさ…。

「『もう俺は忘れた』誰かの言葉だよ。狼、疲れてるね。おやすみ」

「清！！！！」

狼は叫んでいた。

意思とは関係なしに動くそれをどうにか客の首から離して…。

「狼！！？」

自らの名を忘れた青年は部屋に飛び込む。涙の溢れる紺を見付けて、彼は狼を抱き締めた。

「狼、清に救われたわね。三月、こいつに金を返して表に捨て置いて。もう来なくなって付けてね」

炎は付き人の三月に指示する。三月は頷くとそれを実行しようと咳き込む客を担いだ。そうして、一瞬でこの騒動は炎によって片付けられる。

紅く色づいた体は今までの清とはなんら変わらない。それは狼が一子供であり、清と同じ一男娼であることを示していた。

彼女は彼の腕に収まる狼を見下ろし、虚ろな紺の狼の頬を撫でた顔が微かに歪んだ。

「清が野生の勘だから狼の様子を見に行かなきゃ…」
今頃…殺人犯になってたわね。

彼女は安堵の溜め息を吐く。

「狼、狼！狼！！」

青年の腕の中で狼は身を擦った。

「くる…しっ…」

「どうしたの？」

熱い吐息の狼は震える指を動かしては力尽きる。

「あつ…い…」

「熱いって…熱あるの？」

彼が狼の額に触れても熱くない。

「清、狼は下町で流行りの厄介なもの飲まされたの。風呂に入れば一人で処理するわ」

「そうなの？」

体を支えようとする彼。しかし、狼はその手を弱々しく拒むようにぴくりと体を震わせる。

「はっ…っ…」

「狼？」

「感度良好。早く風呂に」

すっかりいつもの調子に戻った炎は、二人を置いて欠伸一つで踵を返した。

「狼、お風呂だよ」

「…む…り」

俺も男だ。

狼の現在の状態は見て分かる。

「あの…俺が…」

びくっ。

「…ごめん」

だよ。そっくりさんとはいえ、大切にしてる奴にやってもらうなんて…。俺だって本物じゃなきゃ厭だ。本物のぬくもりじゃなきゃ安心できない。だよ。ね…陽季。はるき

かくっ。

しかし、震えた狼は俺に凭れた。

「力…入んない…や。清には…言わないでよ。…僕は…お兄さん
みたいな…だから―」

だから、秘密にする？

「分かったよ。優しくする…ね」

正直、何にも覚えていないのにテクがある自分がなんか厭だ。いや、
狼が敏感なだけかもしれない。

「っく…はうつ…」

「大丈夫？」

大丈夫じゃない。そんなの分かってる。

気持ちいんでしょう？気持ちくて、気持ちいと感じる自らに焦っている。

「っ…！！！！…ふあ…っ」

脱力した狼。

俺は幼いその顔を見てからシャワーをかけてあげた。

「薬は抜けた？」

「……………」

「狼？」

「…スー…スー…スー…」

あ、可愛い。

「清がね。帰るよって」

言ってたよ。

そう、聞こえた。きっと清は俺の…―

狼、やっぱり君が好きだよ。

―蓮^{れん}、早く俺を迎えにきて―

「蓮お兄ちゃん？」

「あ…大丈夫」

「蓮さん、今の貴方の魔力は零に等しい」

「呉君^{くれ}もだろう？」

「僕は……悪魔ですから」

「悪魔だからなんだい？」

「気にしないで下さい」

「崇弥^{たかや}は悪魔だからと言う理由で君をそう教育しているわけだ。悪魔は奴隷か」

「黙って下さい！！洗兄ちゃんはそんなこと言わない！！寧ろ――」

「寧ろ？」

「僕を……」

「崇弥は悪魔は悪魔、魔獣は魔獣。そんな分け方をしない。呉君は呉君、琉雨^{るいう}ちゃんは琉雨ちゃんだ。そうだろう？」

「……………はい」

「僕は大丈夫だ。呉君は？」

「平気です。洗兄ちゃんが待ってますから」

「うん」

― 洗^{にう}祈^ぎ、
今迎えに行くよ―

生きる代償（４・５）

蓮達^{れん}が過去に向かった後、遊杏^{ゆうあん}はすぐに動いた。

蛇口からコップに注いだ水を一口飲んだ彼女は直ぐに残った全員に指示を飛ばした。

「うーちゃんは結界の補助」

「うん」

琉雨^{るう}が頷く。

「せーちゃんはレイちゃんの護衛」

「分かったよ」

千里^{せんり}が頷く。

「レイちゃんは準備」

「はい」

レイラが頷く。

「ボクちゃんは結界だね」

遊杏は床にぺたりとお尻をついた。琉雨が寄り添うように後ろに座る。

「うーちゃんの魔力は本当に気持ちいい」

遊杏を中心にゆっくりと築かれる魔法陣。

これからすることがどれほど辛いことかは分かっている。大きいこの屋敷に結界を張り、更に軍人ほどではないが、政府の魔法使いを防げるだけの強度がなくてはならない。

「旦那様のだから」

琉雨は遊杏を優しく抱き締めた。

「温かいや」

「うん」

波色の輝き。神秘的な光が部屋を満たす。

「座標を検索します」

機械的な声が遊杏から流れる。

「検索終了。陣形成終了」

遊杏の紺と琉雨の緋。

「結界を発動します」

「綺麗な空気だね」

千里は深呼吸を繰り返した。

「神社とかとおんなじ、聖域みたいな状態」

遊杏は琉雨に体を預けて言う。

「時々、にーがリラックスに使うんだよ」

うーちゃん。と琉雨に体を埋めた遊杏。琉雨は優しくその頭を撫でた。

「お疲れ、杏ちゃん」

「うん」

カーン……

鐘の音。

「杏ちゃん、杏ちゃん」

「うっ？」

琉雨は腕の中の邸宅の主を呼んだ。かなり魔力を消費したらしく顔色が悪いが、ここの管理は遊杏が一任されているのだ。それに、下

手をして結界を壊したくない。

彼女は琉雨の胸に顔を押し付けると体を起こし、目をしばたかせてピクツと反応して動きを止めた。

「どうしたの？」

「しすい紫水」

「それって…」

「政府」

静まり返ったりビングをヒタヒタと進んだ遊杏はインターホンの受話器を握った。

「せい清はもう帰ったよ」

第一声。

—ならば何故、結界を？—

「にーを苦しめる裏切り者にボクチャン達の土地は踏ませたくないから」

冷めた声音。

—ふふふ。なら、その蓮に代わってくれないかい？—

「にーはいないよ」

—紫水様、目標はいません。…そうか一足遅かったな。流石、逃げの蓮だ—

探索魔法を使ったのだろう。

「帰ってよ」

遊杏は冷静に言う。彼女の後ろで3人は息を呑んでいた。そして、

—では、たかや崇弥^{たかや}洗祈を頂きたい—

「くうちゃんは渡さない！」

「旦那様を…っ」

不安に駆られた琉雨は千里に抱き付いた。ただでさえ、過去に行け

ば洺祈が帰ってくるという保証もないというのに洺祈には敵が多い。それに、琉雨には彼を政府から護る力がないのだ。

「落ち着いて、琉雨ちゃん。洺は僕らが守るんでしょ？」

千里はどうにか上辺だけで冷静だ。琉雨はそんな彼をじっと見詰める両足で立つ。

「はい」

あとは遊杏に任せるしかない。

――崇弥洺祈は我々と契約している。全ての依頼を受けるとね――

「依頼じゃない」

遊杏の冷静さが少しづつ欠けてくる。

――依頼だよ。政府管理下中央研究棟に今すぐ来いって言うね。クロスの名の下に――

「ふざけないですよ！！くうちゃんは渡さない！あなた達もこの土地は踏ませない」

くすり。

受話器越しの紫水はあくまで冷静だ。

「帰って！」

――君は僕達を入れるさ。どんなに美しい花もいつか枯れる――

その理由は簡単。

「だまって！」

――でも、僕は人並みに咲かせる方法を知ってる――

機械人形が唯一従う主のことだから。

「煩い！！！！紫水！！！！！！！！」

蓮の花も枯れどきじゃないか？

感情を露にして叫び、それでも何も言わずに見守っていた琉雨は受話器を手から滑らせドアに歩を進めた遊杏を呼んだ。その表情は淡々としていて何も無い。

機械人形。

「杏ちゃん？」

「会って…文句言ってくる…」
ふらり。

「遊杏ちゃん、危ないよ!!」

千里が遊杏を止めようとする。

「そうです。危ないです」

レイラも止めにはいる。

しかし、

「止めないで」

紺が細くなつた。見えるのは怒り。

千里もレイラも反射的に一歩退く。そして、開いた道を彼女は一歩一歩足を進めた。

「うっん、止めるよ。杏ちゃん、どうしたの？」

そんな彼女の前に一人。琉雨だ。

「どうもしないよ。お話してくるの。危なくないよ」

「嘘ついてる。杏ちゃん、嘘下手だよ。どうしたの？」

決して互いに譲ろうとしない。そこで先に手を出したのは遊杏だった。一瞬で構成された魔法陣が部屋全体に敷き詰められた。

「――」

「？」

緊縛調律。

どわっ。

最初、レイラに異変が起きた。

「レイラ…さん!？」

千里がレイラを抱き支える。

「っ!？魔力が」

しかし、その千里も力の抜けた体で、それでもどうにか立っている状態だ。

魔力が消えている。

彼の見開いた目は遊杏に向けられた。

「遊杏…ちゃん…これは!！？」

「邪魔しないで」

……………。

「いや、やだ…あ、ああ…ああ…や…あ…いや…あ…」

そこに上がる悲鳴。振り子時計が鐘を打った時、少女が倒れた。

遊杏はその声に後ろを向いた。琉雨がその場に踞っている。

緊縛調律は発動者と対象者の魔力を魔力の少ない者に合わせて消し去る魔法。ただそれだけだ。魔力が力が消えるだけではここまで動揺しない。しかし、今の琉雨は明らかに変だ。

「やめて…あ…殺さないで…あ…だん…な…さま…いや…あ…いや…いやああ!?!?!?!」

「うーちゃん!？なんで!？」

—解—

受話器から盛れる紫水の声。緊縛調律が解かれる。

遊杏は崩れる琉雨を抱き締めた。

「うーちゃん!」

「琉雨ちゃん!!」

意識を失ったレイラをソファーに寝かした千里は琉雨に駆け寄る。

彼女はぐったりして呼吸が浅いが、気絶したようだ。そんなつもりじゃなかったのにと遊杏は狼狽える。ただ、反対する琉雨を傷つけ

たくなかった。

「一体何が―」

残り少ない魔力で立つ千里はふらふらだ。
と…。

―では、皆…お休み―

紫水の声。

「せーちゃん!」

遊杏の横で千里が倒れた。もう分けが分からない。

「何を!？」

受話器に飛び付いた遊杏。

―何言ってるんだい？寝かせたのさ。ほら、これで誰も邪魔しない。交渉だろう?―

遊杏お嬢様。

そして、彼の声が受話器を通してリビングに不気味に響いた。

生きる代償（5）

狼の髪は温かい感じがする。柔らかくって…。

鈍い金は光り輝く宝石から見れば用なしかもしれない。でも、鈍くていいと思う。鈍いぐらいが傍にいて居心地がいい。

薄く換気の為に開けた窓から冷たい風が入る。狼にはあつた毛布と借りてきた毛布を全て掛けたから大丈夫だろう。ちよつと重そうにしているが。

「狼…歌…歌えるかな」

何となく歌えそうな気がする…。何でだろ。眠る横顔を眺めていたら、ふと思った。内に眠る記憶のせいかな。

俺は裸足が冷えたので、窓を閉めることにした。

窓から見えるのは墓場だ。

高いこの建物と他の建物に囲まれた小さな空地のような場所に黒くなった石片がぼつぼつと並ぶ。

そこに…。

「陽季はなせは？」

「陽坊？あー、あの餓鬼は……あー、迷子だな」

「バカ弟！！方向音痴なんだから見ときなさいって！」

「いてえよ！蘭」

なんだか賑やかだ。あの花の溢れているお墓の人は幸せなんだろうな。

それにしても…。

「はるき…いい名前」

陽季、どこにいるの？

「あれ？どこ…に？」

狼、起きたんだ。

「外。いいかな？」

「どうして？」

どうしてだろう？でも、ちょっとだけ…。

「会いたい…から。大切な人に」

俺が言くと、頬が少し紅い狼が微笑んだ。あつたかい…笑み。

そして、ゆつくりと体を起こす。

「だめだよ！もう少し寝てなきゃ！俺の世話もしてくれて…熱が…」

「大丈夫。僕はね、強いんだ」

俺の制止も聞かずに毛布から細い足首を見せて立ち上がると、ふらふらと歩みを進め、俺は倒れかけた狼を支えた。それでも、額の熱は昨夜より下がっている。

「狼、俺が傍にいるから休んで。今日一日は狼、お休みの日だから」

「ううん。ね、君は会いに行くんだ。大切な人に。行っておいで。」

僕はただ、君に…悔いは残しちゃいけないと…言いたいんだ」

「悔い？」

「会いたいなら、会いにいつて。僕は…もう少し寝たら清せいを探しに行くよ」

行つてらっしゃい。

「あまり遠くに行っちゃだめよ」と、炎えんに貰ったお小遣いを持って俺は外に出た。

「なんでだろう…来たことある気がする」

花街に来たことあるなんて感じてるって…浮気になるのかな、陽季。さて、どこに行こう。右も左も酔った男と女、人買いだらけ。でも、俺はどんなにこの現実が厭でも、この掟に従うしかない。それは美樹浩みきひろさんの言うとおりなら、俺もこのこと同じように他の花街で掟に従っていたのだ。違うとしても、騒ぎを起こして館の皆に迷惑を掛けたくない。

「えっと…」

裏手の墓には…。

「双蘭ふたらん！？って…なんだよ。知らない人か」
絹糸のような白銀の髪。

黒曜石の漆黒の瞳。

同じ黒の着物には点描で描かれた薄桃の蝶。それは儚く、今にも黒地に埋もれてしまいそうだった。

多分、少年を見たとき、俺は…―

「生意気…」

上目遣いなど、こちらは睨み付けられているようにしか見えない。もの凄くプライドが高そうだ。

「生意気とは失礼な男だな！ここは何処だよ！」
見れば分かると思うんだけど…ここ、墓場でしょ。

「ここはお墓」

沢山の命の眠る場所。殆どがきつと、もう親族がいなか、忘れられているか。少年が今まで向かっていたその墓だけが花に溢れ、周囲の雑草も抜かれている。

あれ？そういえば、この子はもしかして…。

「ねえ、君ははるき君？」

びくりと肩を揺らした。明らかな反応だ。どうやら俺は、迷子の迷子のはるき君を発見したらしい。

「なんで知っているのさ！」

「さっきまでいた人が探してたよ」

「ホント！？どこ！！」

「さあ……」

そこまで俺に期待しないで欲しいな。

俺が知らないと分かると、はるきはわざとらしく舌打ちをして足元の小石を蹴った。その石が近くの墓石にぶつかる。

「こら、はるき君、ダメだよ」

縁起が悪い。祟られちゃうよ。

「煩い！てか、はるき君とか馴れ馴れしい！」

怖いよ……陽季。同じ“はるき”なのに全然違うよ。ここに野郎がいるよ。

「ごめんなさい……」

「っ……まじで取るなよ。いいよ、別に……知らないならそれで。は……はるき君は厭だけど」

いいの？

「は……るき」

「そんなにオドオドすんなよ……」

え！？ホントにいいの！！

「はるきっ！はーるーきっ！」

もっと呼びたい。

“はるき”

「はるき、はるき、可愛いはるき、はるきっ！はーるーきい……」

「流石にやめろよ……！！」

はるきは跳ね飛んで俺の頭を叩いた。あ、慣れた匂いがふわりと。いい匂いだ。

「ねえ、ねえ、迷子でしょ？」

「迷子じゃない！」

「ねえ、一緒に探してあげるよ」

迷子の迷子のはるき、俺も迷子なんだ。陽季に会いたいんだ。

俺ははるきの手を握って適当に歩く。なんだか騒がしいが、無視して花街を抜けることにした。

「なあ、いくらだ？」

はい？

声を掛けたのは誰かと思えば、はるきの手を掴んでいない手を握られる。そして、そのまま引き寄せられた。

「はいっ！？」

「なあ、お前はいくらだ？」

何？この人？

おじさん、酔ってる？

おじさんは真っ赤な頬を俺の手の甲に擦り付けて…きもい！

「やだっ！放せよ！」

「少しだけ。望む分考慮するぞ？」

汚らしい肥えた手は俺を放さない。周りを見渡すが、見ぬ振り、逆に見世物にする人しかない。

どうして？

俺、厭だよ。

「放せっ！」

「いいだろう？」

人の話を聞けよ！

「放せ、変態！！！！！！！」

「いいかげんにしろ！どうせ、飼われものなんだろ！！！！！！！」

黙れ。

「お、静かになったな。やりたいのдар？」

黙れ。

「みな同じだ。お前もそういう奴なんだ」

「黙れ！！！！！！」

多分、俺の魔力の制限が効かなくなっただんだと思う。一瞬意識がなくなっただと思っただら、男は消え、俺の足元が焦げていた。

そして、

「はるき？」

「何してんだよ、バカ」

よく分かんないが、はるきが俺を引き摺っていた。ぺたぺたと草履が鳴っている。銀髪が揺れていて…。

「はるき…俺…殺した？」

「殺してないよ。んな簡単に目の前で殺人が起きてたまるか。あんたを掴んでた手がやけどしてさ、飛んで逃げた。ま、あと少し逃げ遅れていたら、なんか突然現れた虎に食われてたよ」

虎？

「あんた…魔法使いなんだな」

「？」

嫌われたかな。魔法使いはみんな嫌うんだ。どうしてだっけ？

茶屋前のベンチで二人で並んで座っていた時だった。随分ぼーっとしていたが、俺ははるきの手を放していなかったようだ。そして、その手は赤い。

「はるき！？この手っ…」

やけどだ。

まさか俺が傷つけた？

「はいはい。罪悪に浸るのはやめろよ？泣くのもな。めんどいはるきは俺の手を払って、その手を振袖に隠した。」

「でも…」

その傷は俺がさっきつけたに違いない。俺はまた覚えていない。

人を愛していたことも。

人を傷つけたことも。

本当に都合のいい記憶だ。

「――聞いてたのか？おい、って！」

頬に鋭い痛みとはるきの声。俺に平手打ちをしたらしいはるきが茶屋で買ったらしい肉まんに齧り付きながら見上げてくる。また、俺は放心していたのだろうか。

「お前なあ……名前、何だっけ？」

名前？

「お前が花街この住人で魔法使いなのは分かったって。でさ、俺はそんなことよりも、俺の仲間探すって意気込んでたお前の名前が何か知りたいんだけど」

名前は……

「俺……記憶が……」

記憶が？

「今までのこと……なんにも」

なんにも？

「俺、流浪舞団『月華鈴』で、扇舞を得意にしてる」

はるきは真っ直ぐ、夕に伸びた自らの影を見詰めて言う。

「凄いいね。舞妓さんなんだ」

「でも、俺はそんなのどうでもいいと思う。舞妓ってなんか確かに凄そうだろ？でもさ、俺はちっちゃい時に親なくした孤児だし。それで、可哀想になってわけじゃない」

はるきは立ち上がった。そして、橙の空を背に逆光の奥の漆黒で俺をじっと見下ろす。綺麗な目だ。

「俺、陽季。セロリが嫌いで、蜜柑は大好き。何事にも一生懸命で、でも、めんどくさがり。お前みたいなばーつとしてるの見てるとほっとけない質っぽい。それで、恋愛には案外一途なんだぞ。自信だけはああるけど、初恋がまだだから。お前は？」

俺は…。

「俺……………「いじぎ 洗祈。き よろしく、はるき」

「ああ、よろしくな。こづき」

この小さな手を握って大切な人のところに行かなきゃ。

生きる代償（6）

俺が部屋に入ると直ぐに狼は安堵の表情をし、「炎に探すの止められた」と苦笑いした。多分、少しでも早く俺に言いたかったのだろう。まだ諦めたくないからこそ、俺を見てその使命を忘れないために。

「外、どうだった？」

「迷子の男の子の家族と一緒に探したよ」

「迷子の男の子！？清…なら分かるよね…」

俺が手を窓際に座る狼の額に乗せれば、明日には完全に治りそうだと。

「うん。その子、可愛かった」

「……清が世界一可愛いんだ」

清はきつと喜ぶよ。“可愛い”にじゃなくて“世界一”にだらうけど。

「で？見つかったの？」

「その子の希望で茶屋の肉まん巡りしてたら、あっちから見付けてくれたんだ」

「茶屋で肉まん……。まあ、見つかったんなら良かったね」

白い頬を女の人に平手打ちされ、男の人には抱き締められてた。そのスキンシップに嫌がってるようだったけど、家族が見つかって嬉しそうだった。

だからね、狼。

「きつと見つかるよ」

「何が？」

「清はきつと見つかる。だって、狼は清が大好きで、清は狼が大好きだから」

俺が自信満々に言うと、彼は微笑み、直ぐにその笑顔に影を落としたり。紺が黒に変わる。

「狼？」

「清も…好き…ならいいのに。こんな僕を…」

そんなことを心配していたのか。

「好きだよ」

「あなたは…清じゃない」

何度目かの言葉。

そう、俺は清じゃない。俺の中に清はいない。

でも、

清は俺だ。

俺は狼が好きだから。

狼を失いたくないから。

だから、清は狼が好きで、狼を失いたくないはずだ。

清、お前は狼が好きだろう？

「なら、俺は狼が好き。でも、思うんだけど、狼を好きにならない人なんていないと思う。自信を持って」

「ホントに…変な人」

はにかみ屋さんは「もう少し寝る」と、布団に潜った。

「狼！お前、クスリやられたんだろ！？大丈夫か？」

「今はね」

狼に連れられて食堂に行った時だ。

前に来た時はがらんとしていた食堂だが、笑顔の灰^{かい}さんは賑やかなそこから俺達を見付けて手を振った。俺もパイがとても美味しかったことを兼ねて手を振り返そうと思ったら、1人の少年に視界を遮られた。

何故、一応、自然の摂理として一般の少年達より3つ頭分以上は背の高い俺の視界が遮られたかって？

当然、高かったからであって…。

まあ、少年がテーブルに立っていたということだ。
で、さっきの会話に戻るわけ。

「で？誰？」

人を指差しちゃいけないよ。その理由は分かんないけど。

俺の予想通りの一言に、周囲の少年、少女、猫が俺を一齐に向く。
猫？

俺はシンと静まった食堂で狼が無言なので、俺自身が自己紹介しなければいけないようだ。

「えーっと…俺は―」

「にーっ！」

と、あれはクリーム色のツインテール美少女が…。

「ユアナ、走ると危ない…―」

狼がその美少女を保護するより前に美少女の肩がテーブルにぶつかった。テーブルが揺れ、少年が…。

「ユアナっ！！！！？」

ぐらりと傾く少年。

俺はこの場の大人として抱き止めた。

あ…抹香の匂いだ。

「あーもう。ユアナ、錯^{さく}が危なかったろ？」

「ご飯食べるここに立ってるさーちゃんが悪いんだよ！」

「はいはい。でも、ご飯食べる所で走るのも悪いことだからね」

「むーっ…にーを心配したボクちゃんの優しさを評価して欲しいよ」
ツインの髪が所々跳ねている美少女は…にしても…。

「可愛い…」

「お前、ロリコンか？」

「え？何？錯君」

錯君が俺の腕の中でもがいていた。

「放すんだ」

「え？…あ、ごめんね」

錯君を放すと錯君は俺から離れると思いきや、鼻を鳴らして俺にへ

ぱりつく。

「何？」

「この匂い……」

「くうちゃんの匂い！」

くうちゃん……？

ユアナが狼に無理矢理抱っこしてもらいながら、俺を指差して叫んだ。だから、無闇に人を指差しちゃいけないよ。

しかし、その言葉と共に、部屋内が一気に静まる。

一体、何の地雷だ？

「ユアナ、くうちゃんじゃない。清だろ？」

錯君が俺の手を握ってユアナから俺を離れた。

「そうだよ、ユアナ。洸祈^{ホウキ}は君の夢の中の人物だ」

「にーまで否定するの？この匂いはくうちゃんのなのに！」

ユアナは叫ぶ。

辺りが騒がしくなってきた。1人が「先生を呼ばなきゃ」と囁くのが聞こえる。

「ユアナはおかしいんだよ。頭が少し」

錯君は俺に耳打ちした。

「ボクチャンはおかしくない！くうちゃんは忘れたの！？氷羽^{ひわ}のこ
と忘れたの！？くうちゃんだけは信じてると思ってた！」

俺達の小話をする姿を見たユアナは益々騒ぎ立てる。狼はこの声は
手に付けられないと、彼女をどうにか押さえることしか出来なかつ
た。

「くうちゃんだけは氷羽を信じてると思ってた！氷羽を返して！返
してよ……！」

氷羽は俺の友達だ。

俺は氷羽を……信じていた。

確かに信じてはいたし、あの時を除けば、今も信じている。

“あの時”って何だろう……？

「ユアナ！」

この声は…。

「エリー！」

炎は普段のチェックのスカートをやめて、細身を強調するジーンズだ。彼女のカチューシャから垂れる布がひらひらと揺れた。

「勝手に出歩いて…。美樹^{みきひろ}浩が言っただけでしょう？あまりはしゃぐなって」

「それはお日様のお昼だもん。それにただ、ボクチャンは皆と一緒にご飯食べにきたただだよ」

「もう…」

「分かったよ。お部屋に帰る」
踵を返す少女。

隣で俺の手を強く握っていた錯君の溜め息に俺の溜め息が混じる。それは明らかに得体の知れない恐怖からの解放による安心感からきているのは分かっていた。

何となく、少女の話は聞いていたくなかった。

しかし、美少女はくると振り返った。

ツインテールをほどき、長い髪を所々跳ね散らかした姿は誰かに似ている気がした。

「くうちゃん、確かに今までの原因は氷羽があなたを最後まで信じなかったからだよ」

今までの原因？一体、何の話だろう？

「じゃあ、今は？くうちゃんがここにいて、これは本当に最後のチャンスなんだ。なのに、今まで氷羽を信じていたあなたが氷羽を信じられなくなった。これはあなたがヒトになったから？」

俺はヒトだ。“なる”とかじゃなくて、元からヒトの子として生まれたんだ。

「ねえ…氷羽を助けて。今のあなたならヒトであつた氷羽の苦しみが分かるはずだよ」

ヒトであつた？

氷羽は友達で…友達で…なんなんだ？氷羽がヒトではなければ何？

「氷羽を信じて…そして、氷羽の願いを叶えて。そうじゃないと…アークに食われるよ」

分らない。俺には氷羽という友達がいたことしか……。友達がいた？

まだ、分からないことが沢山ある。まだ、記憶が戻りきっていない。「ボクチャンはあなた達が幸せになる過去がみたい。アークに人形として操られて無理矢理作りだされた終わりじゃなくて。くうちゃん、友達と喧嘩した時、どうすればいいって知ってる？」

そんなの…。

「仲直りする」

謝って、語り合えばいい。

美少女が満面の笑みを漏らした。

「うん。まだ、仲直りできる時間はあるよ」

そして、炎と食堂を出ていった。

「狼…あの子は…」

自己紹介はうやむやなまま、食堂の片隅に座らせてもらった俺は、一気に気分が悪くなったらしく、目の前でテーブルに突っ伏す狼を見た。

「ユアナ。炎の妹。過去の夢を見るんだと。カミサマだの洸祈だの氷羽だの嘘っぽいけど」

答えそうにもない狼に変わって、隣の錯君が答えてくれる。

「へえ」

「にしても…清はどこに消えたんだか…って」

やばっと自らの口を押さえた錯君は狼を見て、肩を竦めた。

「お前は清の仕事中にいつの間にか入れ替わってたんだろ？」

「うん」

「で、お前はまあ、清にそっくりだな。でかいけど
どうも。」

「お前は泣き虫？」

「違うけど……」

「お前はなんだっけ？ああゆづの……えっと、自己犠牲派？」

「多分、違う……と、思う」

自己を犠牲にしたら、そこで終わってしまうではないか。その後、
誰が俺の大切な人を守るといふのだ。

「セックスは好き？」

錯君は平然と質問を続けた。

「セックス？」

「うん」

それは……何と答えよう。

「好きな人となら」

陽季はるきとなら、俺はいい。

「じゃあ、違うな」

「違う？」

「清は泣き虫だし、自己犠牲派だし、セックスは嫌いだし……好き
な人……いねえもん」

清って好きな人いないの？

「狼は？」

「狼は兄貴だよ。な？狼」

話を振られた狼はゆっくりと体を起こした。

紺色がじつと俺を見詰める。そして、その無表情を崩して微笑した。

「そ、僕は清のお兄ちゃん。だから、兄弟愛はあるよ」

「ほら、清は好きな人との出会い以前にそういう概念ってやつがな
いんだよ」

それって凄く悲しくない？

狼、清が嫌い？好きじゃない？

「僕は先に部屋に帰るよ。あなたは遠慮せずに食べてて。錯、この人はどこか抜けてるから世話を宜しく」

狼は席を立つと、この話から逃げるように俺達に背を向けた。

その時、俺は狼の着物が黒なのに気付いた。

真っ黒なそこには……

「籠の鳥……」

「ん？ああ……あの着物が」

「何なの？」

「あれ、あいつがここ来た時に着てたもん」

「そう……なんだ」

「あいつの趣味って変だよな。普通、あんな暗いのって葬式に着るもんだろ。あいつ、いつでも喪してるわけでもないのにな。ある意味、服装でいえば、白を好む清と対象的」

「いつも……何かを喪ってる……のかな……」

「さあ。でも、父親に売られたあいつに喪うもんなんかあるのか？」

「父親に？」

「父親って言うてたぜ？大体の親に売られたやつは親憎んで、ここで金稼いで見返してやるってんのに、ホント、変な奴」

「そうなんだ……」

全くこの状況には関係ないというのに、俺は何となく、その後ろ姿に寂しくなった。

生きる代償（7）

「狼…ごめん」

暗いままの部屋では狼が窓枠に座って三日月を見上げていた。

「なんであなたが謝るの？」

狼は月夜を見詰めて身動き一つしない。

「だって…」

だって、そうやってそっぽ向いてるなんて怒ってるようにしか見えないじゃん。

「ねえ、あなたには好きな人がいるんだよね？」

開いた窓から吹く風を頬に受け、目を閉じた狼は俺に尋ねる。

「いるよ」

陽季が。

「じゃあさ、愛って何なのかな？」

「愛？」

「うん」

頷いた狼はその無い表情を俺に向けた。

「教えてよ」

教えてと言われても…。

「僕には…何もないんだ。思い出も何もかも」

「狼は…お父さんに捨てられたから？」

「？あ…あれ。錯から聞いた？」

「うん」

秘密にしといた方が良かったのかな。

「僕は父さんに捨てられたらしいよ」

「らしい？」

「記憶がない。炎は僕を拾った。父さんに捨てられた僕を捨てられ

たなら誰が拾ってもいいでしょって僕を拾い、ここに連れ帰った」

狼は「炎って変人だよ」と微かに笑ったように見えた。それは彼女を嘲笑っているようでもなく、自らを嘲笑っているようでもなく、拾ってくれた炎の優しさに戸惑ったような顔をしていた。

何故、彼女が拾ったのか分からない。

店子が無償で手に入るからか？

だからといって、死にかけてぼろぼろの餓鬼を拾うものだろうか？

寧ろ、死んだときの面倒が厄介だ。

悪い噂も立つかもしれない。

拾わないほうが明らかに得なのだ。

何故、拾った？

分からない。

狼は何故かどうしても彼女の思いを知ろうとはしていなかった。俺には狼が何となく、敵を作り、自らは敵から清^{せい}を守るナイトになるうと意地になっているように見えた。

「何も無い僕に生きる価値を教えてよ。僕は…分からないんだ。生きなくていい理由なら幾つでも挙げられる。でも、生きる理由は無い」

でも、唯一挙げてもいいものがあるはずだ。

「清は？」

君は清を友達でも兄弟でもない、もっと、重い何かで見ている。

「清は……本当にどこに行ったんだろう…。僕…清も失ったのかな…うつん…最初から…清は僕を……」

唐突だった。

狼が俺に全体重を掛け、押し倒すと、俺を見下ろした。小さな顔が、細い腕が、俺を縛り付ける。

「教えて…あなたは何故生きているの？教えてよ」

俺の生きている理由…。

「それは…」

それは？

何かあるんだ。

陽季が好き。

だから？

俺はまだ、会えていない。もう…会えないかもしれない。でも……。

「……………氷羽^{ひわ}」

どうしてだろう。

氷羽は友達で？俺は…そいつを……………失った？

「氷羽？…そう…あなたも…」

俯いた狼が俺から離れ、再び立ち上がった。そして、うろつろと部屋の中を彷徨う。

その開かれ、垂れた手がゆっくりと力なく握られた。

「狼？」

「ねえ、洗^う祈^き、僕と友達になつて」

「洗^う祈^きつて—」

「あなたが全てを失っても僕がいるから。だから、僕が全てを…」

腕に収まった狼の紺の瞳が揺れてる。紺色の綺麗なあの子と同じ紺。

あの子と同じ……杏？

「友達…に？俺と？」

「うん」

「なら、もし…俺が狼の大切なもの壊したらどうする？」

狼が首を傾げた。そして、暫く沈黙を保つと…。

「直すよ」

透き通った声音。

「それでも、夢は医者なんだ。それで、清を僕が守るんだ」

純粹な狼が見えた気がした。

でも、それは間違っている。壊れたらもう元には戻らないんだよ。

「駄目。先に俺を怒らないと。ね？」

「どうして？あなたはわざと壊す気？」

「そしたら？」

友達、やめよう。って言うんだ。

「一回、思いつきり殴らせてくれたら許す。それで、また、友達になつてよ。洸祈」

「大切なものはいいの？」

「僕は言つただろう？直すつて。僕は、ヒトはそれを守るくらい強くなつてから、大切なものを作るべきだと思うから。守れないものには心を寄せちゃいけない。それでも守りたいなら、強くなれ」

その時の狼の笑顔が知っている誰かに重なった。

大切な大切な人に……

蓮^{れん}？

「いつてらつしやい」

「いつてきます」

「いつかまた」

「いつかまた………絶対に」

「母さん」

母さんの愛した葵の花。

「墓参りに葵？普通、置いてないわよ」と、花屋の店主はぶつくさ言っていたが、それでも、沢山の葵を用意してくれた。

一つ行動を取る度に頬を優しく撫でて、青の花弁は空へと舞い上がる。

「母さんの灰は母さんの生まれ故郷の谷だけど…父さんと葵^{あおい}とで作ったここにもいると信じてる。男三人で不器用な家族だけど晴^{せい}滋^じさんや真^ま奈^なさんがいるから大丈夫だよ。驚いてるでしょ？俺、こんなにでかいんだもん…その…あのさ…母さん、きつともつと驚くだろうけど…俺、男が好きなんだ…ただ闇雲にじゃなくて…好きなんだ。陽季が好きなんだ。愛してる。変人かな。でも、好きだから…愛してるから…。母さんは分かっていると思うけど…俺は…沢山の人と寝たよ。臆病だから逃げられなくて…契約に縛られて…」

俺の最低な姿を母さんは見ていたはずだ。

「ねえ、本気で愛せる人を見付けたんだ。俺、絶対は言えない。だけど、傍にいたい。どんなに辛くても一緒にいたいって思えるんだ。俺に残された時間は少ないけど…俺があげられるものは少ないけど…陽季にあげられるものを全部あげられたら俺、こんなに長く生きられて幸せだったって…笑って…逝けるから」

狼がまたね。と、笑って送り出してくれた。炎も二階から俺を見下ろしていた。

みんな、優しかった。

俺は、俺の知っている“みんな”に会いたい。

駄目だ。止まらない。

「母さん…死にたくない。死にたくないよ！！…もつと皆の傍にいたいよ！！！！」

無様だけど、ただ、みんなに会いたい。みんなにありがとうを言いたい。

涙が溢れて止まらない。

葵の花に涙が落ちた。

「まだ皆にお礼してないんだ！！今この瞬間も頭が割れそうに痛い。喉が熱い。手足が震える。怖いよ！！！！！！」

誰か助けて。

母さん、胸が苦しいんだ。

何にもないのに頭がパンクしそうなんだ。早く楽になりたいけど、まだやりたいことがあるんだ。

「洸祈？」

..... 父さん？

若かりしころの慎しんが花束を抱えて立っていた。
葵の花束を...

「あつ... その... 俺、帰ります」

慌てて涙を拭うと洸祈は後退った。また、花弁が空へと舞い上がる。

「居てくれて構わない」

たかやん
崇弥林の字を撫でた慎は葵の花束をそつと墓石の前に置いた。洸祈の足がぴたりと止まる。

「君は林の友人かい？」

.....。

崇弥林は母さんです。とは言えない。洸祈は言葉に詰まって立ち尽くす。

「言い方を変えて、林の墓参りかい？」

こくり。

「なら、こっちだ」

慎は洸祈の腕を引いた。慎の懐かしい匂いが胸一杯に広がる。父さんと言いたくなるのをどうにか堪えて林の墓前に葵を置いた。

「俺達は似た者同士だな」

「葵？」

「ああ」

だってそれは…

「林の大好きな花」

そう、弟の名前。

「君が林とどういう関係かは分からないが、俺と林の間に双子が生まれたんだ。兄貴の方を洸祈。弟の方を葵。林が名付けたんだ。葵の方は蒼い瞳と好きな花から。洸祈の方は――」

いつか聞いたかったこと。

葵の名前の由来は分かる。俺の名前の由来は？

「分からないんだよなあ。林はこの子は洸祈。いい？そう訊いてきた」

分からない。適當？

「ただ…祈りの子だって。この子はきつと大変な思いをするかもしれない。だから、そんな時、この名前を良く考えてくれたらいいな
って」

洸祈。

「慎には多分、分からないだろうけど、洸祈はきつと分かる。だと昔っから林は不思議ちゃんて騒がれてたからなあ。俺には母ちゃんだったけど」
と…。

「あ、ごめんな。林に叱られる夢見そうだ。林が怒るのは怖いけど会いたい」

俺も会いたい。こんなに素敵な名前をくれたのだから。

「質問してもいいですか？」

洸祈は父の顔を見詰める。

「なんだい？」

「男を好きになるってどう思いますか？」

慎から出た答えはとても短いものだった。

「好きならいい」

手のひらが洸祈の頬を優しく包み込む。

「生物学上子供は無理だ。それでもいいかい？」

そんなの…。

「いい…です。俺は好きだから。愛してるから」

「男同士だからどうした。女同士だからどうした。好きなんだろう？愛してるんだろう？愛情のない結婚をする人達よりすごく幸せじゃないか」

洸祈は慎の胸に勢い良く飛び込んでいた。慎はうおっと驚いていたが、やがてよしよしと背中を撫でてくる。

「俺、すごく幸せだ。本当にありがとう。崇弥林さん、崇弥慎さん、俺、最後まで諦めないから」

「ちよっ…君は—！？」

「あ…」

慎の伸ばされた腕を避けて丘を洸祈は走る。

「名前…言っていないのに」

慎は茫然と立っていた。

生きる代償（8）

「館だ」

清の手を引く二之宮は足を止めた。

「清？」

ずりつと清は後退る。

「や…だ…」

二之宮の手を彼は小さなもう片手で外そうとするが…。

「帰るんだろっ？」

力を込めた二之宮の手はビクともしない。そこで初めて清の表情に二之宮に対する恐怖が現れた。

「やだ…放して…！」

「今更なんだい？清、君の家はここだよ」

「違う……お母さんとお父さんのとこ……」

手のひらは葵の服を掴む。葵はどうしようもできなくて口を閉じた。

「じゃあ、お母さんが中へ行けば一緒に行くんだね」

二之宮は容赦がない。

ここで清を返さなければ洗祈がどうなるか分からない。

二之宮は葵に目で連れてくるよう合図をする。

「蓮さん…清は……」

緋の瞳は葵を見上げて涙を溜める。

「確かに清は洗祈だよ。だけどね、今、過去を変えたら、その先は

誰にも分からない。洗祈はもっと辛い目に遭っているかもしれない。

もしかしたら、君の前にもう現れないかもしれないんだよ？」

「だけど……俺は清が洗祈だと知ってこんなとこに帰したくない！」

ヒュッ

風を切った指先は葵の額すれすれで止まった。

「忘れたわけじゃないだろう？君はここへ何しに来たんだ？」
葵は息を詰める。

「足手まといは失せろ」

「……………っ！！！！」

二之宮の言う通りだが、素直に納得はできない。しかし、言い返せない葵は黙るしかない。

「崇弥^{たかや}がべた褒めする頭脳明晰な弟が聞いて呆れる。感情だけじゃ解決できないものもあるんだ。清は帰さなきゃいけない」

二之宮は清を無理矢理、葵から引き剥がし、抱き上げた。

「やだ！やだやだやだ！！お母さん！お母さん！！」

清と言う名の洗祈は葵に必死に手を伸ばす。

呉^{くれ}は見ていられなくて顔を背けた。

「お母さん！！」

清は叫ぶ。

「清から離れろ！！！！！！！！」

何かが二之宮の背中にぶつかった。反動でよろけた二之宮を条件反射で葵が支える。

「ありがとう」

お礼を言った二之宮は自力で立とうとするが、葵が掴んだままできなない。

「葵君、もう…………？」

見上げた葵は二之宮の肩越しから何かを見詰めて啞然としている。在り得ないものを見たかのような、そんな顔。

「どうしたんだい？」

葵の向く先には……

「狼！」

誰が見てもわかる。それは、両目の色が互いに違うオッド・アイを持つ二之宮の幼い頃の姿だ。

「よくも清を誘拐してくれたね。今すぐ清を返せ」

二之宮はビクリと肩を震わせて、狼に背を向けたまま動かない。

「この子……？」

「蓮さんですね」

漆黒の着物を纏う狼を、呉は動じずに見詰めて葵の疑問に答える。

「狼っ！」

「君は……ホントに……」

清は二之宮に捕まっていることを忘れて、彼の震える肩越しに楽しそうに笑う。狼は嘆息すると、自らの乱れた着物を直して清を見た。その顔には明らかな安堵の表情。そして、友達を見ているのとはまた違った、愛情の籠った目。

「離して」

狼に出会えて力を貰ったのか、清は二之宮に訴える。清が館に帰ることが本来の目的である二之宮は白くなつた唇を強く噛んでから、そつと清を地面に降ろした。

「狼！」

清は一目散に両腕を広げる狼に向かって駆けた。小さな体が狼の胸に押し付けられる。

「清、心配した」

二之宮は動かない。

そんな彼の背中で、二人はさも当然のように口付けを交わした。

「もう勝手にいなくなるなよ」

「うん。狼、大好き」

ただのキスなのに、見るものにじわじわと興奮を与えてくる。二人の内から出る気に、葵は息を呑んだ。

清は間違いなく、男娼だ。

そして、陽季はるきとの関係を知る葵は呉の視界を隠した。

「葵兄ちゃん？」

「呉、お前は何も知らなくていい」

知ってはいけない。知っているのは清の関係者と弟の自分だけだいいい。

葵はこの時、洸祈が今の今まで――否、死んだとしても――過去を話そうとはしない理由が分かった。

「蓮さん、あなたは……」

残りの問題は狼……二之宮蓮だ。

葵は少年二人に背を向けたままの二之宮を見た。
はあ……。

呆れでは無い溜め息を吐いた二之宮が位置を変える。絡ませていた舌を離れた狼が清をより強く抱いて、二之宮を睨目上げた。

「やあ、狼」

「あんた……誰だよ」

狼が自らにそっくりの二之宮をじっと観察する。

「あいつは何処にいる？」

「あいつ？」

質問はお断りと言うように、二之宮は自分の言いたいことだけを言った。

少しでもできることなら狼とは話したくない。彼の言葉は感情が失せたように平坦だった。

「清にそつくりの奴」

「厭だね」

狼はきっぱり返した。これはこれで、洗祈がここに居たことが分かった。

「は？」

二之宮は聞き返す。

「そいつは帰らない」

「何を……」

「清と同じ目をしていた。僕はあいつを護る」

紺の瞳が交差する。同じ顔で同じ表情なのに、葵には二人は決定的に違うように見えた。

「館のお前に何が護るだ」

二之宮は小さな自らに容赦はしない。狼の未来を知るからこそ、二之宮は過去に辛くあたる。

清と離れる未来をしろからこそ……。

だがしかし、狼は少しも動じなかった。

「あそこまでぼろぼろにしといてよく言っな!!!!!!!!!! 帰れ!!!!!!!!!!」

ぼろぼろ……

二之宮は口を閉じた。

言葉に詰まっている。

言い換えれば、

返す言葉がない。

「狼！喧嘩は駄目だよ！」

清が二人の間に割り込んだ。沈黙していた葵と呉の意識が戻る。

「お前はいいから、部屋で休め」

狼は唯一の弱点を背中に隠し、館に帰るよう言った。しかし、清は狼の手から逃れると、二之宮の手を握った。

「清！」

「狼、ダメ。蓮お兄ちゃんは俺を狼のどこまで連れてってくれたんだよ？蓮お兄ちゃんのこと、怒らないで」

「だけどっ！」

「狼！！」

清が叫んだ。

狼が黙る。

「ゆーがね、俺にそっくりの人を探してる。蓮お兄ちゃんが言うのもその人でしょ？」

「あ…ああ」

「狼、教えてあげてよ。俺に似てるならその人、待ってると思う。きっと、会いたがってると思う」

清は狼の手を握り、もう片手で握っていた二之宮の手と一緒にして胸に抱えた。

「狼、蓮お兄ちゃん、仲直りしよう？」

「……」

狼は無言。

「……」

二之宮は無言。

「俺…二人ともが大好きなのに、その二人が互いが大嫌いって…」
ぽたり…

涙が二人の手に落ちた。

『あ！泣くな、清！』

その言葉が重なる。

「二人とも分からず屋、意地っ張り、アホっ」
ぽたっ…ぽたっ…

もう直ぐ、嗚咽が大号泣に変わるだろう。

目を合わせた狼と二之宮は呆れの溜め息をつくと……

『仲直り……したよ』

二人して、中心にいるお姫様の頬に接吻した。

「あいつなら自分の故郷に行った。母親の墓参りするって」

狼は泣き疲れて眠った清をおんぶしながら答えた。

「谷……ってことは記憶が……ある？」

葵は首を傾げる。二之宮はその指摘に頷くと、葵の顔を見、嘆息した。

「そのようだね、って……」

「？」

美青年の二之宮に睨まれ、彼の厳しい言動を思い出して、葵は肩を竦める。

「な……んですか？」

「新幹線に乗る前に準備しないといけないみたいだね」

「蓮さん？葵兄ちゃんがどうしましたか？……あ……」

呉が腕を組む二之宮の横からすつと小柄な体を覗かせて葵を見上げた。そして、ごくりと喉を鳴らした濡れた瞳の葵を見上げて同じように嘆息する。

「何！？」

「ホントにさ、マジで倒れられると困るんだ」

「へ？」

「いい、君。今、顔がありえないくらい真っ赤」

真っ赤？

葵が両手を頬に当てる。そして、そうかな。とぼけつとする。

「全然熱くないけど？」

「葵兄ちゃんの手も真っ赤だからですよ」

葵は自分の手を見ると、にこにこ引きつった笑みを見せた。

「谷までは俺の案内がないと、いけないだろ？」

それにしても、遠回しな反抗。

「自信満々に言わないで欲しいな。双子は似るんだね」

「それは嫌味か？」

「嫌味じゃないよ」

二之宮は手を振って話を終わらせると、首を長くしかけていた狼に向き直り、姿勢を正す。

「とても身近で知り尽くしている超厭な奴にお礼はしたくないんだけど……………」

90度きっかり腰を曲げた二之宮。

「ありがとう」

と、プライドの高い二之宮が年下のとても身近で知り尽くしている超厭な奴に頭を下げた。これには狼だけでなく、葵も呉も啞然。そして、二秒弱で礼を終わらせた彼は館を一瞥してから、「行くよ」と、街道の方へと歩みを進めた。

そのため、

「こちらこそ……ありがとう」
という、狼の声は残念ながら聞こえなかった。

生きる代償（9）

知ってる。

ここは母さんの故郷。

母さんが生まれ育ったところ。

俺は小さな駅にある高台から谷を見下ろした。

東京から向かう途中で、新幹線の窓から見えた粉雪に感動したかと思うと、谷に着く頃には旅人を労る気などさらさらないほど雪が深く積もっていた。そして、両側を高い崖に遮られているが、東西に長いため、西陽が谷全体をオレンジに染め、雪がまるで星のように瞬いていた。

「った！」

声変わりがまだの高い声。

俺は柵から乗り出していた体の向きを変えた。振り返れば、薄手の少年が、階段に蹴躓いたのか、積もった雪に突っ伏していた。上げた顔は赤く痛々しかったが、階段から落ちることも、固いコンクリートに額を割ることもなかったのだし、良かったと思うしかない。見上げてくる少年の目は怒ったように細くなり、結んだ口元が震え、

そして――

「痛いんだよお！！！！！！！！」

助けてよお！！！！！！！！

とも、怒られ、彼は泣き出した。

俺はどうすればいいのか分からなくて、顔面の雪を払い、抱っこしてあげる。

寒いので駅に戻ろうとしている間に少年は泣き止み、無言で俺の首に抱き着いていた。

鼻の頭を赤くした彼は……可愛い。

「おや、咲也君じゃないか」

白髪の混じった穏和な顔の年輩駅員が静まりかえった駅で、再び戻ってきた俺に笑顔を向け、抱き着いていた少年を見た。

「さつき階段で転んで、泣いたから……」

「またか。咲也君は相変わらずおっちょこちょいだな」

「雪に……滑っただけ……」

少年、咲也は俺から降りると、俺の手を強く握る。その感触は柔らかく、酷く冷たかった。

つい、手を離して彼の小さな手を見れば、真っ赤だ。

「君……霜焼けになってる」

咲也ははっとした顔を見ると、赤く痛々しい手をポケットに突っ込んでそっぽを向く。

「咲也君、お母さんにちゃんと手袋欲しいって言った？」

駅員のおじさんが一度奥に入ると、白い大福を俺と咲也の手に置いた。

「……言っただよ」

咲也は大福を両手に挟んで小さく掠れた声で囁く。

「早く買ってもらいなさい。咲也君、手が真つ赤じゃないか。上着だけでも。おじさんのお古でもいいなら…。ただでさえ、君は体が弱いんだから」

駅員は大福を包み込む紅葉のような手を優しく上から包み込んだ。

「咲也君はいい子だよ。少しぐらい我が儘言っていんだ」

おじさんに頭を撫でられた少年は顔を赤らめると、肩を竦める。俺はそんな咲也の笑顔に何だか嬉しくなった。おじさんの話を聞く限り、あまり家族間がうまくいってないのだろう。そんな子の手を握ったのは運命かもしれない。

「おじさん、ありがとう。でも、母さんには…ちゃんと言ったから」
おじさんは寒そうにする咲也に困り顔だ。昔からこうなのだろう。

おじさんはそれ以上は言わない。ただ、咲也が美味しそうに大福を食べる姿を見守る。

「咲也君は私が見ますから、ありがとうございます」

おじさんは俺に頭を下げた。

俺は別に急いでもいなかったんで、ふと思い付いたことを訊いた。

「墓参りに来たのですが、地図でも見せてもらえると嬉しいのですが…」

「お墓参り？」

おじさんは驚いた顔をする。

「ここらはここら近辺で結婚する人が殆どですから、外から珍しくて」

少子化と地方の過疎化が進む日本では本当に珍しいことだ。おじさんは奥から地図を持ってきてくれた。見るからに細長い地形だ。

「あそこは一番高いですから、高台からも見えたはずだと思います」
あの一ヶ所だけ飛び出していた場所だろうか。それなら案外、駅の近くだ。

「でも、そこまで行くのは階段の一本道で、それが見付けにくいんですよ」

何だか手に持った大福が引つ張られると思ったら、咲也が大福を奪

おうとしていた。俺だって少しは食べたかったから、半分に分けてあげた。俺を見上げた咲也は半分だけに不満があるようだが、もらえただけ嬉しいらしい。幸せそうな笑みを浮かべ、口を一杯にして大福を頬張る。俺はそんな咲也の笑顔が嬉しい。

「ここは家と水田ばかりですから、それといった目印もなく…」

俺は難問を問い掛けてしまったらしい。

その時、俺が持っていた残り半分の大福を俺の手を引き付けてそのまま口にした咲也が言った。

「僕が案内する」

おじさんが目をぱちくりさせている。

前の墓参りの時よりも驚いているようだ。

「行こう」

放してしまった咲也の歯形付きの大福を掴んだ彼は、薄い長袖の帽子を揺らして歩きだした。

赤い両手を揺らして。

「あの子は大人も知らない場所を知っているぐらいですから、大丈夫です」

それとこれを…

おじさんが俺にマフラーを渡してきた。

「あれだけじゃ寒い。あなたはこんなに早く咲也君が近付いていいと思える人になった。私は咲也君と仲良くなるにはすごい時間が掛かりました。だから、あなたから渡してくれたら、使ってくれると思います」

「あなたは？」

「私は重ね着してますから、大丈夫です。ちょっと肩が凝ってきたぐらいです」

マフラー一本では肩凝りには関係がない気がする。だがしかし、おじさんの優しさは分かる。

「ありがとうございます」

「私にお礼しないでください。咲也君の案内に。咲也君、ぶつきらばうですが、誤解しないでください。根は本当に優しい子です。同年代の友達がいらないのが少し心配ですが」

俺は何だか温かく感じるマフラーを胸に抱えて、咲也を追った。

「もうバテた？」

咲也はゴールから見下ろしている。昼寝をしなかった兎に呆れられている亀の気分だ。

その首にはマフラー。

拾ったと無難ないいわけをしたが、すぐに駅員のおじさんに渡されたものだとはバレ、しかし、咲也は素直に受け取ってくれた。それほどに本当は寒かったのだろう。『おじさん、ありがとうございます…』と、彼はマフラーを大事そうに抱き締めた。

「もう、ちよつと…待って」

「それ、4回目」

咲也はあからさまな溜め息を吐く。ぶつきらばうで収まるの？おじさん。と、言いたくなった。咲也は足元に注意して降りてくると、俺の隣にきた。

「？」

「フラフラしてる。昔、ここから落ちて大怪我した人がいるから、僕が握つとく」

咲也の差し出された手を俺は暖めるように握る。

「どうしてあそこにいたの？」

思えば、咲也が高台に来ようとした理由が分からない。

「巡回」

「巡回？何の？」

その時、彼の耳が更に赤くなったのが見えた。

「困った人がいないか見るため……荷物重くしてる人とか……道に迷ってる人とか……」

ああ、そうか。

根は本当に本当に優しい子だ。

「着いた」

咲也と話をしていた為か、あつという間にゴールに着いていた。

「誰に会いたい？」

「え？あ……えつと、たかやりん崇弥林」

「いっはら琴原林さん？」

旧姓まで知っているんだ。これには驚くしかない。

「うん」

彼はゆつくりと、迷わずに道を選んでいく。

「全員の名前覚えてるの？凄いね」

「覚えてないよ。前に一度、案内したことがあるから」

前に一度？父さん？

「旧姓しか知らなかったみたいで、見付からないって泣いてたから、一緒に探したんだ」

なら父さんじゃない。父さんなら旧姓しか知らないというのはおかしい。

「ほら、崇弥林さんは……」

「ありがとう」

母さんの墓の前に腰を下ろした俺に遠慮してか、咲也は背を向けて柵の間から崖に向かって足を出して座った。落ちないか心配だが、彼なりの配慮だから、背後の気配に集中しつつ、母さんの墓に向かう。

「母さん、さつきも会ったね。もう泣かないから安心して。多分、

もうすぐ迎えが来る。だからその前に、まだ言っていないことがあるんだ」

咲也はじつとしてくれている。

「俺と葵^{あおい}の19歳の誕生日、12月28日、父、崇弥^{しん}慎は亡くなりました。母さんはこの意味分かるよね。俺達、二人ぼっちになった」その時、咲也が振り返った気配がした。

「でもね」

「でも？」

隣には少年が座っていた。

「二人だから大丈夫？なら、一人の人間は？父さんにも母さんにも愛してもらえない人間は？」

巻いたマフラーに顔を埋めた彼の表情は分からない。

「父さんも母さんも自分勝手だ。嫌いなら、どうして僕ができたの？僕を作ったくせに、嫌いなんて言わないでよ。僕は聞きたくないもう、うんざりだ」

だから一人で遊ぶの？

だから人助けをするの？

その正義の全ては居場所を作るため？

咲也は赤い手で顔を覆い隠した。

「でもね、二人ぼっちだと思ってた俺達に沢山笑顔をくれる人がいる。家族だつて言ってくれる人がいる。愛をくれる人がいる」

「……………僕には……」

「その人達は近所の人だったり、昔、ちょっと手伝いをした人だったり。ホントに簡単な関係の人達だったんだ。だけど、あの時はありがとうつて、笑顔くれて。家族なんだから当たり前だって、俺の頭叩いて。いつまでも一緒にいて、愛をくれる。気付かない内に、俺達の周りには沢山の人がいってくれてたんだ」

咲也もそうなんだよ。

駅員のおじさんだつて、君が大好きだ。

勿論、俺も。

俺もさりげなく手を握ってくれる君が大好きなんだ。

「母さん、俺、やっぱり幸せだ。気付けたから幸せだ」

気付いて、咲也。

それに気付いたら、君は幸せなんだよ。

「だから残りは、俺が皆に幸せをあげるんだ」

君にもあげたいんだ。

なんか、咲也を見ていたら吹っ切れた。咲也は小さい分、必死に背伸びをしている。それを見てみると、小さい原因をねちねち考えている俺は随分なアホとしか思えない。

すると、咲也の隠された口から嗚咽が零れた。

「東の端に住んでるお婆さん、僕に沢山お礼言つて、飴玉くれて、頭撫でてくれた。駄菓子屋の娘さん、お兄ちゃんが大好きって、言ってくれた。秋^{あき}が一緒に探してくれてありがとうつて、笑ってくれた」

マフラー、あつたかい…。

咲也は袖を引っ張り、そこに目尻を押し当てて息を殺して泣いていた。

俺はそんな彼の茶色い髪をそつと撫でていた。

「今夜も雪だよ。泊まる場所あるの？」

駅員のおじさんの横で、咲也は俺の服を掴んだ。

「うん」

空はどんよりとし、空気は一気に冷えた。大雪の予感だ。

「本当に？」

咲也は再度訊ねてくる。

まあ、見るからに行く宛のなさそうな人間だと自分でも思う。何故なら、自らの体と纏う服しかないのだから。

「うん」

頼りなく見えるだろうが、行く場所はある。

あそこにいれば、家族が見付けてくれる。そして、俺は大切な人達のところに戻る。

「道案内、ありがとう」

「道案内以外でも、困ったことがあればいつでも言うて」

陽が落ちた後の冬は暗い、駅の淡い照明の下でも互いの顔がはつきりしない。

今、いいことを思い付いた。

「俺、お礼あげてないね」

「ありがとうだけでいいよ。そうでしょ？」

「だけど、余るほどあるから貰って」

想像するは火の鳥。

手のひら温かい感触。

「魔法……？」

チチチ……

紅い小鳥が咲也の頭に留まる。生み出されたもう一匹が駅員のおじさんの肩に留まった。

「夜道を照らしてくれるし、温かい。俺の魔法」

「いいの？」

「半日しかもたないけど」

「ありがとう！」

「ありがとうございます」

物凄く感謝された。

葵、俺は魔法が好きだ。

俺は咲也達に手を振って、背を向けた。

「洸祈！」

「葵」

俺の知る魔力に反応するようにして飛ばした小鳥が、葵の肩で一鳴きして消えた。

懐かしい葵の顔。

そして、後ろから続く二之宮このみやと呉くれ。

「悪い。迷惑かけー」

「心配したっ！」

葵が傍にやってくるなり、俺に抱き付いた。弟は小さく震えている。俺は赤子をあやすようにその背中を撫でていた。

「洸兄ちゃん！」

呉がその上からぴたりとくっつく。

そして、

「崇弥、旅に出るなら前以て伝えてくれ。喻え、過去に旅行でも」
二之宮が地面に膝を突いて笑った。そのまま伸びた手で俺をよしよしと撫でる。なんか、最初に会った時の炎えんみたい。

「ありがとう」

「どういたしまして。でも、ここまでの案内は葵君のお陰だよ」

葵の体はこの雪空の中でも熱く……………？

「葵、熱い」

顔を上げさせれば、真っ赤だ。厚着をし、額には冷却シート。ちゃんと体を温め、額を冷してて良いのか、外に出てきて悪いのか分からない。

重装備の病人が外出って…。

「二之宮」

名前を呼べば、薬剤師兼医者之二之宮が溜め息を吐いた。

「しょうがないだろう？君に似て強情だし、置いて行ったら、葵君が迷子になりそうだし、何より…」

「何より？」

「君に今すぐにでも会いたいつて言うからだよ」

葵は火照った体を俺に凭れさせている。目も虚ろで、頭が完全に動きを提止したようだ。しかし、瞬きを繰り返して俺の背中に手を回している。

起きていようという意志だけはあろうのだろう。

「葵、寝ていい。俺がおぶるから」

「……………いい……………」

「無理するな。母さんも見てる」

葵が俺達の目印となった母さんの墓をじっと見た。

「……………葵の花？……………洗祈が？」

「違う。俺より先に来てたみたいなんだ」

綺麗に包装された花束は、夜遅くまで付き合わせないようにと咲也と一度駅で別れ、それから墓場に戻ってきたら置かれていた。

葵の花が。

「…母さんの…兄弟？」

「多分、これは……………なあ、二之宮」

「ん？何？」

「今日っていつ？」

葵を片手で抱き締め、墓に積もる雪を払った。

多分、今日は…」

「10年前の11月10日だけど？」

「11月10日、葵なら分かるか？」

あの人の大切な日。

葵の瞳が細められ、赤くなつた唇から微かな笑いを溢した。

「分かるよ」

崇弥林に報告しにくるんだ。

「千里^{せんり}の誕生日だ」

『千里がまた1歳成長したのよ、林
櫻千鶴^{さくらちづる}が、友に会いに来る日。』

「千鶴さんに…言いたかつたな」

「何とですか？」

俺の腕に掴まり、囁く葵に呉が訊ねる。葵は今にも手放してしまい
そんな意識を墓に刻まれた崇弥林の名前に向かせた。

「千里は…笑えるよつて…」

葵の四肢から力が抜け、目を閉じた。

「笑える？千兄ちゃんはいつも笑顔です」

呉が葵の額に手を当てる。

「そつだよ、ちいはいつも笑顔だよ」

俺は呉の黒髪を撫でてから、神妙な顔をする二之宮を尻目に葵をお
んぶした。

弟は案外軽く、俺は少しドキリとした。一瞬、葵が消えてしまわな
いかと思つた。

「呉の魔法なんだよな？」

時制空間移転魔法なら過去にも別の場所にもいける。

「葵はそのため？」

多分、俺の目が険しかったのだと思う。二之宮がムツとした表情をした。

「それは違う。葵君が強情でついてきた」

八つ当たりになったのかもしれない。これでは、咲也の隣でした誓いの意味がない。何より、葵の肩に掛かる上着は二之宮のだ。

「悪い…ちよつと…気がたつた」

「かわまないよ。君が無事なら。ここは寒い。置いてきた遊杏^{ゆあん}達も心配だ。だから…」

二之宮の脚が力をなくしたかと思うと、母さんの墓の前で突つ伏した。最初、二之宮が倒れたかと思った。

しかし、二之宮は母さんの墓石に口付けをしていた。

「二之宮？」

「僕は蓮です。帰らなきゃいけないから、手短に」

呉の魔法陣が築かれる中で、二之宮は口を開けた。

何を言うんだろう？

「――」

呉と手を繋いだところから魔力が一気に取られていく感覚と共に、白くなった頭では二之宮の言葉は理解できなかった。立ち上がった二之宮が呉の手を取り、俺の方に微笑して唇を触れさせたのは分かった。

だけど、二之宮の口の動きは“ごめんなさい”のようにも“さようなら”のようにも見えた。

「二之宮…？」

「帰ろう、皆のところに」

そう俺の耳に囁いた彼の手は血の気を失ったように白く、冷たかった。

眠いよ……………氷羽^{ひわ}。
もう一度、俺の手を握って。

強く握った手は俺の手から水のように滑り落ちた。

……………林さん、僕は洗祈を愛しています。一生、守ると誓いました
……………

でも、僕にはもう“一生”を守る時間がない。

未完成品

蓮^{れん}の体が地に吸い込まれるように崩れた。

「二之宮^{にのみや}！」

葵^{あおい}を呉^{くれ}に預けた洗祈^{「しき}は蓮を抱き抱える。蓮は真っ青な顔でぐったりとしていた。

「二之宮！おい！」

「洗兄^{せん}ちゃん、僕に」

手を伸ばした呉は蓮の額に触れ、目を瞑る。そして、小さく何かを呟くと、蓮から手を離れた。

「どうだ？」

「洗兄^{せん}ちゃん……」

呉の長い睫毛が揺れる。

「呉、どうなんだ！」

「だってこの人は……」

「呉！答える！」

呉は葵の首筋に顔を埋めると、震えた声で答えた。

「この人……器官の半分以上が機械。……人なんですか？」

「人………じゃない」

蓮の手は氷のように冷たく、顔は青から白へと血の気を失っている。洗祈は蓮の力のない体を強く抱き締めた。

「二之宮は人じゃないんだ。でも、人でもあるんだ……」

ちゃんと生きているんだ。

洗祈の蓮への思いを感じた呉は葵を支えながら再び魔法陣を築くときこちないが、できる精一杯の笑顔を見せて洗祈に手を伸ばす。

「はい、蓮さんは人です。優しい人です」

「ああ、蓮は優しくていい奴だ」

守ると決めたら絶対を守る。蓮は優しいが、自分にさっぱりなのが少し恐ろしい。その結果がこれなのだ。

「蓮さんの機械部分の動きが乱れています」

洸祈が知っていたことに落ち着きを取り戻した声で呉は言った。

「乱れている？俺の魔力供給でどうにかなるか？」

メンテナンスは生じた誤差を元に戻すためにある。

蓮の説明によると、本来なら蓮にはメンテナンスは必要がなかった。自らの魔力でどうにかなっていた。それがいつの間にか狂いだした。それが、旅行に行った時だ。

「洸兄ちゃんから十分な魔力を得たとしても、これほど乱れていては意味がない。全てを新しいものにしない限りは……僕にはこれしか対策が思い付きません。まずは皆のもとに行きます」

まずは葵を寝かせ、蓮もこの寒い地下はきつい。

蓮を抱き直した洸祈は呉の手を取った。

「ちい、起きろ！」

蓮を床に寝かせた洸祈は目を閉じている千里せんりの体を揺さぶる。千里は小さく唸ると、薄目を開けて洸祈を認識した。

「こ……う。遊杏ゆあんちゃんが……」

洸祈は体を貸して千里を起こすと、近くの椅子に座らせる。

「杏がいない」

「結界もです」

「結界？」

呉がソファで眠るレイラに変わって葵に処置を施しながら洸祈の質問に冷静に答えた。

「洸兄ちゃんが過去にいた時、清せいさんが僕達のいる現在にいました」
「館………の？」

洸祈の眉間に皺が寄る。

やっぱり聞きたくないかも。

しかし、耳を塞ぎそうになる手をどうにか抑える。

「館のです。その清さんを追って政府がやってきました」
やっぱり。

けれども、これはどうしようもないことだ。

「いつかはバレルことなんだ……」

実の弟にすら隠していた俺が悪いんだ。もう腹を括るしかない。

「この緊縛調律は政府の魔法使いか？」

洗祈は状況を整理しようと、辛そうにする千里に詰問した。千里は水を求めると、目を閉じたまま答える。

「政府がインターホン押して……遊杏ちゃんが出たんだ。そしたら……多分、遊杏ちゃんが」

「杏が！？杏がやったのか！？」

こくり。

呉が用意した水を飲むと、彼はソファアの背凭れに頭を乗せて天井を仰いだ。

「魔力……持ってかれた。それで……気を失っちゃって……ごめん」

そして、カーペットに横たわる赤い頬の葵を見付けると、ふらふらと立ち上がって近寄り、おかえりと葵に囁いて抱き締めたまま眠りにつく。

これ以上は千里には無理だった。

呉はそんな二人にまとめて毛布を掛けると、一応、屋敷が静かになる。

「杏が緊縛調律をして政府と共に消えた。二之宮は早く対策を考えないと……くそっ！！！！」

洗祈は先の転移で失っている魔力を感じて自分に叱咤した。

「俺は二之宮がこんなになってたのに逃げ道探して過去に行ったのかよ！」

蓮の体に誰よりも詳しいのは遊杏だ。その遊杏がいない。こんな時助けになるのは……。

「琉雨……琉雨は？家か？」

分かんないけど、琉雨なら何か分かるかもしれない。

「琉雨なら……何だっていい、二之宮を少しでも長く……」

琉雨だけが使える太古の魔法なら。

「呉、店に連絡を――」

「琉雨姉ちゃんもいない……琉雨姉ちゃんもここに残ってたんです！――」

呉が洸祈の服を掴んだ。その手が微かに震えている。そして、滲んできた目で床を見詰めた。

「ごめんなさい……僕は……悪魔なのに何にもできない」

悪魔という肩書きでは何もできない。また、何もできない。

「お前のせいじゃない。だけど、この喪失感は琉雨と繋がりが切れてるせいみたいだ。早く探さないと、琉雨の中の俺の魔力が消えたらあいつは……」

消えてしまう。

「そんなっ」

洸祈の魔力と契約が琉雨を形作る。契約が切れた今、琉雨を存在させるのは残っている魔力のみ。

「どうして杏がちいやレイラに緊縛調律をしたのかは分からない。でも、あいつを守ってくれていると信じてる」

全ての鍵は遊杏。

二之宮、お前の代わりに俺がみんな守ってやるから。

「君は本当にあの子にそっくりだね」

「ボクチャンは遊杏」

跳ねた茶髪が振動に靡く。そして、腕に抱き締めた琉雨を見下ろした。

「うーちゃん…ごめん」

小さな光る羽を付けた少女はまるで妖精。強く目を瞑り、魘されている琉雨は何度も「旦那様…」と呼ぶ。その言葉に紺を瞬かせた遊杏はもう一度、彼女を抱き寄せた。

「洗祈への餌だからね。それにしても、君の残酷さはあの子譲りではないね。この護鳥を殺そうとした」

「ボクチャンは―」

「知らなかった、だろう？でも、それで彼女が消えていたら？知らなかったで済むかい？無知は本当に罪だね」

男は走行する車の窓に凭れ、外の景色を見詰めて言う。そして、窓ガラスに映った隣に座る少女に視線を移した。

「にーを助けてくれるんだよね」

「助ける方法を教える。その為に必要なものも直ぐに手に入る。と、契約しただろう？」

「周りに危害は及ばない。及ばせない」

「とも、契約したね」

彼女は自らの手の甲に波色に光る目で契約があることを確認して、頷いた。

「蓮との二人暮らし、上手くいってるんだね」

「……………」

「蓮はどんどん僕に似てきた。誰かが言ってたんだけど、僕が引きこもりニートの不気味な研究オタクの暇人だって。蓮も同じじゃないかい？」

「にーを紫水しすいと一緒にしないで」

琉雨の髪を撫でる遊杏の瞳に浮かぶのは紛れもない憎悪。それを見た紫水は凭れていた体を起こすと、姿勢を正した。

「ふーん。君は蓮の記憶を一方的に知ることができるんだよね。その脳で。色々あったらう？真実の一つ以外は僕の作ったシナリオさ。

「どうかな。そして、その真実の中ではさぞかし私は恐ろしそうだ」

「最低な奴だよ」

「最低……か。父親を最低とは。年中反抗期だ」

息を吐く紫水に表情はない。彼は前髪をかきあげて背凭れに頭を乗せて目を閉じた。

「殺してやる」

更にシンと静まる車内。ぴりぴりとした空気が特に前方の座席で漂う。

「笹原、やめなさい。彼女を殺してしまったら契約破棄で僕まで死んでしまう。それに、さっきのは彼女ではなく蓮さ」

笹原は軽く頷くと胸元に当てた手を離す。しかし、指圧によってくつきりと残った銃身の膨らみは消えなかった。遊杏は腕の中で寝返りを打つ琉雨をワンピースの胸ポケットに入れるとその上から両手を添える。

「ああ、護鳥は消しても契約に問題はないね。繋がりが切れている今、洗祈には護鳥に何があっても分からないし」

「うーちゃんを傷付けたら赦さない！それに、周りに危害は及ばない。及ばせないと契約したはずだよ！」

「しない、しないよ。ちょっとした冗談。僕には少女虐待趣味はない。それに、洗祈にバレた後が悲惨だ。僕は丸焼きにでもされそうだよ」

紫水は手探りで携帯を上羽織った白衣のポケットから取り出し、渴いた笑いをしてから番号を押した。やがて小さなコール音が響く。「誰に掛けてるわけ？」

「蓮のお母さん。とでもしとこうか」

「最低な奴。よく電話できるね」
「僕もそう思うよ」

紫水は目蓋を下ろして半眼になった遊杏に苦笑した。

未完成品（2）

「愛しているというのは、本当に嫌な言葉だね」

彼はそう言って過去を語りだした。

彼の腕の中で浅い呼吸を繰り返す蓮^{れん}を愛しそうに見詰めて…。

少年の屈んで啜り泣く後ろ姿が見えた気がした。

近親相姦。

僕達の関係を敢えて述べるなら、こんな見た目も気持ち悪い四字熟語がぴつたりと当てはまった。

僕と姉。

いや、違う。

僕と愛していた人。

僕達の両親は本当に酷い人達だった。酒を飲み、煙草を吸い…。そんなに体に悪いこととして死にたいなら二人で死ねばいい。なんて、今の僕なら言えるけど、小さい僕には虐待になんとも言えずに蹲っていた。

怖い…怖いよ……お姉ちゃん。

私が傍にいるから。守るから。

彼女は僕を守ってくれた。ランドセルを背負って帰った僕に待っているのは憂さ晴らしと言う名の虐待。そこに彼女はセーラーのリボンを揺らして割り込む。

やめてよ！父さん！

昨夜から続けて飲んだお酒で頭の働いていない父は彼女をただ打つ。

お姉ちゃん！やだよ！僕のためにいいよ！

私を守るから。だって、家族でしょ。

ああ、そうだ。彼女は家族だ。僕の姉だ。

僕を小学校まで迎えに来てくれて、一緒に寄り道をして帰る。

あっちの道通ってみよっか。

僕、道覚えられない。帰れなくなっちゃうよ。

大丈夫、私が覚えてるから。

ゆっくり、ゆっくり、沈む夕日を見ながら、途中彼女がくれた飴を舐めながら。すこしでも遅く。どうせ、いつ帰ってこようが両親は興味ないのだから。

今までどこに行ってた！！！！

関係ないじゃん！

っ！親に向かってその口の聞き方か！！！！

父が彼女の髪を掴んだ。あれは彼女が毎日毎日時間をかけて手入れをする長い黒髪。僕の大好きな黒髪。

お姉ちゃん！

上に行つてて…。

彼女の伸ばした髪が扉の向こうに消えた。その時、玄関先で立ち尽くしていた僕の後ろでドアが開いた。

あら、何してんの？

酒臭い。もとからこの家は酒と煙草の匂いが染み付いているようなものだが、更にきつい酒の匂い発信源。母だった。近づくマニキュアの塗られた爪から逃げるように僕は二階への階段を駆け上がった。なんか意味不明な言葉を叫んでいるようだが、僕は強く両手を耳に押し付けて部屋に入った。僕は無意識の内に棚の奥にしまっていた貯金箱を開けていた。そして、中身をポケットに全部突っ込んだ。零れてくる涙を必死に拭って、次は隣の姉の部屋に行く。彼女が前に見せてくれた、大切なものが入っているリュックを背負う。そして、僕は階段を下りた。

バンツ…

リビングの彼女が消えた扉を開けようとして、何かがすりガラスの扉にぶつかった。ぼんやりと浮かぶ黒い影。

そして、赤い血。

赤いそれがリビング内の照明に照らされて僕の目に焼きついた。ずるずると滑る黒い影と引き伸ばされる赤。

僕は影が不可抗力によって消えていくのを見て、悲鳴と嘲笑の響き

渡る部屋に駆け込んだ。

お姉ちゃん!!!!!!!!!!

だめ…。

口の端が切れてる。それに、頭から血が……。

僕は彼女の手を掴んでいた。驚愕に振り払おうとする手を力いっぱい握って。靴を引っ掛けさせて僕は飛び出す。振り返ることも叫ぶこともなにもせず、ただひたすら走る。

ちよつとっ…待って！

お姉ちゃん、行こう！僕が守るから！

僕がたった一人の家族を守るから。

「蓮は僕と姉との子…」

紫水^{しすい}は眼鏡の奥の瞳を細めて言った。

「蓮は僕と滄架そうかとの子供だよ」

未完成品（2・5）

蓮。^{れん}

嗚呼…僕の愛しの子。

僕達が生み出した罪の塊。

嗚呼…お前を愛している。

無機質な白壁に囲まれた建物。

その中の無数の実験室の一つ、曇り空を映す天窓があるそこに彼女は足を踏み入れた。

「にー！！」

遊杏^{ゆうあん}は中央の台に横たわる主を見付けて駆け寄る。蓮は遊杏達を屋敷に残して過去へ行った時と同じ格好をしていた。

「にー…冷たい。にー…にー…」

蓮の顔色は白く、力なく瞼が閉じられていた。遊杏は彼の現状を察し、抱き締めながら何度も彼に呼びかける。

「起きて。にー…起きてよ」

しかし、彼女も蓮がもう起きないことは分かっている。手から伝わる心臓の鼓動は止まっていた。

だからこそ、

「紫水^{しすい}、にーを助けてよ！」

遊杏は今部屋に遅れて入ってきた紫水を振り返った。紫水は手の書類に落としていた視線を上げると、蓮の姿に目を見開く。

「蓮……か？」

ゆつくりと歩みを進め、近付いた。

「助けてくれるんでしょ！紫水！」

紫水のズボンを掴み、怒る遊杏。しかし、彼は遊杏を放置して蓮を見下ろす。

「蓮……お前……」

「紫水！紫水がにーをここに運んだくせに！にーを治してよ！」

確かに崇弥^{たかやこうき}洗祈が研究所に向かっているかの確認も兼ねて蓮を二之^{にの}宮邸^{みや}から運んだのは紫水の部下だ。途中、悪魔の存在が見られたが、本体が少年姿なため、力差で抑えたとも報告がきている。そして、それを指示したのは紫水。

紫水は書類を手から滑らせて床に散らし、蓮の頬を撫でてぼやく。

「蓮……お前は……どうしてそうなんだ。誰かを愛そうとし、誰かを求める。自分をどれだけ犠牲にしようとも……」

沢山の犠牲の上に成り立つ。憐れな子。

憐^{れん}、お前は出来損ないなんだ。

だから、

「もう求めて傷付くな……」

お願いだから、もう傷を作るな。

「紫水、今更謝ったって、にーは赦さないよ」

遊杏が台に立ち上がり、ぼーっとする紫水を押し離れさせると、そ

の瞳に感情を映さないで言った。紫水はよろけながらも足踏みを整えて少女を認識する。

紫水と遊杏。

紫水と蓮。

その距離は遠い。

「それに、にーは憐れじゃない。ユアナはにーを求めた。そのせいでにーはユアナに固執してボクちゃんを生み出してしまったけれど、にーはひとりぼっちじゃない。ユアナが求めていた。ボクちゃんも……遊杏も求めてる。それに……にーには好きな人ができた」

「好きな人？蓮に？」

嘘だろう？と紫水は失笑し、遊杏は真っ直ぐ自らと同じ色の目を見詰める。

「くうちゃんだよ」

「くう……ああ、洗祈か？それはあれだろう？家族愛ってとこさ」
洗祈にとって蓮の存在は兄でしかないはずだ。

「違う。崇弥洗祈を好きになった」

「……………」

ぴたりと止む笑い。

紫水の目に光が帯びる。

「洗祈……ねえ。そうだ。皆が洗祈、洗祈、洗祈。折角、蓮の弟に仕立て、あの子も同じ目に合わせた。愛されない蓮の為に愛されない弟を作ったあげた。そして、誰かを愛することが恐怖になるように……蓮だけを見るように体に覚えさせた。なのに……」

彼は愛されている。

多くの者に愛されている。

崇弥洗祈……ム力つくなあ。

「どんなにあの子を壊しても、あの子は誰かに愛されて。その幸せに気付かずにあの子は拒んで。蓮がどれだけ苦しんでいるのかも知らずに」

いつだって泣いているのは蓮なんだ。

波色に光る彼の目。

「蓮をひとりにする奴は排除しないと」

その目に映るのは紛れも無い憎悪。遊杏が彼に向けたように、彼もまた、幸せの中にいる男に憎しみを向け始める。そこに少女の高い声が響いた。

「にーが取られて哀しい？」

そのたったの一言に彼の体が反応する。

「哀しい？」

「息子が取られて哀しいの？自分がひとりになるから？にーがひとりぼっちだったのは、にーは愛されないからじゃない。愛せないからじゃない。あなた達かにーを愛してあげなかったから。にーをひとりにしたのはあなた達。だけど、にーは今ひとりじゃない。あなた達から離れて、にーは幸せになったんだ。……………だから……」

遊杏の小さな手が蓮の頭を撫でる。

「だから……ボクちゃんを使って治してよ。全てを元に戻してよ。」

そして、にーをくうちゃんのところに戻して」

「君は分かかって……」

「分かっちゃったただだよ。無知は罪なんですよ？ボクちゃんは分からないことを調べた。それだけなんだ」

彼女は紫水をじっと見上げて笑みを溢した。

それは少女の本物の笑顔。

「ボクちゃんは一の身体に帰る」

だから、帰らせて。

そして、遊杏は横たわる蓮の横に体を崩した。

Please protect her .

紅い炎。

僕の部屋は館の一番端で、火事の原因から最も遠かった。だから、僕は焦りで心臓が死にそうなぐらい苦しく弾んでいたけど、どうにか外へと出ることができた。僕は大人じゃない。周りのみんなも大人じゃない。だから、僕達はどうにか繋いだ命に安堵するだけで、ただ呆然と燃える館を見上げることしかできなかった。

「燃えてる……」

「俺らこれからどうすんの？」

「僕達、親いないし……」

「捕まっちゃうよ!」

「少年院つてやつ!？」

「ヤダよ!」

「俺だつて厭だ!」

「^{かな}哉!どこ行くの!？」

「俺は行く。少年院も孤児院も厭だ。もう誰にも縛られたくない。だから、俺達はここにいた。違うか？」

「そりゃあ……でも、僕達は子供だよ？」

「俺達はちゃんと仕事をして、金貰って生きていた。俺は捕まんないからな」

「待つてよ、哉!」

「^{いずみ}ぼくも捕まりたくない!大人の世話なんてなりたくない!」

「^泉、来いよ」

「^{そら}うん!」

「^{そら}空は？」

「俺も行く」

「^{けい}恵はどうする?」

「僕は……」

「院に行ったら、また苛められるかもしれないぞ？だから館に逃げ出してきたのに、戻るのか？」

「それは厭だ！」

「なら、行こう」

「でも……………狼ろう……………狼は？」

「え？僕？」

「狼はどうするの？」

「狼も来るだろ？」

「僕？……………僕はここにいるよ」

「どうして！？」

「清せいがない……………からかな」

「狼……………」

「恵、早く決めてくれ」

「僕は……………」

「恵、行きなよ。僕は大丈夫。奏かなでちゃんを一人にしちゃまずいよ。ね？だから、また……………いつかまた絶対会おうね？」

「狼……………僕、行くね。僕、絶対に奏を幸せにするから」

「頑張れ、お兄ちゃん。皆も、生きてまた会おうね」

「うん」

「ああ」

「約束だ」

仲間が消防士に見つかる前に夜の闇へと走り去るのを僕は見送った。そして、再び視線を燃える館に向ける。おばちゃんは僕の下部屋だからとつくに金を持ってどっかに行っただろう。他の子供達は大丈夫だろうか。灰かいさんは大丈夫だろうか。美樹みきさんは大丈夫だろうか。

炎えんは大丈夫だろうか。

炎は嫌いだけど、人が死ぬのはその人が誰であろうと厭だ。と、見知った顔が一人飛び出してきた。

「あ！狼！あの子を見なかった！？」

なんとまあ、炎だ。僕と同じでしぶといようだ。

「あの子？……って……」

まさか……。僕はあの子を探して周囲を見回した。僕は火事が起きてほとんど最初に出てきた。

だから……。……あの子がいない。

「まだ……中だ」

「嘘っ！……」

炎が僕の言葉を聞いて踵を返そうとした。今でもどうしてか分らないが、その時、彼女の手を僕は強く引っ張っていた。

「何するの！放しなさい！」

僕は炎が嫌いだ。なのに、僕はその手を放せなかった。

「戻れば炎が死ぬ！」

「あの子を見殺しにはできない！放しなさい、狼！」

「厭だ！……」

何故か厭だった。戻って死んでしまうのは厭だった。

「狼！……あの子は私の妹なのよ！……」

「その妹が炎に死んでほしくないと言っているんだ！」

そんな気がした。それが、よく分からない衝動に駆られてなんでもいいから、炎を止めようとしたせいかもしれない。それが、本当にあの子が僕に語りかけていたのかもしれない。

姉を死なせないで。と……

僕は彼女の腕を引っ張って、消防士に無理矢理渡した。

「放して！中にあの子が！」

大人の男からは逃げられまい。僕は炎の安全を確認して、あの子を探するために館を振り返った。

そつだよ。姉が死んだら妹が可哀想だろ？

「だから、僕が探す」

清、好きな人と逃げたのなら幸せになれるよね。

だから、僕がこの誰にも必要とされない命で必要とされている命を救うよ。

僕は燃える館へと駆けた。

「狼……あなた、やめなさい……！！……！！」
炎の声が聞こえた気がした。

熱い。

「どこだ！」

熱い。

「どこにいるんだ！」

熱い。

僕は廊下を駆ける。

「返事をしろよ……！！」

ユアナ……！！……！！

「君、何をしているんだ！」

消防士のようだ。だけど、知るか。僕には救わなきゃいけない命があるんだ。

僕は駆ける。

「ユアナ、どこにいるんだ！」
そして、僕は……

【Please protect her.】

僕は罪滅ぼしに彼女を作った。

僕の記憶を頼りに最後に僕に助けを求め、助けられなかった彼女の意識を埋め込んだ。足りないパーツは僕の体から分け与えた。そして、彼女の負担を減らすために作り物だが、魔力を与えた。

そうして僕は彼女の容貌をした第二の僕を作りあげた。

それは、絶望しか残されていなかった僕が生み出した希望。希望じゃなくてもいい。ただ、淡くても、手を触れたら消えてしまいうでもいいから……—

光が欲しかった。

僕は彼女と生活を始めた。

『ねえ、職場で貰ったんだけどケーキ食べる？』

『……要らない』

彼女の中に僕の記憶の中の意識は埋め込んだはずだった。だけど、ヒトというものに必要な何かが欠けていて、彼女は本当にお人形のようにだった。僕には彼女に欠ける何かが分からなかった。僕はこうして動いているのに、僕が思い付く全てを彼女に与えても彼女は正常には起動しない。

そもそも“正常”とは何か？“異常”とは何か？

僕はまるで狂うことのない時計を備えたコンピュータのように規則正しく動く彼女を見ながら考えた。

買ってきたケーキを食べてくれないのは異常だろうか？
分らない。

『君にとって僕は何？』

『……にー』

彼女にとっての僕がにーなのは正常だろうか？
分らない。

『僕にとって君は何だと思う？』

『……ユアナ』

僕にとっての彼女がユアナなのは正常だろうか？
分らない。

ならば、こう聞けばいい。

『君にとって君は何だと思う？』

一瞬、自分でも考えた。

僕にとって僕自身は何だと。

答えは一つしかなかった。

僕は人形でしかない。

人間のフリをしている機械人形でしかない。

『何でもない』

彼女は答えた。

僕には君がユアナで、君は自らを何でもないという。僕はどうやら
罪滅ぼしをしながら自分の為に愛玩人形でも作っていたらしい。

機械人形のくせに愛玩人形……か。

でもまあ、僕は彼女に欠けているものが何か分かった。

さあ、どうしようか。

ユアナ……ユアナ……ユア……。

『ユアン』

『？ユアナだよ』

違うよ。

『君はユアン。君に足りないのは君自身。君の体を君だと肯定するものだ』

僕に人形遊びは似合わない。君が正常ではないのはあるべき名がないからだ。

『ユアン。そうだね…日本人の名前は漢字だ。後で漢字辞典を見ながら考えよう』

『ゆあ…』

『ユアン。君はユアンだよ』

『ボクチャンは…ユアナ…だよ』
そうじゃない。

最初、僕はユアナを作ろうとしていた。でも、僕はいつの間にか、新しい誰かを君に求めていた。ユアナではなくユアンを。

きつと僕は淋しかっただけなんだ。

僕は僕の過去を知らない1からの友達を作りたかった。二之宮家の養子と仲良くしてくれる友達を。

それがユアン。

僕の妹。

君の名は二之宮遊杏だ。

「ユアナ、どこにいるんだ！」

.....に.....？

「ユアナ！」

彼女は10メートルほど離れた廊下に倒れていた。

ユアナは視線を彷徨わせて体を起こす。

「今行くから！まってー」

「来ないで！」

最初、彼女の言っていることが分からなかった。ほんの数メートルなのだ。

僕は無視して駆ける。

「あ！君、こんなところに！」

そこに、途中の角から現れた消防士が僕を抱き上げた。

「は！？放せ！」

「何しているんだ！ほら、外に出るぞ！」

何を言っているんだ。こいつは。ユアナがすぐそこにいるんだぞ。

「あつちに子供がいるんだ！」

「何！？」

消防士は後ろを見る。しかし、

「誰もいないぞ？」

「何言つて……」

いない。彼女がいなかった。

「行くぞ！」

「待って！ユアナが！ユアナがいたんだよ！」

僕は叫んだ。いたはずなのだ。彼女がさっきまでいたはずなのだ。

「ユアナ！ユアナ！！！」

僕は消防士に抱えられながら、彼女がいたはずの場所に向かって叫ぶ。

その時、僕は彼女を見た。

廊下ではなく、彼女が倒れていた場所の直ぐ横の部屋の微かに開いた襖から。

彼女の手が見えていた。手だけで分かるはずが無いのに、僕にはそれが彼女の手だと理解した。

「いる！いるよ！」

「もう崩れる！」

離れる。

彼女と離れていく。

いるのだ。彼女がいるのだ。

あの部屋にいるはずなのだ。

そして、廊下の角を曲がる寸前、僕の目に再び彼女の全身が映った。

廊下に倒れている彼女だ。

薄くぼんやりした彼女が顔を上げて僕を見詰め、何かを語りかけていた。そのちゃんとした形のない映像はまるでホログラムのような…。

「――」

彼女は笑顔を見せて僕に手を伸ばした。

「『炎を守って』」

「遊杏？何か言った？」

「うっん。ボクちゃんの中に最も強く残る言葉を言ってみただけだよ」

「え？何それ」

「にー大好きっ。だよ」

「ありがと、遊杏。僕も遊杏が大好きだよ」

……にー、炎を守って……

未完成品（3）

白い息を吐き、坂の上に見える無機質な建物を俺は見詰めた。

「ここまでありがとうございます」

……………みずまき瑞牧さん。

スーツ姿の瑞牧さんは黒のセダンに凭れて俯いていた顔を上げた。その口元には俺の嫌いな煙草。彼はけだるそうな瞳を俺に向ける。

「あいつは病み上がりだからな。それに…」

言葉を切る瑞牧さん。その先は大体予想がつく。

「あいつにはできるだけお前に関わってほしくない」
そうさ。

俺に関わるとろくなことがない。

俺だって司野しのにはまだ純粋なままでいてほしい。

「ええ。そうですね」

「一ついいか？用心屋」

彼は俺からわざと視線を逸らして訊いてきた。俺には断る理由はないし、政府の研究棟まで送ってくれた礼もある。

「いいですよ」

俺をなんと貶したいんですか？瑞牧さん。

「お前は何故、司野を選んだ？」

「選ぶ？」

「何故、ただの向かいの家の奴がお前達の父親になる？」

「それは俺の父が決めた。司野は俺の父の提案に頷いた。俺が選んだんじゃない」

「司野はお前達が越して来た時、お前達に興味を示した。不思議だよな。他人をあいつが知りたがるなんてな。お前はそれが分かっていたはずだ」

彼は勝手に断言してくる。

俺が“司野は最低限の関係しか持とうとしない”ということを知っていた、と。

「あいつはお前に異常なくらい執着している。何故だ？」

「何を聞きたいんですか？」

「お前、司野を自分に縛り付けて何をしようとしている？」

『あなたはウンディーネに何を望んでいるのかしら？』

『自らに縛り付けたいのかしら？』

厭な奴の声と厭なくらい重なる。そして、裏切り者の顔が醜く俺の頭に浮かんだ。

もう、あいつなんか嫌いだ。

アリアスと手を組む奴なんか……―

俺の敵だ。

「何って？別に俺は司野を縛り付けてるなんて思ってませんよ？」
俺は縛ってなんかいない。

「俺は司野が好き…ただそう言っただけです」

ただ俺はそう言っただけ。そこに他意なんてない。勿論、策略も。

瑞牧さんは齒形の付いた煙草を地面に落とすと、強く爪先で踏み潰した。その仕草で簡単に分かる。

あれは俺が嫌い…そして、あれは司野が本当に好き。

「もういいですか？俺、急いでいるんで」

もう分かったから。

あんたの言いたいことは分かった。

だから、もう聞きたくない。

だって、

俺は司野を手放す気なんてないんだから。

俺は司野を守る。

だから、守るには俺の腕の中にいてもらわないと。

それが、あんたには縛り付けているように見えているのかもしれない。

「用心屋」

瑞牧さんが俺を呼んだ。

「はい」

「俺はお前が嫌いだ。胡散臭い」

そうですね。俺も大嫌いだ。

「だから、俺はお前を……」

新しく火を付けた煙草。

「信用していない」

灰が地面に落ちる。

「瑞牧さん」

「なんだ？」

「俺も煙草を平然と他人の前で吸う奴は嫌いです。受動喫煙って知ってます？ 間接喫煙、不随意喫煙、不本意喫煙、セカンドHANDスモーク……迷惑です。だから……」

あんたは俺の動く公害。

「早く咽頭癌にでもなればいいのにと願っています」

話しているとイライラする。

「あんたが嫌いだ、瑞牧さん」

「ああ、お前が嫌いだ。用心屋」

未完成品（4）

『僕を捨てるの？』

『うん。捨てる』

『出来の悪い子だから？』

『うん。出来の悪い子だから』

『僕が待つていたら？』

『いくら待つていたって拾いにはいかないよ』

『じゃあ、僕はこれから一人で生きていくんだ』

『違うよ』

『違う？』

『お前は死んだんだ。だから、お前は喪服を着ているんだよ』

『僕が死んだ？』

『お前はこの世にいない。だから、お前は一生喪に臥していなくてはいけない』

『？』

『自分の弔いをしてやるんだ』

『僕は僕を弔う？』

『何もかもを忘れ、誰でもないお前は昔のお前とお前が生きるために使われた命を弔い続ける。いつまでもいつまでも。そして、僕とあの人のことも』

『あの人？』

『お前は知らなくていいよ。ほら、これを飲んで』

『お薬？』

『そうだよ。飲んで忘れなさい』

『忘れる？何を？』

『全てを』

『紫水しすいも？』

『僕も蓮れんも。皆忘れなさい。洗いっき祈も忘れるんだ。もう、あれとお前

の関係はないのだから』

……洗祈って誰？……

……いいんだよ。おやすみ、蓮……

お前を愛しているよ。

長い夢を見ていた気がする。

耳を澄ませば静かだ。ここはどこだろう。

しかし、いくら待っても手掛かりとなる音が聞こえないので、重たい瞼を薄く上げてみる。

一面の夜空。

いつか清と見た星空のようだ。腕に納まっていたのは細っこい体だけど、温かくって、空を見上げながら二人で綺麗だねって言い合っていた。

それだけが……凄く幸せだった。そうだ。

あの“いつか”が僕が求めていた普通。あの頃に帰りたい。何でもないあの頃に帰りたい。

ただただ僕は好きな人と一緒に星空を見上げられればよかったんだ。

「……まあ、それくらいは仕方がない。寧ろ、腕一本でどうにか
ったことに感謝だよ」

実験室を出た照明の切れている廊下で彼は携帯片手に窓から空を見
ていた。山を隔てて遠くに都心の灯りがある。しかし、風が木々を
揺らす音以外が聞こえないここからは、それらが異世界のものであ
るかのように見える。ここに研究棟を置いたのもこの為だ。都心の
熱気から離れ、静かに生き、静かに死にたかったから。どうせ使わ
れて死ぬのなら死ぬ場所だけは自分で決めたかった。

「そんなことはしなくていい。彼だって分かっている。ただ、両手
足を空けておきたいだけだよ。一応、軍人の教育をされているから
……うん。そこで待たせとして」

今夜は星が綺麗だ。

あの人は星が好きだった。

遠くて掴めない。それは式場で微笑む花嫁のように。

僕はあの人の夢を奪ってしまった。あの人のたった1つの夢を。

アルバムに写る母の花嫁姿。彼女のように真っ白のドレスを纏い、
大切な人と愛を誓いたい。

それがあの人の夢。

だけど、もうあの人はその夢を叶えることはできない。

今、あの人は山奥の家で世間と離れて暮らしている。ゆっくりと時
が過ぎて、星の下で死ぬことを待っている。

星を見上げて。

夢を見上げて。

ごめんなさい、お姉ちゃん。

「多分、もうすぐ蓮が起きると思うんだ。だから、様子を見てからそっちに行くよ」

紫水は電話を切り、一息吐くと背後を振り返った。そこには頭を押さえ、開いたドアの枠に凭れる影。

「起きていたんだね」

「ここはどこ？」

「かつこよく言えば僕の死に場所。君にも理解できるように言ったら政府管轄下の研究所の南端だよ……」

――……蓮。

ここまで巨大な研究所にしたのには理由がある。2つの内の1つ、特に人付き合いの悪い紫水自身を含めた研究者達が専門分野に集中できるようにだ。この一応の責任者は紫水だが、名前は分かっている顔は分からない。もう1つは単に独りが好きだから。よく考えれば後者があって前者が後付けされたのだ。最初はこの研究所に研究者は紫水の一人だけだった。そこに政府が早く結果を出そうと各分野の専門家を集めた。軍との広がってきた差に焦るように。

「そう……。ねえ、どうせ僕は洗祈の罔だろう？ 洗祈に手荒なことしてないよね」

互いに一定の距離を空けて立つ。そして、互いに目線を逸らす。

「部屋に隔離させてもらってるけど、それ以外は手を出してないよ。一応、お茶も用意させてあるし」

「ならいい。分かっているとと思うけど……洗祈は体調が悪い。だから、あまり刺激しないでほしい」

一度だけ蓮の目が紫水に向いた。しかし、長い廊下の奥を見詰める紫水はそれに気付かない。

この人は父親。

この子は息子。

分かっている。

なんやかんやで二人が会ったのは紫水が蓮を下町で捨てた時以来。

二人が互いを憎んで自身を憎んだ時以来。

もの凄く気まずい。

と、考える紫水はポケットに突っ込んだ手を握り締めては開く。

「……蓮」

「何ですか？」

「僕は紫水だ」

「だから？」

「僕は君の父親だ」

「だから？」

「……………」

「……………」

ふと、唐突に……。

紫水と蓮の視線が絡み合った。紫水はあくまでその緊急事態に無表情を装うと、これを機に起きれるまで回復した蓮を上下観察する。立たれて分かるのはいかに身長が伸びたか。そして、いかに母親に面影が似たか。

「君にとって僕は君のなんだ？」

すつと鼻筋が通り、いくら汚れものを見てきても益々清んでゆく瞳。見えるのはただ一途に曲がない意志。

蓮は美人な母親にそっくりだ。

その蓮の口が小さく開き、唇を舐めたかと思うと、紫水と同じ無表情で言葉を紡いだ。

「あなたは何でもありません」

はつきりと澄みきった響く声。その声は数メートル先の闇に溶け、紫水の鼓膜を震わす。そして、心臓を圧してくる。

「……………僕は君の父親だよ？蓮。君を捨てた僕を憎んでいるだろう？」

蓮。

憐れな子。

報われない子。

愛されない子。

なのにどうして僕を見てくれない。

どうして君は……

「僕はあなたが嫌いだった。父親なら何故僕を愛してくれなかった？辛くて苦しかった。憎んでいた」

僕を……

「でも、今のあなたを見て分かった。あなたは憐れだ。だから、もう僕の復讐は終わっている。だから、僕はあなたなんか知らない」
全てを思い出しておきながら憎まないんだ。

蓮は腕に刺さる針とコードを見、浅い呼吸を繰り返した。そして、徐々に光を持ち始める蓮の紺は、肩を上げ下げし、手を開いて閉じてを繰り返すと共に波色に輝いた。

「それでも僕は洗祈に嫉妬していました。あなたは洗祈ばかりを見て僕を見てくれなかった。あなたは出来のいい子のことばかり。親子だと言うのに出来が悪いからって見てくれない。何よりも……」
蓮が微かに体を震わせて針を乱暴に抜き取ると、自らの血を曲線に床に飛ばして進んだ。その先には当然、紫水。

「僕は死にました。あなたの蓮はもう死んでいる。僕は僕の幸せを探しに僕の足で進むだけだ」

白い指は紫水の体に一切触れずに彼の心臓を指し、蓮は紫水から目を背けた。ヒタヒタと裸足を鳴らしてはくたりと体を窓に凭れ、ただ進む。

幸せ探しに進む。

それはわざと与えなかったはずなのに…。

月明かりが蓮の頬を照らした時、紫水はその揺れる腕を掴んでいた。「え？」という蓮の間の抜けた発声がしたかと思えば揺らぐ四肢が紫水の腕に収まる。

「ちよつ！」

「だからといって僕は君を送り出せない。君自身が言っただろう？君は困だって」

紫水は力が抜けているらしい蓮をずると実験室に引き摺った。そして、脂汗を額に浮かべて文句を言う蓮をベッドに拘束具で縛っていく。

「放せよ！紫水！」

「暴れないなら」

「だって変なもの腕に刺してただろう？」

「君が貧血気味だから」

「採血はないだろう！あなたのせいで僕は貧血なんだ」

その勢いはベッドを揺らすほどで、紫水が蓮を貼り付けた後には物音1つさせずに蓮を観察するので、彼は愚かさに口を閉じて大人しくなった。紫水は回転式の椅子に座って蓮をただ見る。蓮が暴れるので針は片付けられたが、紫水の観察は蓮が無言になった後も続けられていた。

「ねえ…」

「何？」

「見ないでくれる？」

「どうして見るのか、とかじゃなくて直球だね」

「見ないでよ」

「確かに僕は蓮は死んだと言った。だから、蓮にそっくりの蓮には興味があるんだよ」

「レン、レンって、理解しにくい」

「わざとだよ」

紫水は椅子の背に腕を乗せてじつと覗き込む。蓮も負けじと睨み返すが、紫水の動じなさに負けて紫水の背後に興味があった。

と――

「それ……」

倒れたままの写真立てが机に乗っていた。紫水は答えを言わずに蓮は見せないようにして写真立てを立てる。

「その写真何？」

「気になる？」

「僕はそれに夕霧の匂いがついていて理由が聞きたいだけ」

蓮の鋭い眼光。紫水は写真に鼻を近づけて匂いとやらを嗅ぐが、そもそも“夕霧の匂い”を知らない。無臭のように感じるが、それが“夕霧の匂い”かもしれない。それか、この実験室に置かれた薬品や日々の研究で使われる材料に紫水の鼻がバ力になっているのかもしれない。

「蓮の鼻は犬並みかい？まあ、当てたら見せてあげる」

紫水はやつとこさどうでもよい会話ができると写真の中の人物達を見た。これは一枚しかない悪夢の証明。それでも写真の中の彼女が儚い命にとても静かな落ち着いた笑みを見せている。

あれから二人で永遠にも近い旅をした。二人だけの自由を探して。その旅はこの子の誕生とともに終わり、写真が撮られた三人で眠りに就こうと決めたそのすぐ後。

しかし、激しい頭痛と共に起きてしまった自分は息も吐かずに彼女を全力で起こした。ひとりが厭だったから。

彼女は目を開け……二人は腕の弱い鼓動に罪の意識を覚えた。無力

な被害者を更に踏み潰す自分達。自分達はその子の生にしがみつく力強さにどこまでも最低な人間だと叫ばれているようだった。

彼女は罪滅ぼしに隠居を選び、自分はその子を心だけでなく体を強くしてやることを選んだ。そこまで生きたいのなら、できる限界まで生きられるように。

しかし、ただあの子の為だったはずの研究は今では……

「何だと思う？」

「写っているのはあなたの後ろめたい事実だろう？」

「曖昧だけど正解。でも見たい？これは昔死んでしまった蓮の写真だ」

蓮の明らかな動揺。しかし、彼は頷いた……

「……………見たい」

……と。

紫水は溜め息を一つ落とすとベッドに腰掛け、その写真を蓮に見せた。

背景に森林。開けたその場所に椅子が置かれており、そこには女性と青年。顔立ちの似る二人。そして、女性の膝には毛布にくるまれた赤子。

蓮の呼吸におかしな風音が混じった。口が顎を支える力を失ったように開く。

蓮の事態に紫水は苦笑すると、彼は天井を見上げた。

「これは僕の一人言だよ……」

2月21日（金）

憐、紫水、滄架

愛すべき親友達に

F r o m 幸哉

写真の隅にボールペンで書かれた字を写真立てのガラス越しに撫でた紫水は、あの日もこんな星空だったと語り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1487u/>

啼く鳥の謳う物語 2

2012年1月12日19時58分発行